東九州自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－ 12 －

福岡県行橋市所在遺跡の調査

宝 山 小 出 遺 跡
宝 山 桑 ノ 木 遺 跡
流 末 溝 田 遺 跡

2014

九州歴史資料館

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は平成22年度から24年度にかけて行った、行橋市宝山・流末に所在する宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡・流末溝田遺跡の発掘調査の記録です。

宝山小出遺跡と宝山桑ノ木遺跡では、主に室町時代の屋敷地群と考えられる多数の区画溝とこれに関連する遺構を検出し、近接する宝山城跡との関係も含めて、当時の集落のあり方を考える上での貴重な資料を得ました。

流末溝田遺跡では、溝状の遺構から多数の縄文時代晩期の遺物が出土しており、行橋市周辺域での貴重な発見例となりました。

本書が教育、研究とともに、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成に至る間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関ならびに、地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成26年3月31日

九州歴史資料館

館長　荒巻　俊彦

例　言

1．本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した福岡県行橋市宝山に所在する宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡および、行橋市流末に所在する流末溝田遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第 12 集にあたる。

2．発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課および九州歴史資料館が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。

3．宝山小出遺跡は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第 24 地点に、宝山桑ノ木遺跡は同第 25 地点に、流末溝田遺跡は同 26 地点にあたる。

4．本書に掲載した遺構写真の撮影は高橋章・池邉元明・小川泰樹・城門義廣・大里弥生が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は東亜航空技研株式会社に委託した。

5．本書に掲載した遺構図の作成は、高橋・池邉・小川・城門・大里が行い、発掘作業員が補助した。

6．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、城門の指導の下に実施した。

7．出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

8．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「行橋・蓑島・中津・田川」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。

9．平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。

10．本書のⅢ 2．Ⅲ区を城門が、Ⅲ 2．Ⅰ・Ⅳ区およびⅢ 3 を大里・吉村靖徳・秦憲二・城門が分担して執筆した。その他の執筆・編集は小川が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の組織…… 4
Ⅱ　位置と環境…… 6
1　地理的環境…… 6
2　歴史的環境…… 6
Ⅲ　調査の内容…… 10
1. 宝山小出遺跡 …… 10
1）概要 …… 10
2）遺構と遺物 …… 11
竪穴住居跡…… 11
土坑…… 11
溝…… 14
井戸…… 41
3）まとめ …… 42
2. 宝山桑ノ木遺跡 …… 43
1）概要 …… 43
2）遺構と遺物 …… 43
Ⅰ区…… 43
掘立柱建物跡…… 44
土坑…… 48
溝…… 61
SX …… 81
井戸…… 85
その他の遺構…… 88
その他のピット出土遺物…… 90
遺構外出土遺物…… 92
小結…… 95
Ⅱ区…… 96
土坑…… 96
溝…… 98
井戸…… 108
小結…… 108
Ⅲ区…… 109
土坑…… 110
溝…… 121
その他の遺物…… 134
小結…… 140
Ⅳ区…… 141
土坑…… 141
溝…… 143
SX …… 148
その他の遺構…… 150
小結…… 154
3）まとめ …… 155
3. 流末溝田遺跡 …… 157
1）概要 …… 157

2）遺構と遺物 …… 159
土坑…… 159
SX …… 159
その他の出土土器…… 173
3）まとめ …… 180

図版目次

宝山小出遺跡
図版１　１　宝山小出遺跡遠景（空中写真、南から）
　　２　宝山小出遺跡遠景（空中写真、東から）
図版２　１　Ⅰ区遠景（空中写真、東から）
　　２　Ⅰ区全景（空中写真）
　　３　Ⅱ区全景（空中写真）
図版３　１　１号竪穴住居跡（南から）
　　２　１号竪穴住居跡柱掘形
　　３　１号竪穴住居跡カマド（南から）
図版４　１　１号土坑土層（北東から）
　　２　１号土坑（西から）
　　３　２号土坑土層（南から）
図版５　１　２号土坑（東から）
　　２　３号土坑土層（南から）
　　３　３号土坑（北から）
図版６　１　４号土坑土層（南から）
　　２　４号土坑（南から）
　　３　５号土坑土層（南から）
図版７　１　５号土坑（北から）
　　２　６号土坑（北から）
　　３　２号溝南端部土層（北から）
図版８　１　６号溝土層（西から）
　　２　６号溝（西から）
　　３　８号溝土層（南から）
図版９　１　１号井戸（西から）
　　２　１号井戸井筒（南から）
　　３　２号井戸（北から）
図版10　宝山小出遺跡出土遺物①
図版11　宝山小出遺跡出土遺物②
図版12　宝山小出遺跡出土遺物③
図版13　宝山小出遺跡出土遺物④
図版14　宝山小出遺跡出土遺物⑤
図版15　宝山小出遺跡出土遺物⑥
図版16　宝山小出遺跡出土遺物⑦
図版17　宝山小出遺跡出土遺物⑧
図版18　宝山小出遺跡出土遺物⑨
図版19　宝山小出遺跡出土遺物⑩
図版20　宝山小出遺跡出土遺物⑪
図版21　宝山小出遺跡出土遺物⑫
図版22　宝山小出遺跡出土遺物⑬
図版23　宝山小出遺跡出土遺物⑭
図版24　１　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区Ａ地区全景（空中写真）
　　２　Ⅰ区Ａ地区（空中写真）
図版25　１　Ⅰ区Ａ地区遠景（空中写真、北上空から）
　　２　Ⅰ区Ｂ・Ｃ地区（空中写真、北上空から）
図版26　１　Ⅰ区D地区全景（空中写真）
　　２　Ⅰ区D地区南西区画全景（空中写真）

図版27　1　Ⅰ区B･C地区全景（空中写真）
　　2　Ⅰ区B地区全景（空中写真）
図版28　1　Ⅰ区D地区北東区画（空中写真）
　　2　Ⅰ区D地区南東区画（空中写真）
図版29　1　4号土坑（西から）
　　2　5･7号土坑（西から）
　　3　9号土坑（北から）
図版30　1　10号土坑（西から）
　　2　14号土坑（南から）
　　3　18号土坑（北から）
図版31　1　19号土坑（東から）
　　2　20号土坑（北から）
　　3　21号土坑（北から）
図版32　1　22号土坑（東から）
　　2　同上遺物出土状況（北から）
　　3　ピット190（南から）
図版33　1　4号溝（南西から）
　　2　4号溝土層（西から）
　　3　5号溝土層（東から）
図版34　1　1号掘立柱建物跡（西から）
　　2　2号井戸（北から）
　　3　3号井戸（東から）
図版35　1　Ⅱ－1区遠景（空中写真、東から）
　　2　Ⅱ－2区遠景（空中写真、東から）
図版36　1　Ⅱ－3区遠景（空中写真、東から）
　　2　Ⅱ－1区全景（空中写真）
　　3　Ⅱ－2区全景（空中写真）
図版37　1　Ⅱ－3区全景（空中写真）
　　2　1号土坑土層（東から）
　　3　1号土坑（東から）
図版38　1　2号土坑土層（南西から）
　　2　2号土坑（西から）
　　3　4号溝土層（南から）
図版39　1　4号溝土層（北から）
　　2　4号溝（空中写真、北から）
　　3　5号溝土層（東から）
図版40　1　6号溝土層（東から）
　　2　6号溝土層（東から）
　　3　6号溝遺物出土状況（東から）
図版41　1　7号溝土層（北から）
　　2　8号溝土層（南から）
　　3　14号溝土層（南から）
図版42　1　15号溝土層（東から）
　　2　1号井戸（東から）
　　3　1号井戸井筒（東から）
図版43　1　Ⅲ区 1号土坑（東から）
　　2　1号土坑土層（東から）
　　3　4号土坑土層（南から）
図版44　1　5号土坑（南から）

2　5号土坑土層（南西から）
3　7号土坑遺物出土状況（北から）
図版45　1　20号溝北側土層（北から）
2　20号溝南側土層（北から）
3　20号溝（北から）
図版46　1　調査区北東壁土層（南から）
2　谷落ち確認トレンチ土層（南から）
3　重機掘削状況
図版47　1　Ⅳ区（2次調査）全景（空中写真）
2　Ⅳ区（3次調査）全景（空中写真）
図版48　1　1号溝（南から）
2　4号溝（東から）
3　5号溝（南東から）
図版49　1　5･11号溝（北東から）
2　11号溝遺物出土状況（北から）
3　14号溝（北から）
図版50　1　SX05（南から）
2　1号土坑遺物出土状況（南から）
3　ピット50遺物出土状況（西から）
図版51　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物①
図版52　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物②
図版53　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物③
図版54　宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物①
図版55　宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物②
図版56　宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物③
図版57　宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区出土遺物①
図版58　宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区出土遺物②
図版59　宝山桑ノ木遺跡Ⅳ区出土遺物
図版60　1　流末溝田遺跡1号土坑完掘状況（北から）
2　2区全景（北から）
3　SX01遺物出土状況（西から）
図版61　1　SX01完掘状況（北から）
2　Ⅲ区全景（西から）
3　Ⅳ区全景（西から）
図版62　流末溝田遺跡出土遺物①
図版63　流末溝田遺跡出土遺物②
図版64　流末溝田遺跡出土遺物③
図版65　流末溝田遺跡出土遺物④

挿図目次

第１図　福岡県行橋市の位置…… 1
第２図　東九自動車道路線および調査地点位置（１/200,000）…… 3
第３図　周辺遺跡分布図（１/50,000）…… 7
第４図　調査区位置図（１/3,000）…… 9
第５図　１号竪穴住居跡実測図（１/60）…… 10
第６図　宝山小出遺跡遺構配置図（１/400）…… 折込
第７図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（１/3）…… 11
第８図　１～３号土坑実測図（1/60）…… 13
第９図　４～６号土坑実測図（1/60）…… 14
第 10 図　１～６号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 15
第 11 図　６～ 19 号溝土層実測図（１/40）…… 16
第 12 図　１号溝出土遺物実測図①（１/3）…… 17
第 13 図　１号溝出土遺物実測図②（１/3）…… 18
第 14 図　１号溝出土遺物実測図③（１/3）…… 19
第 15 図　１号溝出土遺物実測図④（１/3）…… 20
第 16 図　１号溝出土遺物実測図⑤（１/3）…… 22
第 17 図　２号溝出土遺物実測図①（１/3）…… 23
第 18 図　２号溝出土遺物実測図②（1/3）…… 24
第 19 図　３号溝出土遺物実測図（１/3）…… 25
第 20 図　４・５号溝出土遺物実測図（１/3）…… 26
第 21 図　６号溝出土遺物実測図①（１/3）…… 29
第 22 図　６号溝出土遺物実測図②（１/3）…… 30
第 23 図　６号溝出土遺物実測図③（１/3）…… 31
第 24 図　６号溝出土遺物実測図④（１/3）…… 32
第 25 図　７号溝出土遺物実測図（１/3）…… 33
第 26 図　８号溝出土遺物実測図（１/3）…… 35
第 27 図　９・11・12・14 号溝出土遺物実測図（１/3）…… 37
第 28 図　15 ～ 19 号溝出土遺物実測図（１/3）…… 40
第 29 図　１・２号井戸実測図（1/40）…… 41
第 30 図　１・２号井戸出土遺物実測図（1/3・1/6）…… 42
第 31 図　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区Ａ～Ｃ地区遺構配置図（１/300）…… 折込
第 32 図　宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区Ｄ地区遺構配置図（１/300）…… 折込
第 33 図　１号掘立柱建物跡実測図（１/60）…… 45
第 34 図　２・３号掘立柱建物跡実測図（１/60）…… 46
第 35 図　４・５号掘立柱建物跡実測図（１/60）…… 47
第 36 図　１～４号土坑実測図（4 は 1/40、他は 1/30）…… 49
第 37 図　４号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 50
第 38 図　５・６号土坑実測図（1/30）…… 51
第 39 図　７～ 10 号土坑実測図（1/30）…… 53
第 40 図　11・12 号土坑実測図（1/30）…… 54
第 41 図　７・９・12 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 55
第 42 図　14 ～ 17 号土坑実測図（1/30、15 は 1/60）…… 56
第 43 図　18 ～ 21 号土坑実測図（1/30）…… 57
第 44 図　14・16・18・21 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 59
第 45 図　22 号土坑実測図（1/30）・遺物出土状況（1/10）…… 59
第 46 図　22 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 60
第 47 図　４・５・11・12・17 ～ 19・21・22・24・27・28 号溝土層実測図（1/40）…… 62

第 48 図　4 号溝出土遺物実測図①（1/3）…… 64
第 49 図　4 号溝出土遺物実測図②（1/3）…… 65
第 50 図　4 号溝出土遺物実測図③（23 ～ 28 は 1/3、他は 1/6）…… 66
第 51 図　4 号溝出土遺物実測図④（1/6）…… 67
第 52 図　2・5・6・8 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 69
第 53 図　9 ～ 11 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 71
第 54 図　12・13・17 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 73
第 55 図　18 ～ 20 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 77
第 56 図　21・22・24・26・27 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 79
第 57 図　SX01・04 実測図（1/80）…… 82
第 58 図　SX01 ～ 04・07 出土遺物実測図（1/3）…… 84
第 59 図　1 ～ 3 号井戸実測図（1/40）…… 86
第 60 図　1・2 号井戸出土遺物実測図（1/3）…… 87
第 61 図　ピット 190・260 遺物出土状況（ピット 190 は 1/10、ピット 260 は 1/20）…… 88
第 62 図　Ⅰ区ピット出土遺物実測図①（1/3）…… 89
第 63 図　1 号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）…… 90
第 64 図　Ⅰ区ピット出土遺物実測図②（1/3）…… 92
第 65 図　Ⅰ・Ⅳ区出土特殊遺物実測図①（1 ～ 6 は 1/1、7 ～ 11 はおよそ 1/1、12 ～ 18 は 1/2）　93
第 66 図　Ⅰ・Ⅳ区出土特殊遺物実測図②（1/3）…… 94
第 67 図　3 号井戸出土井戸枠実測図（1/4）…… 95
第 68 図　宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区遺構配置図（1/600）…… 折込
第 69 図　1・2 号土坑実測図（1/80）…… 97
第 70 図　1・2 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 97
第 71 図　4 ～ 6・8・12・14 号溝土層実測図（1/40、14 は 1/60）…… 99
第 72 図　1・4・5 号溝出土遺物実測図（1/3、14・15 は 1/6）…… 101
第 73 図　6・7・8・14 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 103
第 74 図　15・17・18・21 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 106
第 75 図　1 号井戸実測図（1/40）…… 107
第 76 図　1 号井戸出土遺物実測図（1/3）…… 108
第 77 図　宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区遺構配置図（1/200）…… 折込
第 78 図　基本土層・確認トレンチ土層実測図（1/40）…… 109
第 79 図　1 ～ 3・6 号土坑実測図（1/30）…… 111
第 80 図　4 号土坑実測図（1/40）…… 112
第 81 図　5 号土坑実測図（1/40）…… 113
第 82 図　1・4 ～ 7 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 114
第 83 図　7 ～ 9 号土坑実測図（1/30）…… 115
第 84 図　7・9 ～ 11・13・14 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 116
第 85 図　10 ～ 12 号土坑実測図（1/30）…… 118
第 86 図　13・14 号土坑実測図（1/30）…… 119
第 87 図　14 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 120
第 88 図　2・3・5 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 122
第 89 図　6・8 ～ 10 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 124
第 90 図　11・14 ～ 17・19・23 ～ 25 号溝出土遺物実測図（1/3、3 は 1/4）…… 126
第 91 図　15・18 号溝実測図（1/40）…… 127
第 92 図　18 号溝出土遺物実測図（1/3）…… 129
第 93 図　20 号溝実測図（1/40）…… 130
第 94 図　20 号溝出土遺物実測図①（1/3）…… 132
第 95 図　20 号溝出土遺物実測図②（1/3、30 は 1/4）…… 133
第 96 図　20 号溝出土遺物実測図③（1/3）…… 134

第 97 図　ピット出土遺物実測図①（1/3）…… 135
第 98 図　ピット出土遺物実測図②（1/3）…… 136
第 99 図　ピット・その他の遺構など出土遺物実測図（1/3、11 は 1/4）…… 137
第 100 図　出土特殊遺物実測図（1/2、1 ～ 3 は 1/1）…… 138
第 101 図　宝山桑ノ木遺跡Ⅳ区遺構配置図（1/300）…… 折込
第 102 図　1 号土坑実測図（1/40）…… 142
第 103 図　1 号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 142
第 104 図　1・2・4・5・11・12・14 号溝土層実測図（1/40）…… 143
第 105 図　1・2・5 号溝状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 145
第 106 図　8・11・13・14 号溝状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 146
第 107 図　SX05 実測図（1/40）…… 150
第 108 図　SX02、05 出土遺物実測図（1/3）…… 150
第 109 図　ピット 36 遺物出土状況（1/20）…… 151
第 110 図　ピット 36 出土遺物実測図（1/3）…… 152
第 111 図　その他の遺構出土遺物実測図（1/3）…… 153
第 112 図　宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡区画溝配置図（1/1,500、1/6,000）…… 156
第 113 図　流末溝田遺跡遺構配置図（1/400）…… 158
第 114 図　1 号土坑実測図（1/60）…… 159
第 115 図　SX01 実測図（1/80）…… 160
第 116 図　SX01 遺物出土状況（1/40）…… 161
第 117 図　SX01 出土土器実測図①（1/3）…… 162
第 118 図　SX01 出土土器実測図②（1/3）…… 163
第 119 図　SX01 出土土器実測図③（1/3）…… 164
第 120 図　SX01 出土土器実測図④（1/3）…… 165
第 121 図　SX01 出土土器実測図⑤（1/3）…… 166
第 122 図　SX01 出土土器実測図⑥（1/3）…… 167
第 123 図　SX01 出土土器実測図⑦（1/3）…… 168
第 124 図　SX01 出土土器実測図⑧（1/3）…… 169
第 125 図　SX01 出土土器実測図⑨（1/3）…… 170
第 126 図　SX01 出土土器実測図⑩（1/3）…… 171
第 127 図　SX01 出土土器実測図⑪（1/3）…… 172
第 128 図　SX01 出土土器実測図⑫（1/3）…… 173
第 129 図　SX01 出土土器実測図⑬（1/3）…… 174
第 130 図　SX01 出土土器実測図⑭（1/3）…… 175
第 131 図　SX01 出土土器実測図⑮（1/3）…… 176
第 132 図　その他の出土土器実測図（1/3）…… 176
第 133 図　特殊出土遺物実測図①（1/2、1・2 は 2/3）…… 177
第 134 図　特殊出土遺物実測図②（1/2）…… 178
第 135 図　特殊出土遺物実測図③（1/2、28・29 は 1/3）…… 179

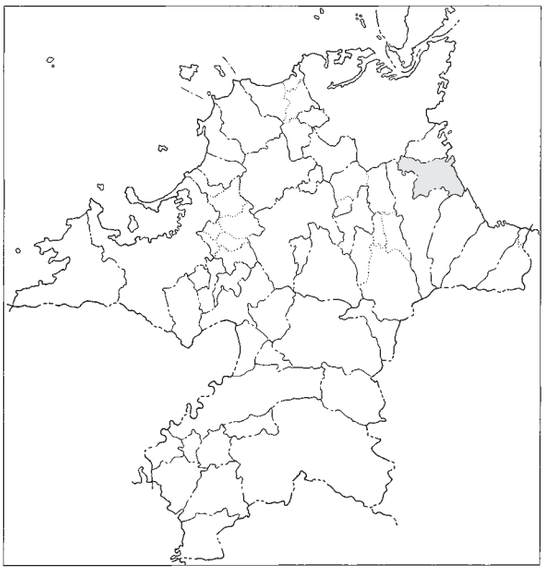
表目次

第 1 表　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧…… 2

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

東九州自動車道は、北九州市を起点として、福岡、大分、宮崎、鹿児島各県の東九州に点在する主要都市を結んで、鹿児島市に至る延長約436km の高速道路である。既に高速道路整備が完了している西九州側と比較して、これまでの物流・移動時間の面での較差が、東九州自動車道が開通することで解消し、東九州地域の経済、産業、医療、文化等の各方面での振興が見込まれている。また、九州道、大分道、宮崎道と接続することで、九州内の移動時間が大幅に短縮され、地域間交流が活発になるとともに、九州全体の発展も期待されている。



第１図　福岡県行橋市の位置

東九州自動車道の建設事業は、日本道路公団が平成 19(2005) 年 10 月に民営化して誕生した西日本高速道路株式会社 (NEXCO 西日本) 九州支社の福岡工事事務所、中津工事事務所、延岡高速道路事務所が引き続いて担当し、平成 24 年度までに約 141km が部分的に開通している。福岡県内では、平成 18 年 2 月に北九州 JCT －苅田北九州 IC 間が開通しており、苅田北九州空港 IC から既に供用中の椎田道路に接続するまでの区間を福岡工事事務所が、椎田南 IC から県境までの区間を中津工事事務所がそれぞれ担当し、苅田北九州空港－行橋 IC が平成 25 年度末、行橋 IC －豊津 IC が平成 26 年度末、椎田 IC －県境が平成 28 年度末までにそれぞれ供用開始予定である。

埋蔵文化財の調査については、平成 9 年 3 月に福岡県教育委員会に対して出された「東九州自動車道計画ルートに係る埋蔵文化財について」の照会文書 (苅田－豊津間) を受けて、58 箇所の調査地点を回答したことに始まる。平成 12 年度以降は、用地の取得状況に合わせて試掘・確認調査を実施し、埋蔵文化財の存在が確認された箇所について順次発掘調査を実施しており、詳細は第 1 表に示したとおりである。

今回報告する、宝山小出遺跡、宝山桑ノ木遺跡、流末溝田遺跡のうち、前二者については福岡県教育委員会および行橋市教育委員会がこれまで行なってきた分布調査で埋蔵文化財包蔵地として周知されており、平成 21 年 2 ～ 3 月に実施した確認調査によって発掘調査の必要な範囲を確定した。また、流末溝田遺跡はこれまで未確認であったが、同年 3 月の試掘調査の結果、新たに発見された遺跡である。

発掘調査は、用地の取得状況ならびに建設工事の工程に合わせて、平成 21 年 10 月から 24 年 7 月までの期間、最大では 3 箇所が同時進行するかたちで順次実施した。

表１　東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積（㎡）	試掘年度	調査面積（㎡）	調査年度	報告年度	既刊報告書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4000	H13･14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16・20・21	1200		H24	４集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18･19	3900	H19･20	H24	４集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21･22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字上片島	30600	H18・20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字上片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19	H24	５集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19	H24	５集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	５集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	５集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～	2集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21・22		12集（本冊）	
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20･21	31550	H22～24			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20･21	2900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20･22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19･22	16574	H22～			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21			
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21	H24	６集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20～22	3420	H22・23	H24	６集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20～22	29491	H21～23			H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	呰見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町呰見	1132	H21	1132	H22			
39	福岡	呰見中園遺跡 呰見大塚古墳	京都郡みやこ町呰見	8218	H21・22	5918	H21～23			H22呰見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町呰見・下原	45510	H19～21	22763	H20～22	H23～	３集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町呰見	5080	H21	3580	H21・22			
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21・22	26000	H22			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					

第２図　東九州自動車道路線および調査地点位置（１/200,000）

2.　調査の組織

発掘調査（平成 21 ～ 24 年度）および整理・報告書作成（平成 25 年度）の関係者は次のとおり。なお、組織改革により平成 23 年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管された。

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
西日本高速道路株式会社九州支社					
支社長	久保晶紀	久保晶紀 (～ 9.30)	本間清輔	本間清輔	本間清輔
	本間清輔 (10.1 ～)				
西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所					
所長	福田美文	福田美文	中薗明広	源谷秋義	源谷秋義
副所長（技術担当）	高尾英治 (～ 9.30)	岩尾　泉 (～ 9.30)	入江壮太	松繁浩二	松繁浩二
	岩尾　泉 (8.1 ～)	入江壮太	今井栄蔵 (～ 9.30)	井　秀和	井　秀和
			井　秀和 (10.1 ～)		
副所長（事務担当）	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博	甲斐島武司
総務課長	白川雄二 (～ 9.30)	江口政秋	江口政秋	馬場孝人	馬場孝人
	江口政秋 (10.1 ～)				
工務課長	大久保良和 (～ 9.30)	石塚　純	石塚　純 (～ 9.30)	竪山哲	田中康一郎
	石塚　純 (10.1 ～)	竪山哲二 (～ 10.1)			
行橋南工事長	杉本浩司	杉本浩司	榎本敬二	榎本敬二	榎本敬二
福岡県教育委員会					
総　括					
教育長	森山良一	杉光　誠			
教育次長	亀岡　靖	荒巻俊彦			
総務部長	荒巻俊彦	今田義雄			
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘			
副課長	池邉元明	伊﨑俊秋			
参事兼課長技術補佐	小池史哲	小池史哲			
	伊﨑俊秋				
課長補佐	前原俊史	日高公徳			
参事補佐	日高公憲				
参事補佐兼管理係長					
参事補佐兼調査第二係長					
	飛野博文	飛野博文			
管理係長	富永育夫	富永育夫			
調査第一係長	吉村靖徳	吉村靖徳			
庶務					
事務主査	藤木　豊	藤木　豊			

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
主任主事	近藤一崇	近藤一崇			
	野田　雅	内山礼衣			
主事	仲野洋輔	仲野洋輔			
調査・報告・整理					
参事補佐	高橋　章				
新原正典	新原正典				
技術主査	小川泰樹	小川泰樹			
臨時調査員	大里弥生	大里弥生			

九州歴史資料館

総括					
館長			西谷　正	西谷　正	荒巻俊彦
副館長			南里正美	篠田隆行	篠田隆行
総務室長			圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子
文化財調査室長			飛野博文	飛野博文	飛野博文
文化財調査室長補佐				吉村靖徳	吉村靖徳
文化財調査班長			小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹
庶務					
総務班長			塩塚孝憲	長野良博	長野良博
事務主査				青木三保	青木三保
					南里成子
主任主事				熊谷泰容	
				近藤一崇	
主事			谷川賢治	谷川賢治	三好洸一
調査・報告・整理					
参事補佐			池邉元明	池邉元明	池邉元明
保存管理班長			加藤和歳	加藤和歳	加藤和歳
主任技師			城門義廣		城門義廣
					小林　啓
技　　師				小林　啓	
臨時職員			大里弥生	大里弥生	大里弥生

Ⅱ　位置と環境

1. 地理的環境

行橋市は、福岡県の東部に位置し、周防灘に面する。明治 22(1889) 年の町村制施行に際して、行事村、大橋村、宮市村が合併して行橋町となり、昭和 29 年に簑島、今元、仲津、泉、今川、稗田、延永、椿市の各村が合併して行橋市となり、翌年には祓郷村の一部も編入している。面積は 68.65 ㎢、人口は平成 17 年に 7 万人を突破し、現在も増加傾向にある。

行橋市は、北に高城山、水晶山、貫山、北西側に平尾台カルスト台地、西に塔ヶ峰、上矢山、南に飯岳山、御所ヶ岳、馬ヶ岳、矢留山が連なって、三方を山地に囲まれており、全体で行橋盆地を形成する。基盤は平尾花崗岩閃緑岩で、第四紀更新統の堆積物が河川段丘を形成しており、平尾台を水源とする長峡 (ながお) 川、英彦山を水源とする今川、祓川による肥沃な沖積平野である。

今回報告する宝山小出遺跡、宝山桑ノ木遺跡、流末溝田遺跡の所在する、行橋市宝山および流末を含む一帯は、今川と長峡川によって形成された扇状地である。現在宝山の集落の中心で頂部に王埜八幡神社と養徳寺のある小山は、周囲を両河川によって削り取られた低位段丘と考えられ、周囲から独立してここだけが取り残されたかのように島状に残る。

2. 歴史的環境

縄文時代中期以前については、これまで遺物が採集・出土してはいるものの断片的であり、早期頃とされる落し穴を除けば明確な遺構が確認されておらず、生活の痕跡は不明瞭である。後期になると、九州内でもいち早く京築地域では住居が増加して集落も形成されるという。行橋市域では長者原遺跡で後期末～晩期初頭頃の中央に炉を持つ住居跡 1 軒を検出している。今回の調査区に近接する丘陵には貝塚があったとされ、後期に属する出土遺物が残されているが、遺跡は完全に消滅しており詳細は不明である。また、近辺の採集品としては今川河川敷の石刀がある。墓制としては、下崎瀬戸溝遺跡で後期中頃の埋甕 1 基が確認されているほか、先の長者原遺跡の住居跡に切られる土坑も土壙墓である可能性が高いという。

弥生時代前期初頭にまで溯るものとして、周防灘に面した砂丘状の長井遺跡では 500 基を超える大規模な箱式石棺墓群が存在したとされる。環濠を伴う辻垣遺跡群も前期の集落遺跡である。前期中葉から中期になると、鬼熊遺跡など引き続き沖積地上にも営まれるが、前田山遺跡、下稗田遺跡、竹並遺跡など低丘陵上に進出する集落が目立つ。後期は、いまだ調査成果が充分に出揃っていない観があるが、そうした中で終末期～古墳時代初頭のみやこ町徳永川ノ上遺跡の墳墓群から出土した 5 面の舶載鏡を含む出土遺物は抜きん出ている。

苅田町石塚山古墳は九州最古の大型前方後円墳とされており、その後古墳時代を通じて京都平野に大型古墳が集中することから、ここが要衝の地として豊前地域の中心と考えられていたものと思われる。それは、時代が下ってこの地を見下ろす位置に御所ヶ谷神籠石が築かれ、後に国府、国分寺が造営されることとも無関係ではあり得ないであろう。

そうしたなか、平成 22 年度から東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した福原長者原遺跡では、一辺約 150 m の九州最大級の官衙跡を検出し、未発見であった 8 世紀代の豊前国府跡である可能性が高い。

1　丸山遺跡　2　番塚古墳　3　御所山古墳　4　山口遺跡　5　谷遺跡　6　神後古墳　7　木ノ坪遺跡　8　黒添メオト塚遺跡　9　徳永丸山遺跡　10　椿市廃寺　11　高来井正丸遺跡　12　高来小月堂遺跡　13　葛川遺跡　14　岩屋古墳群　15　木ノ元幸１号墳　16　上片島遺跡　17　延永ヤヨミ園遺跡　18　ビワノクマ古墳　19　ビワノクマ遺跡　20　下崎ヒガンテ遺跡　21　鳥井原遺跡　22　入覚大原遺跡　27　綾塚古墳　28 橘塚古墳　29　前田山遺跡　30　下稗田遺跡　31　下稗田台ノ下遺跡　32　下稗田森遺跡　33　金屋遺跡　34　羽根木古屋敷遺跡　35　福富小畑遺跡　**36　宝山小出遺跡　37　宝山桑ノ木遺跡　38　流末溝田遺跡**　39　宝山城跡　40　矢留堂の前遺跡　41　福原長者原遺跡　42　寄原遺跡　43　竹並ヒメコ塚古墳　44　鬼熊遺跡　45　竹並遺跡　46　カワラケ田遺跡　47　呰見大塚古墳　48　京ヶ辻遺跡　49　豊前国府跡　50　惣社古墳　51　徳政瓦窯跡　52　徳政宮ノ上遺跡　53　豊前国分尼寺跡　54　豊前国分寺跡　55　八景山古墳群　56　甲塚古墳　57　彦徳甲塚古墳　58　馬ヶ岳城跡　59　大谷田淵遺跡　60　天生田大池遺跡　62　大谷車塚遺跡　63　推定官道跡　64　内屋敷遺跡　65　御所ヶ谷神籠石

第３図　周辺遺跡分布図（１/50,000）

平安時代後期から中世前半期は、この地は宇佐神宮および神宮寺である弥勒寺の強い影響下にあったとされ、中世後半期には大内、大友両氏による豊前国の覇権の争奪戦がたびたびここを舞台に行われた。馬ヶ岳城をはじめとする現在に残る多数の中世山城は、これらの歴史を物語るものとも言えよう。

中世の集落遺跡については、近年の圃場整備事業、道路建設事業等の大規模開発事業に先立つ発掘調査によって徐々に明らかになりつつある。金屋遺跡では室町時代の鍛冶炉跡を検出しており、記録に残る今井の鋳物師集団の活動の一端が考古資料から確認できた。福富小畑遺跡では15世紀代に掘削された溝によって区画された複数の区画が確認されており、限定的な範囲ではあるが、この時期の集落の一形態を示すものと考えられる。

行橋市教育委員会『行橋市の遺蹟』1963

福岡県教育委員会　2000 『寄原遺跡・長者原遺跡』福岡県文化財調査報告書第146集

定村責二・小田富士雄　1965 「福岡県長井遺跡の弥生式土器」『九州考古学』25・26号

福岡県教育委員会　1993 『辻垣ヲサマル遺跡』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第1集

福岡県教育委員会　1994 『辻垣畠田・長通遺跡』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第2集

行橋市教育委員会　1987 『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集

行橋市教育委員会　1985 『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集

竹並遺跡調査会　1979 『竹並遺跡』東出版寧楽社

福岡県教育委員会　1996 『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集

福岡県教育委員会　1992 『金屋遺跡』 一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集

福岡県教育委員会　2004 『福富小畑遺跡B地点』 福岡県文化財調査報告書第194集

行橋市　2004 『行橋市史　上巻』

行橋市　2006 『行橋市史　中巻』

行橋市　2006 『行橋市史　資料編：原始・古代』

第４図　調査区位置図（１/3,000）

Ⅲ．調査の内容

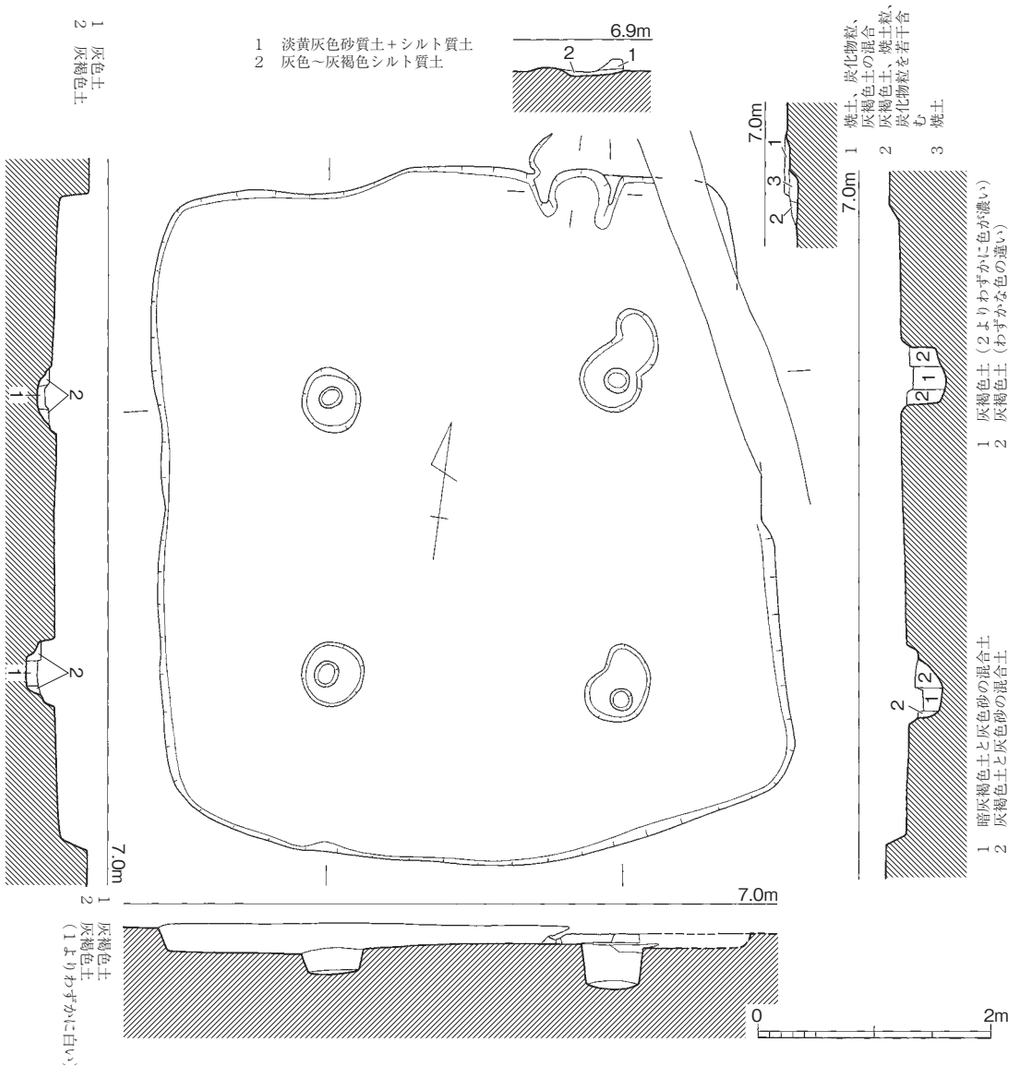
1．宝山小出遺跡

1）概要

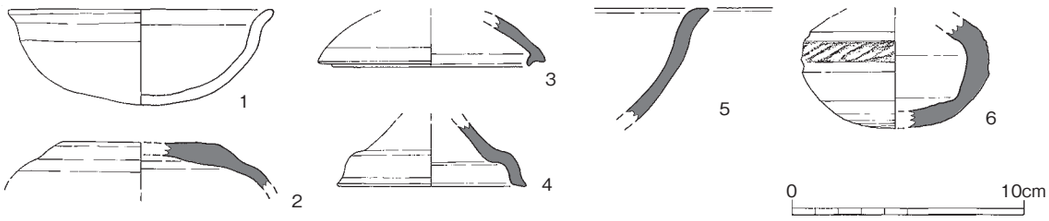
宝山小出遺跡は、福岡工事事務所第24地点にあたり、行橋市大字宝山161-1、162-1、163～166、175-1、176-1、211-1、212、214、216-1、217-1、242～244、246-1、247～249、251-1に所在する。現状は水田として利用されてきた。福岡県教育委員会および行橋市教育委員会がこれまで行なった分布調査の結果から、古墳時代遺物の散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。

平成21(2009)年3月10･11日に実施した確認調査の結果、古墳時代から中世の遺構と遺物を検出したため、限定協議部分を除いた約4,800㎡について発掘調査を実施することとなった。

調査は、便宜的に現在使用している用水路を挟んで西側(Ⅰ区)と東側(Ⅱ区)に分けて二工程で実施した。Ⅰ区は平成21年10月6日から重機による表土掘削を開始し、10月26日から作業員に



第5図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）



第７図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図（１/3）

よる手作業の検出および掘削作業を行なった。Ⅱ区については、平成 22 年 8 月 11 日より表土除去作業を開始し、最終的に 12 月 9 日に記録類を含めた全ての作業を終了し、その後重機による埋め戻し作業を行なった。

今回の調査で検出した主な遺構は、古墳時代の竪穴住居跡 1 軒、自然流路と考えられる溝 1 条、鎌倉・室町時代の区画溝 18 条以上、土坑 6 基以上、井戸 2 基などである。ことに区画溝とこれに伴うと考えられる遺構については、当時の土地利用のあり方を考える上で興味深い。

２）遺構と遺物

竪穴住居跡

1 号竪穴住居跡（図版 3、第 5 図）

Ⅰ区の北半部､1 号溝のすぐ東側で検出した。平面形は正方形に近い長方形であるが､南北 6.0 m、東西は北側で 4.8 m、南側では 5.4 mと、わずかに台形気味となる。深さは 20㎝程度残存している。住居内の 4 箇所で主柱穴を検出し、柱堀形は径 50 ～ 55㎝の平面円形、深さ 15 ～ 30㎝で、西側の 2 箇所は浅い。柱痕跡は径 20㎝程度で、柱間は南北 2.4 ～ 2.75 m、東西 2.5 mである。カマドは北東隅部付近にあり、南側に開口するが、わずかしか残存していない。

出土遺物（図版 10、第 7 図）

1 は土師器椀で、内面の口縁部と体部の境に稜を持つ。胎土は精良で、口径 11.5㎝、器高 4.1㎝。2 ～ 6 は須恵器である。2 は坏蓋であろうか。焼成はやや軟質で、茶灰色を呈する。3 は蓋でかえりを有し、復元受部径 9.8㎝。4 は壺等の脚部と思われる。焼成は堅緻で、復元底径 8.2㎝。5 は器台の坏部であろう。焼成はやや軟質である。6 は甕である。肩部に 2 条の沈線がめぐり、その間にヘラ状工具でキザミを入れる。沈線以下は回転ヘラケズリ調整。復元体部径 8.1㎝。

土坑

1 号土坑（図版 4、第 8 図）

調査区の北端部近く､2 号溝の西 2 mの位置にある大形土坑である。平面形は円形に近い楕円形で、上縁部で南北 4.45 m、東西 3.85 m、深さ 0.7 m。埋土は下層から暗灰色土、灰褐色土の順でレンズ状に堆積し、10 ～ 40㎝大程度の自然石が若干混入している。

出土遺物（図版 10、第 10 図）

1 は土師器甕で、体部内外面ハケメ調整。復元口径 20.8㎝。2 ～ 6 は須恵器である。2 は受部を

持つ坏で、復元受部径 11.5㎝、器高 3.8㎝。3 は高台のある坏で、高台径 11.4㎝。4 はつまみ付きの蓋で、復元口径 14.7㎝、器高 3.8㎝。5 は短脚の高坏で、坏部の丸味が強い。復元口径 12.3㎝、底径 8.8㎝、器高 7.3㎝。6 は短頸壺で、蓋を被せて焼成した痕跡が残る。復元口径 8.0㎝。7 は瓦質土器足鍋の脚部で、体部内面はハケメ調整、外面底部には叩打痕が残り、煤が付着する。脚部の下端部は微妙に外方に曲がる。8 は瓦質土器火鉢である。口縁部下の 2 条の突帯の間にスタンプ施文する。9 は李朝陶磁器の椀かと思われる。胎土は灰褐色で砂粒を含み、釉はやや青みを帯びた透明である。

2 号土坑（図版 4・5、第 8 図）

Ⅰ区の北部、4 号溝の屈曲部付近の北側に接するようにある。平面形は南北に長い丸味を帯びた隅丸長方形で、長軸長 2.15 m、短軸長 1.8 m、深さ 0.5 m。埋土には炭化物粒を含む。

出土遺物（図版 10、第 10 図）

10 は李朝陶磁器の椀で、小振りなものであろう。内面見込みと高台畳付部に砂目跡が残る。胎土は灰白色で黒色粒を含む磁器質、釉はやや青みを帯びた白色で、全面に施釉する。高台径 4.8㎝。

3 号土坑（図版 5、第 8 図）

Ⅰ区の中央部付近、6 号溝東端部のすぐ北側にある大形土坑で、2 号井戸から 6 号溝へと延びる溝を切って設けられている。平面形は卵形に近い楕円形で、長軸長 3.4 m、短軸長 2.7 mである。底部の北東寄りの部分 1.7 × 1,25 mの範囲がさらにもう一段 25㎝程掘り込まれており、上部からの深さは 0.85 m。埋土の各層に炭化物粒を含む。

出土遺物（図版 10、第 10 図）

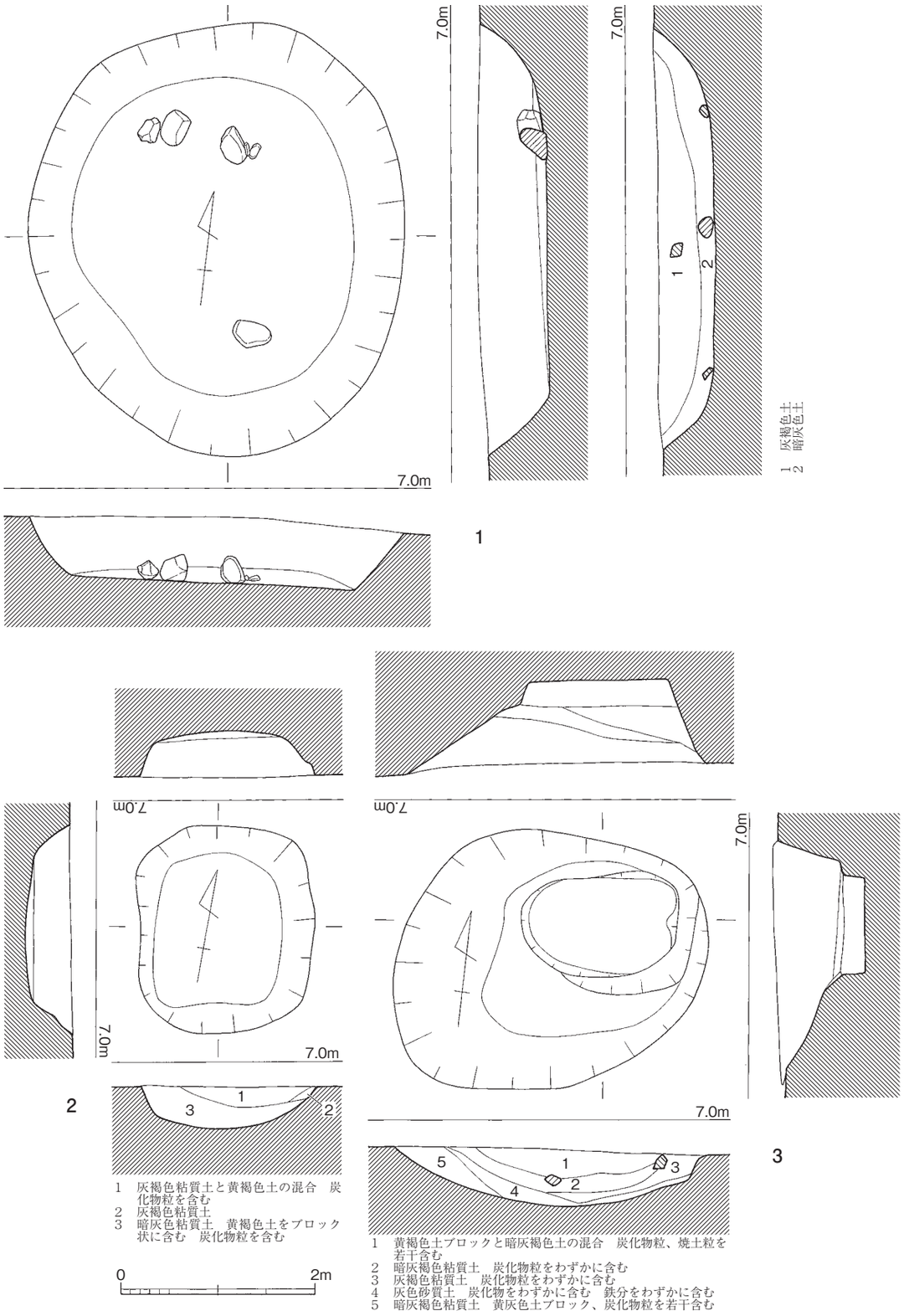
11 ～ 13 は土師器である。11･12 は坏で、調整が雑で器形の歪みが大きい。11 は口径 14.2㎝、底径 6.8㎝、器高 4.4㎝、12 は復元口径 13.8㎝、底径 6.9㎝、器高 3.7㎝。13 は小皿で、11･12 と同様の調整で、口縁部の一部が大きく歪む。口径 7.9㎝、器高 1.8㎝。14 は土師質土器摺鉢である。底部には板状圧痕が残り、体部は内外面ナデ調整を行なった後 5 本一単位の条線を放射状に配置する。復元口径 35.0㎝、復元底径 12.4㎝、器高 11.9㎝。15 は鞴羽口で、先端から 13㎝分が残存している。羽口の外径が 11.4㎝と大形であるのに対して、内径は 2.8㎝と小さい。炉壁にあたる部分は白色化しており、それによれば炉壁の厚さは 3㎝程度である。炉内にあたる部分は高熱のため溶融して下方に流れた結果、上部が減って下部の残存状況が良い形状になっている。炉内の上部にあたる部分に鉄滓状の塊が融着していることから、製鉄あるいは鍛冶に関わる遺物と考えられる。

4 号土坑（図版 6、第 9 図）

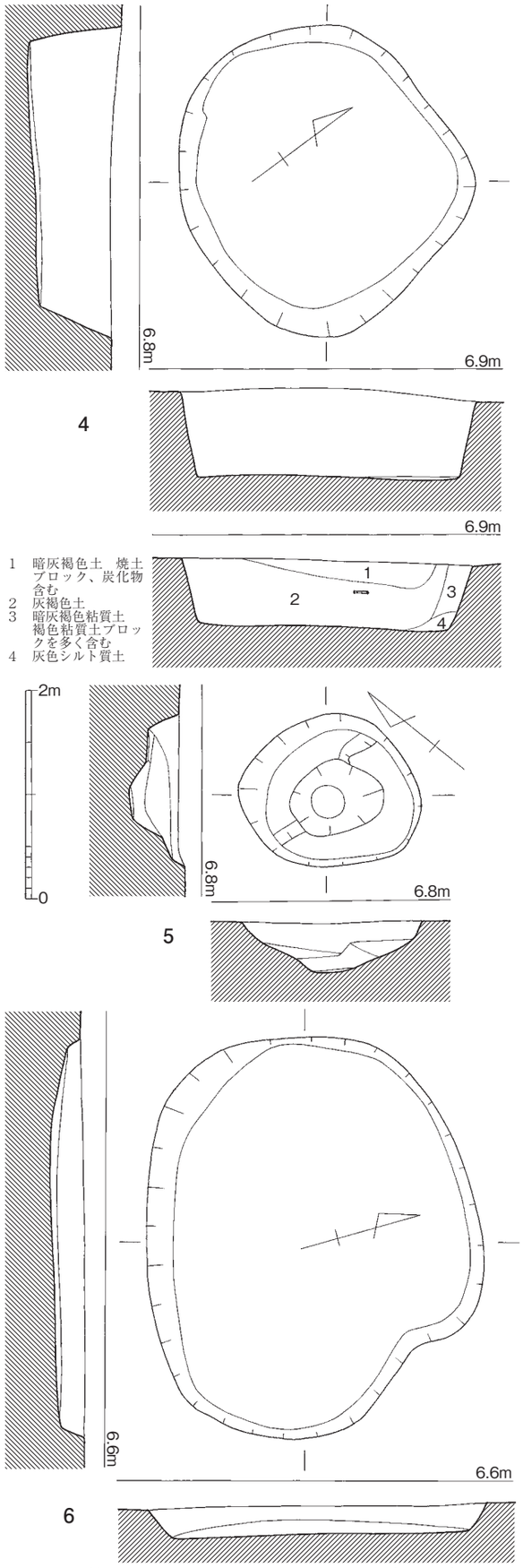
Ⅰ区の南半部、10 号溝の北端部のすぐ西にある。平面形は不整円形で、径 2.6 ～ 3.0 m、周壁は急傾斜で直線的に立ち上がり、深さ 0.85 m。埋土の最上層の暗灰褐色土には焼土ブロック、炭化物を含む。

出土遺物（第 10 図）

16 は瓦質土器摺鉢であろう。口縁部を内側に折り返すのが特徴的で、体部内面は横方向のハケメ調整の後、斜め方向の条線がわずかに確認できる。



第８図　１～３号土坑実測図（1/60）



第９図　４～６号土坑実測図（1/60）

5 号土坑（図版 6・7、第 9 図）

8 号溝南端部の東側、2 号溝との中間あたりにある。平面形は楕円形で、長軸長 1.75 m、短軸長 1.45 m。底部の中央部がもう一段深い二段掘り状になっており、深さは 0.5 m。埋土は灰色粘質土の一層で、30㎝大の自然石が混入している。

出土遺物（第 10 図）

17 は土師器坏である。底部は糸切りで厚く、内面には轆轤目が残る。胎土に金雲母を多量に含むのが特徴的である。復元底径 8.8㎝。

6 号土坑（図版 7、第 9 図）

Ⅱ区の北半部、14 号溝の屈曲部を切って設けられる。平面形はややいびつな楕円形で、長軸長 3.85 m、短軸長 3.25 m、深さは 30㎝と平面規模に対して浅く、南半部は若干掘りすぎてしまったが底面はほぼ平らになるものと思われる。土坑というより竪穴状遺構といった方が適切かもしれない。

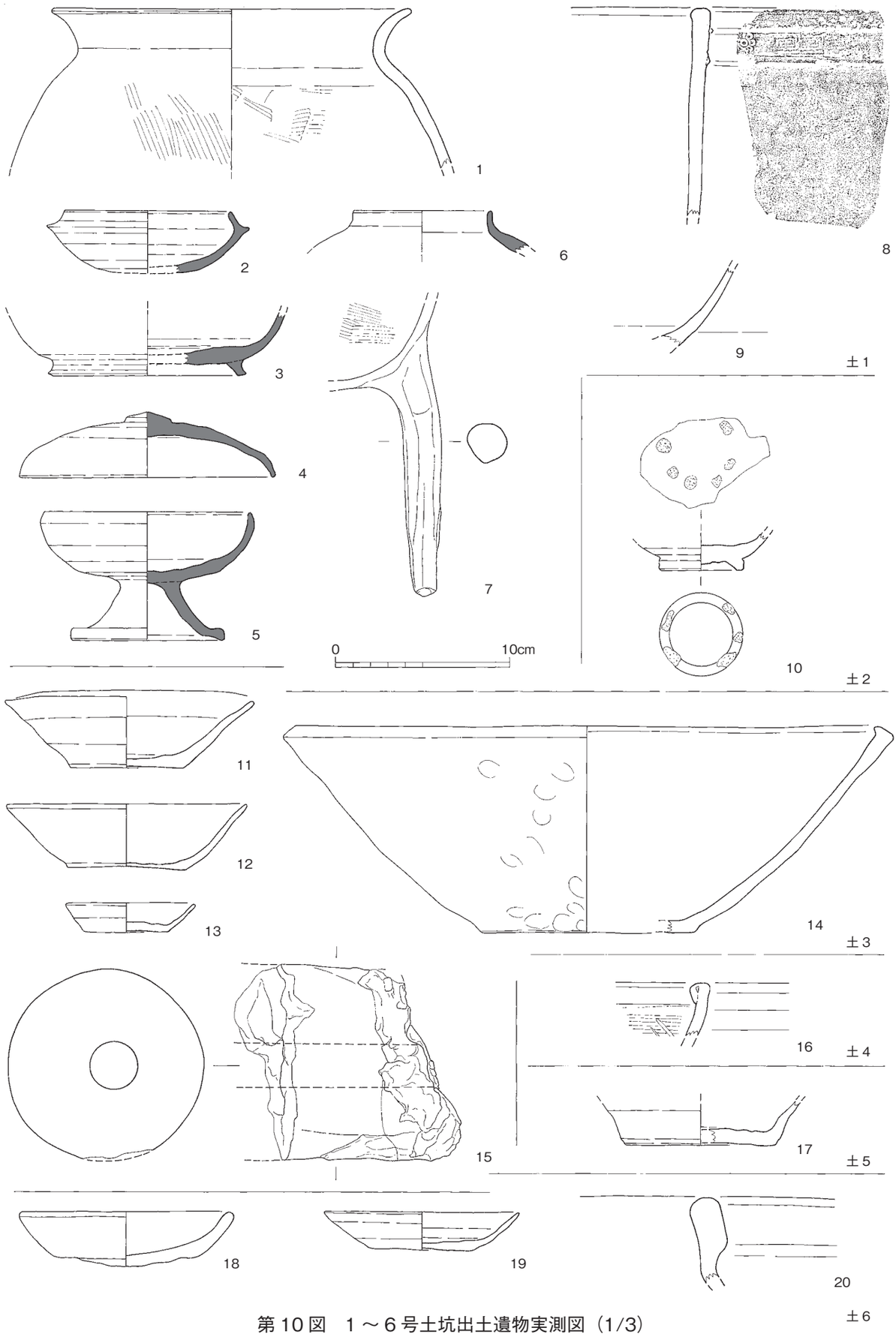
出土遺物（図版 10、第 10 図）

18・19 は土師器皿。18 は器壁が厚く、底部は糸切であるが調整が雑である。復元口径 12.3㎝、底径 8.0㎝、器高 3.1㎝。19 は器壁が薄く、底部には板状圧痕が残る。口径 11.2㎝、底径 5.9㎝、器高 3.2㎝。20 は瓦質土器甕の口縁部である。

溝

1 号溝（図版 2、第 6 図）

Ⅰ区の南西隅部付近から北西隅部付近まで、ほぼ縦断する形で検出した。流路は大きくは弧状を描くが細かく蛇行しており、また幅も一定せず、最も広い部分で約 14 m、狭い部分で約 2.5 m、深さは最大で 0.8㎝程である。埋土は灰白色シルト質土のほぼ一層である。調査区内で 110 m以上分を検出した。

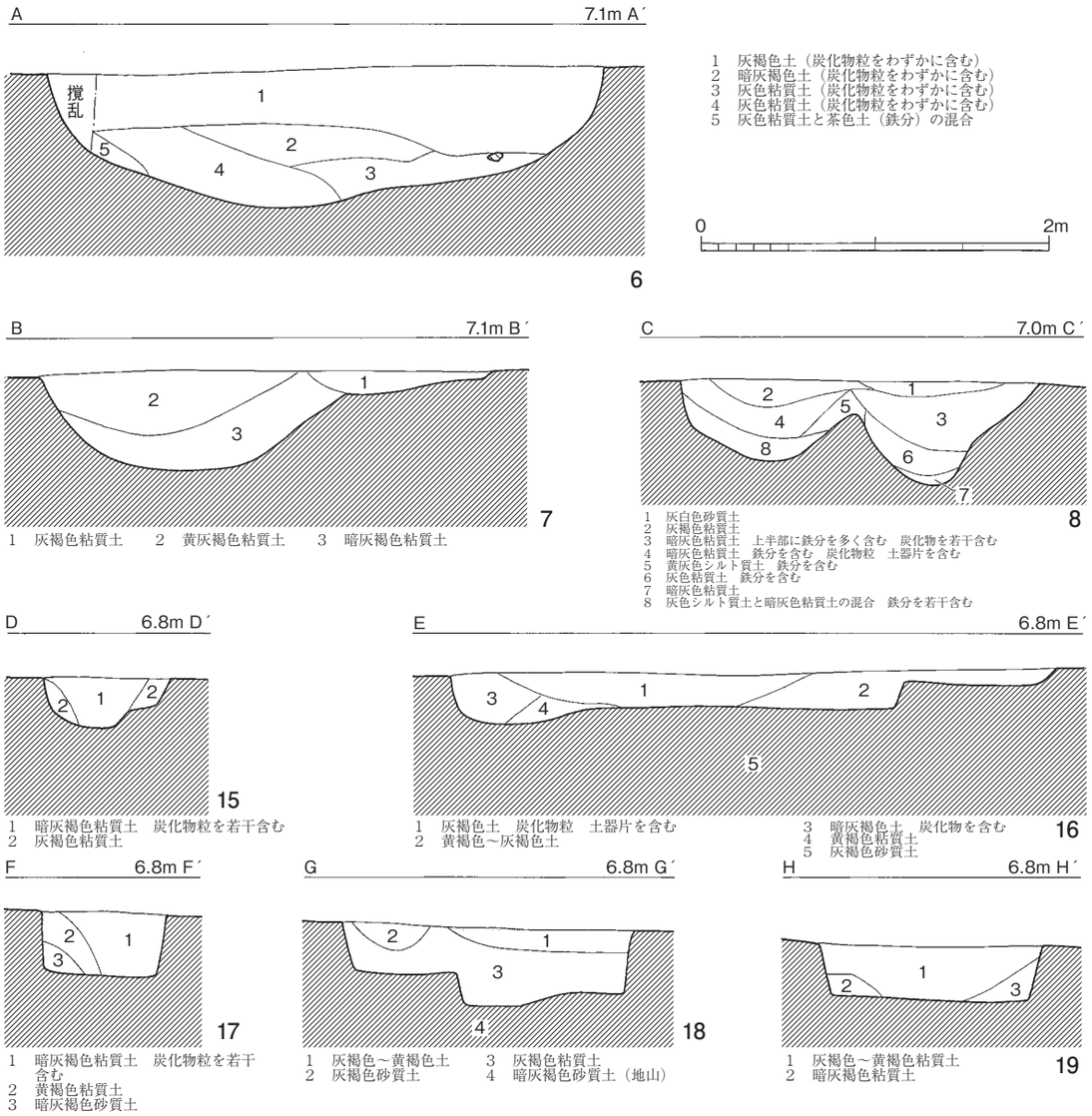


第10図　1～6号土坑出土遺物実測図（1/3）

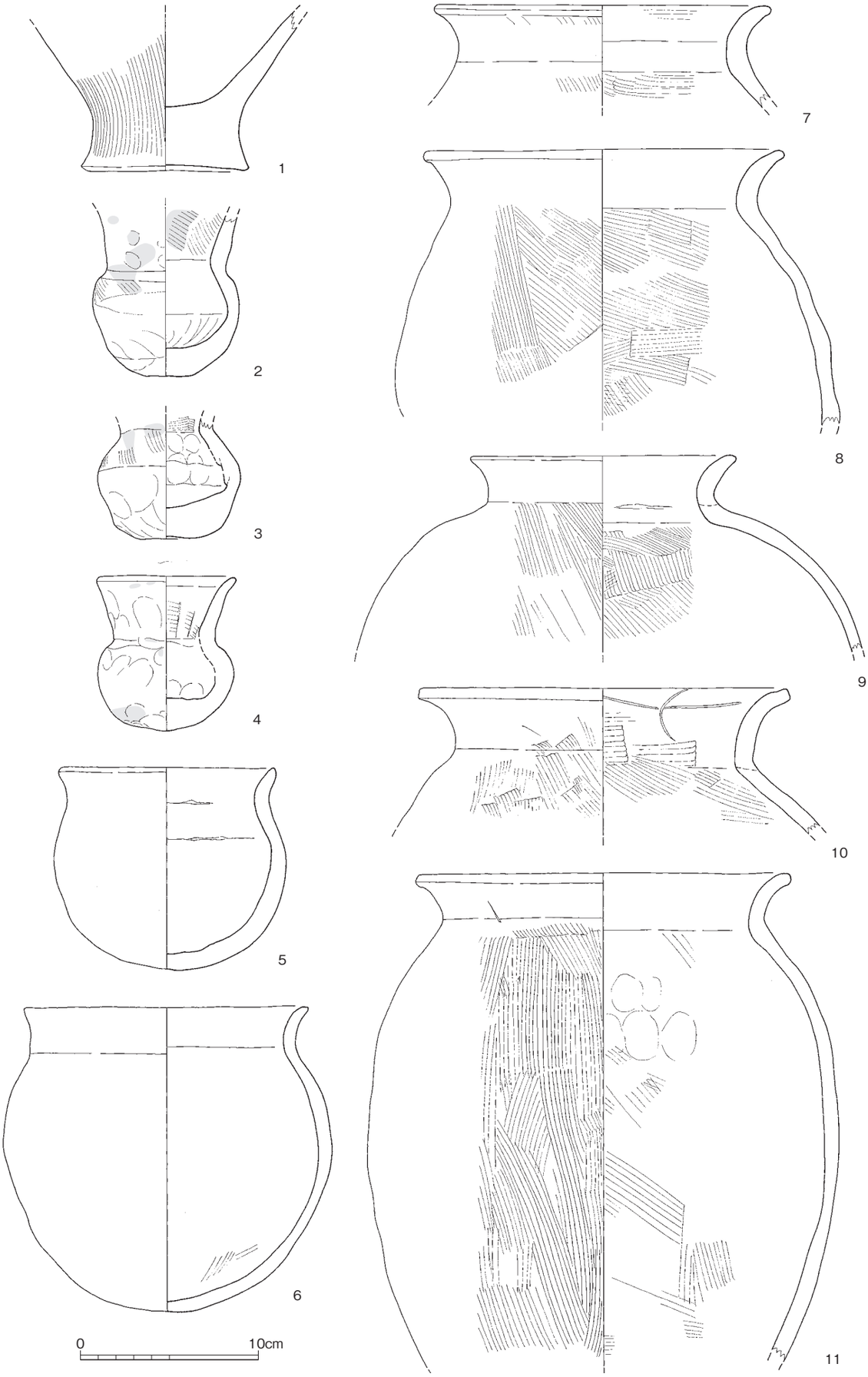
形状から判断して、自然の流路と考えられるが、古墳時代後期を中心とした遺物が多量に出土している。

出土遺物（図版 11 ～ 16、第 12 ～ 15 図）

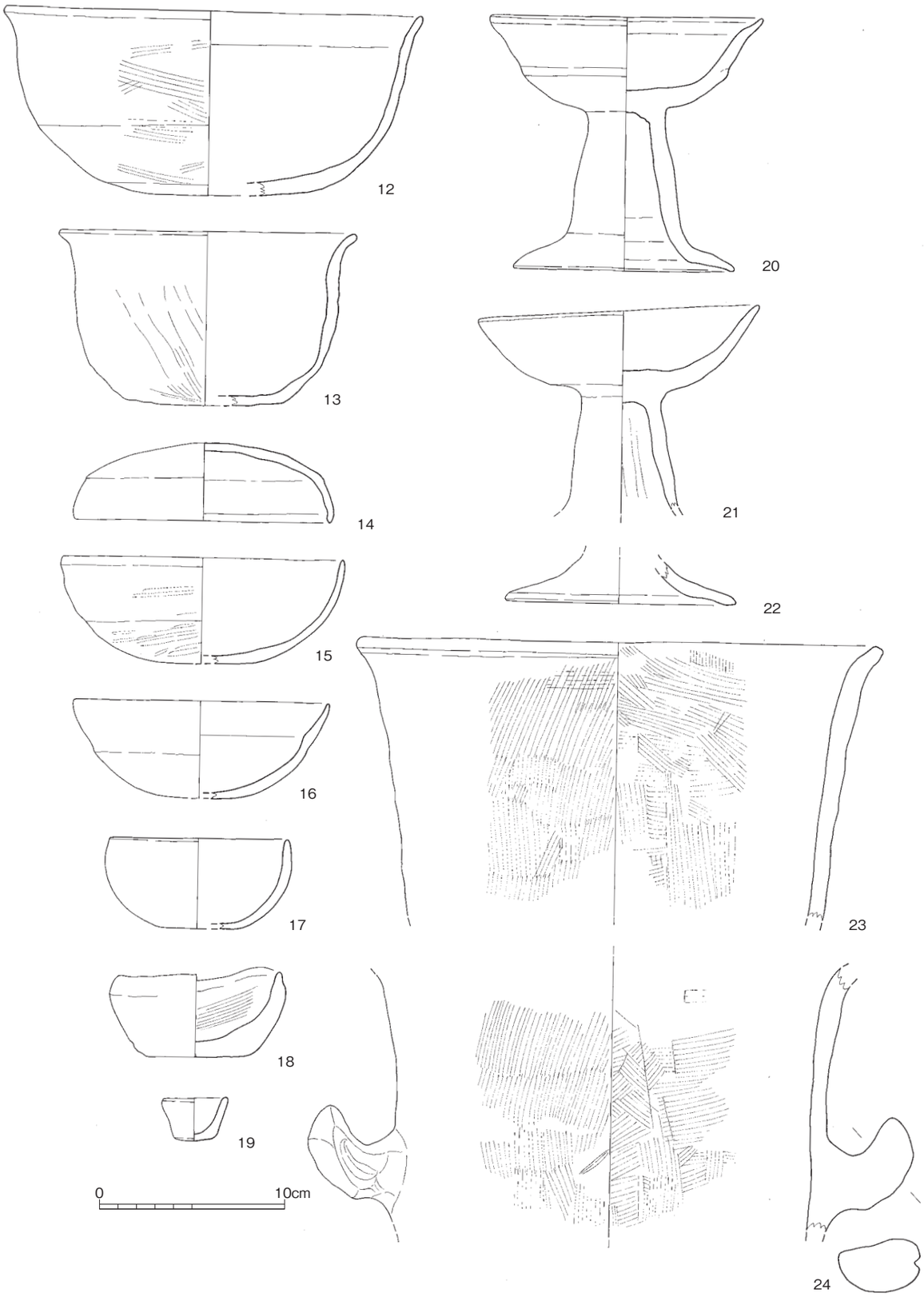
1 は弥生土器甕で、底部は厚く、底面はわずかに上底になる。底径 9.4cm。2 ～ 24 は土師器である。2 ～ 4 は粗い作りの丸底壺で、器壁は厚く、ほぼ手捏ねに近いが、頸部内面と 2・3 の体部上位にはハケメ調整がみられる。また、外面と 2 の頸部内面には赤色顔料の痕跡が残る。体部径 8.0 ～ 8.2 cmで、4 は口径 7.7cm。5 ～ 11 は甕。5 の体部は球形に近く、体部は内外面ともナデ調整で、内面には粘土の接合部が観察できる部分がある。外面は二次焼成のために赤変しており、煤も付着する。復元口径 12.2cm、器高 11.3cm。6 も体部が球形に近く、ハケメ調整後ナデ調整。外面は二次焼成を受けて赤変しており、器面の剥離も見られる。7 ～ 11 は体部内外面ともハケメ調整である。7 は復元口径 19.0cm。8 は口径 20.4cm、体部径 24.5cm。9 は口頸部が小さく、体部が球形に近い。口径 15.0 m。10 は口頸部が比較的長く、内面にはヘラ記号状の痕跡がある。口縁端部は四角く仕上げ、口径 20.7cm。



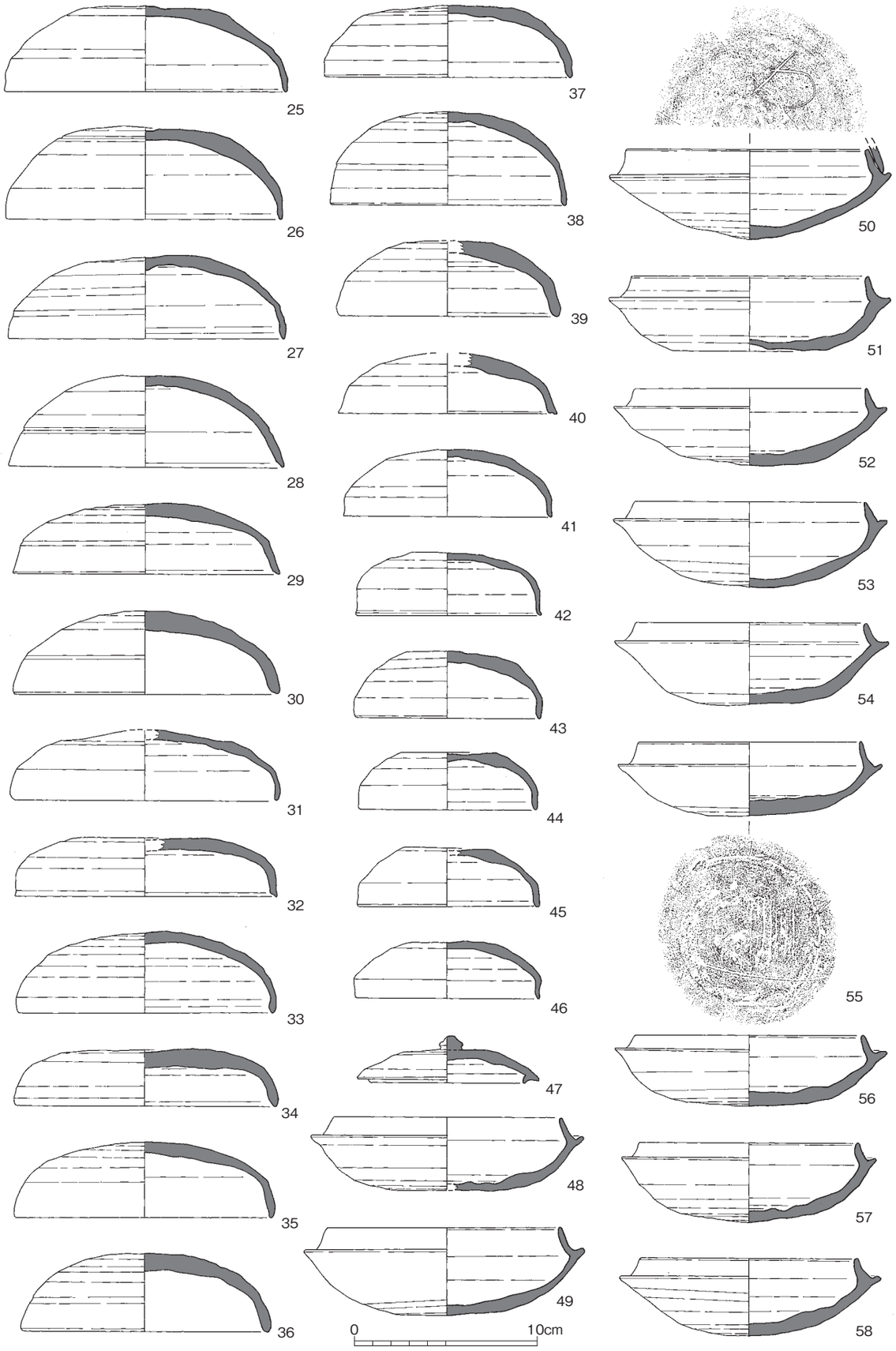
第 11 図　6 ～ 19 号溝土層実測図（1 /40）



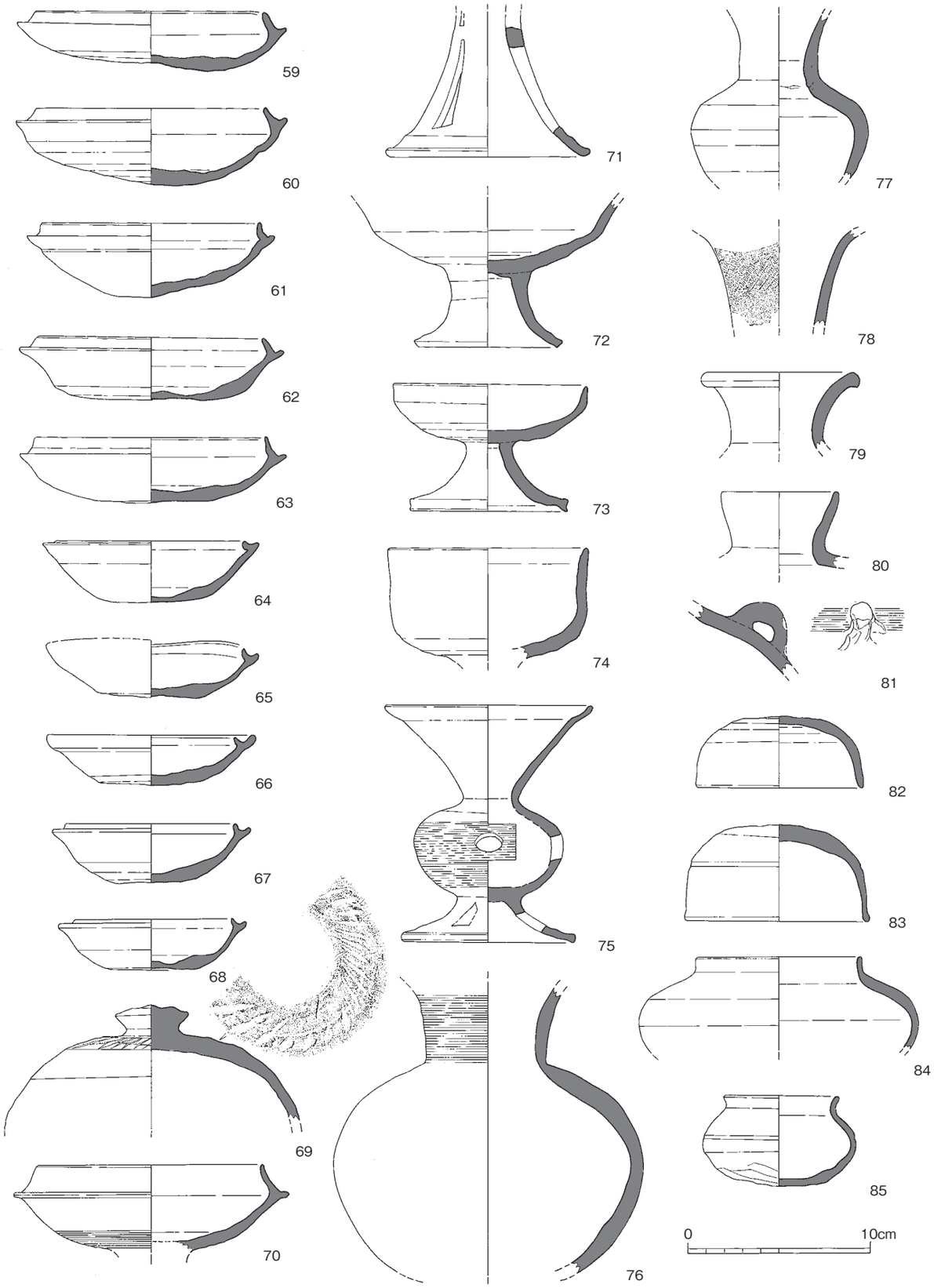
第 12 図　1 号溝出土遺物実測図①（1 /3）



第 13 図　1 号溝出土遺物実測図②（1 /3）



第 14 図　1 号溝出土遺物実測図③（1 /3）



第 15 図　1 号溝出土遺物実測図④（1 /3）

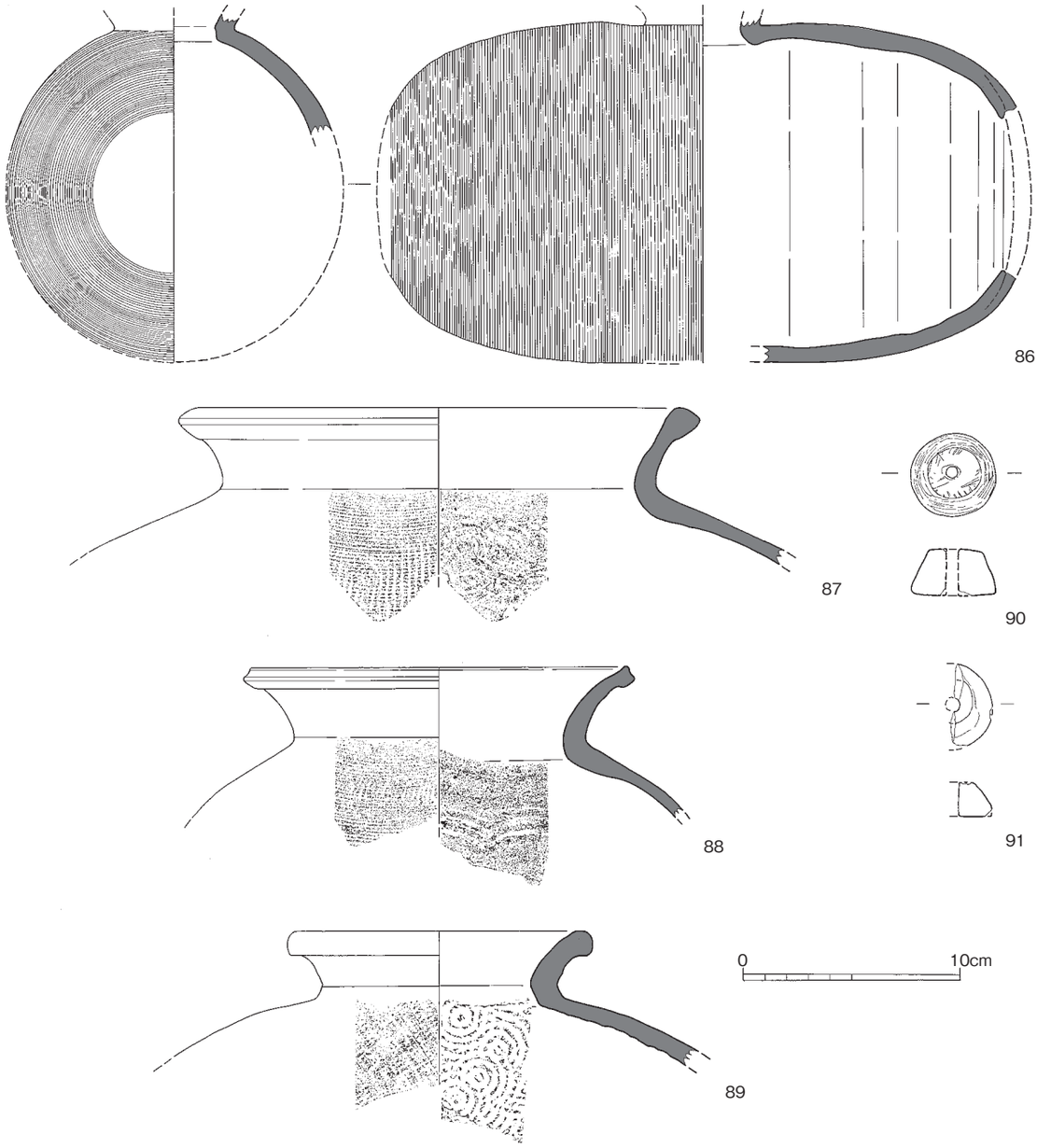
また、内外面には赤色顔料の痕跡がわずかに確認できる。11 は復元口径 27.5cm、体部は長胴で中位に最大径があり復元径 26.5cm。12･13 は鉢。12 の底部は平底気味の微妙な丸底で、内面ナデ調整、外面ハケメ調整。口縁部は歪んでいるが口径 22.5cm程度、器高 10.0cm。13 の底部は平底で、内外面とも器面が風化しているが、内面ナデ調整、外面は粗いハケメ調整、復元口径 16.2cm、器高 9.3cm。14 は坏蓋で、天井部と体部の境にゆるい段を持つ。口径 13.8cm、器高 4.2cm。15 ～ 17 は椀で、15・16 は丸底で、17 は平底。15 は外面ミガキ調整で仕上げ、口径 15.4cm、器高 5.6cm。16 は内面に稜を持ち、口縁部と体部を分ける。器面が風化しているが、外面体面はケズリ調整であろうか。口径 13.7cm、器高 5.6cm。17 も器面の風化が激しいが、外面はミガキ調整ではなかろうか。口径 9.8cm、器高 4.8cm。18・19 は手捏ねの椀あるいは鉢形のもの。18 は平底で、内面に粗いハケメ状のナデ調整の痕跡が残る。口径 8.8cm程度。19 はミニチュアの鉢形で、平底になる。口径 3.5cm、器高 2.4cm。20 ～ 22 は高坏で、20 は坏部の体部と底部の境に段を有する。3 点とも器面が風化しているが、脚部内面に工具痕が残る以外はナデ調整。20 は口径 14.8cm、底径 11.9cm、器高 13.7cm、21 は口径 15.3cm、22 は底径 12.5cm。23･24 は甑で、2 点とも内面は不定方向のハケメ調整、外面は縦方向のハケメ調整、23 が復元口径 28.4cm。25 ～ 89 は須恵器である。25 ～ 46 は坏蓋。口径 9.8 ～ 15.6cm、器高 3.1 ～ 5.6cm。体部と口縁部の境が明瞭でないものが多いが、27 ～ 30・38 はこの部分に段を持ち、41 ～ 46 は稜を持って口縁部が垂直に近くなる。31 は天井部に板状圧痕が認められる。47 は口縁部にかえりを有し、天井部につまみが付く。受部径 10.0、器高 2.6cm。また 25・30・33・35・36・41 は焼成が不充分で軟質、28 は灰茶色を呈する。48 ～ 68 は坏で、受部径 13.6 ～ 15.4cmのもの (48 ～ 63) と、10.2 ～ 11.8cmのもの (64 ～ 68) に大きく分かれる。50 は蓋の一部が融着したまま残り、また内底部にヘラ記号がある。59・60 は外底部にヘラ記号があり、また 59 は板状圧痕も認められる。64 は軟質で器面の風化が激しい。65 は内面に自然釉がかかり、器形が歪んでいる。　69 は高坏の蓋であろう。天井部につまみが付き、体部は丸味を持つ。天井部外面は回転ヘラケズリ調整の後、つまみを取り囲むようにヘラ状工具でキザミを入れる。焼成はやや軟質である。口径 16.2cm、器高 6.8cm。70 ～ 74 は高坏である。70 はたちあがりを有する坏部で、底部外面にはカキメ調整がみられる。受部径 15.1cm。71 は脚部で 3 箇所に透し窓を有する。焼成は堅緻で、底径 11.2cm。72・73 は短脚の高坏で、72 は口縁部が開き、73 は直立する。72 は底径 8.2cm、73 は口径 10.8cm、底径 8.7cm、器高 7.0cm。74 は坏部が深いタイプで、歪みがみられるが復元口径 11.0cm。75 は脚付きの瓹で、体部はカキメ調整、脚部には 3 箇所に粗い透し窓を有する。焼成はやや軟質で、灰茶色を呈する。復元口径 11.4cm、体部径 8.2cm、復元底部径 9.6cm、器高 13.0cm。76 ～ 78 は長頸壺である。76 は体部の中位に最大径があり、頸部はカキメ調整、体部は下半部をヘラケズリ調整した後、ヨコナデ・ナデ調整。体部径 17.0cm。77・78 は瓹の可能性が高い。77 は体部の過半部が回転ヘラケズリ調整で、復元体部径 9.7cm。78 は頸部中位に櫛状工具による波状文をめぐらせる。79 は提瓶の口頸部であろうか。口径 8.7cm。80 は平瓶等の口頸部で、口径 6.4cm。81 は一見提瓶の把手のようであるが、頸部の基部周囲にカキメ調整がみられ、内面にはタタキ調整の当具痕が青海波状に残る。耳付きの壺であろうか。82･83 は短頸壺の蓋。82 は天井部から体部に別の土器の破片が融着している。口径 9.2cm、器高 3.9cm。83 は焼成が不充分な軟質で、器面は風化し、白褐色を呈する。復元口径 10.2cm、器高 5.3cm。84・85 は短頸壺。84 は口縁部が直立し、体部は扁平な形状である。肩部には口縁部周囲を避けて自然釉がかかり、蓋をした状態で焼成したことが判る。復元口径 9.2cm、復元体部径 15.4cm。85 は

口縁部が外反して開き、体部中位に１条の沈線がめぐる。体部下半部は回転ヘラケズリ調整の後、底部は工具によって不定方向に粗くなでる。口径 6.3cm、体部径 8.4cm、器高 5.0cm。86 は横瓶であろう。内面は一部に同心円の当具痕がみられ、その後ヨコナデ調整、外面は細かいカキメ調整で仕上げ、焼成は堅緻で黒灰褐色～黒色を呈する。

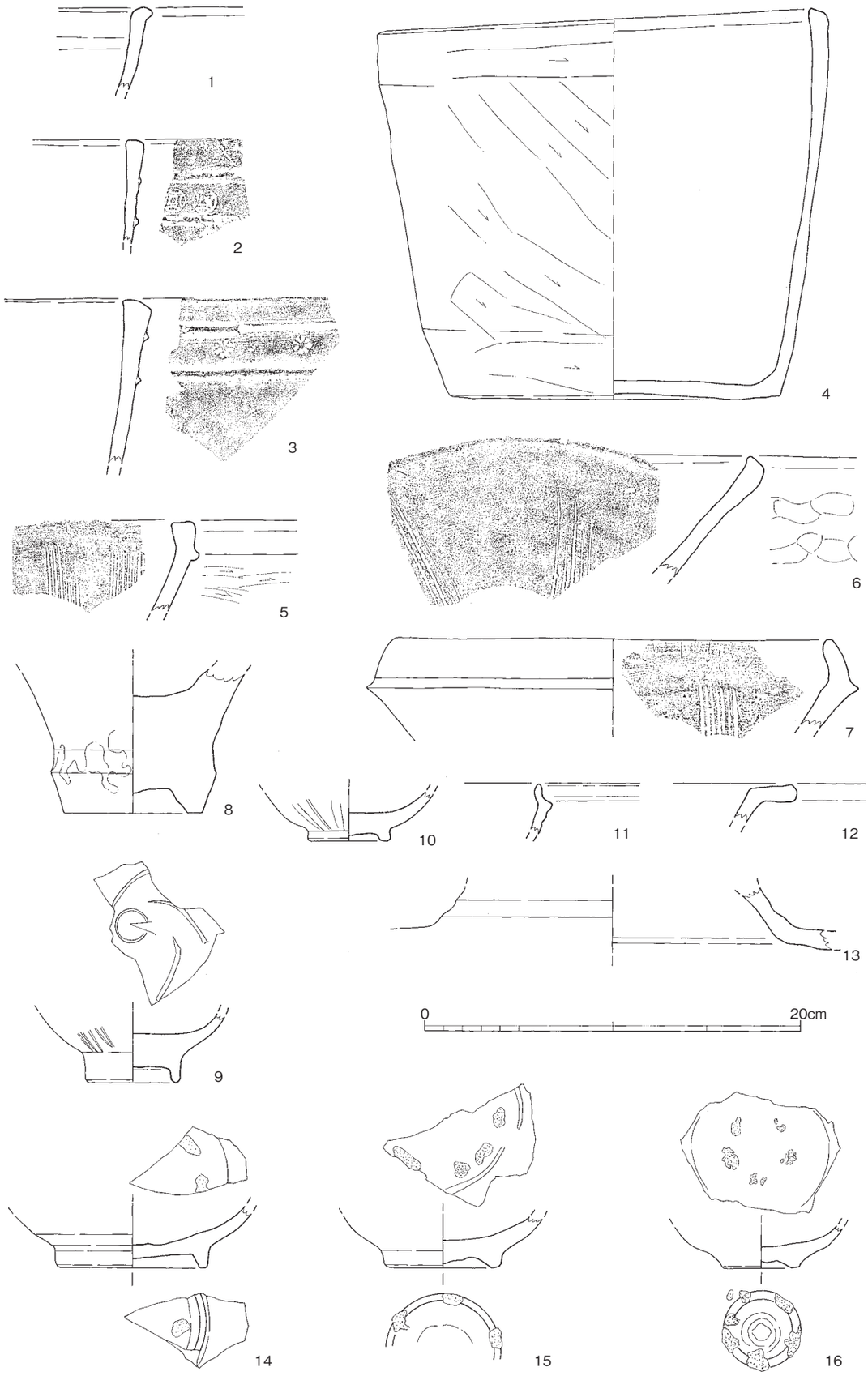
87 ～ 89 は甕で、口頸部は短く、体部はタタキ調整の後 87・88 はカキメ調整をおこなう。復元口径 14.1cm～ 24.0cm。90・91 は紡錘車で、90 は蛇紋岩製、91 は滑石製。

２号溝（図版２・7、第６図）

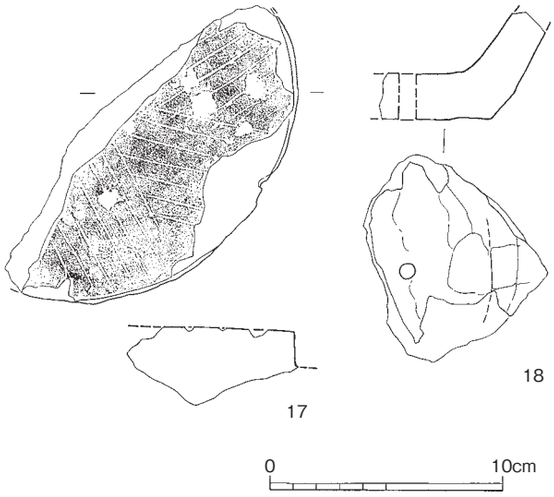
Ⅰ区とⅡ区の間で検出し、調査区中央部を南北に縦断する。調査範囲のほぼ中央部、調査区北端から 50 m程のところで直角に折れ曲がって東に進み、約 10 mで再度直角に折れ曲がって南端部に到り、全体としてクランク状を呈する。調査区内で延長約 120 m、幅約 5.5 m、深さ最大 0.7 mの



第 16 図　１号溝出土遺物実測図⑤（1 /3）



第 17 図　2 号溝出土遺物実測図①（1 /3）



第18図　２号溝出土遺物実測図②（１/3）

断面逆台形で、埋土は暗灰褐色粘質土のほぼ一層である。区画溝と考えられる。後述する３～19号溝は、すべてこの２号溝を基準として配置されているようである。また、２号溝の直上には現在の水田の用排水路が存在する。当時の区画が現在の地割に継承されていることは興味深い。

出土遺物（図版16・17、第17・18図）

１は土師器鉢で、口縁部は外方に折り曲げて上端部に平坦面をつくる。内面はミガキ調整であろうか。２～４は瓦質土器火鉢で、２・３は口縁部下の２条の突帯の間にスタンプ施文をおこなう。４は体部内面は粗いヨコナデ調整、外面はヘラケズリ調整。口径24.0㎝、底径17.7㎝、器高20.7㎝。５は瓦質土器摺鉢で、体部外面はヘラケズリ調整である。６は東播系摺鉢であろう。内面はヨコナデ調整、外面はナデ調整で多数の指頭圧痕が残る。７は備前系摺鉢で、内面には自然釉がかかる。８は白磁四耳壺である。底部は極端に厚く、高台の中位に明瞭な稜をつくる。釉は体部と高台の境までかかる。胎土は灰色で、釉は透明に近いがやや緑がかる。９・10は青磁椀である。９は内面見込みに片切彫の文様を配し、外面にも線描きの文様がある。全面に施釉した後、外底部を輪状に削り取る。高台径5.0㎝。10の体部外面は鎬蓮弁文と考えられる。高台外面まで釉がかかる。高台径4.4㎝。11は青磁の蓋付きの鉢か。受部とたちあがり部外面は露胎である。12は青磁盤であろう。口縁部には若干歪みがみられ、輪花あるいは菊花となるものかと思われ、また釉には貫入があらわれている。13は褐釉壺の頸部と体部の境あたりか。胎土は茶灰色、釉は暗褐色でかかりに斑がある。14～16は李朝陶磁器で、14・15は椀、16は皿と思われ、３点とも内面見込みと高台畳付部に目跡が残る。14は胎土は白色、釉も白色で、高台径8.1㎝。15は胎土は黄灰色、釉は白色で、高台径6.2㎝、16は胎土は灰色、釉は透明感のある青灰色で、高台径4.1㎝。17は茶臼の下臼であろう。臼面はわずかに凸状になり、張りは１ｍｍ程度。受皿との境で割れているようで、完全に欠失するが痕跡だけが確認できる。臼面は６分割型と考えられ、単位あたり８～９本の溝を刻む。輝緑凝灰岩、いわゆる赤間石製で平滑であるが、岩自体の空洞部が目立つ。臼面の復元径19.0㎝。18は滑石製石鍋の底部付近の破片で、外面には煤が付着するが、底部に径6.5～7.0ｍｍの穿孔があり、転用しようとしたものである。

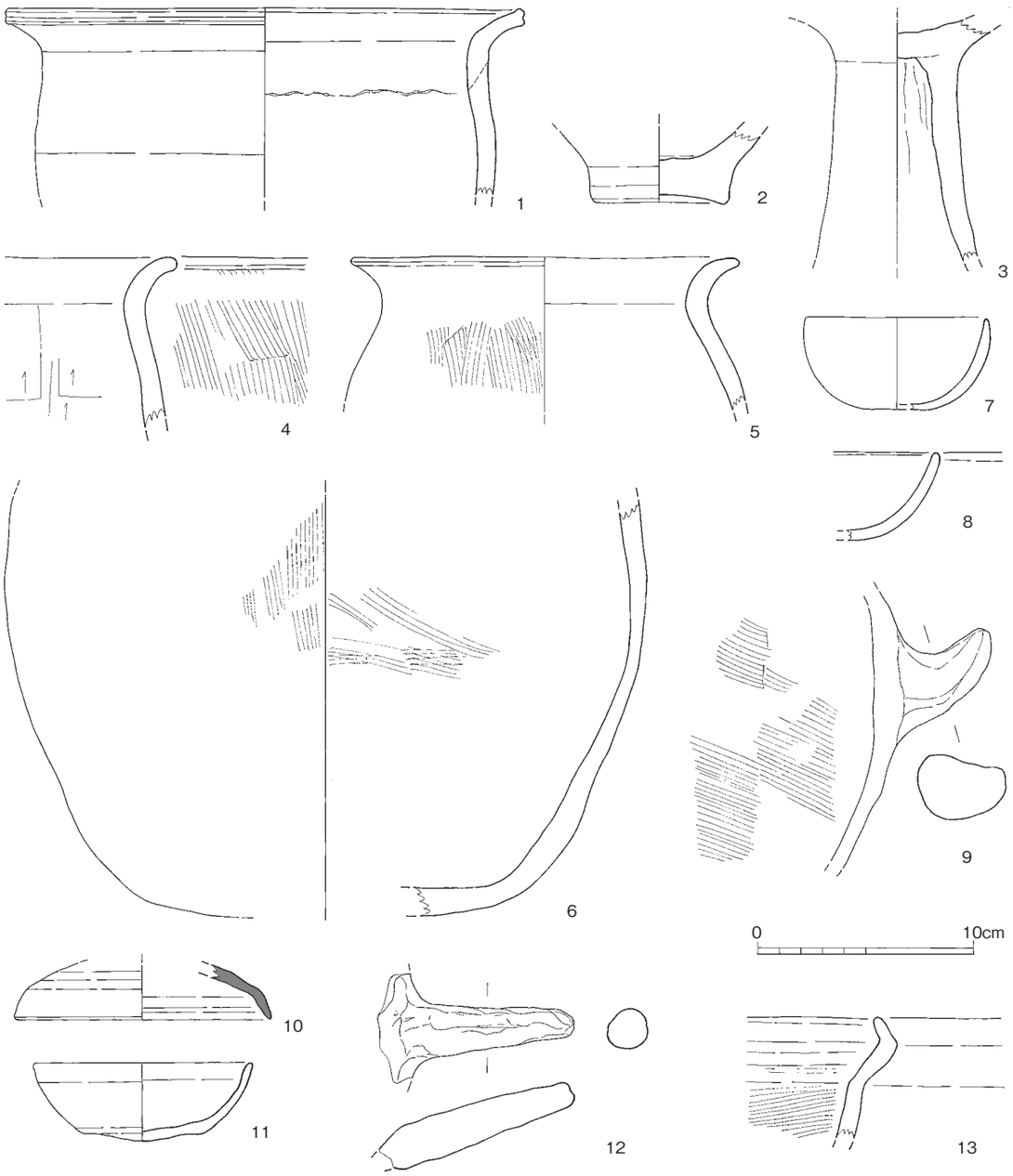
３号溝（図版２、第６図）

調査区北端部で検出した。東西に直線的に延び、調査区内で長さ31.5ｍ、幅0.4～1.2ｍ、深さは20～30㎝程が残存している。２号溝とは直角方向であるが、接続はせず約2.0ｍの間隔を開けており、現状では東端部３ｍ部分の南側が膨らむ。後述する4･5号溝などと同様とすれば、３号溝は本来は東端部で南側に折れ曲がり、また北側調査区外にこれと対となる平行する溝が存在する可能性もあるものと考えられる。

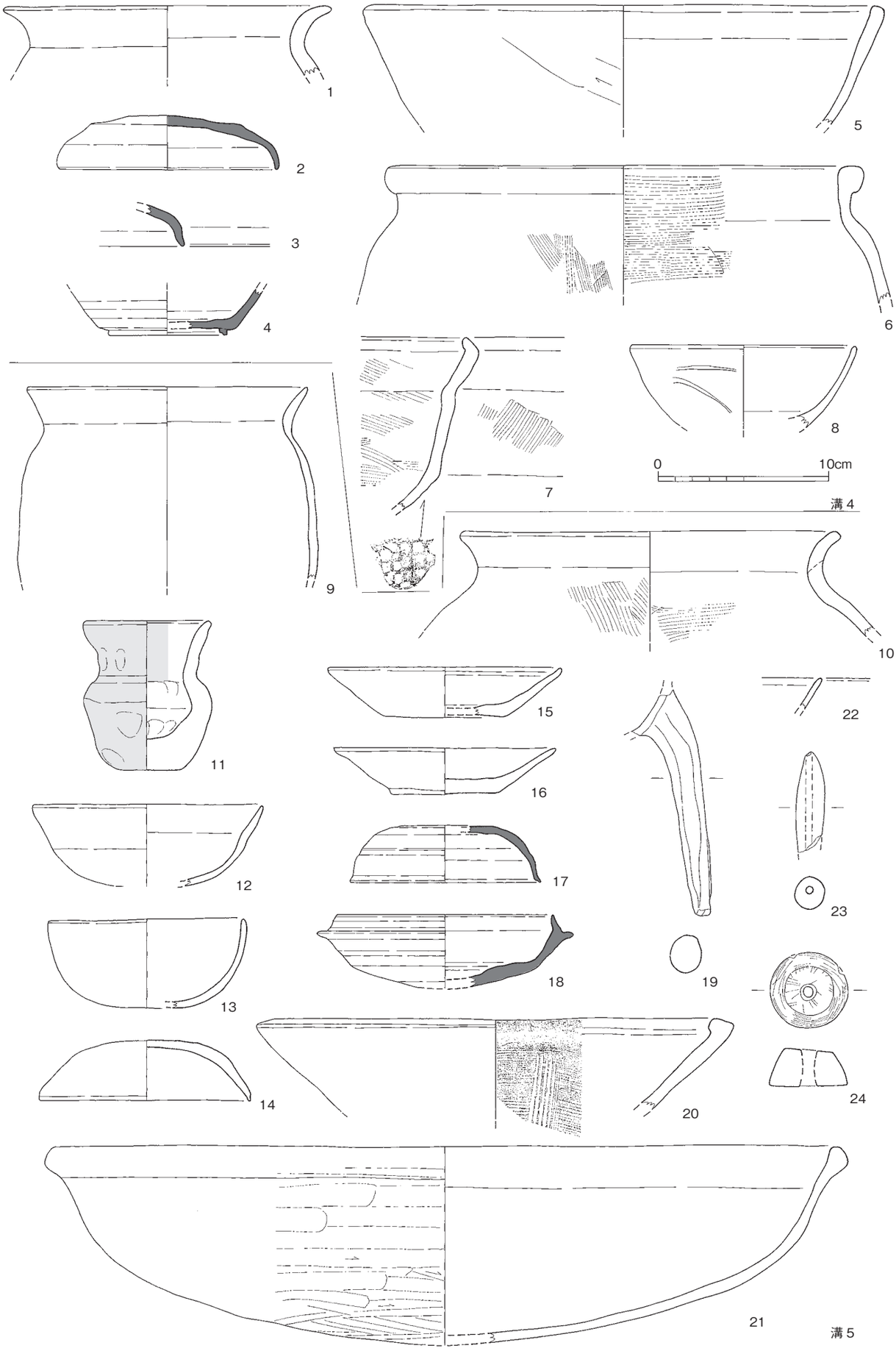
出土遺物（図版17、第19図）

１～３は弥生土器である。１は甕で口縁端部をわずかに上方に摘み上げる。復元口径24.2㎝。２

は甕の底部で、若干上底となる。復元底径 6.5㎝。3 は高坏で、脚部内面にはしぼり痕と坏部との接合部が明瞭に残る。胎土には砂粒を多く含み、焼成は堅緻だが、表面の風化が激しい。　4 ～ 9 は土師器で、4 ～ 6 は甕。体部外面はハケメ調整、内面は 4 はケズリ調整、6 はハケメ調整の痕跡が残る。また 6 の底部は平底気味になる。5 は復元口径 18.0㎝､6 は復元体部径 29.7㎝。7･8 は椀で、7 は復元口径 8.5㎝、器高 4.3㎝。9 は把手付き甕で、内面は横、斜め方向のハケメ調整、外面は縦方向のハケメ調整がわずかに残る。10 は須恵器坏蓋で､復元口径 12.0㎝。11 は焼成は瓦質であるが、土師器である可能性もある。底部はヘラ切りの後、周囲をなでて仕上げる。復元口径 10.2㎝、復元底径 5.6㎝、器高 3.6㎝。12・13 は瓦質土器。12 は片手鍋あるいは炮烙の把手であろう。つくりは足鍋の脚部と同様の手捏ねであるが、口縁部に接合する。13 は鍋で、口縁端部を屈曲させて内側に折り曲げる。体部内面はハケメ調整、外面はナデ調整で煤が付着する。



第 19 図　3 号溝出土遺物実測図（1 /3）



第 20 図　4・5 号溝出土遺物実測図（1 /3）

４号溝（図版２、第６図）

西調査区の北半部、３号溝の南約 25 ｍにある。東西に直線的に延びて、２号溝とは 2.1 ｍの間隔を開けて北側に 3.5 ｍ程折れ曲がる。延長約 24 ｍ、幅 0.8 ～ 1.2 ｍ、深さ約 20㎝。南側の５号溝と平行しており、両者の間隔は 1.0 ～ 2.0 ｍで対となるものであろう。

出土遺物（図版 18、第 20 図）

１は土師器甕で、器面は風化している。復元口径 19.4㎝。２～４は須恵器で、２･３は坏蓋である。２は復元口径 13.0㎝、器高 3.2㎝。４は高台のある坏で、復元高台径 7.0㎝。５は土師質土器鍋で、内面上部を強くなでて微妙な段をつくり、体部と口縁部を分ける。外面はヘラケズリ調整で、全面に煤が付着する。復元口径 30.6㎝。６・７は瓦質土器。６は甕で、口縁部を折り返して上部に平坦面をつくる。内面は横方向、外面は縦方向のハケメ調整をおこない、復元口径 28.0㎝。７は鍋で、口縁端部を内側に折り曲げる。体部の中位で屈曲し、それ以下には格子目叩打痕が残る。８は青磁椀で、外面には片切彫の文様を描く。復元口径 13.4㎝。

５号溝（図版２、第６図）

４号溝の南側、1.0 ～ 2.0 ｍの間隔を開けて平行して東西に直線的に延びる。２号溝とは 1.7 ｍの間隔を開けて、東端部がわずかに南側に曲がる。長さ 22.5 ｍ分を検出し、幅は中央部分が乱れているが、これを除けば 0.3 ～ 0.9 ｍ、深さ約 20㎝が残存する。

出土遺物（図版 18、第 20 図）

９～ 17 は土師器である。９・10 は甕で、９は薄手で、外面は二次焼成のため赤変して煤が付着する。復元口径 16.4㎝。10 は体部内外面ともハケメ調整で、復元口径 22.4㎝。11 は手捏ね風の粗い作りの平底の壺で、器壁は厚く、全面ナデ調整だが口頸部内面にわずかにハケメ状の工具痕が残る。外面全面と口頸部内面には赤色顔料の塗布がみられる。口径 7.0 センチ、体部径 7.4㎝、器高 8.7㎝。12・13 は椀である。12 は底部は丸底で、上位で屈曲して開いて口縁部をつくる。器面は風化しているが、体部下半はヘラケズリ調整。口径 13.5㎝。13 は半球形に近い形状で、風化のため外面の調整は不明。口径 11.5㎝、器高 5.4㎝。14 は坏蓋であろう。口縁端部は摘み出して段をつくる。口径 12.3㎝、器高 3.5㎝。15・16 は坏で、底部は糸切り。15 は復元口径 13.8㎝、復元底径 7.2㎝、器高 2.9㎝、16 は復元口径 13.0㎝、底径 6.3㎝、器高 2.7㎝。17・18 は須恵器。17 は坏蓋で、天井部と体部の境に段を持ち、口縁端部をシャープにつくる。復元口径 11.2㎝、器高 3.3㎝。18 は坏で、胎土に砂粒を多く含む。復元受部径 15.0㎝。19 ～ 21 は瓦質土器である。19 は足鍋の脚部。20 は摺鉢で、内面は横方向のハケメ調整の後７本一単位の条線を入れる。外面はケズリ調整後ナデ調整。復元口径 28.0㎝。21 は盤である。口縁部は玉縁にし、内面に稜を持って体部とを分ける。内面は丁寧なナデ調整、外面ケズリ調整。復元口径 47.0㎝、器高は 11.5㎝＋ α である。22 は白磁椀で、口縁部内面には施釉されない「口禿」である。胎土は灰白色、釉は透明。23 は土錘で、残存長 5.9㎝、幅 1.7㎝。24 は蛇紋岩製の紡錘車で断面台形である。径 4.5㎝、厚さ 2.1㎝、孔径 0.8 ～ 0.9㎝、重さ 68.2 ｇ。

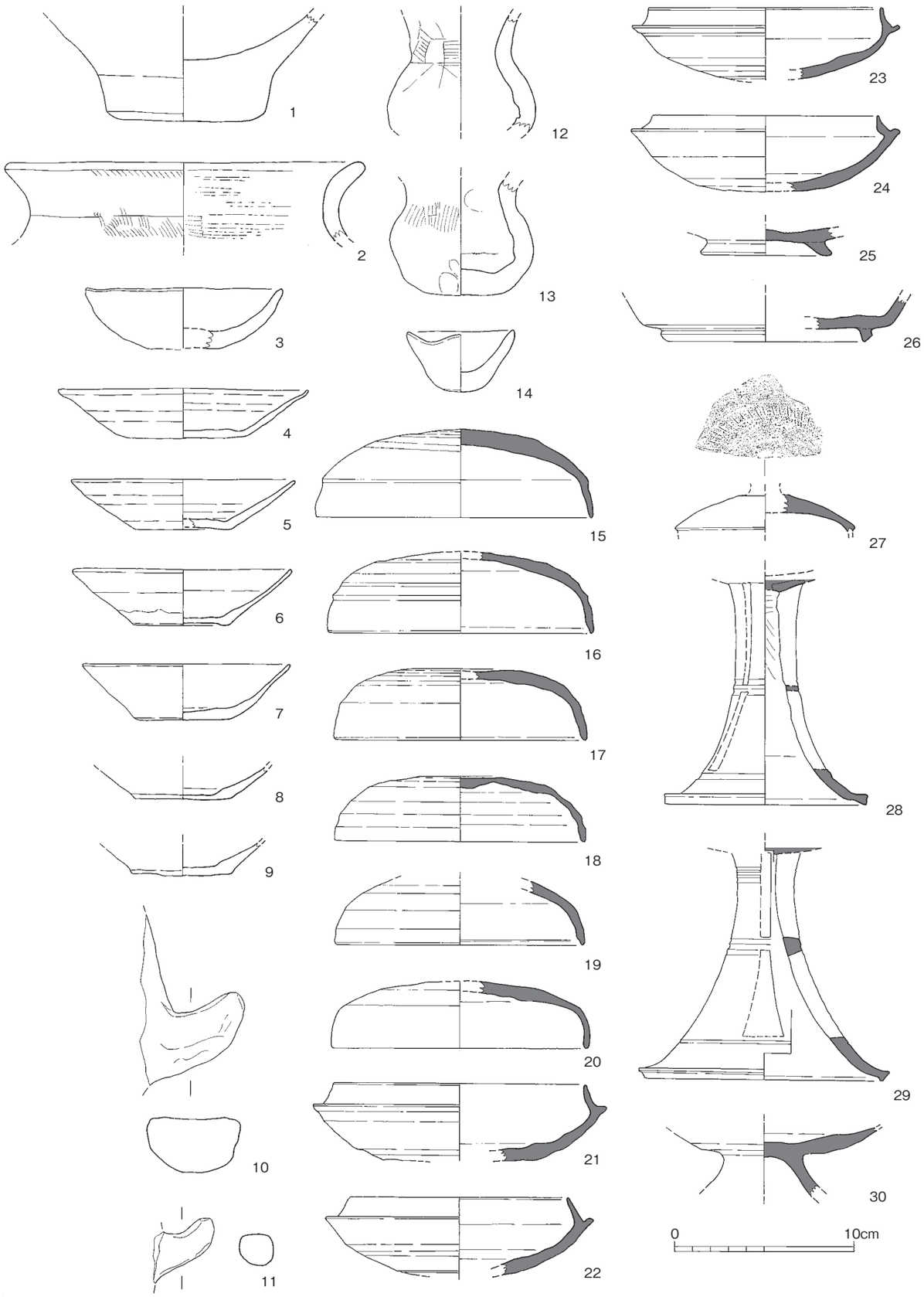
６号溝（図版２・８、第６・11 図）

西調査区の中央やや北側にある東西方向の溝である。やはり区画溝と考えられるが、今回の調査範囲では２号溝に次いで規模が大きい。長さ 24 ｍ分を検出し、幅 2.8 ～ 3.8 ｍ、深さ 0.8 ｍの断面

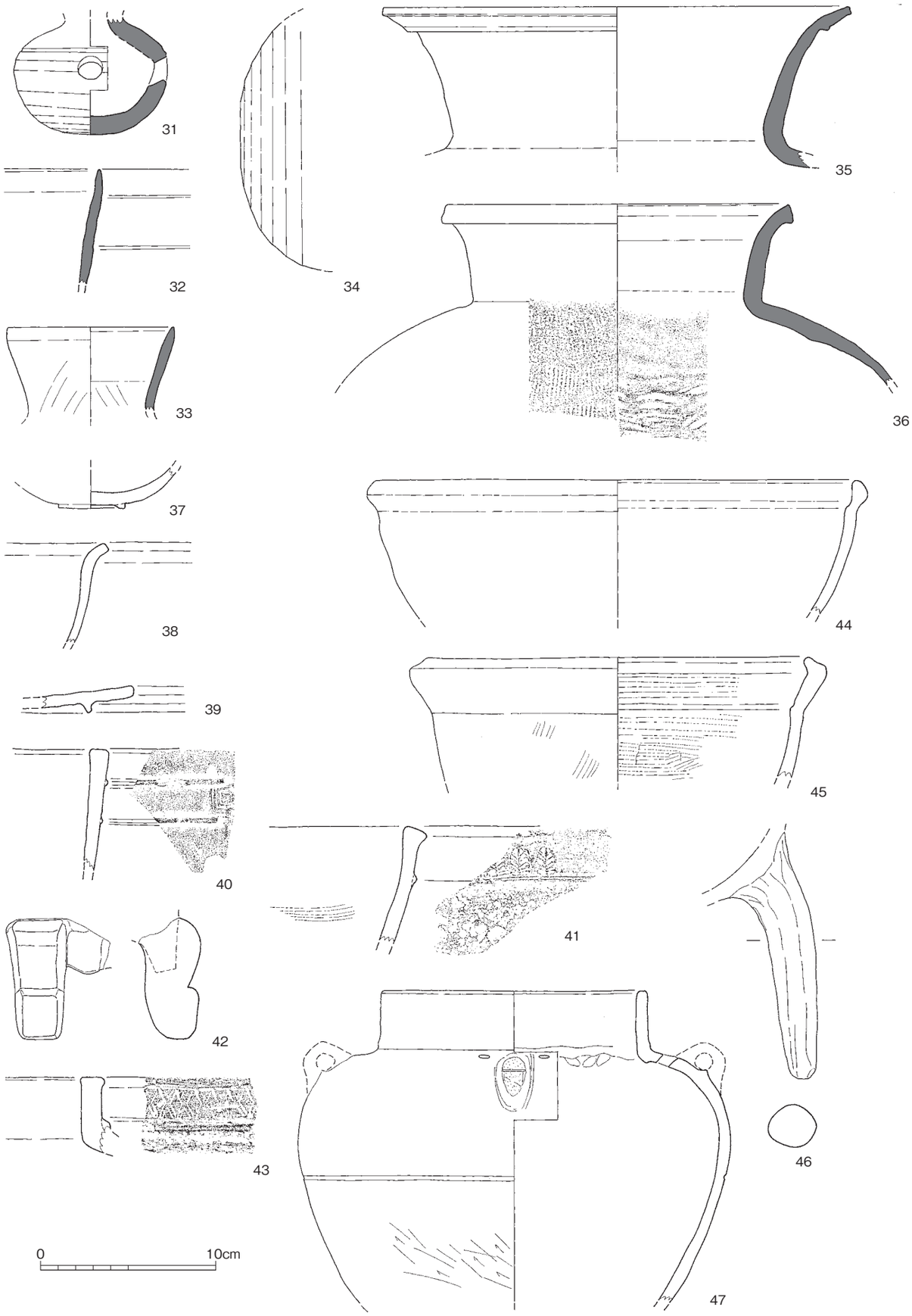
逆台形。東端部が2号溝の屈曲部に接続し、計画的に配置している。

出土遺物（図版19～21、第21～24図）

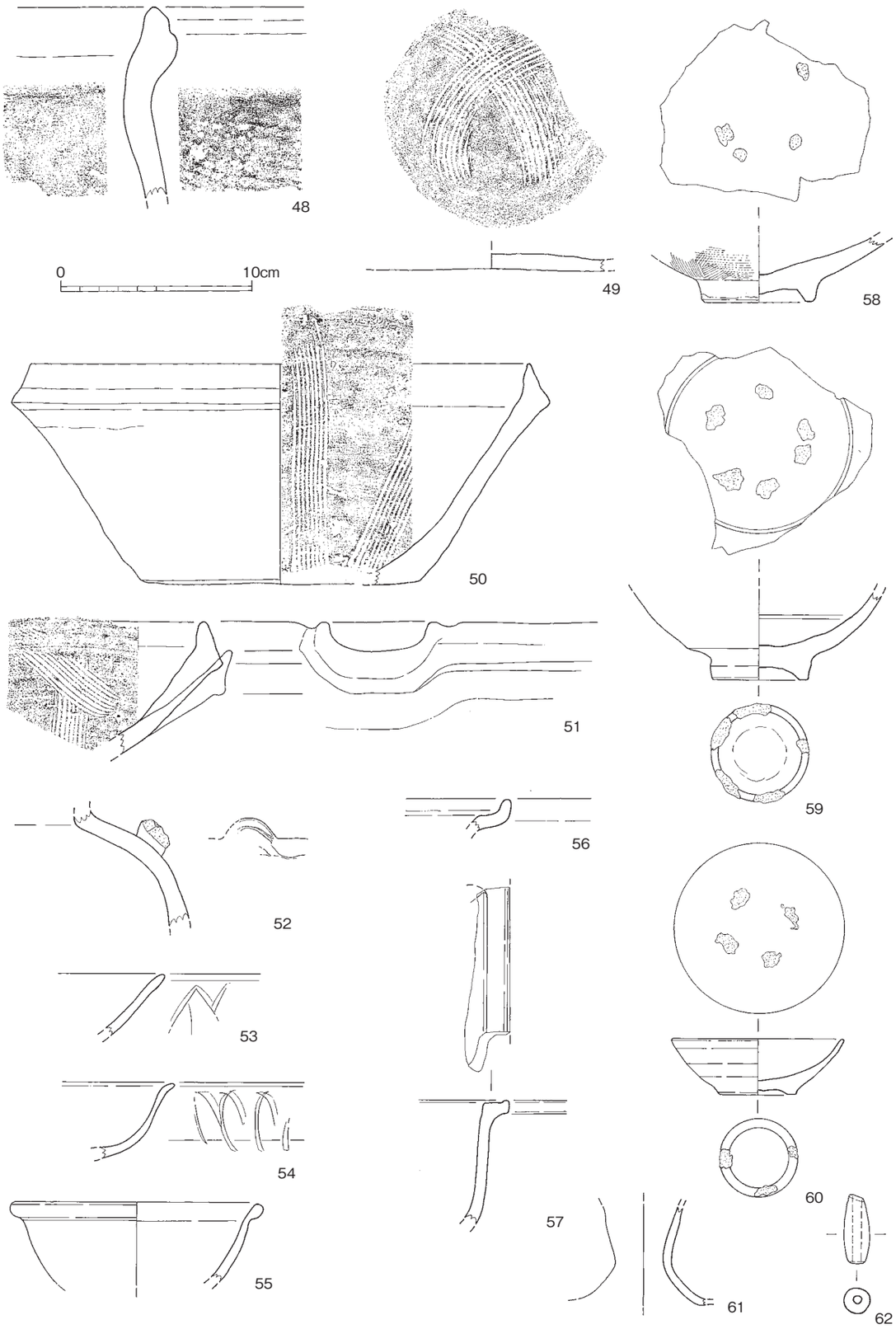
1は弥生土器甕であろう。底部は厚く、底面はやや丸味を持つ。外面は赤変し、内面には煤が付着する。底径9.0cm。2～13は土師器。2は甕で、内外面ハケメ調整後、口頸部はヨコナデ調整をおこなう。復元口径20.0cm。3は椀で、器壁は厚く、調整は風化のため不明。4～9は坏で、内面の体部と底部の境に凹線がめぐり、4・7～9の底部外面には板状圧痕が残る。4はやや復元口径が大きく14.0cm、底径6.2cm、器高2.6cm、5～9は復元口径11.6～12.5cm、底径5.4cm、器高2.8～3.1cm。10・11は甑等の把手で大小があり、10は体部内面のハケメ調整が残る。12・13は手捏ね状の粗い作りの壺である。器壁が厚く、ほぼ手捏ねで作るようだが、内外面には一部ハケメ状の工具痕が残る。外面と頸部内面には赤色顔料の痕跡が認められる。13の体部径8.0cm。14は手捏ねの鉢形の土器である。底部は丸底で、口径6.0cm、器高3.3cm。15～20は坏蓋で、天井部と口縁部の境に段を持つもの(15・16)と、不明瞭なものがある。復元口径14.0～15.5cm、器高3.6～4.9cm。21～26は坏である。21～24は受部を持つもので、21は復元受部径がやや大きく16.4cm、器高4.3cm、22～24は復元受部径15.0、器高4.0～4.3cm。25・26は高台を持つもので、25は端部が外に張り出すタイプで高台径7.4cm、26は復元高台径11.0cm。27は蓋で天井部につまみが付き、その周囲には板状工具の小口によるキザミをめぐらせる。28・29は高坏の脚部で、2段の方形透かしが、28は3方向、29は2方向に入る。30は短脚の高坏で、焼成がやや軟質である。31は瓹で、体部径8.7cm。32・33は平瓶等の口頸部で、33の復元口径9.6cm。34は提瓶であろう。外面は回転ヘラケズリ調整。35・36は甕で、35は復元口径26.8cm、36は20.0cm。37は瓦器椀で、高台が小さく径3.7cm。二次焼成のため器面の風化が激しい。38～49は瓦質土器である。38は鉢か。体部外面はケズリ調整。39は蓋と考えられるが、やや歪んでいる。外面はケズリ調整、内面はヨコナデ・ナデ調整。復元すると、径15.2cm程度で、受部径10.4cm。40～43は火鉢。40・41は口縁部周辺で、40は口縁部外側の突出部と口縁部下の突帯の間に、41は口縁部下の2条の突帯の間に、それぞれスタンプ施文する。42は脚部で、火鉢の底部を高台状にし、さらにやや装飾的な脚部を付す。43は風炉形の火鉢で、口縁部と口縁部下の突帯の間にスタンプ施文する。44～46は鍋。44は口縁部が短く、体部外面はケズリ調整で煤が付着する。復元口径28.7cm。45は口縁端部を内側に折り曲げ、内外面ハケメ調整。口径24.0cm。46は足鍋の脚部である。47は釜で、体部中位に1条の沈線がめぐる。外面下位はケズリ調整、それ以外はナデ調整。外面には煤が付着する。復元口径15.2cm、復元体部径24.6cm。48は甕で、大型のもの。体部外面には叩打痕が残る。灰黄褐色を呈し、焼成は土師質である。49は摺鉢の底部で、内底部にも櫛状工具による10本一単位の条線を文様状に入れる。50・51は備前系の摺鉢。50は8本一単位の条線を放射状に配する。51は片口部で、8本一単位の条線が確認できる。52は白磁四耳壺の肩部である。胎土は灰色で、釉はやや青みを帯びた灰白色を呈する。53～55は龍泉窯系青磁椀である。53・54は体部外面に片切彫による蓮弁文を描くもので、蓮弁に鎬のあるもの（53）と明瞭でないもの（54）がある。55は口縁部を外方に巻き込んで肥厚させる。復元口径13.2cm。56は青磁盤の口縁部で、体部内面には若干の凹凸が観察され蓮弁文となるものか。全面に釉が厚くかかる。57は紫砂鉢か。方形で箱形の器形と思われ、全面丁寧なナデ調整で仕上げる。胎土は紫褐色、無釉で硬く焼き締まり、炻器の特徴を示す。58・59は李朝陶磁器椀である。58の内面見込み、59の見込み、高台畳付部には砂目跡が残る。58の体部



第 21 図　6 号溝出土遺物実測図①（1 /3）



第 22 図　6 号溝出土遺物実測図②（1 /3）



第 23 図　6 号溝出土遺物実測図③（1 /3）

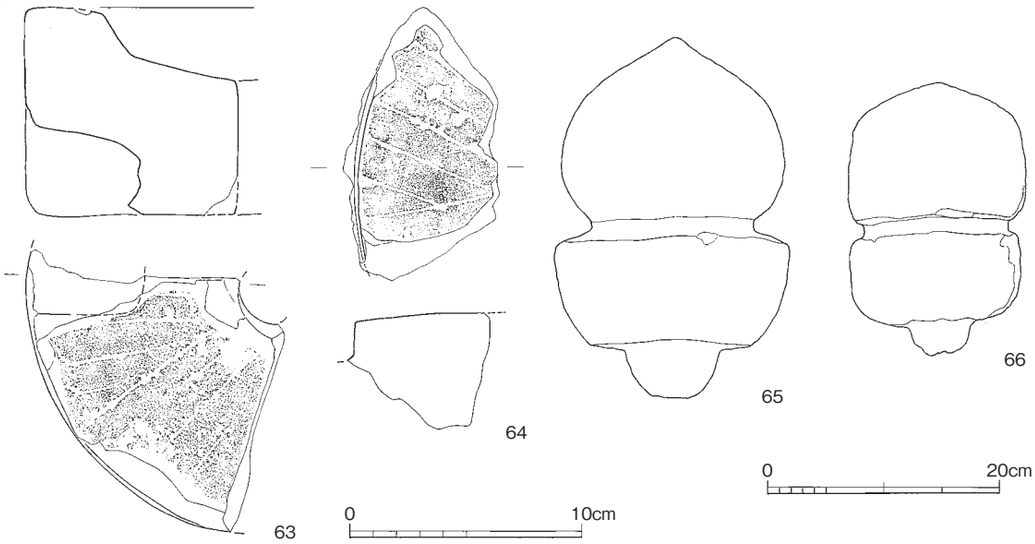
外面にハケメ状の痕跡が確認できるが、化粧土を塗る際のものか。58 は黄灰色の粗めの土で、白化粧土を塗布した後青みを帯びた透明釉をかけたものと思われ、内外面に剥離した部分がある。59 は胎土は黄灰色、釉はわずかに青みを帯びた灰白色。高台径は順に 5.8㎝、5.1㎝。60 は李朝陶磁器の皿である。内底部、畳付部にそれぞれ 4 箇所の砂目跡が残り、胎土は灰色で砂粒を含み、釉は青みの強い濃灰色。復元口径 9.0㎝、底径 4.1㎝、器高 2.9㎝。61 も李朝陶磁器であろうか。壺の頸部で、胎土は赤褐色で磁器質、釉は黄灰色で黒褐色粒を多く含む。62 は土錘で、長さ 3.7㎝、幅 1.4㎝、重さ 5.1 g。63・64 はともに凝灰岩製で、茶臼であろう。63 は上臼で、挽き手孔は下部に穿つ。復元径 21㎝程度となる。64 は復元臼面径 19㎝程度の下臼で、受け皿を持つ。この 2 点の特徴的なところは、溝の目が一般的なものとは逆であり、右回し臼になることである。石材、径、回転方向の特徴が一致することから、2 点がセットになる可能性が高い。65・66 は五輪塔の空風輪で、65 は安山岩製、66 は凝灰岩製である。

7 号溝（図版 2、第 6・11 図）

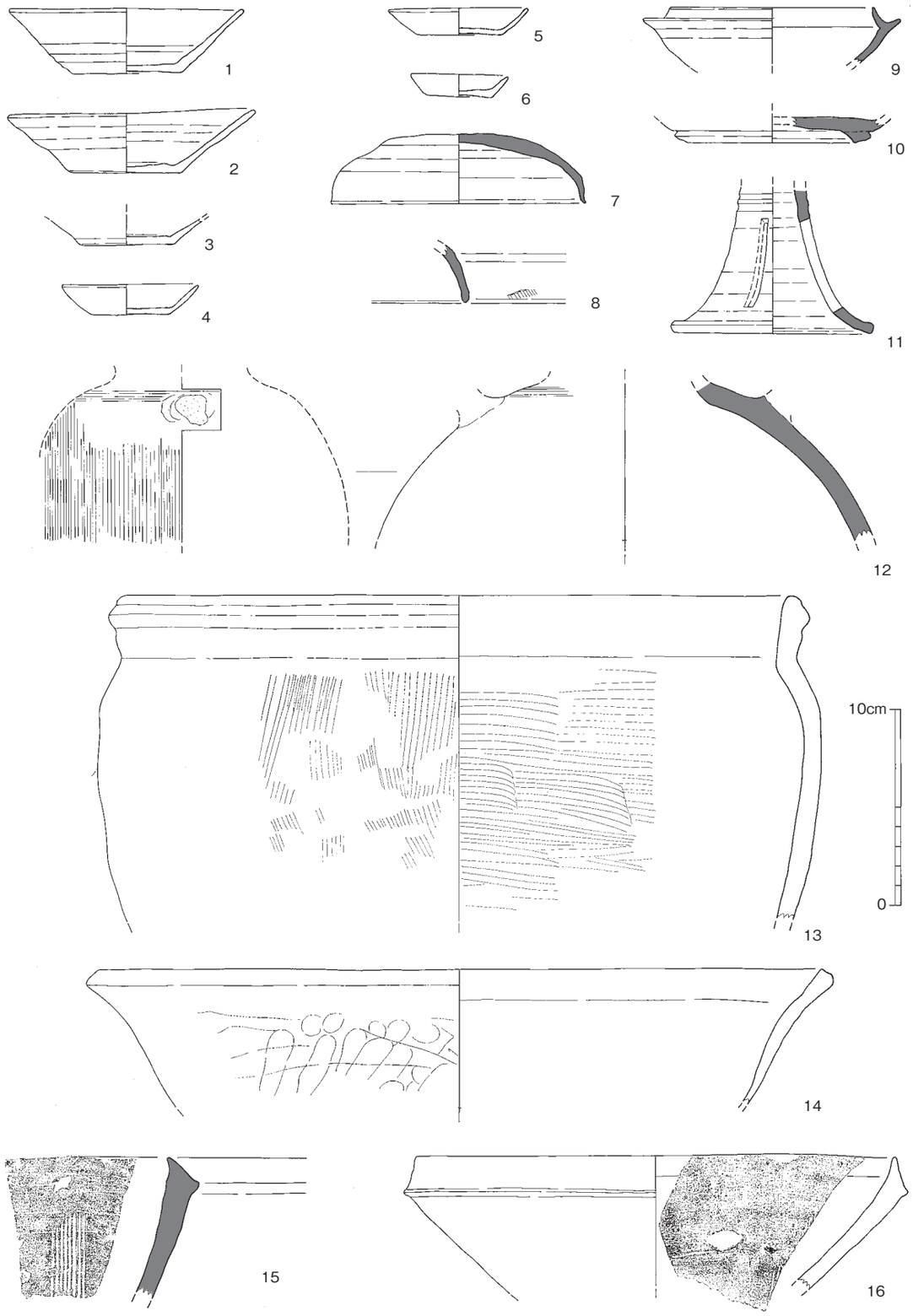
Ⅰ区の中央部やや南、6 号溝の南 7 mの位置にある。調査区西端から直線的に東に 26.5 m延び、2 号溝から 4.7 mのところでこれと平行する形で南東に折れ曲がり 9.5 mで途切れる。屈曲部がやや鈍角になるのは 2 号溝と同様であり、両者は計画的に配置されたものと考えられる。現状では南東端部付近の形状が乱れており、さらに東側に折れ曲がっているように見えなくもないが、本来の形状は不明である。幅 0.6 ～ 2.0 m、深さ 30㎝程が残存する。7 号溝のすぐ南側にはこれと平行する 8 号溝があるが、両者には先後関係がある。8 号溝の廃絶後に、12 × 7 m、深さ 10㎝程度の落ち状の遺構によって切られ、さらにこれを 7 号溝が切っていることから、7 号溝が新しいと言える。両者は位置が若干ずれているがほぼ平行していることを考えれば、8 号溝の廃絶後にこれと同様の目的で掘り直された区画溝と言えるのかもしれない。

出土遺物（図版 21、第 25 図）

1 ～ 6 は土師器で、1 ～ 3 は坏である。器壁は薄く、内底部の周囲に凹線がめぐる。1 は復元口径 12.0㎝、底径 5.6㎝、器高 3.3㎝。2 は灰褐色で、口径 12.9㎝、底径 5.8㎝、器高 3.2㎝。3 は外底部に板状圧痕が残り、復元底径 5.0㎝。4 ～ 6 は小皿で、坏と同様に凹線を持ち、4･5 は口径 7.1㎝、底径 4.2㎝、器高 1.4 ～ 1.5㎝。6 はより小形で、口径 5.0㎝、底径 3.5㎝、器高 1.1㎝。7 ～ 12 は須恵



第 24 図　6 号溝出土遺物実測図④（1 /3）



第 25 図　7 号溝出土遺物実測図（1 /3）

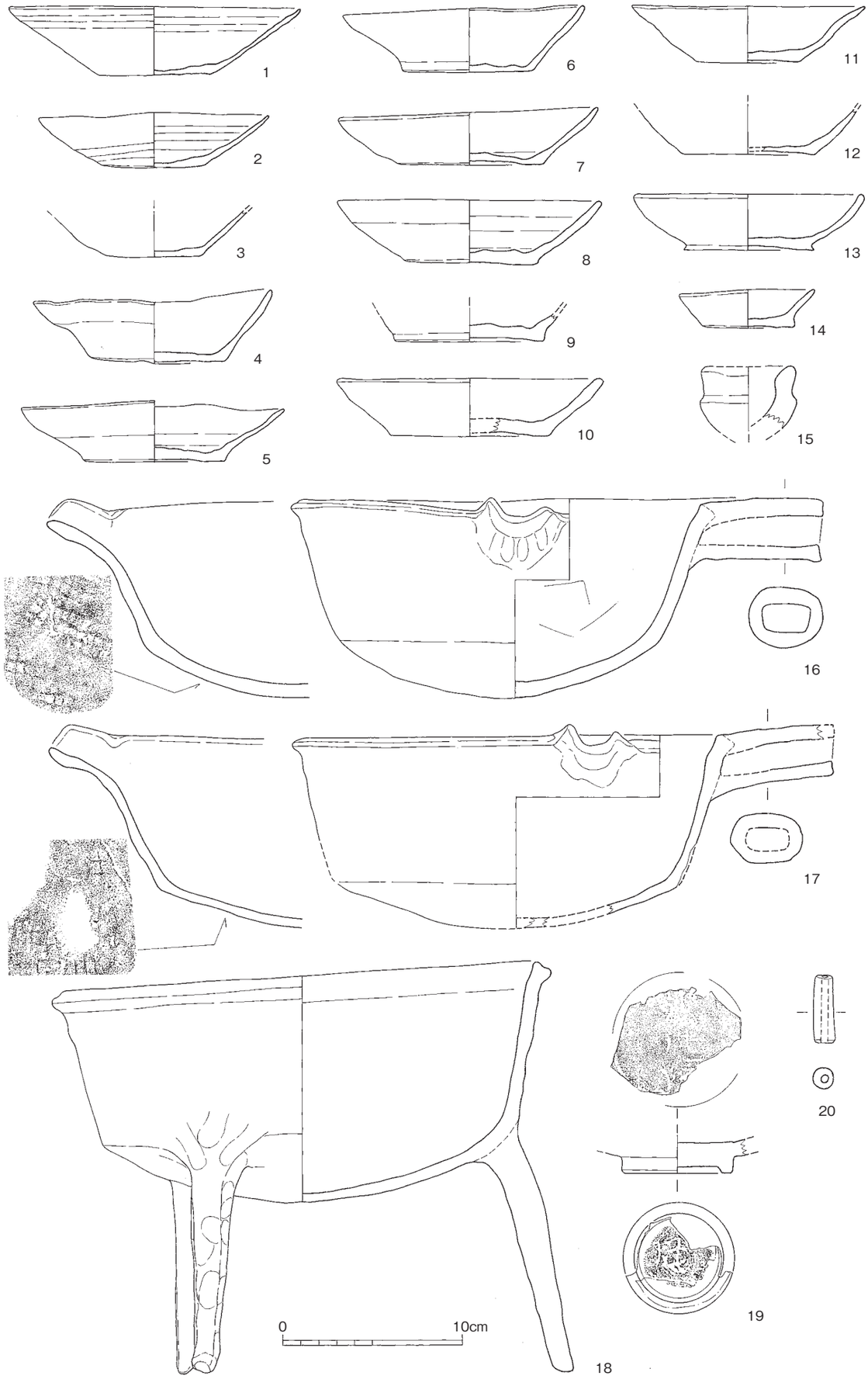
器である。7･8は坏蓋で､7は口径13.0㎝､器高3.5㎝。8の口縁部外面にはハケメ状の工具痕が残る。9･10は坏。9はたちあがりを持つもので、受部径13.2㎝、10は高台を有するタイプで、復元高台径10.0㎝。11は長脚の高坏脚部で、3方向に方形透し孔を有する。12は提瓶で、焼成が軟質で灰白色を呈する。13～16は瓦質土器である。13は甕で、内面は口縁部まで横方向のハケメ調整の後、口縁部はヨコナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ調整である。復元口径35.7㎝、体部径36.8㎝。14は鍋で、口縁部内面にわずかな稜を持って体部と分ける。体部外面はケズリ調整の後、多数の指頭痕が残る。復元口径38.0㎝。

8号溝（図版2・8、第6・11図）

7号溝のすぐ南側、0.7ｍの間隔を開けて存在する。先述の通り、切り合い関係から8号溝→落ち状の遺構→7号溝の順で、7号溝に先行する。調査区西端から直線的に東側に延び、17ｍおよび20.5ｍの2箇所で南東に折れ曲がり、2条の溝は30ｍの位置で再び合流して明瞭に途切れる。屈曲部が鈍角になるのは2号溝および7号溝と同様。現状ではこの2条の溝はＶ字形を呈するが、同時に存在したものかあるいは先後関係があるのかについては、北西端の分岐部分がちょうど落ち状の遺構に切られていることと、南東端部付近の埋土土層断面でも明瞭に確認できず（第11図）、不明と言わざるを得ない。溝の幅は1.2～1.5ｍ、深さは南端部付近で約50㎝の断面逆台形であり、南西側溝の一部では底部がさらに幅60～80㎝で二段掘り状になっている。

出土遺物（図版21・22、第26図）

1～15は土師器である。1～13は坏で､大きく2タイプに分かれる。1～3は器壁がきわめて薄く、調整も丁寧で、胎土が精良で白色を呈する。1は底部に板状圧痕が残る。1は復元口径15.3㎝、底径6.3㎝、器高3.2㎝、2は口径12.9㎝、底径5.7㎝、器高3.1㎝、3は底径5.4㎝。2～13は調整が雑で、全体的に歪みが大きく、灰褐色～灰色を呈する。7は二次焼成を受けている。口径12.8～14.7㎝、底径5.7～8.9㎝、器高3.1～3.5㎝。14は小皿で、やはり調整の雑さと歪みが目立つ。口径7.4㎝、底径5.1㎝、器高2.1㎝。15は手捏ねの土器で、壺形のもの。復元口径5.2㎝、復元体部径5.4㎝。16～18は瓦質土器である。16・17把手付鍋で、口縁部の一端に把手を取り付け、左側面に片口を設ける。2点ともほぼ同形同大で、口縁部はわずかに外方に開き、体部と底部の境が稜を持って屈曲する。底部外面には格子目の叩打痕が、16の底部内面には板状工具の調整痕がわずかに残るが、全面ナデ調整で仕上げる。また焼成は、16は須恵質に近く、17は土師質に近い。16の外面には煤が厚く付着し、17は全面黒色に塗られているようで、外面には煤が付着し、また器面の剥離も見られる。把手は2点とも口縁部端からの長さ6㎝程で、中空となり、この部分に柄を挿入して使用したものと考えられる。把手の断面形は外面楕円形、内面長方形である。16は鍋部がやや歪んでいるが、口径24.5㎝程度、器高11.1㎝。17は口径24.0㎝程度、器高10.6㎝。18は足鍋で、ほぼ完存し、三足の状況など良く観察できる。鍋部の特徴は16・17の把手付鍋とほぼ同様で、口縁部はわずかに開き、体部と底部の境は稜を持って屈曲する。底部外面には格子目の叩打痕が残るが、内外面ナデ調整で消している。脚部は上部はやや扁平な形状で、下端部は三足とも屈曲して外方に開く。口径27.8㎝、鍋部の器高12.5㎝、全体の高さ22.7㎝。19は龍泉窯系青磁椀である。底部は厚く、胎土は灰色、釉は灰緑色で、高台外面まで施釉し畳付部以内は露胎である。高台径6.2㎝。この椀の特徴的なことは、底部の内外面に焼成前の刻書がある点である。内面見込みには施釉前に3文字



第 26 図　8 号溝出土遺物実測図（1 /3）

「鼓(池カ)□□」を線刻し、外底部にもおそらく同一人物の手で1文字「□」あるいは記号の線刻が確認できる。20は土錘で、両端部は工具を使用して平坦にしており、胎土は精良、焼成は土師質である。長さ3.6㎝、幅1.1㎝、一部を欠失するが残存重量4.4 g。

9号溝（図版2、第6図）

Ⅰ区南半部で検出した東西方向の溝で、東端部は8号溝の南西側溝に接続する。遺構検出時の切り合い関係では8号溝が新しいと判断したが、9号溝がこの位置で途切れていることを考えれば、併存していた時期もあったものと思われる。長さ13 m分を確認し、幅0.7～1.6 m、深さ30㎝。

出土遺物（図版23、第27図）

出土遺物はほぼ古墳時代のものに限られるが、1号溝を切って造営していることが原因と考えられる。1～5は土師器である。1～3は甕で、口頸部の形状にそれぞれ特徴がある。2・3は二次焼成を受けて外面が風化しているが、3点とも体部外面は縦方向のハケメ調整、内面は1は横方向のハケメ調整、2･3はナデ調整。復元口径16.0～19.4㎝。4は椀で、器壁は厚く、体部中位に段を持つ。器面の風化が激しい。復元口径13.0㎝、器高2.9㎝。5は甑の把手部分で、体部内面に粘土を延ばした痕跡があり、挿入式であることが分かる。6～14は須恵器である。6は坏蓋で、焼成が堅緻である。7～9は坏で、3点とも焼成がやや軟質である。復元受部径13.5㎝～15.9㎝、器高3.8～4.1㎝。10・11は高坏の脚部で、10は底部の端部を上方に跳ね上げ、11は巻き上げるタイプ。10は透し孔を2方向、2段に開ける。復元底径は10が9.0㎝、11は9.6㎝。12は壺等の脚部と思われ、3方向に円形の穿孔を持つ。体部外面はヘラケズリ調整後ヨコナデ調整、それ以外は体部内面も含めてヨコナデ調整である。13・14は甕で、2点とも体部内面には当具痕が残り、外面はタタキ後カキメ調整で仕上げる。14は焼成が軟質で灰白色を呈し、復元口径19.0㎝。

10号溝（図版2、第6図）

Ⅰ区南半部、2号溝の西1.5～2.0 mの位置にこれと平行して延びる。長さ11 m、幅0.3～1.1 m、深さ10㎝で、やや不整形で貧弱な印象を受けるが、2号溝と平行していることからやはり区画溝の一部と考えられる。図示できる遺物の出土はない。

11号溝（図版2、第6図）

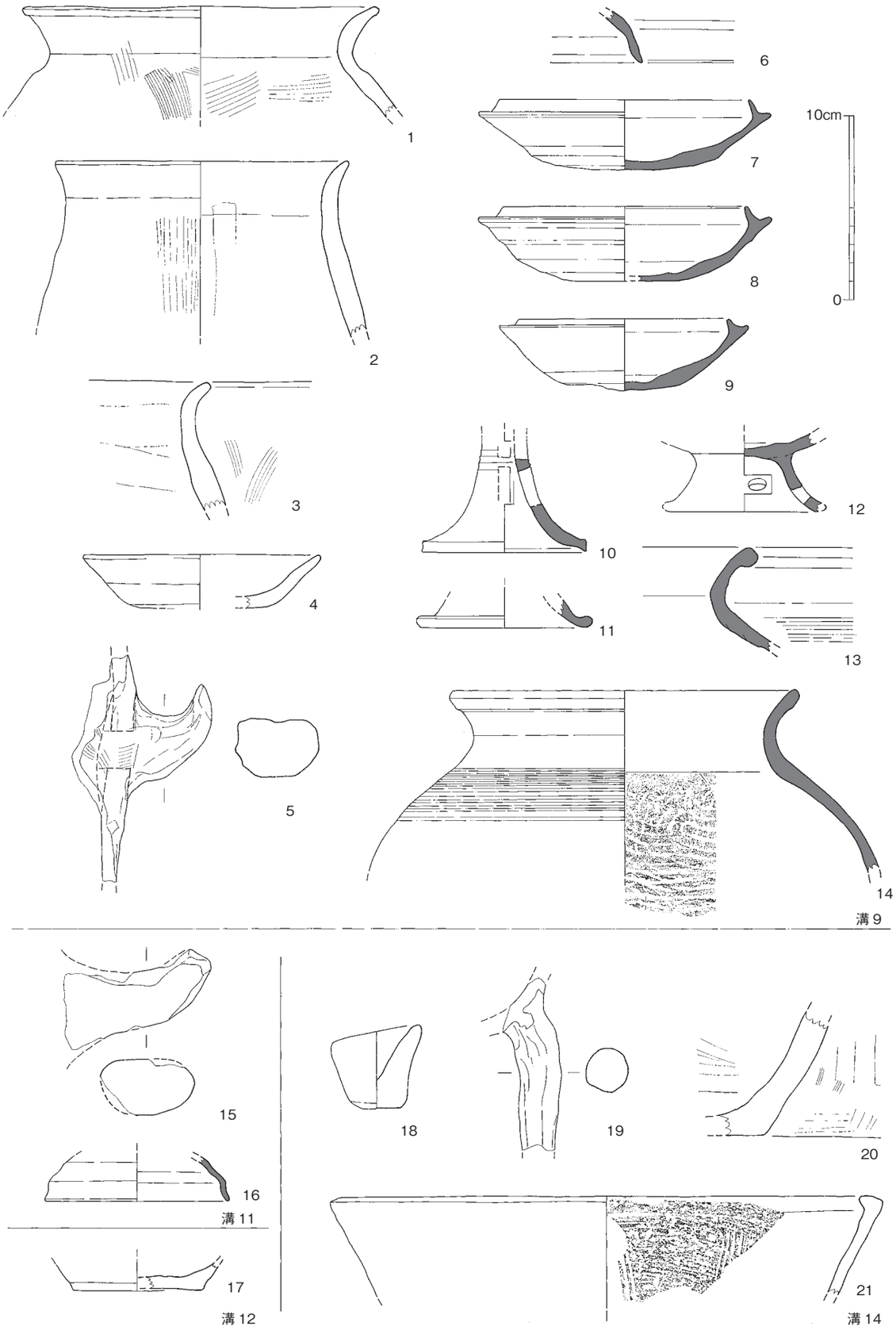
Ⅱ区の北端部付近で検出した東西方向の溝で、8 m分を確認した。調査区隅のため不明瞭ながら、西端部で2号溝に直角に接続するようである。幅は1.0 m程だが、西側0.8 m部分は0.4 mと狭くなり、また深さは最大50㎝で底部が不整形となる。

出土遺物（第27図）

いずれも古墳時代のものである。15は土師器甑等の把手部分で、体部に貼付する際に付け足した粘土が剥離している。16は須恵器坏蓋で、復元口径10.0㎝。

12号溝（図版2、第6図）

11号溝の南側、5.2～5.5 mの間隔で平行する東西溝である。7 m分を確認し、西側は2号溝から4 mの位置で途切れている。幅0.4～0.9 m深さ10㎝でやや不整形である。



第 27 図　9･11･12･14 号溝出土遺物実測図（1 /3）

出土遺物（第 27 図）

17 は土師器坏で、底部は糸切り、ヨコナデ調整だが、体部下端部のみヘラ状工具痕が残る。復元底径 7.1㎝。

13 号溝（図版 2、第 6 図）

Ⅱ区の北半部で検出した東西溝で、2 号溝のクランク状の屈曲部分をバイパス状に繋いでいるように見えるが、東端部は現在の水路の下で調査区外にあたるため接続部は未確認である。長さ 8.5 m、幅 0.8 m、深さ 30㎝。図示できる遺物の出土はない。

14 号溝（図版 2、第 6 図）

東側調査区の中央やや北側にある。北東側調査区外から南西に延びる 2 状の溝が、2 号溝の屈曲部の手前でこれを避けるように直角に折れ曲がって合流し、2 号溝と平行して 17 ～ 18 m南東に延びたところで再び分岐して、一方は直進して 15 号溝に接続し、一方は南西に直角に折れ曲がって 2 号溝に接続するものと思われる。幅 0.4 ～ 1.0 m、深さ 20㎝でやや不整形で、形状も複雑であるが、15 号溝とセットになって方形の区画を作り出しているように見受けられる。

出土遺物（図版 23、第 27 図）

18 は手捏ね風の粗い作りの土器で、平底の鉢形とでもいう器形であるが、歪みが大きい。内面は棒状工具による成形と思われ、工具の先端部の痕跡が残る。19・21 は瓦質土器で、19 は足鍋の脚部である。21 は摺鉢で、内面は横方向のハケメ調整後条線、外面はケズリ後ナデ調整か。焼成が軟質で、器面が剥落している。20 は備前系の鉢の底部付近で、内外面ナデ調整である。

15 号溝（図版 2、第 6・11 図）

14 号溝の南東にある北東－南西方向の溝である。11.5 m分を検出し、南西端部は 2 号溝に直角に接続するように見えるが、接続部分は現在の水路の下の調査区外にあたるため未確認である。南西部で 14 号溝と接続しており、検出時の切り合い関係では 15 号溝が切っていたが、位置関係からして本来同時に存在していたものであろう。幅 0.8 ～ 1.3 m、深さ 40㎝。14 号溝との組み合わせで方形の区画を形成しているものと思われる。

出土遺物（第 28 図）

1 は須恵器蓋で、口縁端部の下方を突出させる。かなり大形品であろう。2 は土師質土器鍋で、口縁部内面は強いヨコナデ調整で体部との境に段をつくり、外面は肥厚させる。

16 号溝（図版 2、第 6・11 図）

15 号溝の南東側に 1.5 ～ 2.0 mの間隔で平行する。北東側調査区外から南西に延びて、10 mで 2 号溝を避ける形で直角に南東に折れ、9.5 mで再び直角に鍵形に折れて 3 mの位置で明瞭に途切れる。溝の幅は 1.0 m前後であるが、北西の屈曲部から北東に 7 m程は約 3 mにまで広がり、深さ 20㎝～ 40㎝で、底部に凹凸がある。16 号溝で囲った部分周辺では径 20 ～ 40㎝程度の小穴を多数検出したが、明確に掘立柱建物跡と判断できる纏まりは見い出せなかった。

出土遺物（図版 23、第 28 図）

3は須恵器瓹で、復元体部径8.6㎝。4～6は瓦質土器である。4は甕で、内面は横方向のハケメ調整、外面ヨコナデ・ナデ調整。5は火鉢で、口縁部下の2状の突帯の間にスタンプ施文する。6は鍋で、口縁部を屈曲させて開く。底部内面はハケメ調整、外面には格子目叩打痕が残る。外面には煤が付着し、底部内面には焦跡がみられる。復元口径28.8㎝。7は龍泉窯系青磁皿である。口縁部には輪花を有し、内面にはヘラ描きの文様を配する。胎土は灰色～暗灰色で粗く、釉は青灰色で、貫入が表れている。復元口径13.6㎝。8は李朝陶磁器椀である。胎土は灰色で、釉は透明、外面の一部に白色の線が見えるのは化粧土であろうか。

17号溝（図版2、第6・11図）

東調査区の南東部にある。17～19号溝は平行して並んでおり、18号溝との間隔は1.7～2.3ｍである。北東－南西方向の直線的な溝で、長さ16.5ｍ、幅0.4～0.8ｍ、深さ30㎝。

出土遺物（第28図）

9は古墳時代の須恵器坏だが、焼成が軟質で土師質である。10は土師質土器鍋で、口縁部が屈曲して開き、外面を肥厚させる。内面から口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整で、指頭圧痕が残る。

18号溝（図版2、第6・11図）

17号溝の南東側に平行して並ぶ、北東－南西方向の溝で、2号溝の手前でこれを避ける形で直角に北西に折れ曲がって、わずかで途切れる。形状から判断して、南東側の19号溝と対になるものと考えられるが、北西側の17号溝もこれに関連しているものと思われる。長さ20.5㎝、幅1.5ｍ、深さ40㎝。

出土遺物（図版23、第28図）

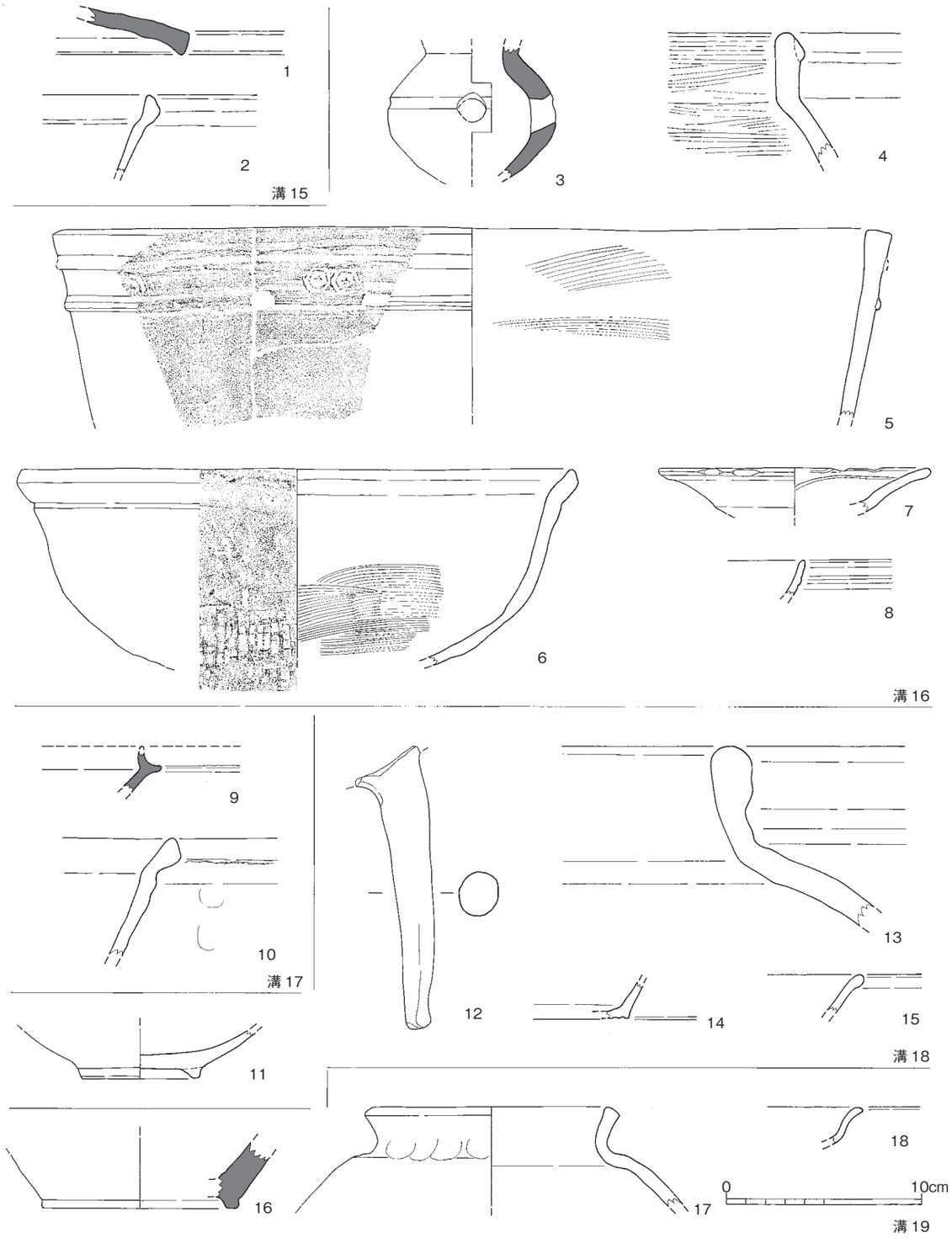
11は土師器椀で、断面逆台形の高台を持つ。器面は風化しており調整は不明で、高台径6.1㎝。12は瓦質土器足鍋の脚部で、下端部を若干外方に折り曲げる。13は備前系の甕で、体部は内外面ともケズリ後ヨコナデ調整と思われる。14は緑釉陶器壺であろうか。胎土は灰色の須恵質で、釉は濃緑色で、外面の他に内面の一部にも釉がかかるが、内面は施釉したものではないと思われる。15は青磁椀で、胎土は灰色、釉は灰緑色で、貫入が生じている。

19号溝（図版2、第6・11図）

東調査区の南東端部近くで検出した。北西側の17号溝と平行しており、両者は対になるものと考えられ、間隔は3.5～3.8ｍ。北東側調査区外から南西にほぼ直線的に23.5ｍ延び、2号溝の手前で直角に南東に折れて9.5ｍで南東側調査区外へと続く。幅0.8～1.8ｍ、深さ30㎝。

出土遺物（図版23、第28図）

16は須恵器の壺の底部と思われる。器壁は厚く、内外面ともヨコナデ調整である。17は瓦質土器壺か。内外面ナデ調整で頸部と体部の境には指頭圧痕が残り、焼成は軟質で白色を呈する。復元口径13.1㎝。18は白磁皿で、胎土は灰色、釉はやや緑がかった透明である。



第 28 図　15 ～ 19 号溝出土遺物実測図（1 /3）

井戸

1 号井戸（図版 9、第 29 図）

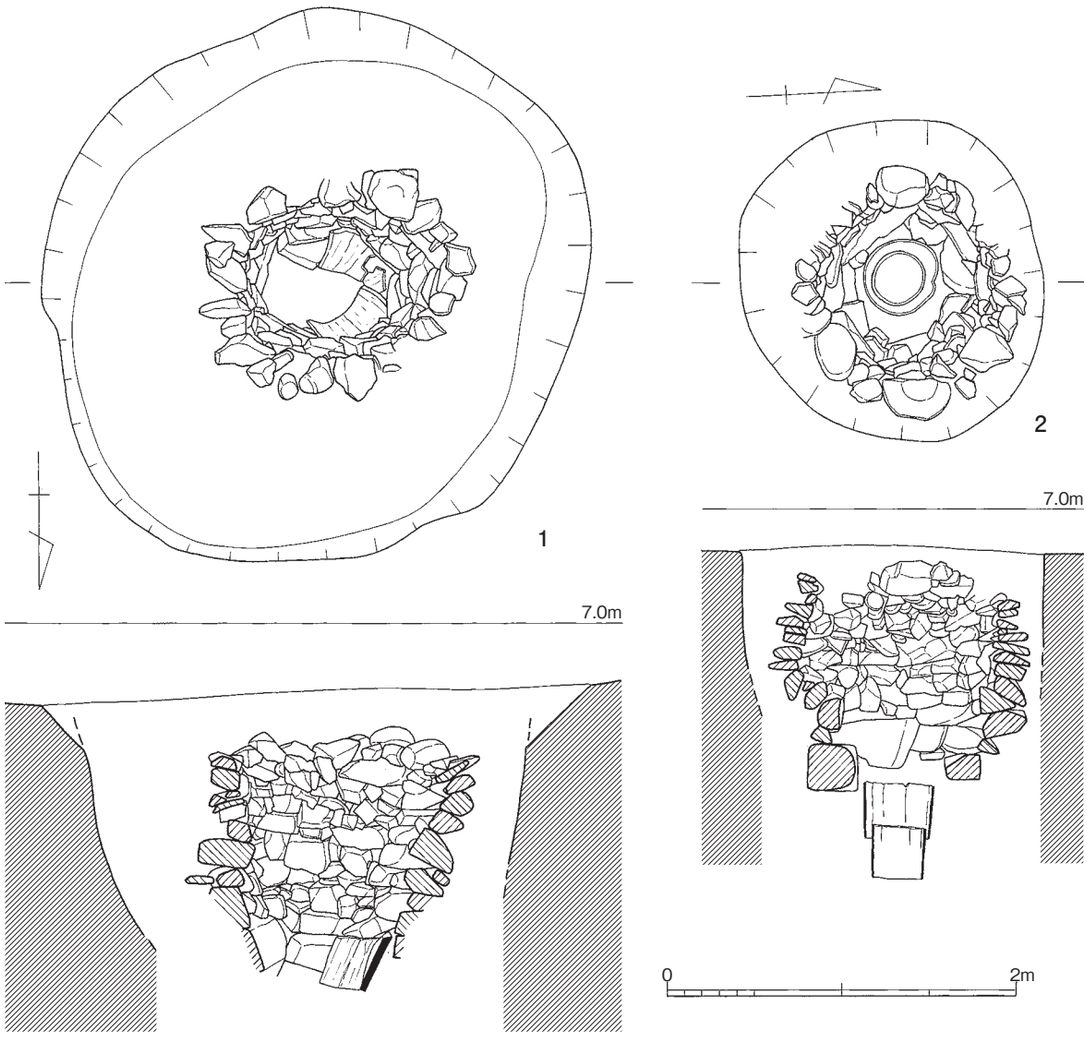
調査区の北部、2 号溝の西側、1 号土坑の南側で確認した石組井戸である。掘形は、調査後の遺構の崩れで図示したものでは上縁部が若干広がっているが、本来は径 2.6 ～ 3.1 m程度の円形に近い楕円形の平面形で、茶灰色～灰色シルト質土、灰色粘土を掘り込んで、灰褐色砂層の湧水層にまで到達している。深さは 1.7 m以上であるが、激しい湧水のため確認できなかった。井側は自然石をやや楕円形に積み上げ、内径は上部で 1.1 × 0.9 m、下部で 0.7 × 0.6 m、深さ 1.5 mが残存する。井筒には底の無い粗い作りの桶状の木製品を据えるが、東半部は失われている。

出土遺物（図版 23、第 30 図）

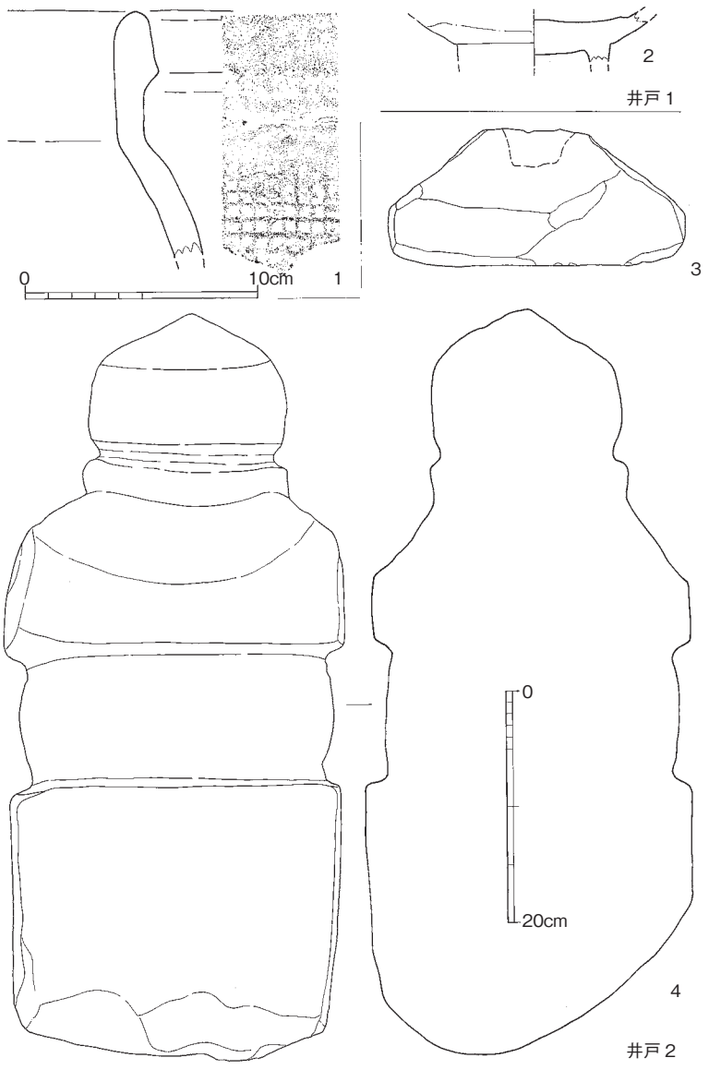
1 は瓦質土器甕である。体部内面はナデ調整、外面には格子目の叩打痕が残る。2 は白磁椀で、内面見込みと体部の境に段を有する。胎土は灰白色、釉はわずかに青みを帯びた乳白色で、高台近くまで施釉する。復元高台径 6.5㎝。

2 号井戸（図版 9、第 29 図）

西調査区の北半部、2 号溝の西側、3 号土坑の北側にある。堀形は径 1.7 ～ 1.8 mの平面円形で、灰色砂層の湧水層にまで達している。深さは 1.9 m程であろうが、湧水による崩壊のために正確には



第 29 図　1・2 号井戸実測図（1/40）



第 30 図　1・2 号井戸出土遺物実測図（1/3・1/6）

確認できなかった。井側は堀形中央やや東寄りにあり、ほとんどは自然石を使用するが最下段に五輪塔を使用しているほか石臼などの石製品の転用もみられる。平面円形に組み上げ、上部で径 1.0 m、下部で 0.5 ～ 0.6 m 程度、深さ 1.3 m が残存する。井筒には底を抜いた桶 2 個体を上下二段に組んで使用しており、上段が径 40㎝、下段が径 30㎝、深さは二段で 55㎝程度となる。また、2 号井戸から 5 m 南側の 6 号溝まで溝状の遺構が延びており、排水溝とも見えるが、切り合い関係では 2 号井戸の堀形が切っており、両者の関係は不明である。

出土遺物（図版 23、第 30 図）

3・4 は五輪塔で、3 は火輪、4 は一石を削り出したもので、地輪の形状から下部を地中に埋めて立てたものか。ともに安山岩製である。

3）まとめ

今回の調査で検出した主な遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡 1 軒、自然流路と考えられる溝 1 条と、中世の区画溝 18 条、井戸 2 基、土坑等である。このうち区画溝からは、弥生時代から 16 世紀までの遺物が出土しているが、奈良時代以前のものが混じり込みであるのは確実としても、概ね 14 ～ 16 世紀代が遺構の時期であろうと考えられる。区画溝は、調査区中央の 2 号溝を基準にして、その両側にこれに直角、あるいは平行に延びる多数の溝を計画的に配することで、連続する方形の区画を形成している。Ⅰ区北半部はやや判然としないながら、調査区内で 7 ないし 8 区画が確認できる。これらの区画は類例からも屋敷地と考えられ、建物跡等は削平のために失われているのであろうが、検出した井戸や土坑はこれに付随するものであろう。

さてこの連続する区画であるが、市道を挟んで南東側に接する宝山桑ノ木遺跡でもほぼ全面で検出しており、両遺跡を跨ぐ溝も確認できる。明らかに一連の遺構であり、全体では東西約 200m、南北約 400m の範囲で、合計 20 前後の区画を確認しており、計画的に配置された集落といえる。いずれにしても、宝山小出遺跡の調査範囲だけで判断できるものではなく、宝山桑ノ木遺跡も含めて考えたい。

2. 宝山桑ノ木遺跡

1）概要

宝山桑ノ木遺跡は、福岡工事事務所第 25 地点にあたり、行橋市大字宝山に所在する。

この地は、福岡県教育委員会および行橋市教育委員会が行なった分布調査の結果、弥生時代・古墳時代の散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。平成 21（2009）年 2 月 25 ～ 27 日に実施した確認調査の結果、今川の氾濫による削平を受けていない微高地部分約 16,000㎡の範囲で埋蔵文化財の存在が確認されたため、発掘調査を実施した。

調査対象地が広範囲にわたるため便宜上Ⅰ～Ⅳ区に分け、各区内でも開発工事の工程上急ぐ部分から優先的に順次発掘調査を終わらせる必要性があり、また排土の処理等の都合上からも、調査が数次におよぶ箇所もあり、一部はさらに細分している。

2）遺構と遺物

Ⅰ区

Ⅰ区は農業用水路の関係から便宜上 A・B・C・D 地区に分けて調査を行った。県道を挟んで北側には宝山小出遺跡がある。標高 7m 前後。ここでは居館と思われる掘立柱建物跡や井戸等が検出され、溝によって区画される。B 地区は A 地区よりも区画が顕著ではないものの、溝に囲まれるように遺構が手中している。また、土坑墓と思われる遺構が調査区北側に集中している。C 地区は B 地区から続く溝とピット群が検出された。掘立柱建物跡の検討を行ったが、確認できなかった。D 地区は溝により大きく 4 つに区画されている。調査区北東は土坑墓と思われる遺構があり、墓域の可能性もある。北西では遺構は希薄である。調査区南東では掘立柱建物跡が 3 棟確認された。この区画内では焼土塊を含むピットが多い。調査北西では区画内にピット群と井戸が検出された。掘立柱建物は検出に至っていない。調査区西側中央に用水路があり、これを除去した結果、用水路の部分は若干削平されていた。このため 27 号溝状遺構は一部消失している。また 21 号溝状遺構と SX05 の間も削平されて地形が急激に落ちており、遺構は検出されなかった。B・D 地区の東側は用地内であったが、調査開始時に試掘トレンチを入れて確認したところ、遺物と遺構が確認できなかったため調査対象からはずした。また、D 地区西側は用地内に墓地があり、倒壊の恐れのあるものがあったため重機掘削の影響を考慮し余裕を持たせて調査区を設定した。また、東側も調査予定地ではあったが、調査開始時に確認調査を行ったところ遺構は認められなかったため調査対象から除いた。Ⅰ区はいずれの地区でも鉄滓や焼土塊が多く見られ、特に A・B 地区では多かった。鉄滓は割愛したが椀形滓や坩堝、羽口が出土するなど鍛冶が行われていたとも考えられる。

調査の経緯

平成 22・23 年度にわたって調査を行った。

22 年度は 10 月 4 日から重機を投入し、7 日から表土剥ぎを開始する。およそ地表下 70㎝程度で

遺構を確認した。12 日から作業員を投入し、Ⅰ区 A 地区北側から検出を開始した。18 日にはピット下層から洪武通宝が出土し、19 日に建物跡を確認した。11 月 4 日には石組みの井戸を確認した。5 日にはピット状遺構の大半は掘り終え、溝状遺構の掘削に集中する。15 日に 1 区 B 地区の表土剥ぎを開始した。12 月 6 日に同時並行で新たに検出を開始した。24 日に A 地区の空中写真撮影を行い、年内の作業を終えた。1 月 6 日から作業を再開。2 月 3 日に石組みの井戸を確認する。14 日にはC 地区の表土剥ぎを開始し、21 日に B 地区と同時並行して検出を開始した。3 月 8 日に B 地区の測量を終了し、12 日に B・C 地区の空中写真撮影を行った。16 日に C 地区の測量がほぼ終わり、21 日埋め戻しも終了した。また、D 地区の南側は表土剥ぎのみ一部先行して行った。

23 年度は 10 月 7 日にⅠ区 D 地区の表土剥ぎを前年度の続きから行った。17 日に作業員を投入し、作業を開始した。24 日には表土剥ぎ中に土師皿と古銭が集中して出土した。11 月 10 日に石組みの井戸を検出した。12 月 5 日に表土剥ぎを終了し、6 日に遺構掘削と平行して測量を開始した。遺構掘削を順調に行い、26 日に年内の作業を終了した。新年は 1 月 6 日から作業を再開し、掘削を進めて行った。24 日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。また、26 日から終了した箇所から埋め戻しを開始し、平行して 27 日にはⅣ区の表土剥ぎを開始した。30 日にⅠ区 D 地区の埋め戻しが終了した。

掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡（図版 34、第 33 図）

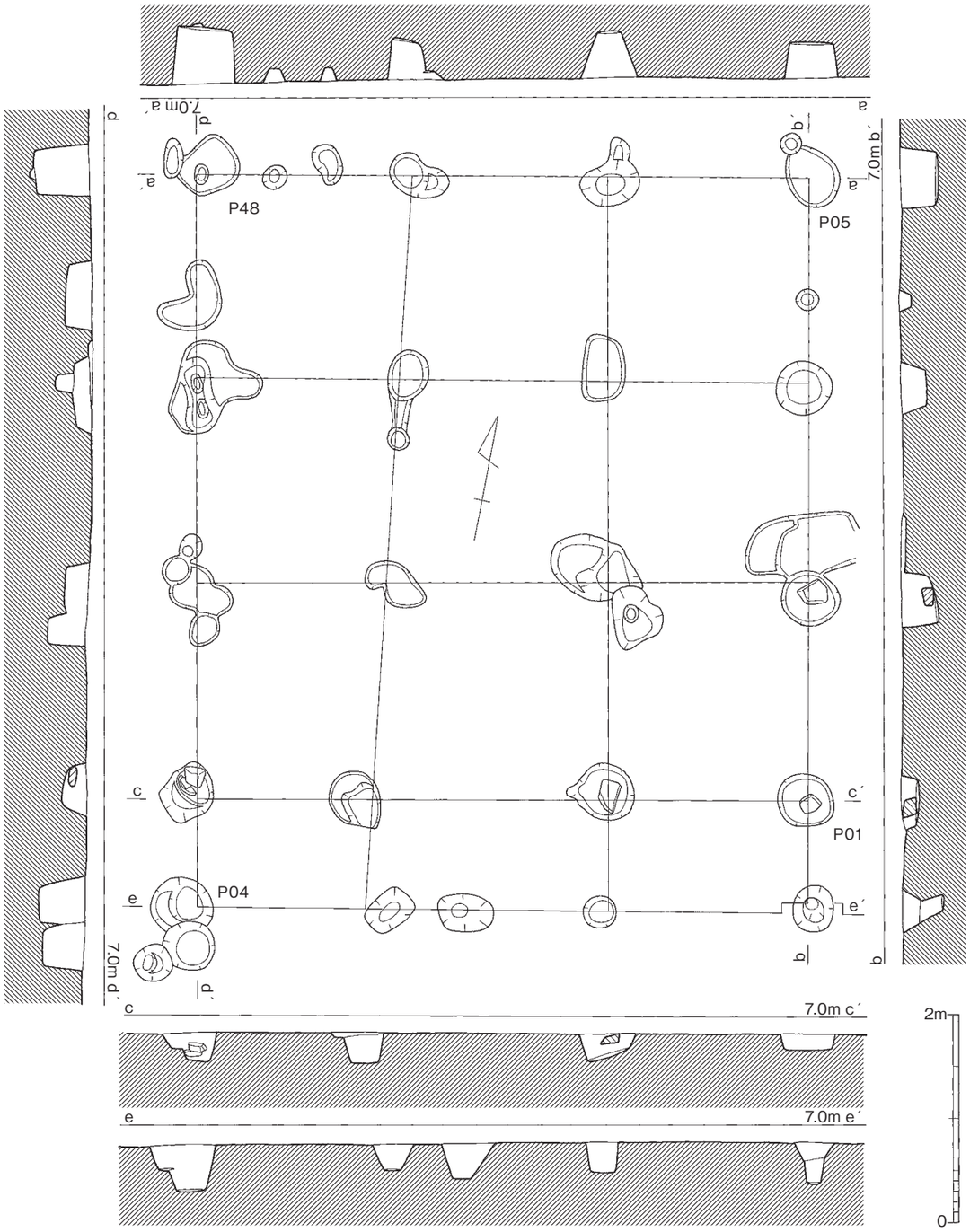
A 地区北東隅で検出した。ほぼ北西方向を向く。桁行 4 間、梁行 3 間の総柱の建物である。南東側の 1 間×３間は縁を設けたと思われる。これを除く３間×３間の 4 隅の柱跡からは地鎮に用いられたと思われる洪武通寶が出土した。また、南および西の柱穴では根石がみられた。柱穴の大きさは 50 ～ 90㎝、深さ 30 ～ 50㎝を測る。南東の 1 間×３間は柱穴は若干小さくなり、30 ～ 60㎝を測る。西側では柵列を検討したが確定できなかった。

出土遺物（第 63 図）

土師器小皿で、外面には２段の回転ヨコナデがあり、上段のナデは口縁部を薄くし、下段のナデは沈線を 2 条残す。見込みは平坦で端部をナデ窪めている。外底部は回転糸切り痕で、板状圧痕は確認できない。一部に歪みがあるが、図には反映していない。胎土は精良で褐色パミスを含む。内外にぶい黄橙灰褐色を呈する。13 世紀後半代から 14 世紀前半の所産である。このほか、ピット 01・04・05・48 から洪武通宝が出土した。このうちピット 04・48 から出土したものはピット出土遺物で取り上げる。

2 号掘立柱建物跡

1 号掘立柱建物跡の西側で検出した。調査区によって切られており、1 間×２間を検出している。南側の 2 間は約 250㎝間隔、東西の 1 間は約 180㎝間隔となる。柱穴の大きさは径 40 ～ 50㎝、深さは 30 ～ 60㎝を測る。出土遺物は小片ばかりで図化に堪えない。



第 33 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1 /60）

3 号掘立柱建物跡（図版 24、第 34 図）

A 地区南側、4 号溝状遺構を挟んで SX01 の南側で検出。1 間 × 3 間としたが中央の柱に相対する柱が検出できなかったため、建物跡とするには不安が残る。

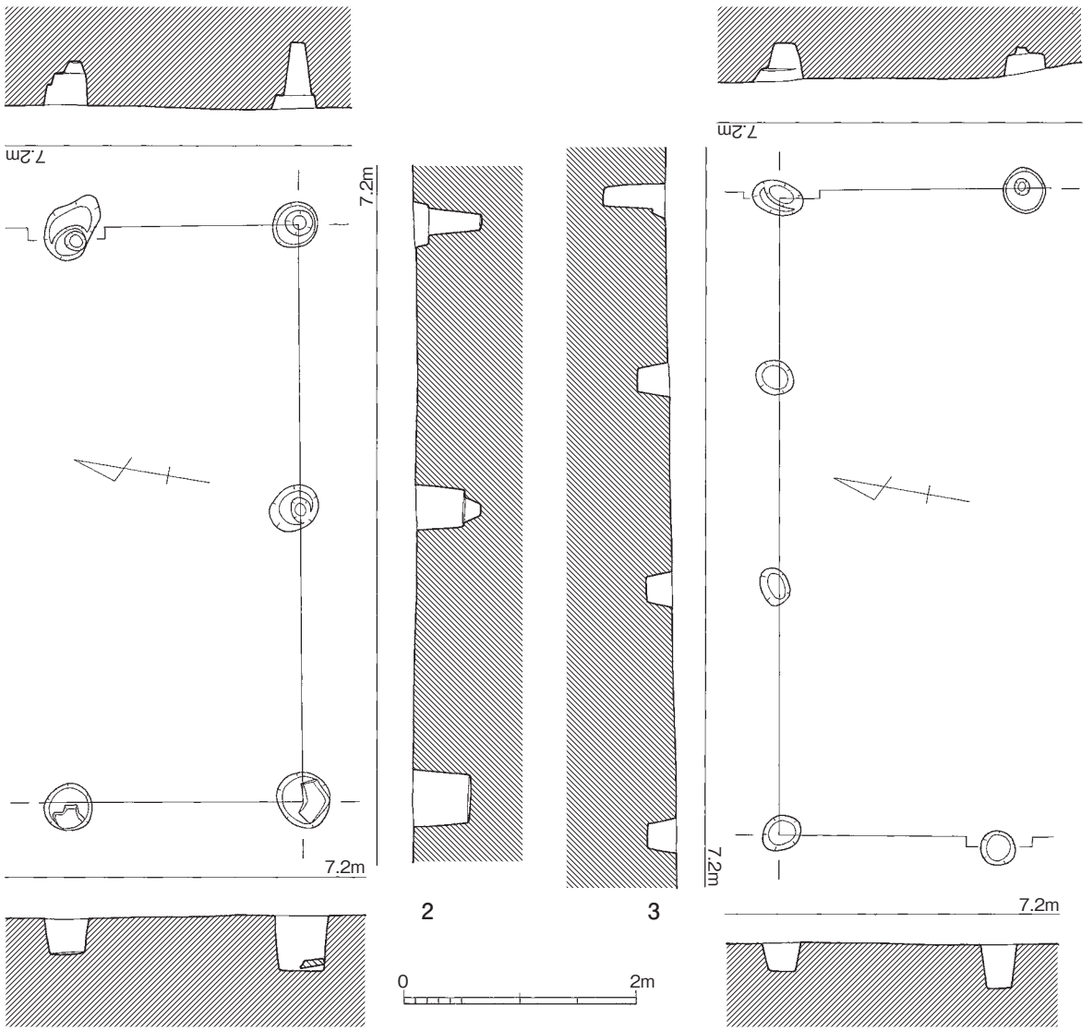
柱穴の大きさは 30 ～ 40cm、深さは 20 ～ 40cmを測る。北側の 3 間のみで柵列を成していた可能性もある。

4 号掘立柱建物跡（図版 28、第 33 図）

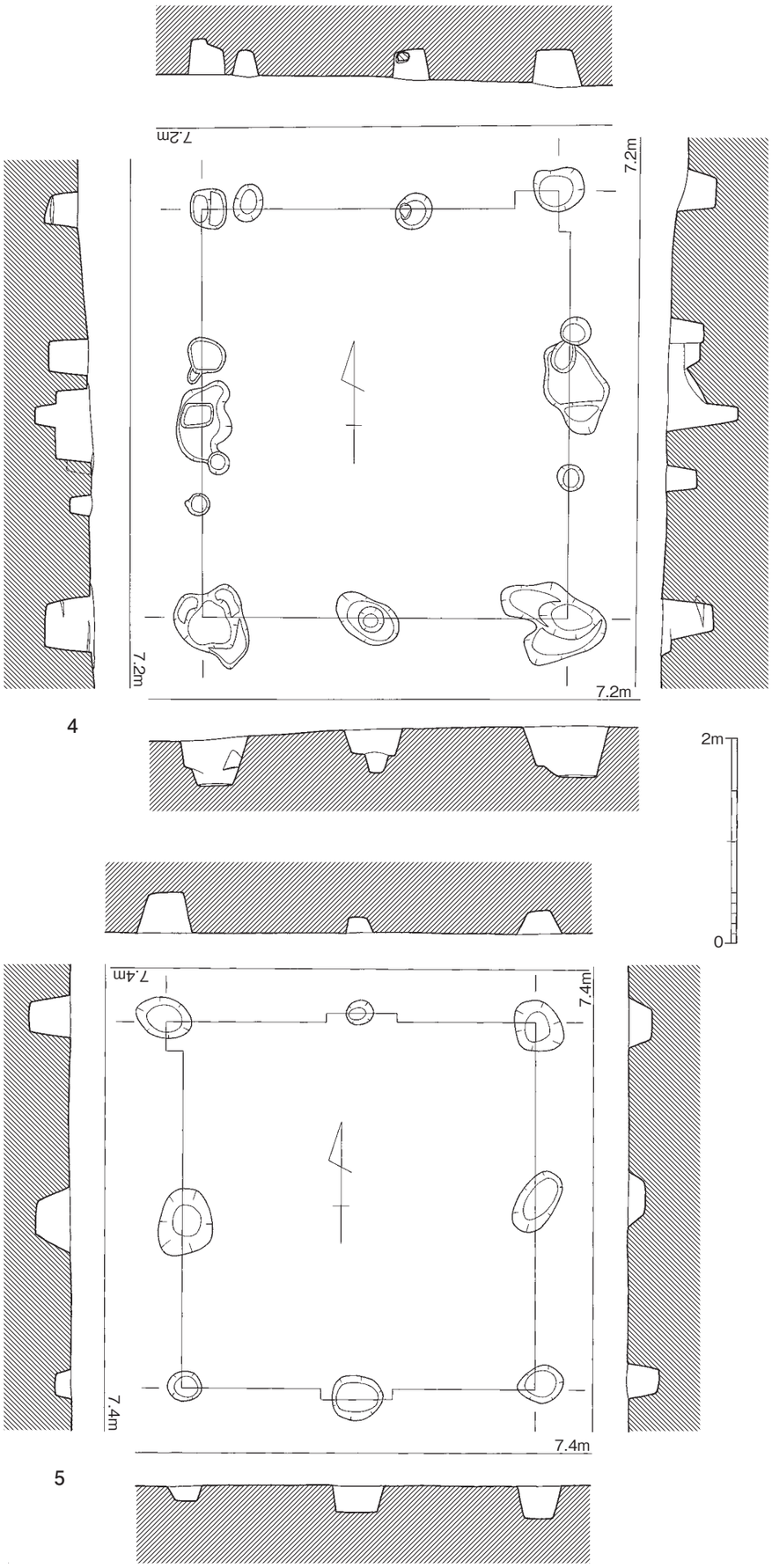
D 地区東側、SX06 の東に隣接する。2 間 × 2 間の建物跡で間隔は 100 ～ 130cmであり、柱穴の大きさは径 40 ～ 90cm、深さは 40 ～ 60cmを測る。柱穴には焼土塊が多く含まれていた。瓦器片、土師器の捏ね鉢など土器片が出土するが図化に堪えない。

5 号掘立柱建物跡（図版 28、第 35 図）

D 地区東側、23 号溝状遺構の西側に位置する。2 間 × 2 間の建物跡で、柱穴は径 25 ～ 60 cm、深さ 20 ～ 30cmと若干浅い。掘立柱建物として調査を行ったが中世の土師器片および古墳時代の所



第 34 図　2・3 号掘立柱建物跡実測図（1 /60）



第 35 図　4・5 号掘立柱建物跡実測図（1 /60）

産と思われる須恵器片が出土しており、建物跡と断定しがたい。遺物はいずれも小片で図化に堪えない。

土坑

1号土坑（図版24、第36図）

4号溝の北側、2号土坑の西側に近接する。南北約140㎝、東西約120㎝、深さ約50㎝を測り、方形を呈する。覆土は黄褐色土で、炭化物・焼土塊を含む。出土遺物は見られなかった。

2号土坑（図版24、第36図）

1号土坑の東側に位置する。南北168㎝、東西約90㎝、深さ60㎝を測り、長楕円形を呈する。上面には暗灰褐色土のピットが切り込んでおり、このピットからの遺物の出土はなかった。堆積は1号土坑とほぼ同じ。北側にテラス状の段を有するが、周囲を若干掘り過ぎのため生じた段である。

遺物は瓦質土器の小片等が出土しているが図化に堪えない。

３号土坑（図版24、第36図）

１・2号土坑の北側に位置する。南北約130㎝、東西74㎝、深さ30㎝を測り、長楕円形を呈する。床面は水平で、立ち上がりは急である。

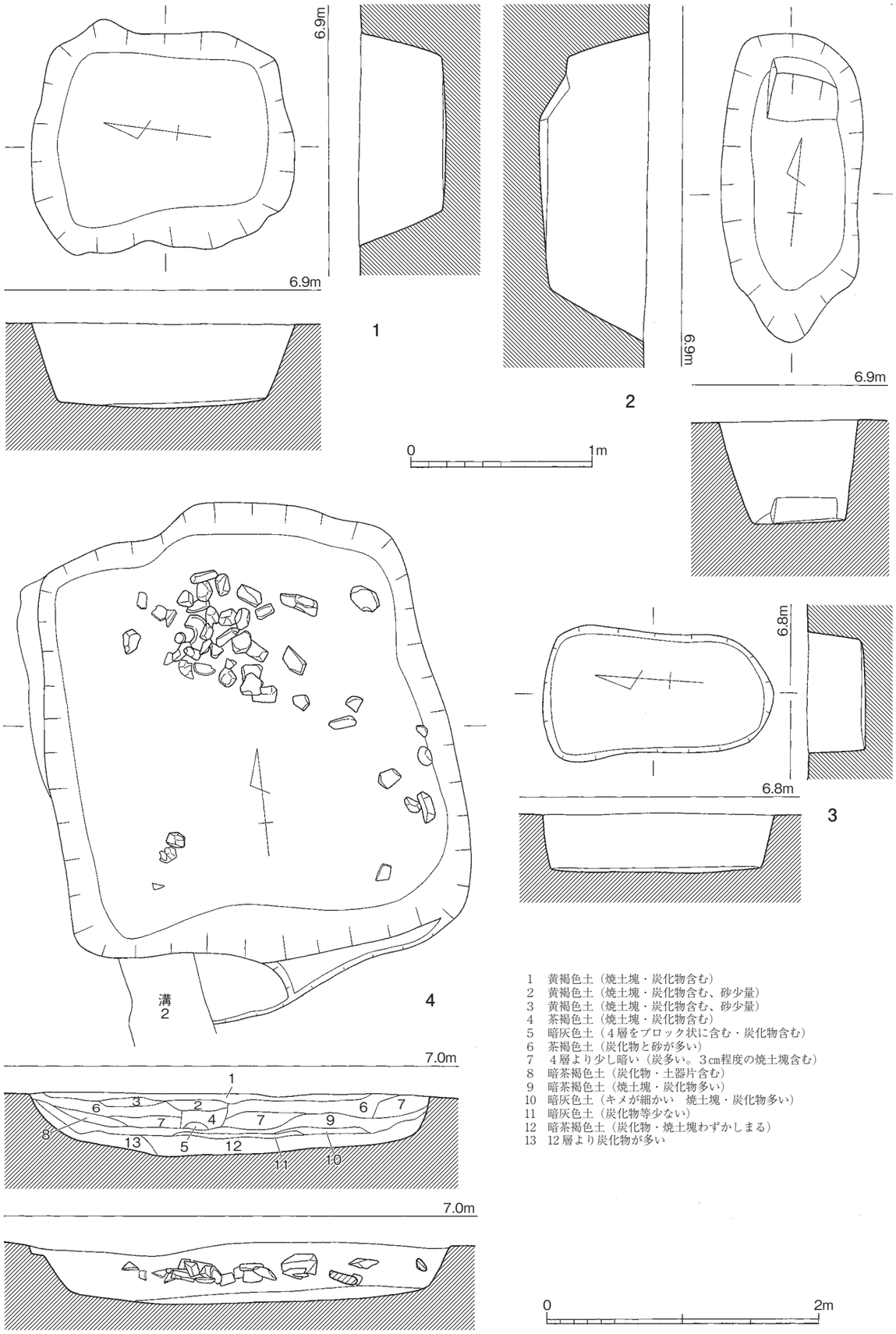
遺物は土器小片が出土するが器種は不明。図化に堪えない。。

4号土坑（図版24、第36図）

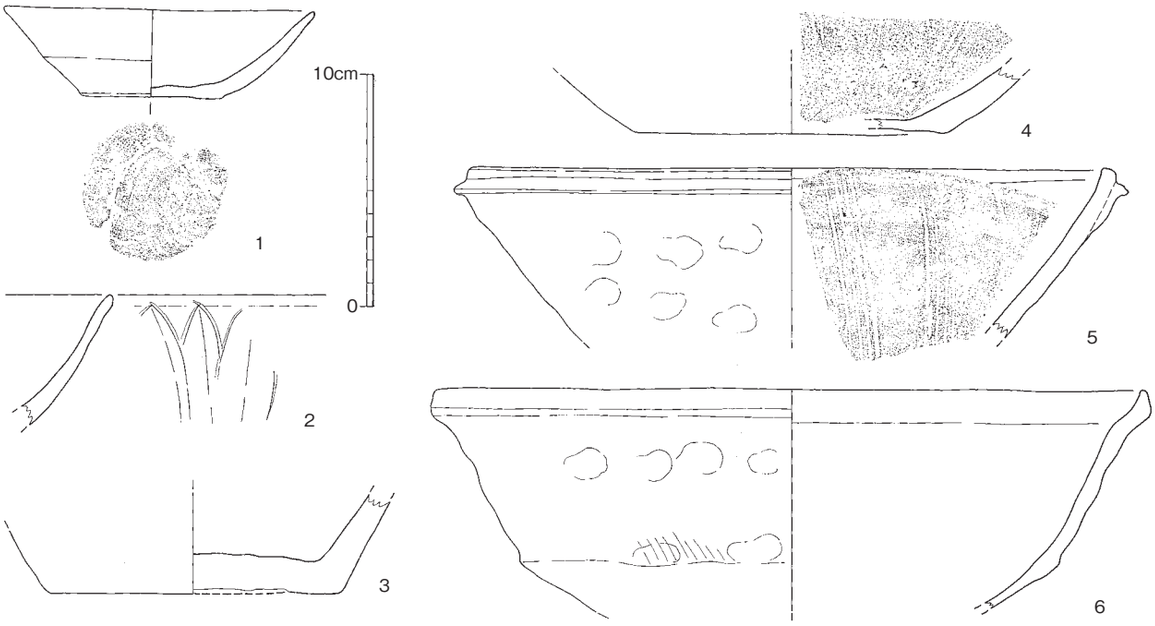
一辺が約3ｍの方形で、深さ約40㎝を測る。2号溝状遺構に切られる。覆土は黄褐色土で、下層では暗褐色土が堆積する。全体的に焼土塊や炭化物の混入が見られる。また、9層では特に炭化物が多く含まれ、土器の出土もこの層からである。土器および石は遺構の北側に集中する。性格は不明であるが、炭化物・焼土塊の混入も見られることから、廃棄等に使用されたものか。

出土遺物（図版51、第37図）

１は土師器皿で、外面には３段の回転ヨコナデがあり、見込みは螺旋状回転ナデで、中央部を凸状に高く残す。口縁部を薄くする成形を行っておらず、ナデ後に指圧痕を残すなど整形は粗雑である。外底部は回転糸切り痕で、一部分が長方形に失われている部分は板状圧痕である。胎土は精良で金雲母を多く含み、にぶい暗黄灰褐色を呈する。13世紀後半代の所産である。２は龍泉窯系青磁碗で、外面に片切彫りによる鎬連弁文が入り、口縁部がやや外反する。焼成は良好で淡緑灰色に発色する。13世紀後半代の所産である。３は土師質土器の甕の底部で、外面の調整、胴部はナデ、底面はヘラケズリ、内面は器面が残っていない。外面は胴下位から底部に連続する斑状剥離があるが、内面には見られないことから、埋甕として使用されたものである。胎土は比較的精良だが砂粒を含む。色調は黄灰白色から黄橙色で、内面は変色が見られない。４･5は土師質土器の摺鉢で、内外器面摩滅で調整不明。色調は灰白色から灰黒色を呈する。胎土は長石と風化花崗岩粒子を多く含む。５は口縁部外面に突帯を貼り付け、突帯上面は平坦にナデている。器面の黒灰色は全面に均一な色調であり、胎は橙褐色であることから、使用変色でなく炭素を吸着させたものである。外面



第 36 図　1 ～ 4 号土坑実測図（4 は 1/40、他は 1/30）



第 37 図　4 号土坑出土遺物実測図（1/3）

の胴上位はヨコナデ、中位以下は指頭圧痕のみで、内面はヨコナデが残っている。内面は器表面が残っているが、小さな班状剥離の使用痕があるので、摺鉢としての使用は認められる。13 世紀末から 14 世紀初頭。6 は土師質土器の土鍋で、外面の器面調整は胴上位がヨコナデ、中位が指頭圧痕のみ、下位は格子目タタキである。中位と下位の境界に段差があるのは、タタキによる粘土の寄りが中位に被ったものだろう。ちょうどこの段差を境に、外面は中位以上に煤が付着し、内面は使用により下位の器面の残りが悪い。使用変色以前の色調は器面が灰白色だが、胎は灰色なので、瓦質土器の焼成不良品の可能性もある。また、内面には使用時の炭化物が付着している。16 世紀中葉。

5 号土坑（図版 27、第 38 図）

7 号土坑に切られる。南北約 240cm、東西約 130cm、深さ約 30cmの長方形を呈する。検出後、一段掘り下げた際に「永楽通宝」が出土する。覆土は黒褐色土が堆積し、遺構埋土には全体的に焼土塊・炭化物が混入する。中には炉壁も見られた。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は不正形な浅いくぼみが見られる。土坑墓と思われ、木棺墓を想定したが痕跡は見られなかった。

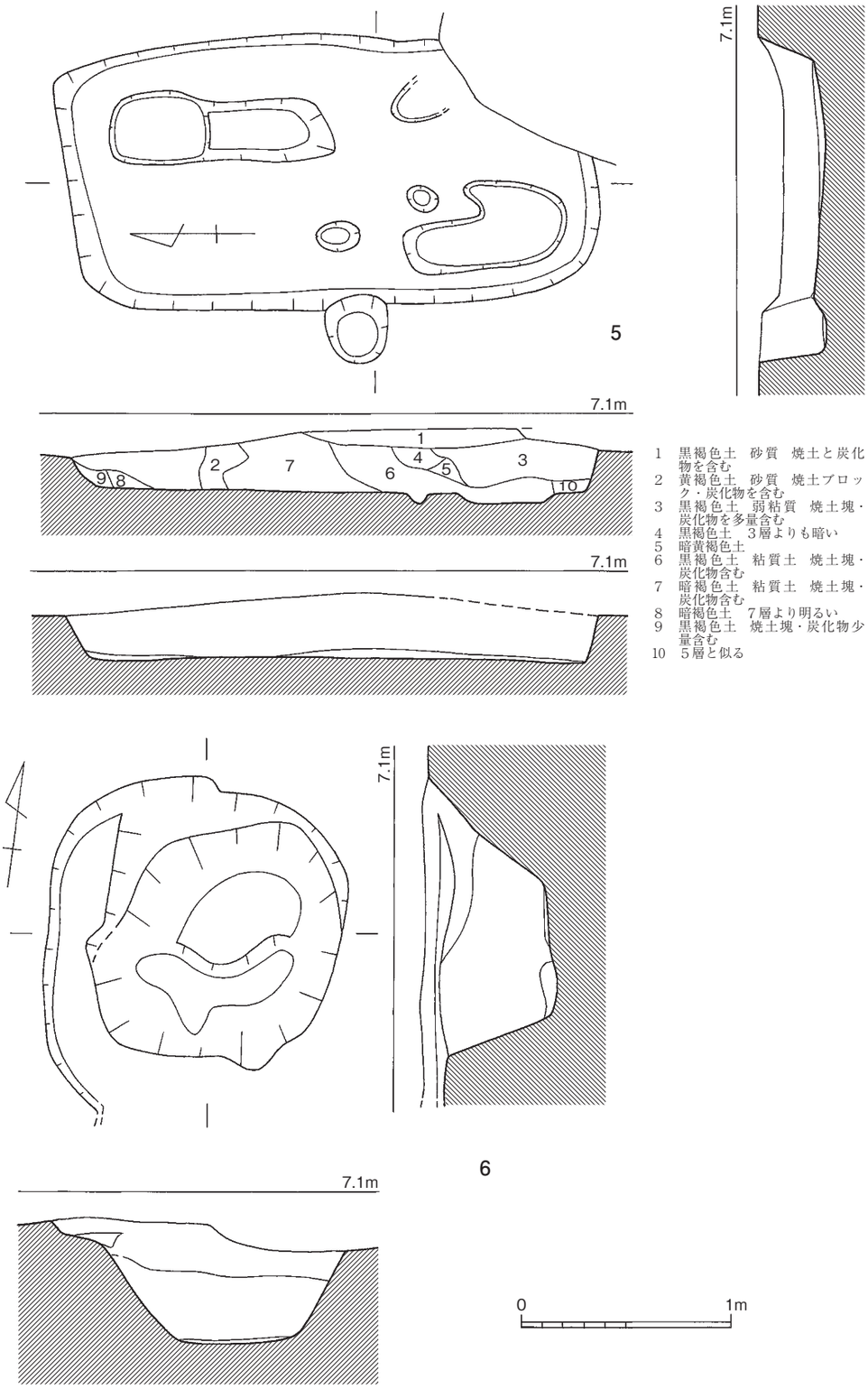
出土遺物（第 65・66 図）

第 65 図 5 は永楽通宝である。明銭で初鋳は 1408 年である。第 65 図 13 は銅製帯執金具である。上面に 14 × 5.5㎜の吊り下げ孔、下部に 36 × 17㎜の鞘入れが付く。第 66 図 12 は鉄釘である。上端を折り曲げて敲面を作り出している。

このほか、土壁と見られる粘土塊が計 1,990 g 出土している。

6 号土坑（図版 27、第 38 図）

5 号土坑の南に位置し、南北約 130cm、東西約 120cm、深さ約 50cmの円形を呈する。覆土は黒褐



1　黒褐色土　砂質　焼土と炭化物を含む
2　黄褐色土　砂質　焼土ブロック・炭化物を含む
3　黒褐色土　弱粘質　焼土塊・炭化物を多量含む
4　黒褐色土　３層よりも暗い
5　暗黄褐色土
6　黒褐色土　粘質土　焼土塊・炭化物含む
7　暗褐色土　粘質土　焼土塊・炭化物含む
8　暗褐色土　７層より明るい
9　黒褐色土　焼土塊・炭化物少量含む
10　５層と似る

第 38 図　5・6 号土坑実測図（1/30）

色土で、焼土塊や土器片を含んでいる。遺構埋没後に東側で再度掘削した痕跡も見られるが、出土遺物から時期差は見られない。性格は不明である。

遺物は図示できるものがない。

7号土坑（図版29、第39図）

調査区北側、10号土坑の南西に位置し、5号土坑を切る。一辺約180cmの方形で、深さ約65cmを測る。土層観察から北側にピットが切り込んでいたと思われるが、検出時には確認する事ができず掘削には至っていない。

出土遺物（第41図）

１は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに菊文がスタンプされている。発色が良く明薄緑色を呈しており、高台内のみが釉剥ぎで畳付まで釉が掛かっている。胎は灰白色。14世紀後半から15世紀前半の所産である。２は龍泉窯系の花弁口縁皿で、口縁部内面にヘラ描きの花文が入る。焼成やや不良で、貫入が多く、釉内に気泡が見られる。胎は暗灰白色15世紀前半。３は土師質脚付土鍋の脚部で、火を受けて淡赤橙色を呈する。胎土はやや精良でチョウ石を多く含む。４は管状土錘で、全面黒灰色を呈する。一部欠損しており、5.7ｇを測る。このほか図化していないが李朝陶器の象嵌入り粉青沙器の瓶類が出土している。

8号土坑（図版27、第39図）

B地区北側に位置し、11号溝状遺構に近接する。南北約120cm、東西約180cmの長楕円形を呈し、深さ約30cmを測る。覆土は明褐色砂質土が堆積しており、地山の判別が困難であった。壁の立ち上がりは緩やかで、床面は水平である。

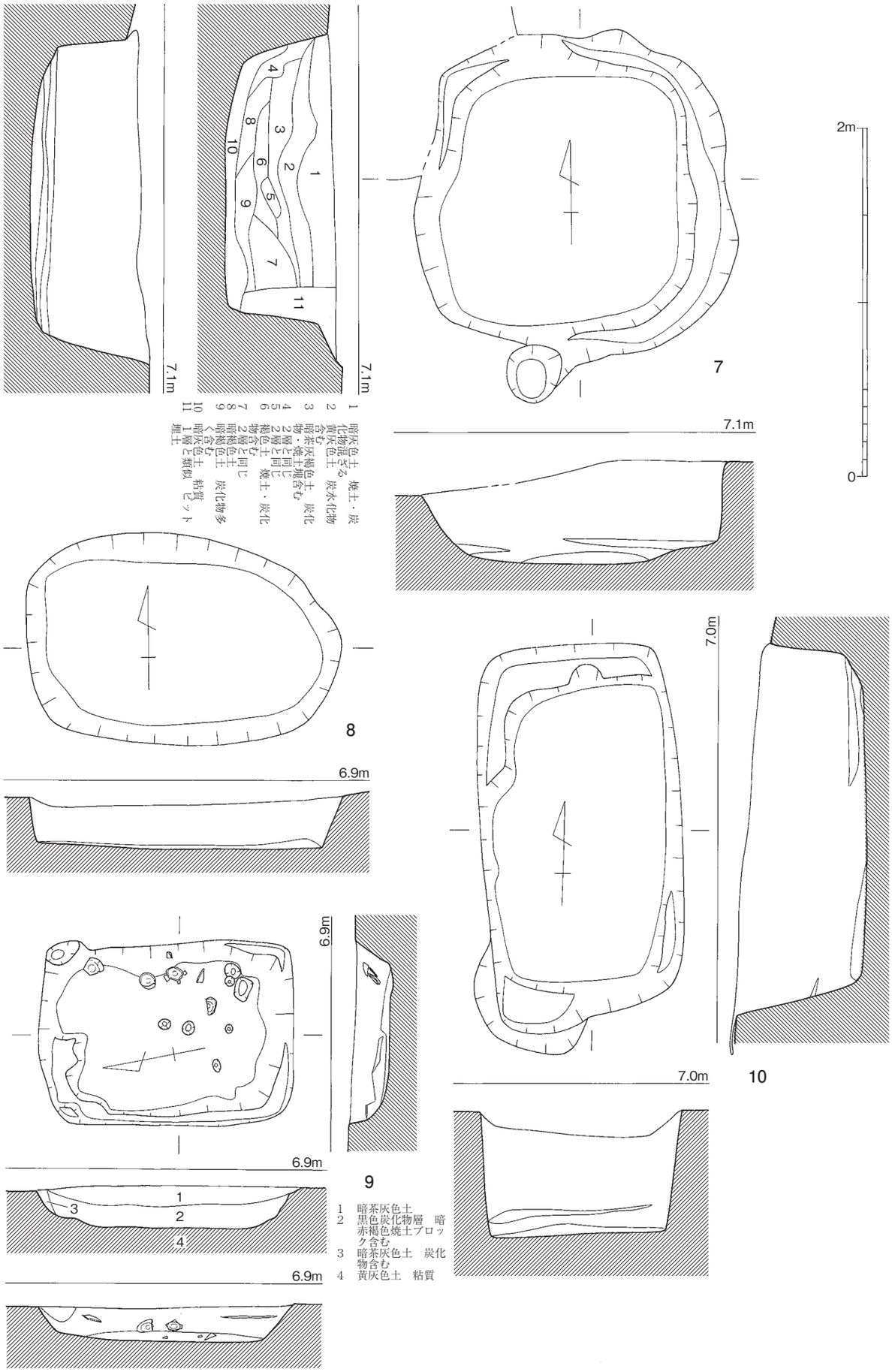
遺物は土師器椀の小片が出土しているが、図化に堪えない。

9号土坑（図版29、第39図）

11号溝状遺構の湾曲部西側、8号土坑の南東に位置する。南北145cm、東西約100cm、深さ約25cmの長方形を呈する。覆土は茶灰色土、下層は黒色炭化物層が堆積し、大きく２層に分かれる。遺物はいずれも東半部分にあり、床面直上から出土する。炭化物は藁灰のようにきめが細かく、柔らかい。少量ではあるが、炭化材・焼土塊も含まれる。土坑墓と思われる。

出土遺物（図版51、第41図）

５～９は土師器皿で、胎土はいずれも金雲母・長石を多く混入している。５と７は見込みに螺旋状回転ナデが入り、胴部は２段ナデだが、外面の段の間に工具端部痕で段ができる整形技法の特徴が同じである。５は図上では口縁部が厚いが、部分的なもので、５・７は同一工人の製品であろう。５は器面剥落のため観察不能だが、７は回転糸切り後の板状圧痕が見られ、６は回転糸切り後、端部の一ヶ所に小さな粘土塊を貼り付けて底部の融着を防いでいる。５は器面が剥落しており、本来は７の黄橙色だったと考えられる。７は接合した破片ごとに色調が異なっており、破片の遺存状態に差があったようだ。６も5･7に近い法量だが、口縁部がやや内湾しており、見込みの螺旋状回転ナデの幅が狭い点で異なっている。変色が著しいが、本来は７に近い黄橙色で、胎土は近似しているので、同一工人集団内の差異だろう。外底は摩滅しているが回転糸切りである。8･9は全面暗黒



第 39 図　7 ～ 10 号土坑実測図（1/30）

褐色を呈しており、変色と炭素の付着を意図したものの両方の可能性を残す。8 は口縁端部外面を小さく肥厚させ、先端は尖る。8･9 とも見込みは螺旋状回転ナデの中央部に粘土を埋めており、外底は回転糸切り後板状圧痕が明瞭に残る点が同じなので、同一工人の製品だろう。いずれも 12 世紀後半代であろう。

10 号土坑（図版 30、第 39 図）

5 号土坑の東側に位置し、11 号溝状遺構に近接する。南北約 210cm、東西約 110cm、深さ約 80cm を測り、長方形を呈する。覆土は暗灰色土が堆積する。壁の立ち上がりは急で、南側はピットに切られていた。墓の可能性も考えたが断定できない。

11 号土坑（図版 27、第 40 図）

Ｂ地区のほぼ中央に位置する。南北約 130cm、東西約 180cm、深さ約 20cmを測り、長楕円形を呈する。覆土は黒褐色土が堆積し、炭化物・焼土塊・土器片を含む。壁の立ち上がりは緩やかで浅い。

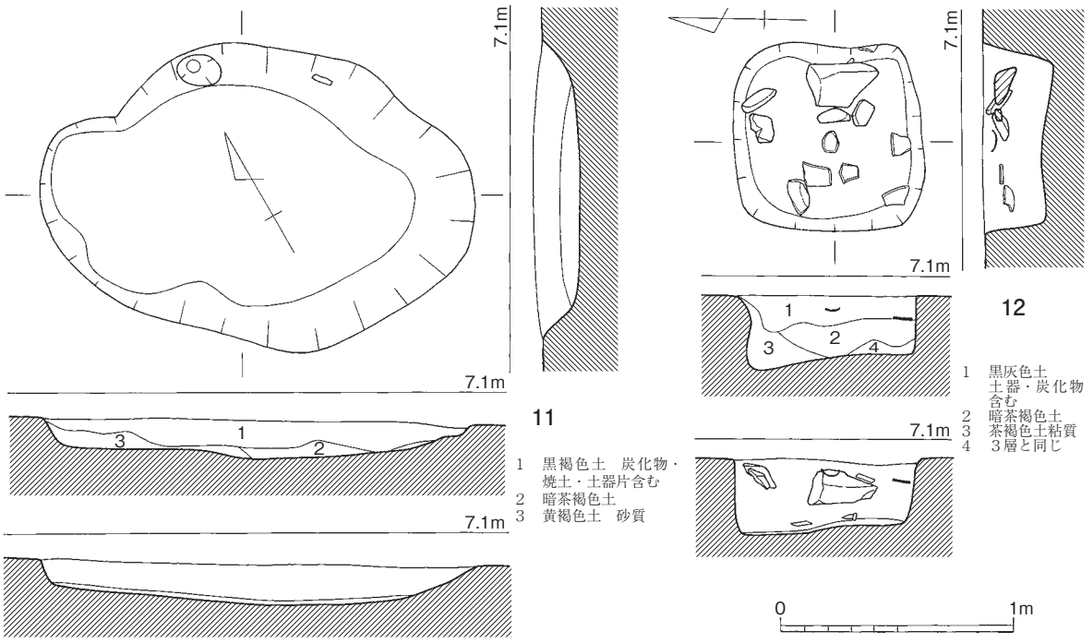
土師器皿の小片が出土するが図化に絶えず、時期も不明。

12 号土坑（図版 27、第 40 図）

一辺が 80cm、深さ約 30cmの方形の土坑。遺構上層の黒灰色土から人頭～拳大の礫まとまっていたが意図したものかは不明。

出土遺物（第 41 図）

10 は小型の須恵器椀底部片で、焼成不良か２次焼成による変色があるが、本来の青灰色が残る部分もある。底部は押し出し技法により丸みをもつ。外面はミガキで、胴下位にはミガキの前のケ



第 40 図　11・12 号土坑実測図（1/30）

ズリも残っていた。18 号土坑出土例と同様なものである。11 は土師質土器の湯釜の口縁部と底部片である。器面の残りが悪く調整は不明瞭だが、内面はケズリ後ナデ、外面は鍔の上下はナナデで、胴下位は指頭圧痕、外底は回転糸切り痕がなく、底部の一部に細い板状圧痕が残る。本来は暗灰色を呈していたようで、外面胴下位には煤の付着も見られる。15 世紀代。

14 号土坑（図版 30、第 42 図）

B 地区の南半、2 号井戸の西に位置する。南北約 80cm、東西約 160cm、深さ約 37cmの長楕円形を呈する。覆土は暗黄褐色土で上層は砂質、下層は粘質土。下層は炭化物および土師器片を含む。壁の立ち上がりは急ではなく、床面はほぼ平らである。

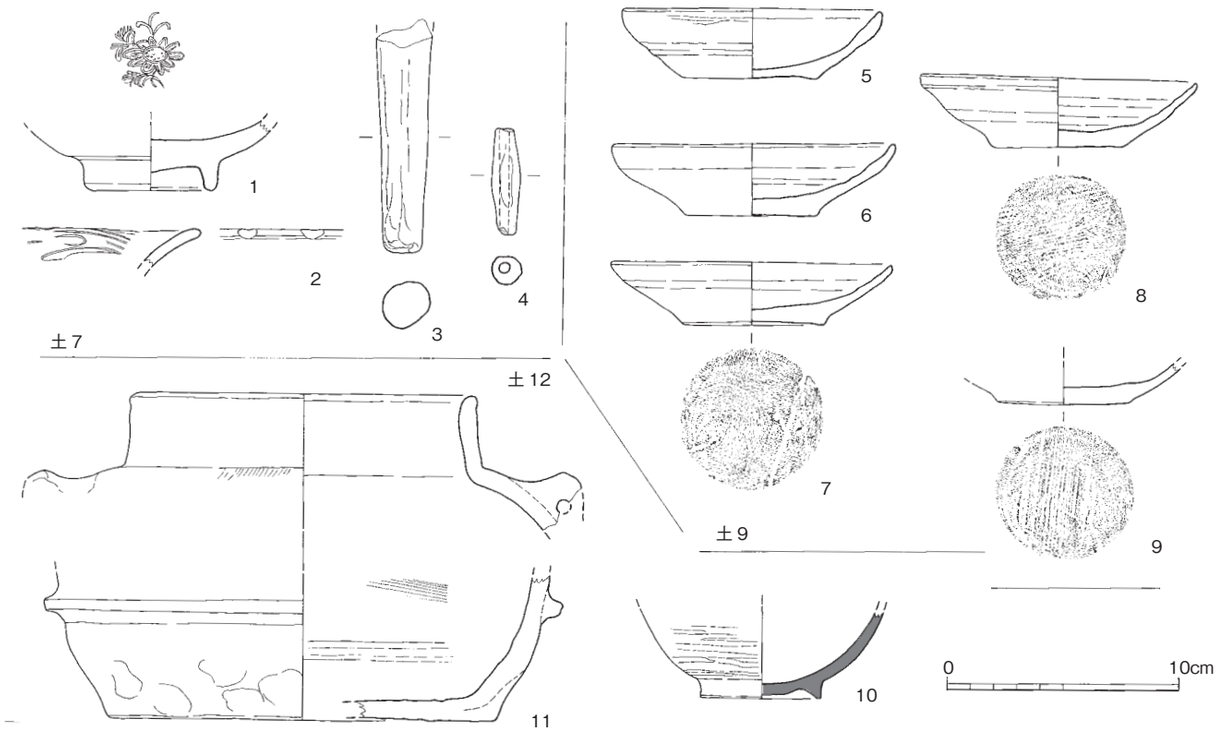
出土遺物（第 44 図）

1 は土師器小皿で、口縁部は残っていない可能性もある。器面は摩滅しており、調整は不明瞭。外底は回転糸切り。胎土は精良で、にぶい暗黄灰色を呈する。14 世紀代。

15 号土坑（図版 27、第 42 図）

C 地区中央部西側に位置する。南北約 100cm、東西約 190cm、深さ約 15cmの長楕円形を呈する。覆土は暗黄褐色土が堆積する。自然堆積と思われる。

遺物は土師器片が出土したが、図化に堪えない。



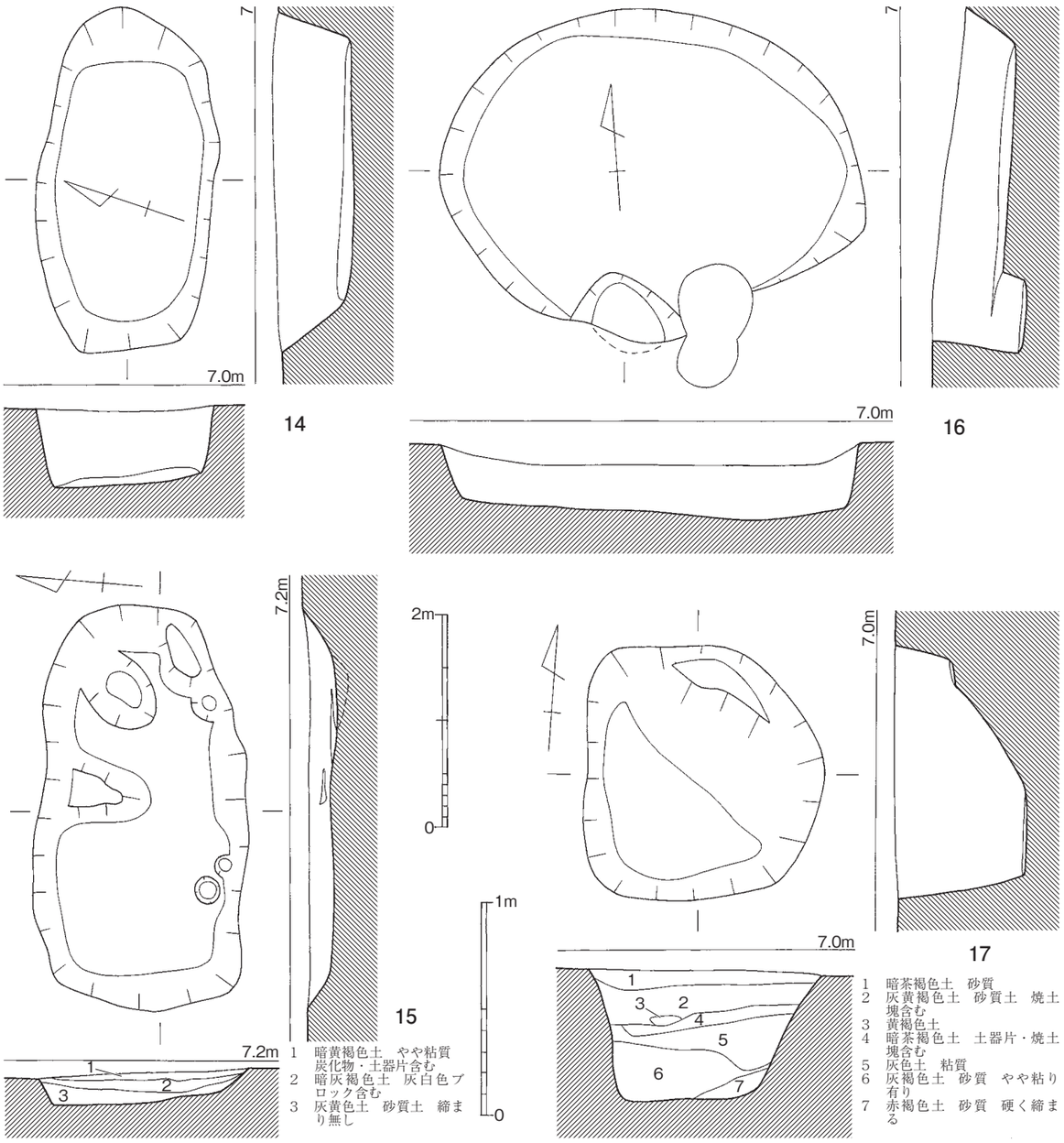
第 41 図　7・9·12 号土坑出土遺物実測図（1/3）

16 号土坑（図版 27、第 42 図）

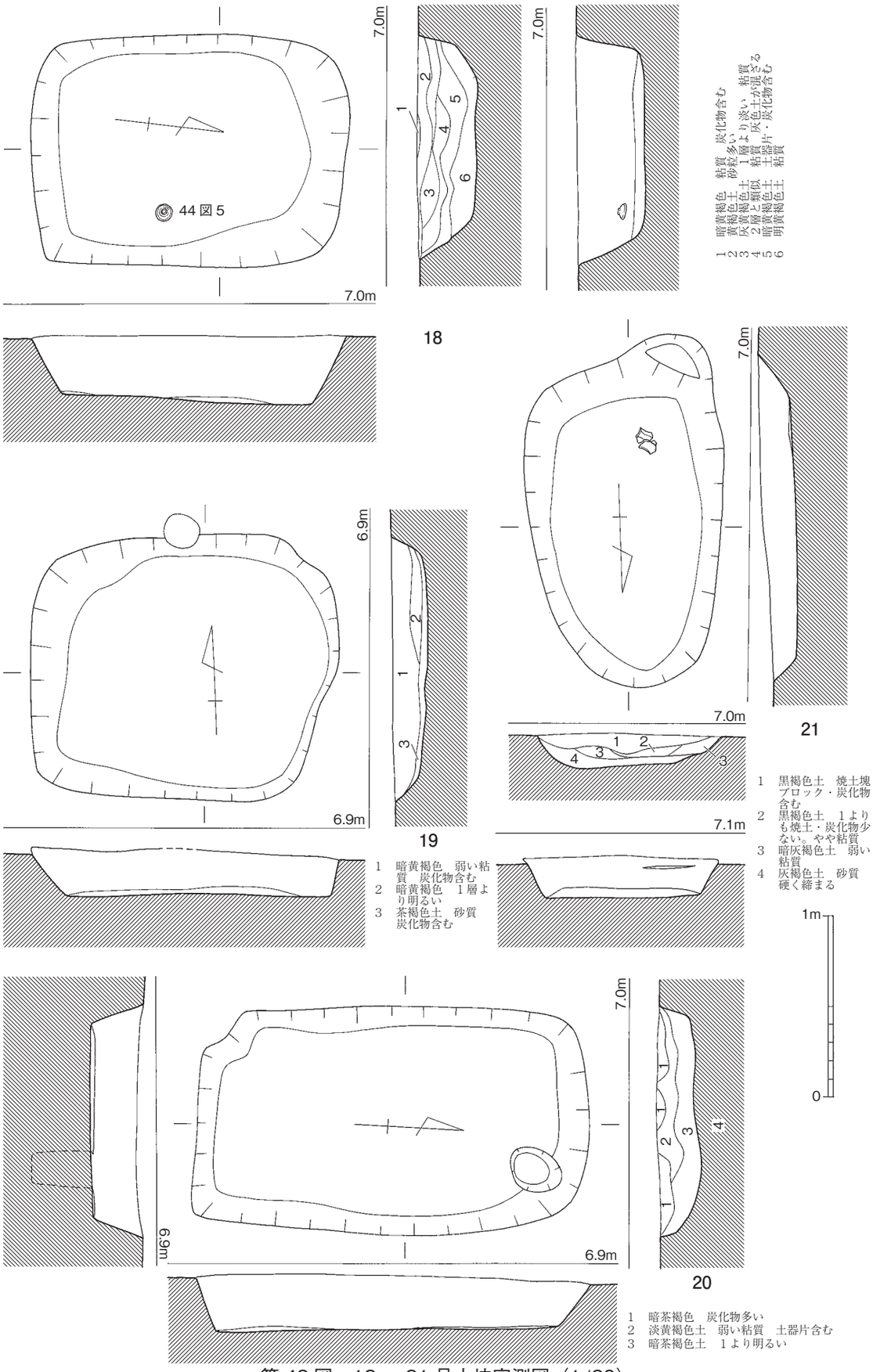
15 号土坑の北東に位置する。南北約 160㎝、東西約 190㎝、深さ約 40㎝の楕円形を呈する。覆土は暗黄褐色土で、レンズ状の堆積が見られる。

出土遺物（第 44 図）

２は須恵器の小型杯だろう。胴下位の湾曲から高台はつかないようだ。8 世紀後半の所産だろう。３は管状土錘で、にぶい暗黄褐色から黒灰色を呈する。一部欠損しており、4.2 g を測る。



第 42 図　14 ～ 17 号土坑実測図（1/30、15 は 1/60）



第43図　18～21号土坑実測図（1/30）

17 号土坑（図版 27、第 42 図）

Ｃ地区南東に位置する。一辺約 120㎝、深さ約 60㎝の方形を呈する。覆土は暗茶褐色土で、下層には炭化物層が見られた。深さ 60㎝程度掘り進めたところで砂質となり、激しく湧水したため掘削を中止した。焼却等に使用されたと思われる。

遺物は摺鉢片、土師器皿片が出土しているが図化に堪えない。

18 号土坑（図版 30、第 43 図）

Ｄ地区北側、20 号溝状遺構の東側に位置する。南北約 170㎝、東西約 120㎝、深さ約 40㎝の長方形を呈する。覆土は黄褐色土が堆積する。遺構の中央部東端から完形の瓦器椀が伏せた状態でほぼ床面から出土している。土坑墓と思われる。

出土遺物（図版 51、第 44 図）

４は土師器皿で、精良な胎土で、乳白色を呈する。器壁は薄く、丁寧な作りである。外底は板状圧痕で、一部は底部の端部にまでかかっていない。外面はヘラ状工具痕間に小さな平坦面があり、内外ともに底部と胴下位の間に沈線が入るのが特徴で、見込みの螺旋状ナデもないことから、搬入品だろう。15 世紀後半から 16 世紀前半。５は東播系須恵器の小型椀のほぼ完形品で、内外青灰色で、口縁部は重ね焼きによる黒変が残る。外面は回転ヘラケズリ後に斜めにミガキが入り、内面は丁寧なミガキが入る。

19 号土坑（図版 31、第 43 図）

18 号土坑の東側に位置する。南北 195㎝、東西 170㎝の方形で、深さ約 25㎝を測る。上層に暗黄褐色土が堆積し、炭化物を含んでいる。遺物は乏しく、性格は不明である。

遺物は底部糸切りを施す土師皿が出土するが、実測に堪えなかった。

20 号土坑（図版 31、第 43 図）

南北 215㎝、東西 125㎝の長方形を呈し、深さ約 30㎝を測る。検出面は暗茶褐色土で、炭化物や焼土塊が含まれる。その下層には淡黄褐色土が堆積し土器片が含まれる。この層までが遺構の中位で、これより下層では砂質土となり地山と判別が困難となる。

出土遺物（第 65 図）

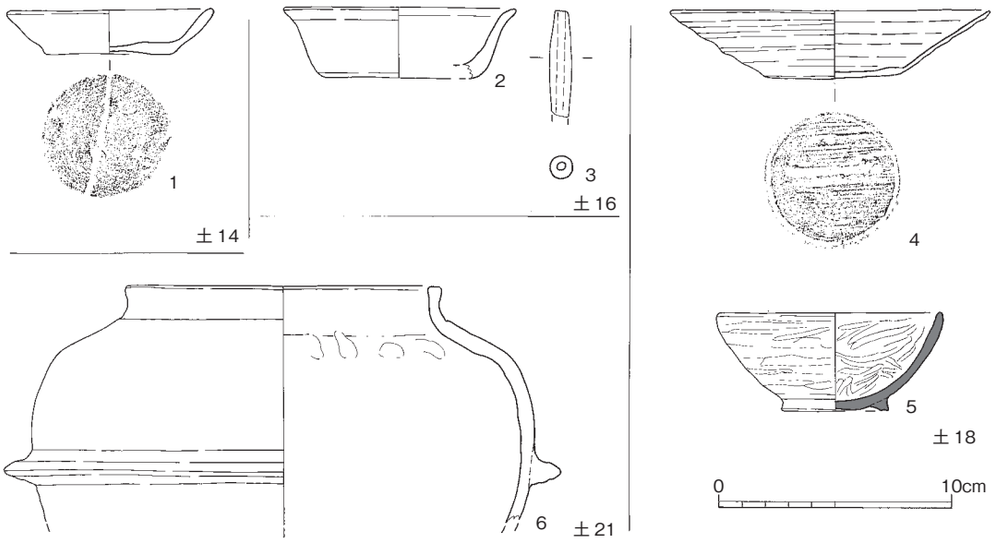
14 は青銅製鞘である。大きさから刀子用と考えられる。上面にわずかに繊維質が見られる。

21 号土坑（図版 31、第 43 図）

南北約 145㎝、東西約 110㎝の長楕円形を呈し、深さ約 25㎝を測る。上層では焼土塊・炭化物・土器片が含まれる。土坑墓の可能性も考えるが断定できない。

出土遺物（第 44 図）

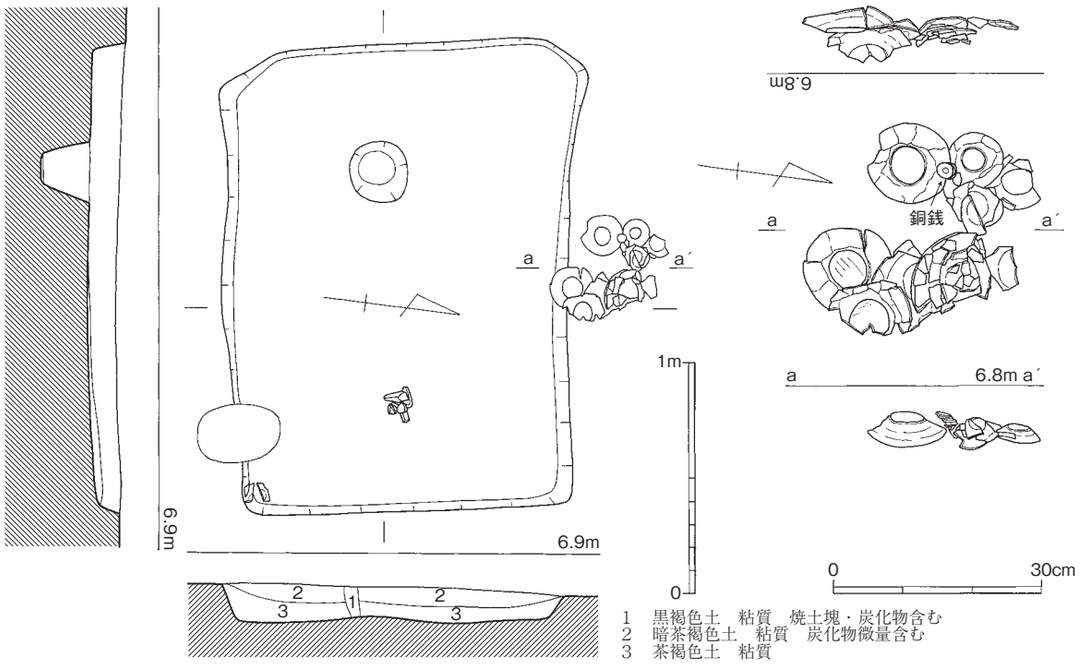
６は土師質土器の湯釜で、外面は単位を残さない革状のものによるナデで、外面頸部と鍔の接合部と内面は目跡のつくナデ。内面肩部は指オサエ列が残り、胴部はケズリ状のナデ。器面の黒茶褐色は全面に均一な色調であり、胎は橙褐色であることから、使用変色でなく炭素を吸着させたものである。鍔部分の序下に煤が付着する。16 世紀後半。



第 44 図　14・16・18・21 号土坑出土遺物実測図（1/3）

22 号土坑（図版 32、第 45 図）

南北約 150㎝、東西約 200㎝の長方形を呈し、深さ約 20㎝を測る。埋土は暗茶褐色土で、地山と類似が、地山よりも若干粘質で、炭化物を含んでいる。土坑上面北側に古銭と土師皿がまとまって検出された。古銭は錆化により判読不能である。すくなくとも 6 枚を確認した。5 枚は錆着し、穴には紐が残存していた。一枚は欠損しており、六道銭と思われる。土師皿は小皿と皿が少なくとも 10 枚確認でき、表と裏に重ねられている。重機による掘削の際に確認され、上部の遺物が失われ



第 45 図　22 号土坑実測図（1/30）・遺物出土状況（1/10）

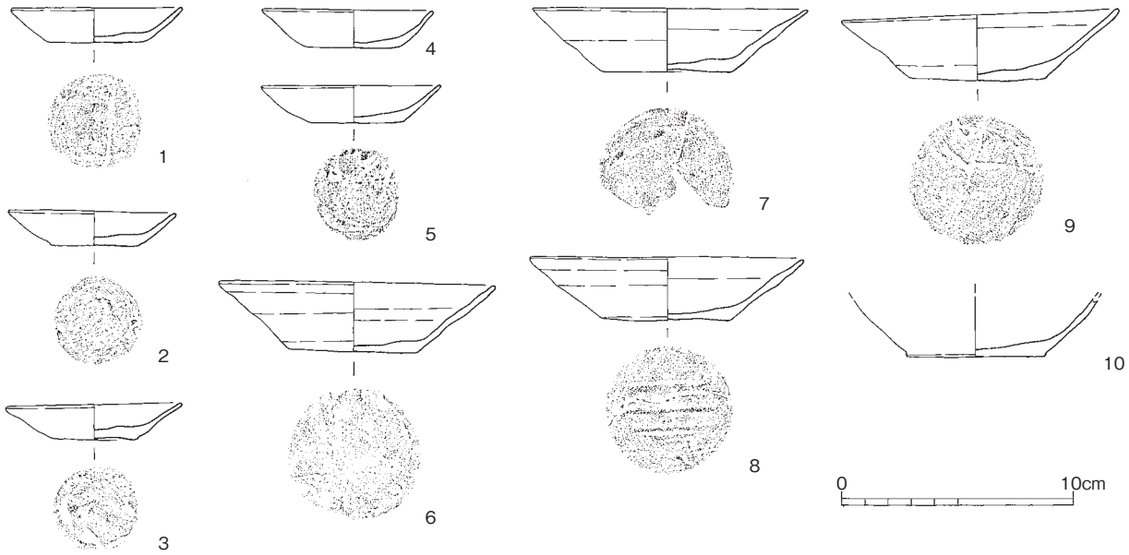
ている可能性も否めない。土坑墓と思われる。

出土遺物（第 46・65 図）

1～5は土師器小皿で、1～3・5はほぼ同じ法量で胎土も色調も同じで、4は器高がやや高く色調が若干異なる。しかし、窯内での位置による色調差と焼成による歪みと考えてよく、同一工人の製作で一括購入したものの可能性が高い。胎土は精良で、金雲母を含み、4は黄橙色だが、他はにぶい暗黄灰褐色を呈する。胴部下位は軽くナデて膨らませ、口縁部は外反させる2段の回転ヨコナデで、口縁部は内側に小さな丸みを持つので内湾するように見える。見込みは螺旋状の回転ナデで、中央が窪んだまま未調整である。見込みに残るナデ幅は8mm 前後なので、指でなく工具によるナデと考えられる。外底部は回転糸切り後、端部の一ヶ所に小さな粘土塊を貼り付けて底部の融着を防いでいる。

6～9は土師器皿で、ほぼ同じ法量で胎土も色調も同じなので、同一工人の製作で一括購入したものの可能性が高い。また、胎土や口縁部の特徴は小皿とほぼ同じなので、同一工人の製作だろう。胴部のナデは、小皿と同じく胴下位を膨らませた後、2段回転ヨコナデしている。ナデは沈線や窪みを持つ部分があるので、工具で施されている。見込みは螺旋状の回転ナデだが、9を除いて最後に中央を縦ナデしている。外底部は回転糸切り痕を切って板状圧痕がついており、成型作業後の乾燥台の痕跡であろう。10は外底回転糸切りで、板状圧痕あり。内面は螺旋状回転ナデのナデ消し。胎土は精良で、金雲母を含む。いずれも 13 世紀後半から 14 世紀前半代。

第 65 図 7～11 は融着して出土した銅銭で、中央に紐が通っていた。X 線により 6 枚が存在することがわかったが、上から 2 枚目は磨滅が著しく文字を判読できなかった。図の上から順に番号を付しており、7・8のみ上が表面、他は下が表面である。7・11 は朝鮮通寶である。朝鮮銭で初鋳は 1423 年である。8 は篆書の元豊通寶である。宋銭で初鋳は 1078 年である。9 は政和通寶である。宋銭で初鋳は 1111 年である。10 は紹聖元寶である。宋銭で初鋳は 1094 年である。



第 46 図　22 号土坑出土遺物実測図（1/3）

溝

1区では28条の溝状遺構を検出した。このうち区画溝と思われるものも溝状遺構として取り上げている。特筆しない小規模の溝については土層図は省略した。

1号溝

3号土坑の北側で検出した溝状遺構で、東側へ短く伸びている。幅約70cm、深さ約35cmを測る。出土遺物はなく、時期は不明。

出土遺物（図版24、第66図）

3･9･11は鉄釘で、9･11は完形品。上端を折り曲げて敲面を作り出す。

2号溝（図版24、第31図）

4号土坑に切られる。幅約50cm、深さ約5cm。4号溝に接続しており、1号掘立柱建物跡へと伸びている。出土遺物はなく、時期は不明であるが、1号掘立柱建物跡との関連も考えられる。

出土遺物（第52図）

1･2は管状土錘で、1は黄灰白色を呈し、3分の2残存して2.6ｇ、2は茶褐色を呈し、半分残存して1.9ｇを測る。

3号溝（図版24、第31図）

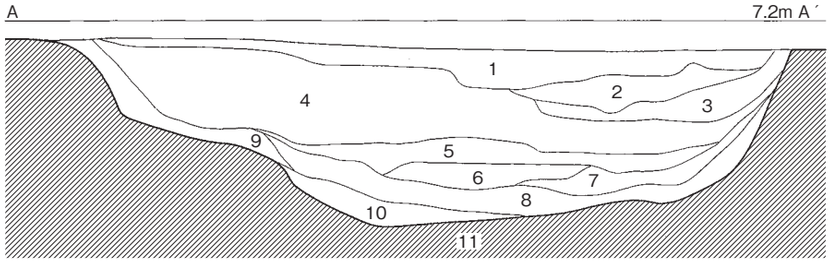
調査区北側で検出するが調査区端に位置するため、全容は不明。深さは約60cm。自然堆積の可能性もある。出土遺物はなく、時期は不明。

4号溝（図版24、第31・47図）

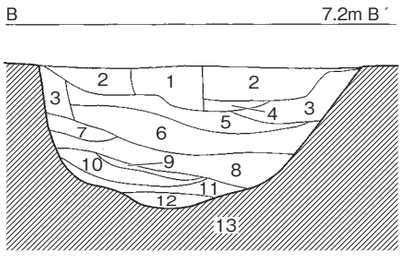
A地区南西で屈曲し、調査区の端を巡るように検出された。A地区の掘立柱建物跡、井戸を含む一帯を区画した溝と思われる。最大幅約4m。深さは60cm程度で一定だが、幅が広くなっている箇所では90cmをはかる。2号溝状遺構・SX01と接続している。4号土坑とSX01の中間あたりでは南側斜面上部に礫が堆積しており、この中から石臼が9点確認された。また、屈曲部の床面直上では灯明皿が3点出土している。14世紀代の所産であり、1号掘立柱建物跡の年代と合致する。

出土遺物（図版52、第48～51・66図）

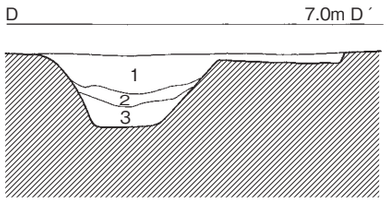
第48図1から3は完形の土師器極小の小皿で、1は糸切り痕がわかるが、2･3は不明瞭。見込みは螺旋状回転ナデのナデ消しで、1は色調が灰白色で口縁部に歪みがあるが、2･3は橙褐色で褐色パミスを含む特徴も一致するので、1と2･3は別工人集団の製品であろう。いずれも14世紀代。灯明皿か。4は龍泉窯系青磁碗で、暗緑灰色に発色する。無文で、外面口縁下に沈線が入る。16世紀前葉。5は中国製玉縁口縁白磁碗で、12世紀前半代。6は白磁の小皿で、乳白色の白磁釉が掛かり、畳付は釉剥ぎ、高台は露胎である。高台内に花押の墨書が入る。やや軟質の胎であることから15世紀前半の邵武窯系白磁である。7は龍泉窯系青磁碗で、高台は内面削り出し。畳付から外底は露胎。8･9は龍泉窯系青磁碗で、8は片切り彫りによる鎬連弁文が入るが、鎬の稜が失われているので15世紀中葉のものである。畳付釉剥ぎ、高台内露胎。9は無文で、見込みにもスタンプ



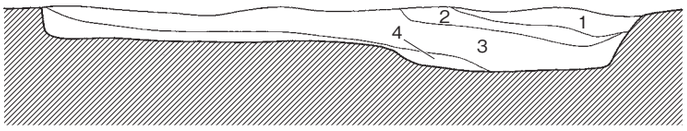
4 号溝
1　暗茶褐色
2　茶褐色
3　暗褐色　炭化物・土器片含む
4　褐色　2のブロックを含む
5　暗茶褐色　明茶褐色のブロック含む
6　暗茶褐色　やや粘質
7　暗茶褐色　粘質土、炭化物多い
8　暗灰褐色　粘質土、炭化物多い
　明褐色のブロックを含む
9　暗褐色
10　灰褐色　強粘質、上面にマンガンが溜まる
11　茶褐色　地山



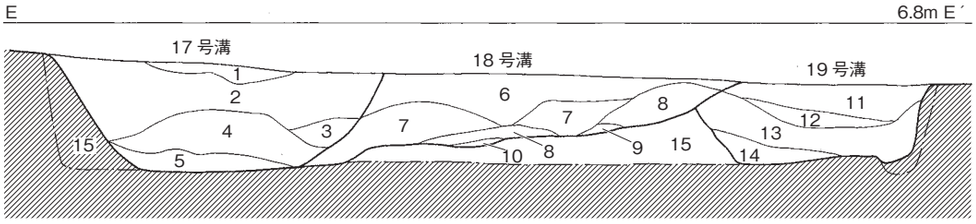
5 号溝
1　暗茶灰色
2　茶灰色
3　茶褐色
4　暗茶灰色　粘質土
5　明茶褐色
6　3に類似するが、
　やや茶色が濃い
7　2層に類似
8　暗茶灰褐色
9　暗茶褐色　粘質土
10　8と同じ
11　灰褐色　粘質土
12　茶灰色　粘質土
13　青灰色　地山



12 号溝
1　黄褐色　粘質土
2　黄褐色　砂質土
3　灰黄褐色　砂質土



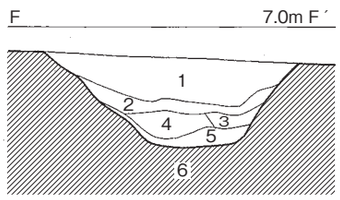
11 号溝
1　暗茶褐色　粘質土
2　暗茶褐色　粘質土
3　暗黄褐色　粘質土
4　茶褐色　硬く締まる、
　鉄分を多く含む



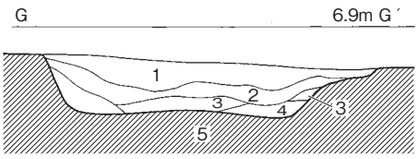
17号溝
1　黄褐色
2　暗黄褐色
3　2に類似
　2より粘り強い
4　灰褐色
5　灰色　強粘質土

18号溝
6　明黄褐色　きめ
　が細かい
7　暗灰褐色　炭化
　物含む
8　黒色灰　7がわ
　ずかに混入、
　焼土塊含む
9　7層に類似
　7層よりも粘りが
　あり、マンガン含
　む

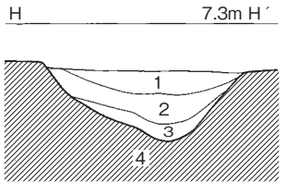
19号溝
10　灰褐色
11　暗茶褐色
12　11に類似　11よ
　りも明るい
13　暗灰褐色　砂質
　でしまりなし
14　暗灰色　焼土塊含
　む
15　黄褐色　地山



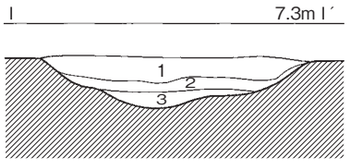
21 号溝
1　暗黄褐色　粘質土
2　淡黄褐色　砂粒が多い
3　暗茶褐色　砂利層
4　2に類似　2よりも明るく
　灰色粘土混じる
5　灰褐色　粘質土、炭化物含む
6　灰色　粘土、地山



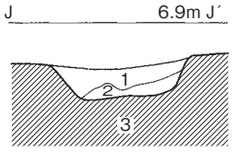
20号溝
1　暗黄褐色　5cm程
　度の焼土塊含む
2　暗茶褐色　弱粘
　砂質土
3　暗灰褐色
4　茶褐色　砂質土
5　赤褐色　粘質土、
　灰色粘土が僅か
　に混ざる



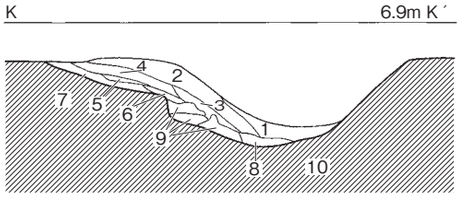
24 号溝
1　暗黄褐色　砂質土
2　暗黄褐色
　1よりも粘質
3　暗茶褐色　砂質土
4　灰褐色　砂質土、地山



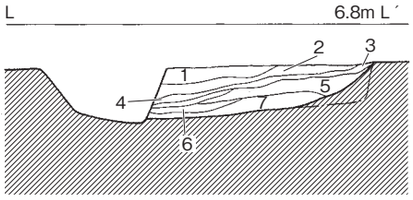
28 号溝
1　暗黄褐色　粘質土、砂粒が多い
2　淡黄褐色　砂質土
3　灰褐色　砂質土、地山に似る



27 号溝
1　暗黄褐色　粘質土、粘り弱い
2　暗黄褐色　1よりやや明るい
　砂質土
3　茶褐色　砂質土、地山



27 号溝　灰層①
1　暗黄褐色　灰色粘土僅かに含む
2　黒褐色　弱粘質土、焼土塊・灰
　が混入、まとまりがない
3　黒色　藻灰状、やや灰色がかる
4　3と類似するが、砂粒が堆積す
　る箇所あり
5　暗灰色　藻灰状のみ
6　灰黄褐色　粘質土、炭化物・焼
　土塊含む
7　灰黄褐色　6よりもやや明るい
8　灰褐色　粘質土
9　淡黄褐色　締りはなく、きめが
　細かい
10　灰色　粘土、地山



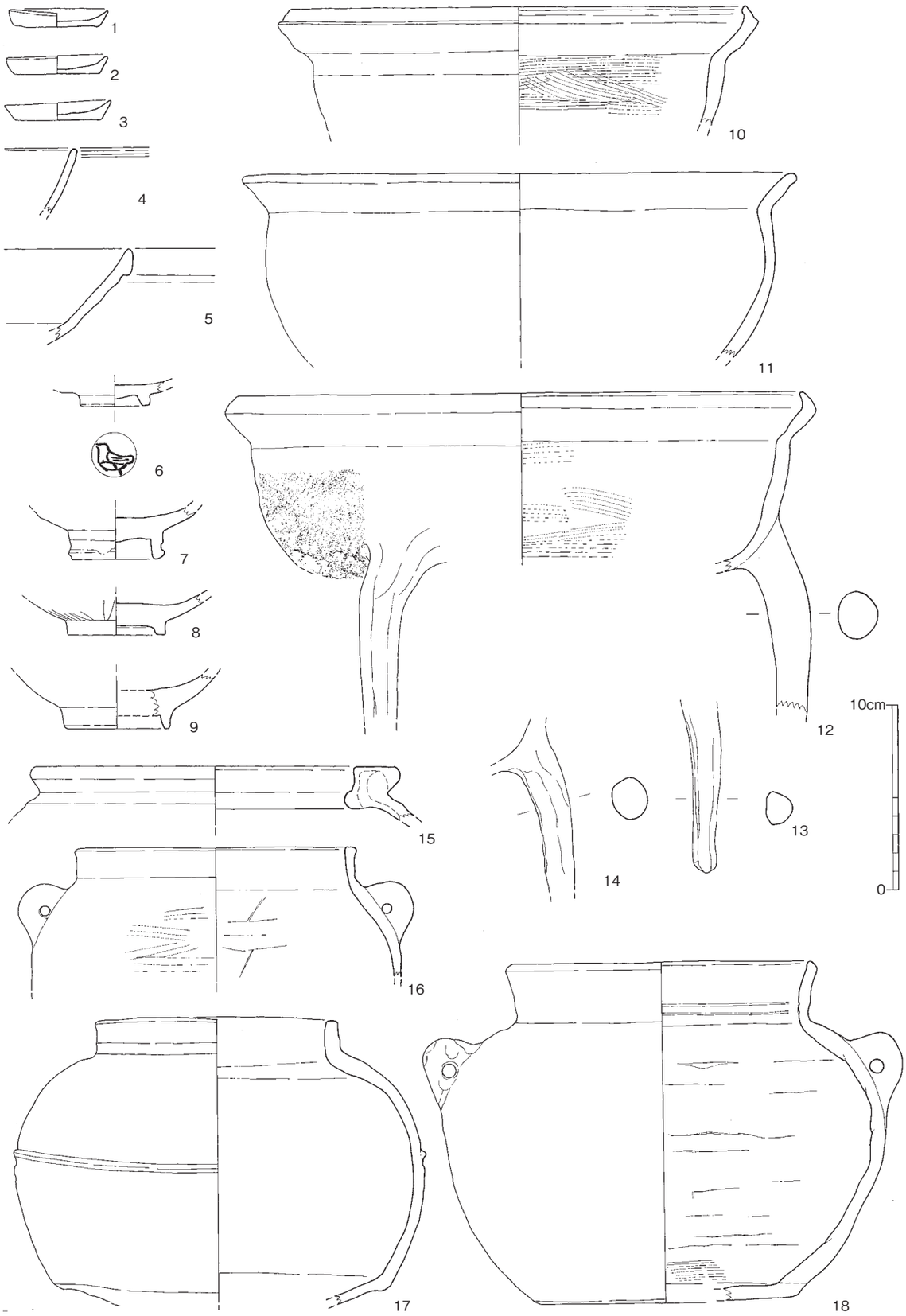
27 号溝　灰層②
1　黒褐色　粘質土、炭化物・焼土塊含む
2　暗黄褐色　弱粘質土、炭化物含む
3　2と同じ　藻灰が層状に細かく入る
4　黒色　灰層、①の3と同等
5　黄褐色土　粘質土
6　暗い茶褐色　砂質土
7　茶褐色　砂質土

第 47 図　4・5・11・12・17 ～ 19・20・21・24・27・28 号溝土層実測図（1/40）

が見られない。外底のみ釉剥ぎしており、濃緑灰色に発色している。胎は灰白色で、底部の厚さと高台の高さから15世紀代であろう。10は瓦質土器の鍋で足鍋の可能性が高い。外面は口縁部がヨコナデで外面側端部が突出する。胴部はケズリ状のナデ。内面は口縁部から胴部までヨコハケが丁寧に入る。外面は使用変色しており、内面は本来の黒灰色を呈する。胎は比較的精良で堅緻。16世紀後半。11は土師質土器の鍋で、内外黄橙色を呈する。12世紀代か。12から14は瓦質土器足鍋の脚部で、12の外面は口縁部がヨコナデ、胴部は上半に目の細かいタテハケ、下半から底部は格子目タタキ。内面は口縁部がナデ、胴部はヨコハケが丁寧に入る。外面は使用変色しており、煤が付着している。内面は本来の黒灰色を呈し、足部は内側と中位以下は火を強く受けて灰白色化しているので、中位まで灰に挿して使用したのだろう。胎は比較的精良で軟質。12は16世紀後半。15は褐釉陶器の甕で、口縁端部を外反しながら折り畳んで断面台形に整え、内面側に突帯を貼り付けている。

16から18は土師質土器の湯釜で、16は外面ヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、肩部はケズリ状のナデ。紐部は手捏ねで片側穿孔。内外灰黒褐色だが、胎は黄橙色を呈する。胎は軟質で長石を多く含む。17は紐部が欠損している。胴中位は突帯を貼り付け、接合部はナデ窪んでいる。底部は中央部が押し出し技法により窪んでいる。外面の器面の残っている部分は煤付着が著しく、底部中央が窪んでいるため縁部で火鉢などに掛けらしく器面が焦げている。胎土は精良で褐色パミスと金雲母・角閃石が目立つ。初期の底部の押し出し技法から15世紀末から16世紀初頭。18は欠損があるが口縁部から底部まで残っている。器面摩滅で調整不明。外面胴部はケズリ状のナデの痕跡の凹凸が残るが、丁寧にナデ仕上げされている。内面は積み上げ痕が残っている。紐部は手捏ねで片側穿孔。外面は器面の残る部分で灰黒褐色、内面は焼成不良で黄橙白色を呈する。胎は軟質で角閃石と金雲母を多く含む。15世紀後葉。第49図19は土師質土器の甕で、口縁部は玉縁状に肥厚している。口縁部から頸部は内外面ナデで、肩部は外面目の細かいタテハケ、内面は目幅の広いヨコハケ。外面口縁部は器面が摩滅して胎の灰白色が露出しているが、本来は黄橙色だったものと見られる。胎土は精良で、やや軟質。15世紀後半代。20は瓦質土器の甕で、口縁部外面は型押し成型による幅の広い櫛歯文を貼り付けて肥厚させている。外面肩部はケズリ状ナデ、内面はヨコハケとナデ。器面は灰黒色で、胎は黄灰白色が灰黒色を挟んでいる。胎土は精良で、やや軟質。防長産であろう。16世紀前半。21は瓦質土器の鉢で、口縁部外面は玉縁状に肥厚する。内外面は口縁部ナデで、外面の肩部以下は粗いタテハケが段々に入るため、ハケとハケの間が膨らみをもつ。胴下位はハケの上に指頭圧痕が多く残る。外底は簾状の圧痕が入り、圧痕の切り合いが見られる。内面は胴上半がヨコハケ、下半はタテハケで目幅が広い。見込みは回転ハケ。器面は灰黒色で、胎は黄灰白色。胎土は精良で、やや軟質。

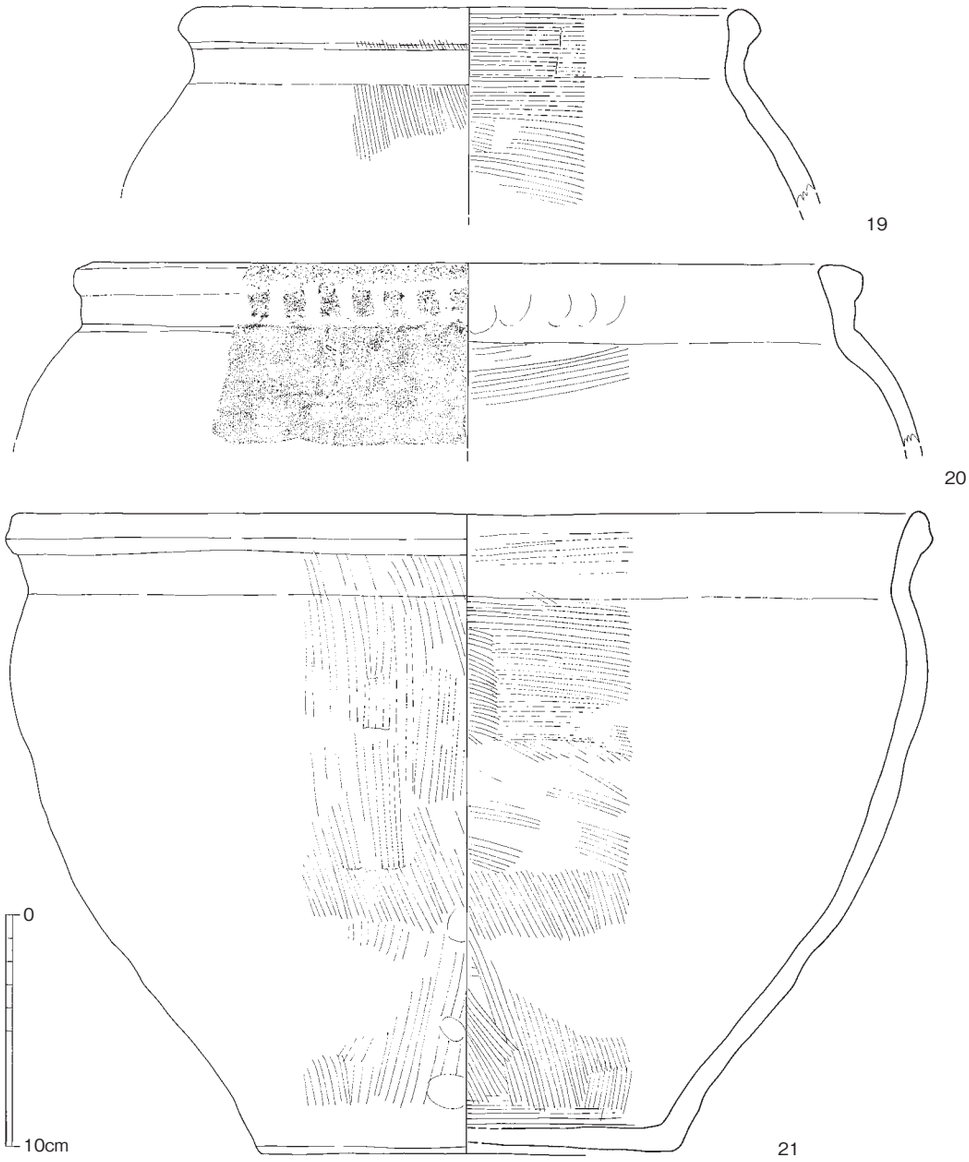
第50図22は土師質土器の火鉢で、口縁部は肥厚して跳ね上げている。胴部上半は型押し成型で多条隆線が入り、口縁部・胴下位と接合している。胎土は精良軟質で、長石と褐色パミスが入る。器面は暗黒褐色だが、胎は黄橙色を呈し、器面が摩滅して胎の色調が露出している。23は土師質土器の火鉢で、口縁部と口縁下に突帯が貼り付けられており、その間に刺突列点で構成された文様が入る。施文具はスタンプではなく、5本竹櫛を一直線に並べた状態のものを縦に2ヶ所施文し、その間に4本単位のものを横に4段施文している。胎土は精良軟質で、長石と褐色パミスが入る。器面は本来暗黒褐色だが、器面が摩滅して胎の黄橙色が露出している。16世紀代。24は土師質土



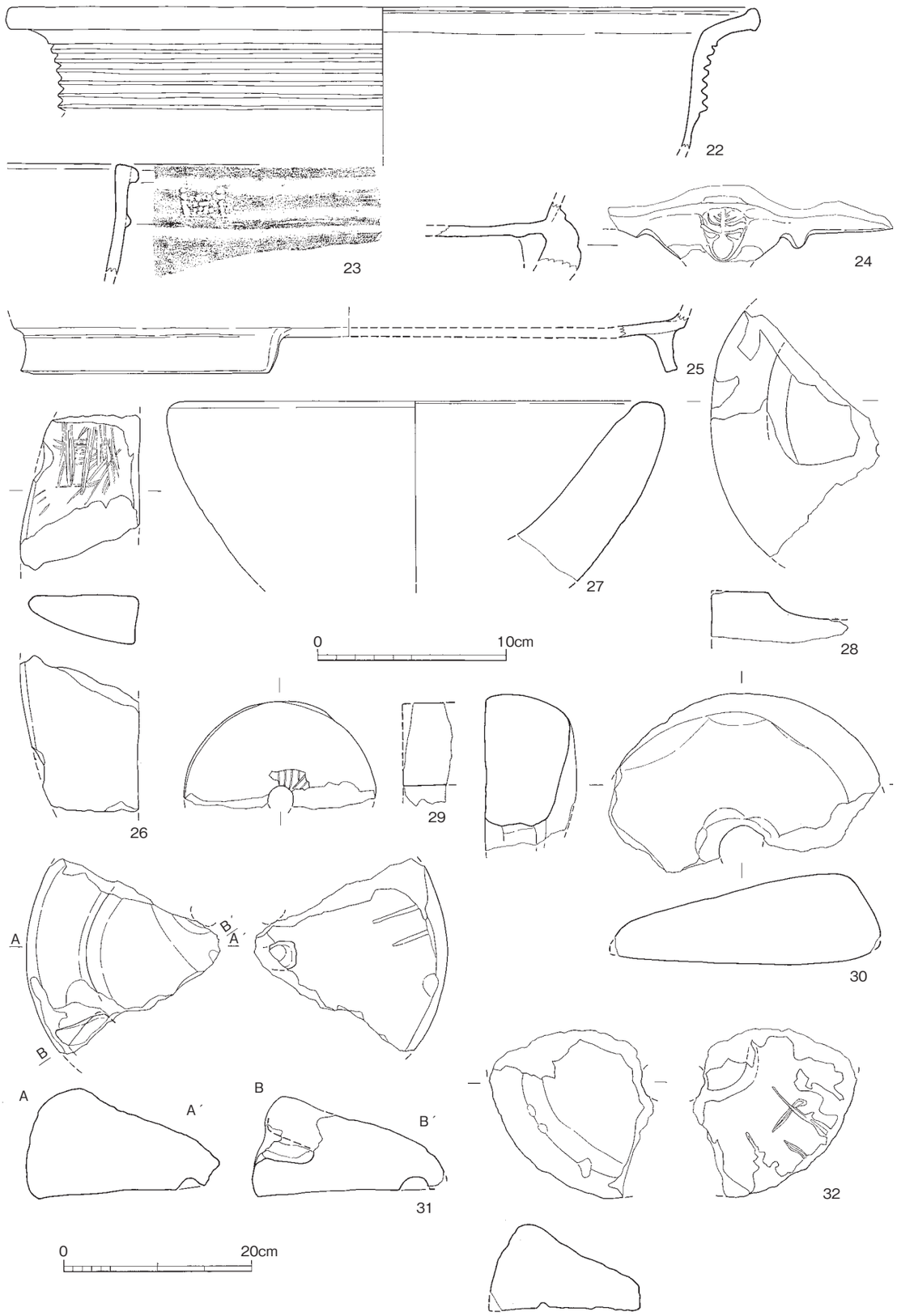
第 48 図　4 号溝出土遺物実測図①（1/3）

器の火鉢の底部で、脚部は先端が欠損しているが、両端に削りによる山形をもつ弧形と考えられ、中央に型押し成型されたカラス天狗と見られる獣面文が貼り付けられており、脚部の裏面に貼り付け時の強いオサエ痕が残る。外底はケズリ状のナデ、見込みはナデ。胎土は精良軟質で、長石と褐色パミスが入る。器面は暗黒褐色だが、胎は黄橙色を呈し、器面が摩滅して胎の色調が露出している。25 は瓦質土器の火鉢の底部で、高台には隅円方形に切った透し孔が入る。器面は暗灰褐色、胎は灰黒色を呈し、精良軟質で長石・角閃石が目立つ。26 は砥石で、3 面使用しており、上下小口面は欠損面。図面左側面は研磨しているが丸みをもっているので整形面である。表面は縦横に刃傷が入るが、裏面は平滑で刃傷ないことから使い分けしていたようだ。天草石製の仕上げ砥。17.4 g を測る。

27 は摺り目のない鉢形の石臼で、内外ノミ痕が残らないほど平滑に仕上げられている。多孔



第 49 図　4 号溝出土遺物実測図②（1/3）



第 50 図　4 号溝出土遺物実測図③（23 ～ 28 は 1/3、他は 1/6）

第 51 図　4 号溝出土遺物実測図④（1/6）

質の凝灰岩製で、847.9g を測る。28･29 は茶臼の上石で、輝緑凝灰岩製で同一個体の可能性がある。28 は上面部片で上面は丁寧に研磨されており、側面は細かいケズリ痕を意図的に残している。306.5g を測る。29 は摺り目がわずかに残っており、側面は細かいケズリ痕を意図的に残している。1.59kg を測る。30 は石臼の下臼で、使用面は斜めに傾斜しており、摺り目は残っていない。全体的に摩滅が著しく、4.32kg を測る。31 は上石で、上面にもの入れ、下面に軸受け孔がある。使用面は傾斜しており、30 とセットであった可能性がある。使用による摩滅が著しく摺り目は残っていない。多孔質の凝灰岩製で、3.96kg を測る。32 は上臼で、使用面が湾曲しており、摺り目はわずかに残っている。多孔質の凝灰岩製で、2.34kg を測る。33 は上石で、もの入れが残るが、軸受孔は欠損している。摺り目はよく残っており放射状に入るため密に入っていない。多孔質の硬質凝灰岩製で、3.78kg を測る。34 は上石で、もの入れが残るが、軸受孔は欠損している。摩滅のため摺り目はほとんど残っていない。硬質の多孔質の硬質凝灰岩製で、6.65kg を測る。35 は下石で、摺り目はほとんど残っていない。多孔質の軟質凝灰岩製で、5.60kg を測る。36 は上石で、もの入れ・軸受孔・横打込穴・ものくばりが残っている。もの入れは方形でノミ加工痕が残る。使用により摩滅しているが摺り目は残っており 4 本単位 5 分割である。多孔質の凝灰岩製で、10.21kg を測る。

第 66 図８は鉄釘で、上端を折り曲げて敲面を作り出し、先端は曲がっている。

このほかに図化していないが、枢府院系白磁の底部片や、饅頭心底部を持つ明染碗、ふいごの羽口片と銅の粒状滓、28.7g の鉄滓が出土している。

5 号溝（図版 24・33、第 31 図）

4 号溝に平行に沿って直線的に伸びている。幅約２m、深さ約 80㎝を測る。

4 号溝と同様に区画を形成する溝と思われる。

出土遺物（第 47・65・66 図）

３は土師質土器の火鉢で、内外面ナデで、外面口縁下には小さい突帯の下に菊花文のスタンプが等間隔に入る。その下の凹線は突帯が剥落した痕跡や突帯下部のナデではない。内外明橙色から淡橙色だが、内面胴部は煤が厚く付着している。胎土は精良で軟質。４が土師質土器の鉢で、残存度から摺り目は無い。内外口縁下にナデ窪みがあり、内面は凹線状を呈する。外面胴上半はケズリ状ナデ後にナデ仕上げしており、下半はケズリ。器面は黒灰色、胎はにぶい黄灰白色を呈する。胎土は精良だが角閃石を含む。17 世紀代か。５は土師質土器の火鉢で、内外面ナデで、外面胴下位のみケズリ。底部は弧状のケズリが入っており、上げ底なので脚がつく。突帯の上にスタンプがないが、残存度からスタンプ間にあたる可能性がある。外面黒灰色から灰白色を呈すが、内面は明黄橙白色から灰白色と炭素が吸着しておらず煤汚れもない。胎土は精良で軟質。６は国産陶器の甕の底部である。外面胴下位は縦のケズリ状ナデで、同じ調整で外底部が仕上げられている。内面はナデのみ。胎土はやや粗放で、白色粒子を多く含み、器面にも露出している。内外橙色を呈する。

第 65 図 17 は滑石製の石鍋底部片である。内外面共にケズリを施し、外面に煤が付着する。側面は切断後粗く研磨しており、尖らせた先端を使うために再利用したものだろう。59.6 g を測る。第 66 図４は鉄釘の先端部である。

このほか図化していないが、ラグビーボール形と加工痕のある軽石、50.8 と 274.6g の鉄滓が出

土している。

6 号溝（図版 24、第 31 図）

Ａ地区西側、4･5 号溝状遺構の間に位置し、南北に 6 m程伸びる。幅 50cm、深さ約 10cmを測る。溝状の落ち窪みに自然堆積したものか。

出土遺物（第 52 図）

７は土師質土器の火鉢で、器面摩滅のため調整は観察できない。外面口縁下は小さい突帯を貼り付け、その下に七宝文のスタンプが入る。器面は黒灰色、胎はにぶい黄灰白色を呈する。胎土は精良だが角閃石を含む。16 世紀代。８は管状土錘で、ほぼ完形で 11.8 g を測る。

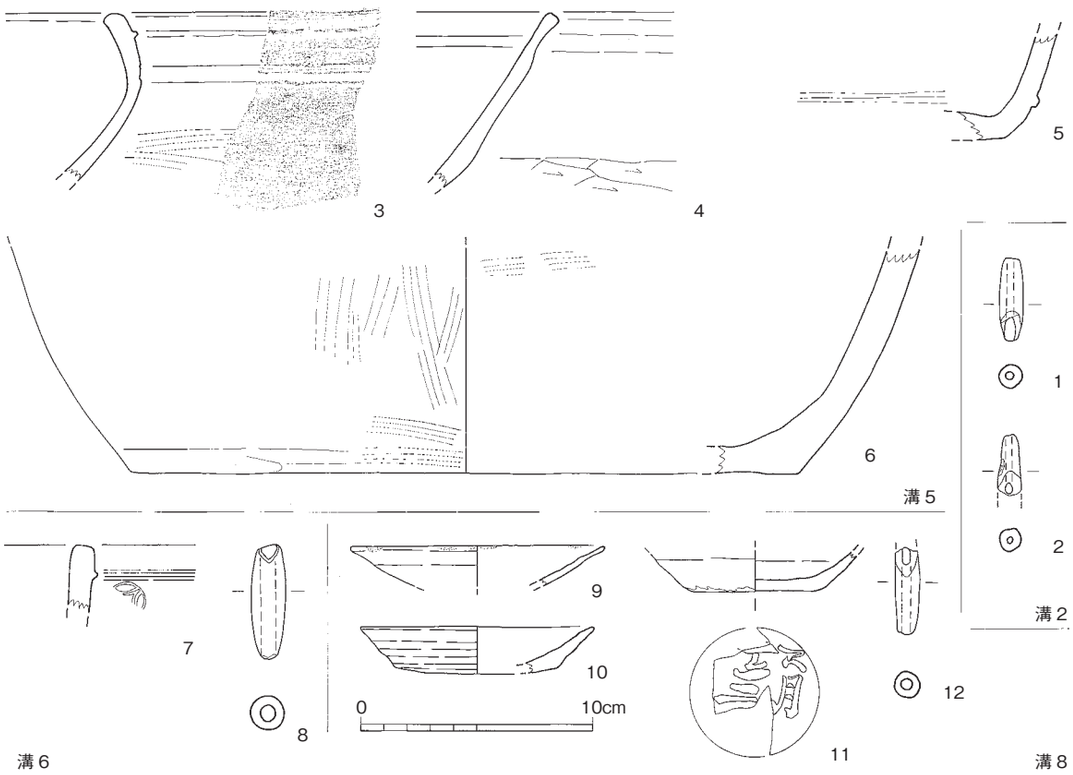
7 号溝（図版 24、第 31 図）

Ａ地区南端に位置し、東西に伸びる。幅約 50cm、深さ約 10cmを測る。須恵器甕片および土師器小片が出土するが、図化に堪えない。

8 号溝状遺構（図版 27、第 31 図）

9 号溝状遺構の西側に隣接する。全長約 10 m、幅約 50cm、深さ約 15cm。覆土は黒褐色土が堆積。灯明皿および墨書土器が出土している。溝として機能したかは不明。

出土遺物（第 52 図）



第 52 図　2・5・6・8 号溝出土遺物実測図（1/3）

9·10 は土師器小皿で、９は口縁に歪みがあるので復元径は不確実だが、小皿であることにはまちがいない。器面は摩滅しており器面調整は観察できないが、内面に３段のナデ窪みと、外面口縁下に屈曲が認められる。色調は内外黄白色で、口唇部に煤が付着する部分があるので、灯明皿として使用したものだろう。10 は外底回転糸切りだが、小片のため板状圧痕の有無は不明。内外胴部中位にナデ工具端部による段がある。内外にぶい暗黄橙色を呈し、内面胴下位は焼成不良なので、重ね焼きの可能性あり。胎土は精良で金雲母が目立ち軟質。11 は土師器小皿で、外底に回転糸切り後の板状圧痕があり、見込みは螺旋状回転ナデ。胎土は精良で金雲母が目立ち軟質。黄橙色を呈し、変色なし。外底に墨書で、「十年」「六月」と書かれている。12 は管状土錘で、器面は暗灰色を呈する。半欠で 6.08 ｇを測る。このほか 13.3 ｇの鉄滓が出土している。

9 号溝（図版 27、第 31 図）

B 地区西側、2 号井戸から北に 5m ほど伸びる。幅約 50㎝、深さ約 30㎝を測る。2 号井戸に切られる。また、15 号溝状遺構と接続すると思われる。2 号井戸と関連するものかは不明である。

出土遺物（第 53 図）

１は土師質土器の火鉢で、外面は単位を残さない革状のものによるナデで、内面は器面摩滅で観察できない。外面はにぶい暗茶褐色、内面は黒灰色、胎はにぶい黄橙色を呈する。胎土は精良だが角閃石を多く含む。

このほか図化していないが、李朝灰青陶器や天目茶碗片が出土している。

10 号溝（図版 27、第 31 図）

7 号土坑の南、9 号溝状遺構の東側に位置する。全長約 4.5 m、幅約 50㎝、深さ約 20㎝。溝状の落ち込みと思われる。

出土遺物（第 53 図）

２は明の青花の小皿である。外底は削り出しによる碁笥底だが、胴部側のケズリが強いので断面三角形の高台のように見える。見込みには簡略化した寿文が入り、外面にも文様が入るが、文様の下部は胴下位の露胎部分に達しているため透明釉が掛かっていない。透明釉は発色が悪く乳白色を呈し、呉須も明瞭でない。16 世紀前半代。３は瓦質土器の摺鉢で、器面摩滅が著しいが、内面の摩滅は使用によるものだろう。外底には幅の広い凹凸のある板状圧痕が残っている。器面は灰黒色だが、胎は灰暗白色を呈し、白色粒を多く含む。

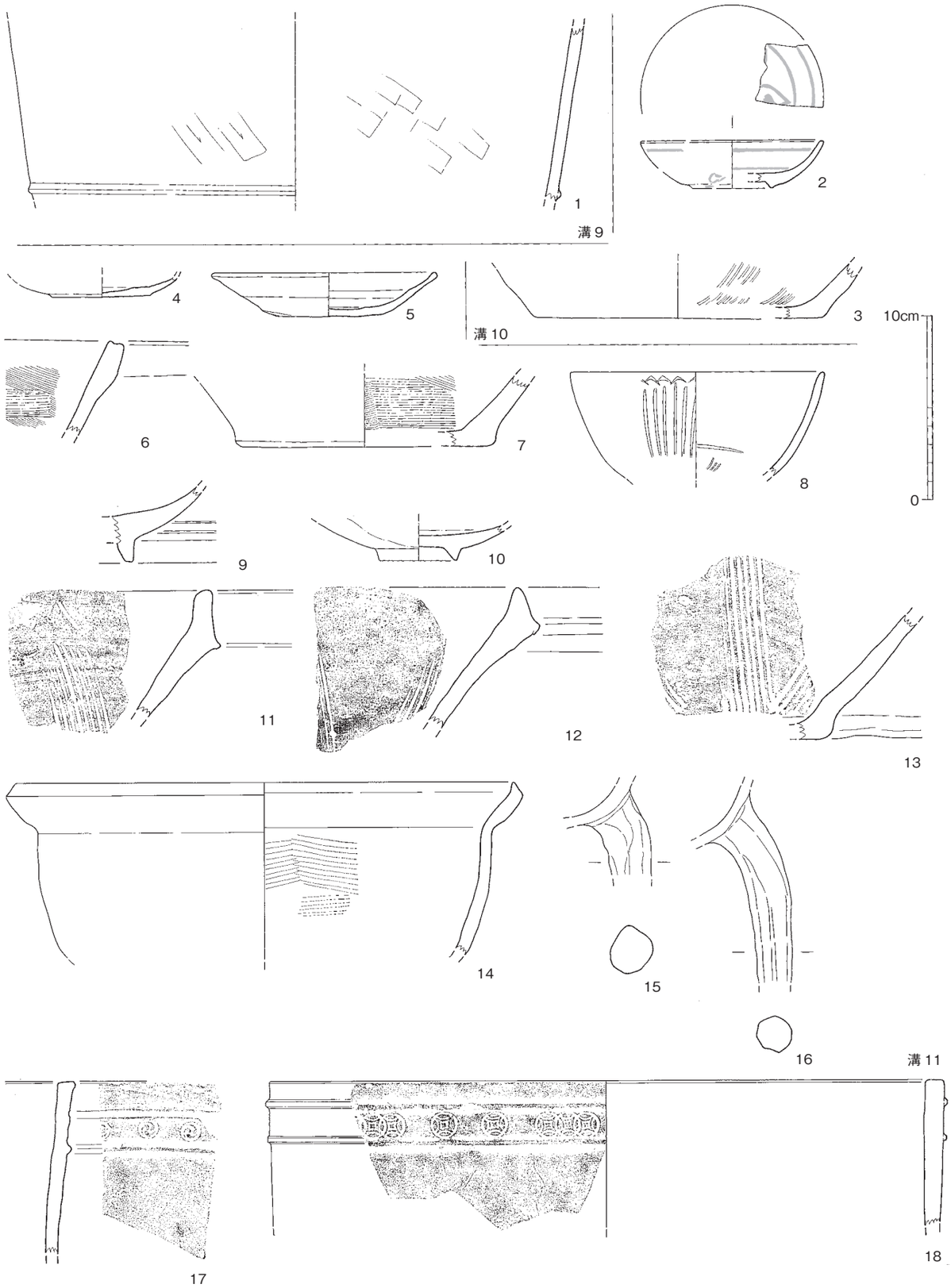
11 号溝（図版 27、第 31・47 図）

B 地区北東で緩やかに屈曲する。幅約３m、深さは北側で 70㎝、南側で 15㎝を図る。

号溝状遺構と同一の溝で、区画溝と考えられる。調査区中央より東側は地山が砂質になっており、東西に伸びる辺は浅く、立ち上がりも緩やかであった。この溝より東側では 12 号溝状遺構を除いて遺構は確認できなかった。

出土遺物（第 53・66 図）

4·5 は土師器小皿で、外底に回転糸切り後の板状圧痕があり、見込みは螺旋状回転ナデ。胎土は精良で金雲母が目立ち軟質。４は黄白色、５は黄橙色を呈し、変色なし。５は口縁部がやや内湾し



第 53 図　9 ～ 11 号溝出土遺物実測図（1/3）

て内側が丸く肥厚する。また、一部が湾曲しており、片口になる可能性を残す。見込みの螺旋状回転ナデはナデ後未調整。胴部は２段ナデで凹凸あり。16 世紀代であろう。６は瓦質土器の鉢で足鍋の可能性が高い。内面はハケが残っているが、外面の器面は滅しているので、器面の色調や調整は不明。内外面灰白色だが、外面は胎の色調が露出している可能性がある。胎は精良でやや軟質。防長地域の 16 世紀前葉のものである。７は土師質土器の底部で、鉢か甕だろう。胎土は混入物多く器面がざらつく。特に角閃石が目立つ。外面は器面摩滅のため調整不明で、内面は丁寧なヨコハケ。にぶい暗茶橙色を呈し、煤の付着などの変色は見られない。8･9 は龍泉窯系青磁碗で、８は片切彫りにより外面は退化した蓮弁文、内面は花文が入る。発色が良く明淡緑色を呈しており、胎は灰白色。文様から 15 世紀末から 16 世紀初頭の所産である。9 は見込みに寿字のスタンプ文らしいものがあるが、釉溜まりにも見え不明瞭。淡緑白色に発色するもので、胎は灰白色。高台内蛇ノ目釉剥ぎ。底部器壁の厚さと胴下位の立ち上がりから見て 15 世紀中葉のものだろう。17 号溝から近似例（第 54 図 14）が出土している。10 は磁器小皿で、底部は偏った露胎。灰釉はガラス化して貫入著しい。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、重ね焼きの融着が残る。時期・産地不明。11 から 13 は備前焼の摺鉢で、内外ヨコナデ、青灰色を呈する。12 は胴中位内面が使用により摩滅している。11 は 16 世紀中葉、12 は 16 世紀前葉である。13 は胴下位部片で、外面はオサエによる凹凸がある。内面は使用により摩滅している。

このほか掲載していないが、16 世紀前葉の備前焼の甕口縁部がある。14 は瓦質土器の鍋で足鍋の可能性が高い。器面摩滅で調整観察不能。内外黒灰色で、胎は軟質で灰白色を呈する。14 世紀末から 15 世紀初頭。15･16 は瓦質土器の鍋の脚部で、硬質で青灰色を呈し、同一個体の可能性もある。脚部は手捏ね成型で、オサエが残る。17･18 は瓦質土器の火鉢で、17 は器面黒灰色で、18 はにぶい黄灰白色を呈するが、本来は黒灰色だっただろう。17 の口唇部はナデで平坦にされており外面側が突出している。口縁下には２条の突帯が貼り付けられているが、上側は欠損して貼り付け面を加工した沈線が露出している。突帯内には等間隔に巴文がスタンプされている。18 は口縁下には２条の貼り付け突帯の間に七宝文が入るが、３つ繋がった七宝繋ぎ文の間に単体の七宝文が２つ入る。内面はミガキが残る。17･18 とも 15 世紀代のものだろう。

第 66 図 21･23 は刀子の刃部片である。

12 号溝（図版 27、第 31 図）

B 地区東側に位置し、南北に伸びる。幅約 1 m、深さ約 50㎝。溝の南北両端は調査区によって切られているため全容は不明である。また、この周辺は地盤が砂質土になっており、遺構は希薄である。

出土遺物（第 54 図）

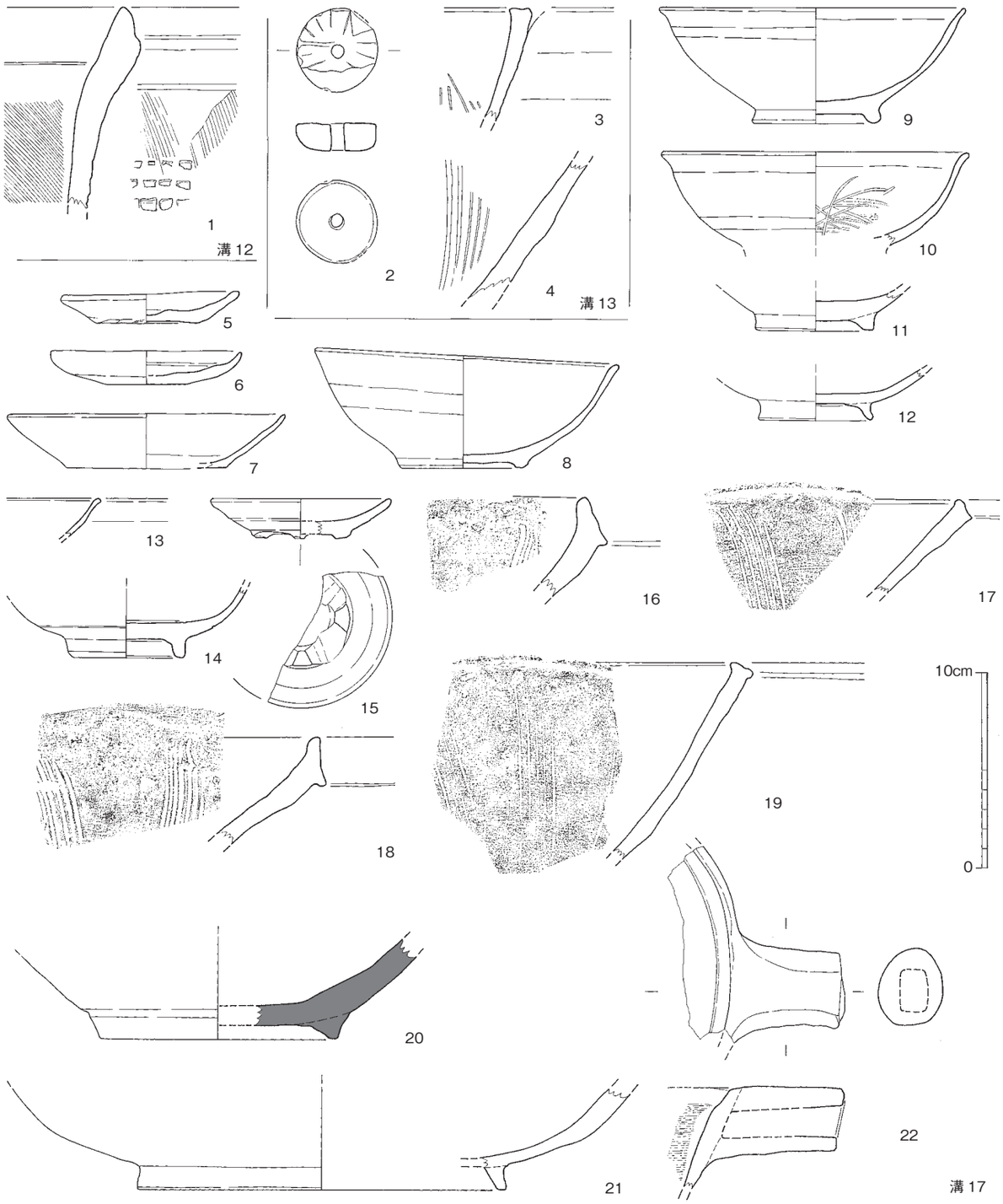
１は防長産の土師質大甕で、外面は口縁下に貼り付け突帯があり、その下はタテハケで、ハケを切って格子目タタキが入る。タテハケと突帯を切って横方向に波状の沈線が入る。文様でも調整に関するものでもないので、運搬や使用時の痕跡かもしれない。内面は口縁部をケズリ状のナデが入り、下部は段がつく。頸部以下はタテハケ。器面は暗灰褐色で、胎は黄橙色。胎土は混入物が少なく軟質。15 世紀後半。

13 号溝（図版 27、第 31 図）

B 地区中央部に位置し、東西に伸びる。幅約 1.3m、深さ約 35cm。溝状であるが。この溝状遺構から地形が落ちており、落ちくぼみに流れ込んだものと思われる。

出土遺物（第 54 図）

２は滑石製紡錘車で、穿孔後丁寧に研磨しているので、穿孔方法がわからない。上面には放射状の



第 54 図　12・13・17 号溝出土遺物実測図（1/3）

沈線が線刻されている。裏面は平滑でケズリ面や研磨痕を残さないが、側面は研磨痕を残す。42.3ｇを測る。３は瓦質土器の摺鉢で、片口部の小片のため傾きは不正確。摺り目は上位で交差する。外面は口縁下まで灰色で、胴部は灰白色を呈する。内面の器面剥落が著しいが、外面はケズリ状ナデが口縁部まで入る。４は土師質土器の摺鉢で、内外とも器面の剥落著しく、調整観察不能。胎は長石など砂粒の混入多く軟質。胎土のにぶい黄灰白色が露出しており、本来の器面の色調は不明である。17 世紀初頭。

このほか図化していないが、表面が火を受けた扁平な川原石が出土している。

14 号溝（図版 27、第 31 図）

13 号溝の南側に位置し、長さ 16 m、幅 70 ～ 30㎝、深さ約 20㎝。溝状の落ち込みと思われる。出土遺物はない。

15 号溝（図版 27、第 31 図）

2 号井戸から南北に伸びる。2 号井戸に切られており、9 号溝と接続している可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明。

16 号溝（図版 27、第 31 図）

B 地区南西端から北に約５m延びる。幅約 1.5 m、深さ約 15㎝。溝状の落ち込みと思われる。溝の掘削後にピットが検出された。

出土遺物（第 66 図）

第 66 図 26 は刀子片の関部分である。

17 号溝（図版 27、第 31 図）

C 地区北側に位置する。当初、17 ～ 19 号溝をひとつの溝として認識したため東半分は同じ溝として掘削している。土層を確認後、西半分はそれぞれの固体で掘削した。

幅約 190㎝、深さ約 70㎝を測る。3 条のいずれか断定することは難しいが、B 地区の 11 号溝状遺構と同一の溝の可能性がある。17 ～ 19 号溝の中では一番新しいが、18・19 号溝より新しい遺物が見られることから、埋没の時期幅はないと思われる。

出土遺物（第 54 図）

５は土師質土器の小皿である。にぶい暗黄灰白色で、土師器の小皿より器壁が厚いので判別できる。胎土は精良だが金雲母を多く混入する。底部は回転糸切り後にオサエ痕が見られる。胴下位にもナデ後のオサエが見られる。見込みは窪んでいるので螺旋状ナデを行っているようだが、欠損のため判然としない。14 世紀代。６は外底が回転ヘラ切りで、切り離し後部分的にナデている。底部は丸みがあり、胴下位にも丸みを持たせるが、内面は２段ナデで、見込みは螺旋状になっていない。胎は精良軟質で、黄灰白色を呈する。14 世紀後半から 15 世紀前半。７は土師器皿で、胴下位が歪む部分がある。外底は一部しか残っていないが回転糸切りであることはわかる。内面は器面剥落のため調整観察不能。胎は精良軟質で、雲母も見られない。内外にぶい黄橙灰色を呈する。15 世紀代。8 ～ 12 は土師器椀である。８は底部押し出し技法のため、見込みには押し出し時のヒ

ビが入っている。外底は中央部に切り離し後の調整であるハケがあり、高台を貼り付けた後、接合部を広くナデている。器面は摩滅しているが内外面とも粗いミガキが認められる。黄白色で変色なく、胎土は精良。12 世紀後半代。９は底部が厚く平坦である。器面摩滅のため調整は観察不能。黄白色で変色は埋没時のものだろう。胎土にはやや大きめの砂粒が入る。11 世紀後半代。10 は器面が内外ともよく残っており、外面は５段の回転ナデ、内面はナデ後の粗いミガキが見られる。黄白色で変色なく、胎土は精良で、雲母も見られない。11 世紀後半代。11 は 10 と同様の黄白色で精良な胎土だが、別個体である。器面が失われているため触ると胎の粉が付着する。調整観察不能。11 世紀後半代。12 は高台貼り付けで、高台内面に接合部にあり、未調整なため段が残る。内面は丁寧にナデられ、部分的にミガキが残る。風化花崗岩粒子を多く含む胎土で、黄白色を呈する。器面が失われているため触ると胎の粉が付着する。調整観察不能。11 世紀後半代。

13 は中国製白磁碗で、光沢のある乳白色に発色する。15 世紀中葉。14 は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みには界線の中にスタンプ文があるが、釉が厚く掛かっているため不明瞭である。おそらく「寿」だろう。外面は無文で、胴下位の界線は意図的なものではない。発色が悪く明淡緑白色を呈している。畳付から高台内が露胎で、釉剥ぎされている。胎は明灰白色。15 世紀中葉。15 は中国製白磁小皿で、釉薄掛けのため胎の粒子が露出している。高台は位置関係から４ヶ所の抉りが入っていたものと見られ、残った畳付は台形を呈する。全面施釉で畳付のみ釉剥ぎする。見込みにも台形の重ね焼き痕が残る。15 世紀前半の邵武窯系に近いが、胎は硬質で釉も透明度がある。16・18 は備前焼の摺鉢で、16 は片口部小片のため、細部が異なるだけで同一個体の可能性が高い。18 は半分が焼成不良。16 世紀中葉。17･19 は瓦質土器の摺鉢で、同一個体の可能性が高い。外面口縁部がナデで、胴部はケズリ状のナデ。内面はナデで、胴下半は使用による器面摩滅と擦痕が見られる。器面は内外とも灰黒色だが、19 の外面には黒班がある。15 世紀前葉。20 は須恵質土器の底部で、器種不明。外底は静止ヘラケズリで仕上げており、高台は貼り付けで、接合部の調整は粗い。長石など白色粒子の混入物が多く、器面がざらつく。内面の器面の剥落は使用によるものと見られる。21 は土師質土器の底部で、鉢だろうか。胎はにぶい黄灰白色、器面は暗黒灰色を呈する。外面は胴下位がケズリで、中位はミガキ。内面は摩滅しているがミガキが入っていたようだ。胎土は角閃石が多く入る。22 は土師質土器の把手付鍋で、粘土板を丸めて成型した把手部を貼り付けており、把手内面に丸めた接合痕が残る。内面は口縁部がナデ窪み、屈曲を持つ。口縁下は丁寧なヨコハケ。外面は煤付着が著しく調整観察不能。把手部の先端下部のみ煤が付着せず赤化しているのは、火鉢などに接していた痕跡だろう。

18 号溝（図版 27、第 31 図）

17 号溝状遺構に切られる。立ち上がりは緩やかで、17 号溝状遺構により幅の長さは不明である。深さは約 50㎝を測る。炭化物や焼土塊が多く見られた。

出土遺物（第 55・66 図）

１は土師器小皿の小型品で、底部に粘土板を貼り付けて成型している。口縁部は内面側に丸みを持って肥厚し、口縁下に窪みを残す。胎土は精良で褐色パミスと金雲母を多く含む。使用変色は見られない。2･3 は土師器小皿で、２は図上接合しているが、別個体の可能性がある。両者とも胴下位のナデで底部端に段ができ高台状を呈する。外底は回転糸切り後板状圧痕が残る。見込みは螺旋

状ナデだが、２は平坦にナデ消され、口縁部内面が丸く肥厚し、胎土は混入物少なく黄橙褐色を呈する。３は内底縁をナデ窪ませているため見込みが高く残る。胎土は金雲母と褐色パミスを多く含み、暗黄橙灰褐色を呈する。2･3 は 13 世紀代。４は土師器皿で、外底に回転糸切り後の板状圧痕があり、見込みは螺旋状回転ナデ後、粗くナデ消し。胎土は精良で金雲母が目立ち軟質。黄橙色を呈し、使用変色なし。16 世紀後半代から 17 世紀前半。５は土師器の鉢で、器壁の厚い粗製品。内面は丁寧にナデているが、外面は口縁下のオサエ痕がナデ消えておらず凹凸多い。外底は粗いナデ。胎土は精良で金雲母が目立ち軟質。内面は暗黄灰白色を呈するが、外面は使用変色している。６は中国製玉縁口縁白磁碗で、釉は乳白色に発色する。胴下位は露胎で、露胎部分の変色なし。7･8 は土師器椀で、回転糸切り後に高台を貼り付けている。12 世紀後半。７は高台内接合部をナデ窪め、外面胴部と内面は丁寧なミガキが入る。胎土は精良で黄灰白色を呈し、変色なし。12 世紀前半。８は高台と外面胴下位をナデ窪めたため平坦面ができている。見込みは螺旋状回転ナデで、ナデ消しが弱い。本来ミガキが入っていたようだが、器面摩滅のため残っていない。胎土は精良で軟質。内面は黄灰白色を呈するが、外面は使用変色している。焼成不良で、胎は黒灰色を挟む。12 世紀後半。９は土師質土器の摺鉢で、器面が摩滅しているため、内面口縁部のナデが失われ、摺り目が口縁部に達しているように見える。胎は黄灰白色を呈し、本来の器面は伺えない。胎土は軟質精良。

第 66 図 10 は大型の鉄釘で、上端を折り曲げて敲面を作り出している。

19 号溝（図版 27、第 31 図）

18 号溝に切られる。砂質土が堆積し、炭化物や土器片が混入する。幅はおそらく 140㎝ほどと推定でき、深さは 50㎝を測る。

出土遺物（第 55 図）

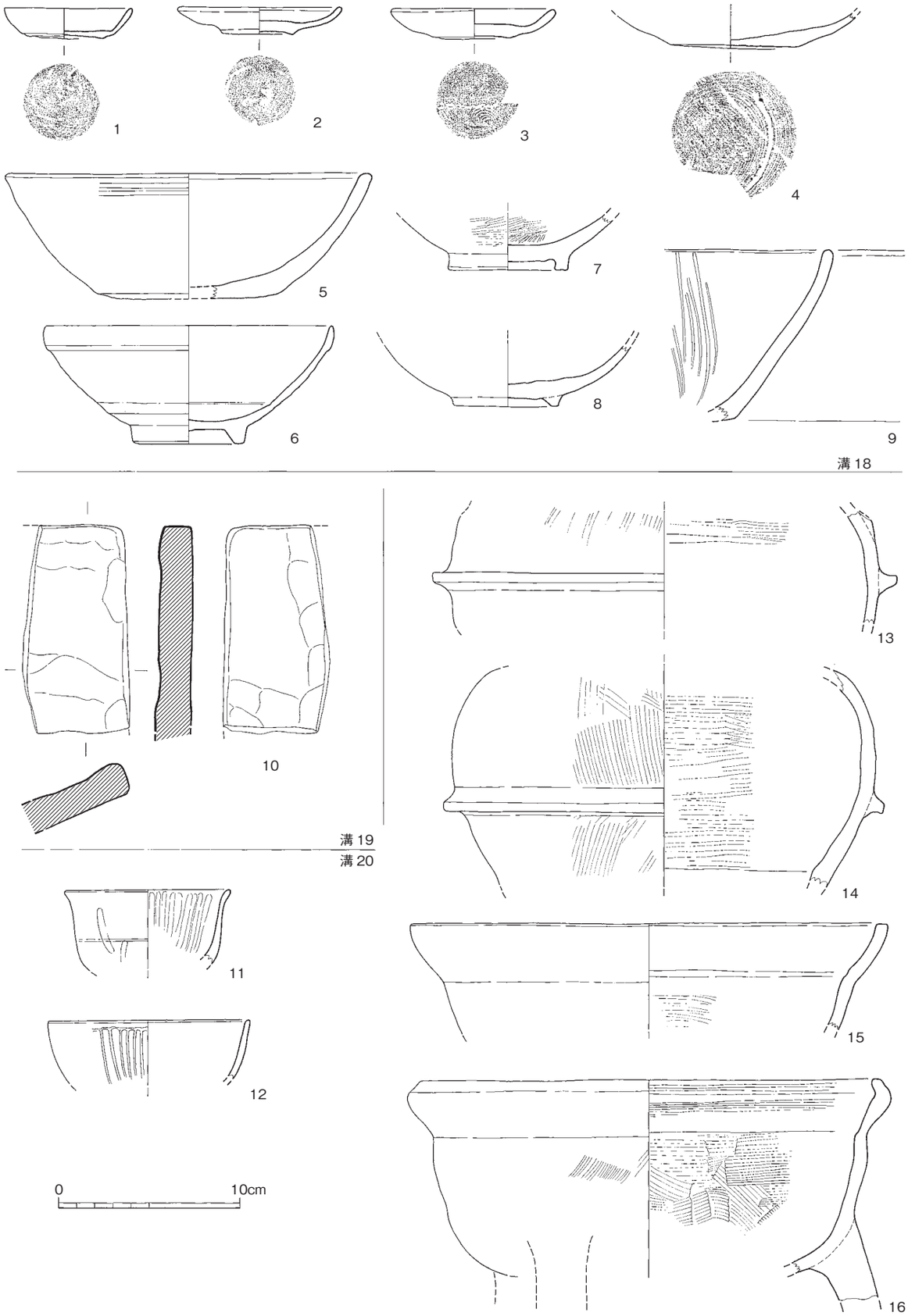
10 は平瓦の基部片で、１側面と小口面が１面残っており、器面摩滅。上面の窪みは成型痕か。やや軟質でにぶい黄灰白色を呈する。このほか 5.9g の鉄滓が出土している。

20 号溝（図版 28、第 32 図）

D 地区北東に位置する。L 字に屈曲しており、区画溝と考えられる。当初、東西に伸びる溝を 20 号、南北に伸びる溝を 22 号と設定していたが同一の溝となるため、22 号は欠番とした。幅約 2m、深さ約 30㎝を測る。この溝より東側には 18 号土坑・22 号土坑など土坑墓があり、墓域を区画した溝か。屈曲部分に試掘トレンチがあり、この部分の形状は不明。

出土遺物（第 55 図）

11･12 は龍泉窯系青磁で緑灰色に発色する。14 世紀代。11 は小杯で、片切り彫りにより外面は花弁が、内面は菊花の細い花弁が彫られている。12 は蓮弁が退化して線状になったもので、16 世紀前半。13 は瓦質土器、14 は土師質土器の湯釜で、鍔の下に煤が付着する。13 は紐の一部が残っている。内外黒灰色、胎は灰白色で、鍔より上は外面タテハケ、内面ヨコハケ。鍔より下は外面器面が摩滅し、内面は斑状剥離している。14 は外面の鍔の上下はタテハケ、肩部はナナメハケ。内面はヨコハケ。胎土は軟質で長石を含む。13･14 は、鍔が下に下がっていることから 16 世紀後半代。15 は瓦質土器の鍋で、口唇部は平坦面を持ち、端部は尖る。内外口縁部はナデ、胴部は外面



第 55 図　18 ～ 20 号溝出土遺物実測図（1/3）

がケズリ状ナデのナデ消し、内面はヨコハケ。本来内外淡黒灰色だが、外面は使用のため変色している。胎は砂粒を含みざらつきがある。胎は黄灰白色が灰黒色を挟む。16 世紀後半。16 は瓦質土器の足鍋で、21 号溝の出土片と接合した。口縁部は内傾し、口唇部はナデで平坦面を持つ。脚部は手捏ね成型後接合。内外口縁部はナデ、胴部は外面がケズリ状ナデのナデ消しの上を上位のみハケ。下位は格子目タタキが入る。胴部内面はヨコハケ。底部はタタキ当て具痕の窪みをナデ消している。本来内外淡黒灰色だが、外面は使用のため変色し、胴部まで煤が付着する。胎は堅緻で砂粒を含みざらつきがある。16 世紀後半。

21 号溝（図版 26、第 32 図）

調査区南西に位置する。3 号井戸付近に屈曲部を持つ区画溝である。幅約 1.7m、深さ 30㎝を測る。この溝により形成された区画内において掘立柱建物や土坑は検出されていないが、井戸が 1 基検出されたことから、調査区西側に遺構が広がる可能性がある。

出土遺物（第 56・66 図）

1 は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに花文がスタンプされているが、中央部が押されて消えている。外面は無文で、胴下位の凹凸はカンナ痕である。発色が良く明淡緑色を呈しており、高台内のみが釉剥ぎで畳付まで釉が掛かっている。胎は灰白色。14 世紀後半から 15 世紀前半の所産である。2 は李朝の灰青陶器で、灰釉が全面に掛かり畳付に 4 ヶ所、見込みに 3 ヶ所の砂目が残っており、位置関係から本来 6 ヶ所あったものと考えられる。高台貼り付け後高台内を螺旋状回転ヘラケズリしている。灰釉は透明度が高く薄く掛かっているため、胎土内に多く含まれる白色砂粒が表面に突起を作っている。3 は瓦質土器の香炉で、脚部は欠損しているが、残存する 2 ヶ所の欠損部の位置関係から本来 3 脚あったことがわかる。外底は静止ヘラケズリで、中央部に十字のヘラ記号が入る。外面は摩滅しているがミガキが施されており、その上に巴文と 5 弁花文のスタンプ列で幾何学文が描かれている。内面はケズリ後軽くナデている。色調は本来にぶい灰白色から青灰色で、見込みが淡褐色に変色しているのは使用のためかもしれない。4 は瓦質土器の鳥形の容器で、型押し成型で、口縁部内側をケズリ、口唇部をナデて仕上げた後、目はスタンプ、嘴はヘラ描きで仕上げている。使用痕などが見られないので用途がわからない。胎土は精良で暗灰色を呈す。5 は砥石で 1 面を使用しているが、あまり平滑でない。側面は 1 面が非常に平滑だが、もう 1 面はあまり平滑でない。下面はほとんど使用されていないが、整形されている。両小口面は粗い整形面である。このことから、平滑な面を使用面としていた砥石の欠損品の再利用だろう。安山岩製で、182.9 g を測る。

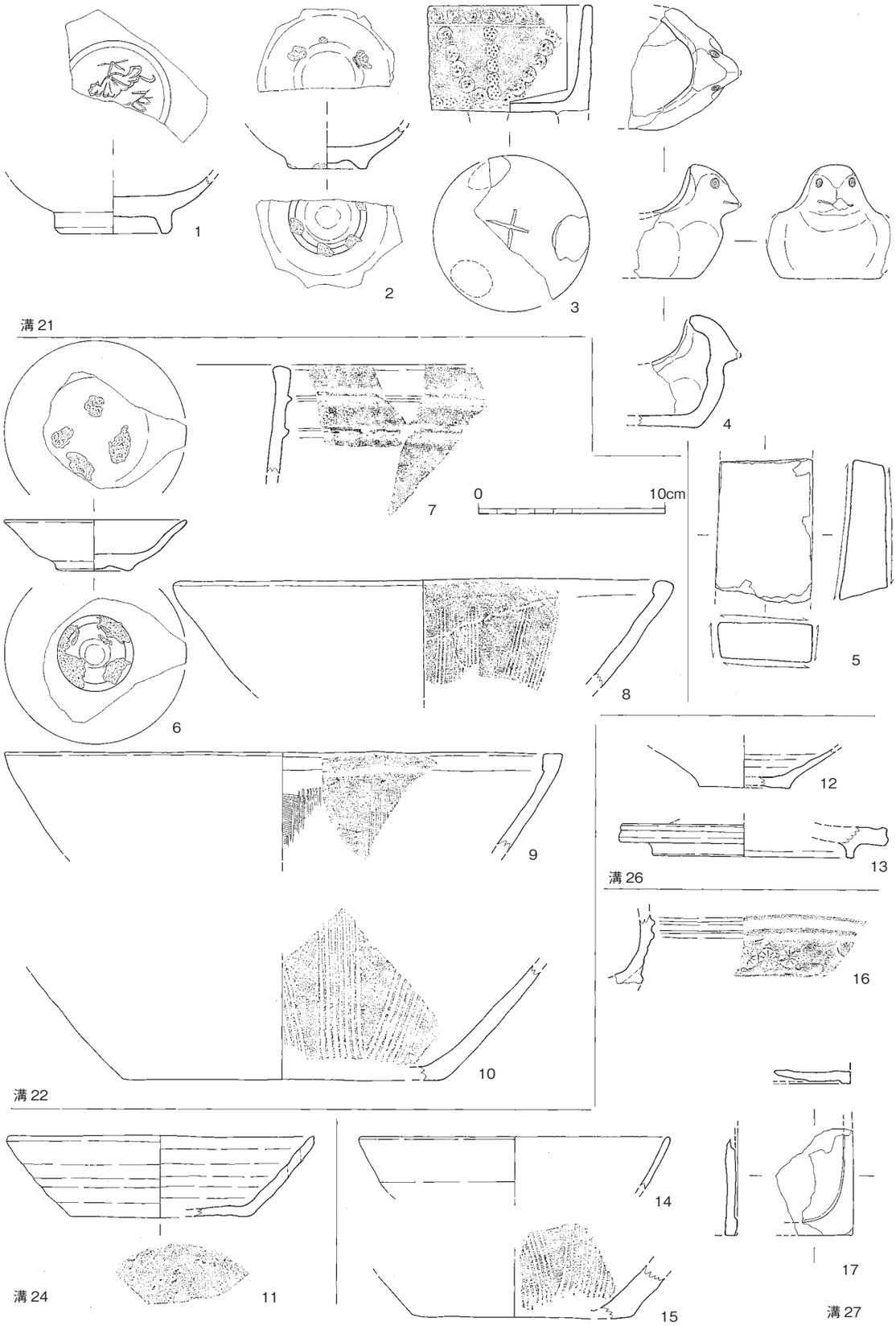
第 66 図 6 は鉄釘だろう。このほか合計 351.1g の鉄滓が出土している。

22 号溝

20 号溝と同一の溝となったため欠番となる。ここでの遺物は 20 号溝の南北部分からの出土。

出土遺物（第 56 図）

6 は李朝の灰青陶器で、灰釉が全面に掛かり畳付と見込みに 4 ヶ所の砂目が残っている。高台貼り付け後接合部を回転ヘラケズリしているので、中央部が高く残る。灰釉は透明度が高く薄く掛かっているため、胎土内に多く含まれる白色砂粒が表面に突起を作っている。7 は瓦質土器の火鉢



第 56 図　21・22・24・26・27 号溝出土遺物実測図（1/3）

で、口縁下２条の貼り付け突帯の間に小さい５弁花文のスタンプが入るが、等間隔に連続していない。おそらく２ないしは３個置きに入って間隔を空けていたのだろう。胎土は精良で、焼成はやや強く器面は青灰白色、胎は橙灰白色を呈する。16 世紀代。8 から 10 は瓦質土器の摺鉢で、８は外面に煤が付着するが２次的な変色だろう。本来黒灰色であるが器面摩滅して胎の灰白色が露出している。内面から外面口縁部は丁寧なナデ、外面胴部はケズリ状ナデ。胎土は精良。９･10 は須恵質で同一個体ではない。９は内面ヨコハケだが、外面ナデなので、内面は意図的にハケ目を残した可能性がある。胎土は精良で堅緻で、青灰色を呈する。９は、外底はナデているが胴部はオサエをナデ消す程度。内面は丁寧にナデており、器面は残っている。青灰色を呈し、精良で堅緻。8･９は 16 世紀後半。このほか 53.5 ｇと 27.8g の鉄滓が出土している。

23 号溝（図版 26、第 32 図）

24 号溝の東側、28 号溝の南側に位置する。5 号掘立柱建物跡に沿うように屈曲する。幅約１m、深さ約 10㎝を測り、南北に約 10m 伸びたところで途切れる。出土遺物はなく時期は不明。

24 号溝（図版 26、第 32 図）

Ｄ地区東側を南北に伸びる。幅約 1.5㎝、深さ約 30㎝をはかり、28 号溝を切る。地盤が砂質で浅く、区画溝とは考えにくい。

出土遺物（第 56 図）

11 は土師器皿で外底は回転糸切り。小片のため板状圧痕の有無は不明。内外面胴部は４段ナデで、口縁端は尖り、口縁下に貼り付け痕と見られる沈線が入る特徴から、搬入品の可能性が高い。胎土は精良で堅緻、にぶい黄灰白色を呈する。14 世紀前半から後半。

25 号溝（図版 26、第 32 図）

Ｄ地区中央南側に位置し、SX05 から東西に伸びる。8m ほどで消滅する。出土遺物はなく、時期は不明。

26 号溝（図版 26、第 32 図）

21 号溝状遺構と平行に走り、3 号井戸から約 11m のびる。南では浅くなり自然に消滅する。3 号井戸と接する箇所では溝のラインが不明瞭で遺構が曖昧になる。3 号井戸の排水等に使われたものだろうか。

出土遺物（第 56 図）

12 は土師器皿で、外面は平滑にナデているが、内面はナデの凹凸が多い。外底は回転糸切りで、小片のためか板状圧痕は確認できない。胎土は精良で、金雲母が目立つ。黄橙色を呈する。15 世紀末から 16 世紀初頭。13 は瓦質土器の蓋で、裾部の端部と受け部下面にのみ煤が付着している。器面は上面から受け部下面は使用変色のため暗灰黒色を呈し、受け部は本来の灰色なので、裾部が突出するように合わさっていたようだ。胎は灰色で、精良。

27 号溝（図版 26、第 32 図）

調査区西側に位置する。調査区に西側から東西に約 20m の延びたところで南北に屈曲する。南北に約 14m 延びたところで不明瞭となり消滅する。ここは調査以前に水田の用水路があり、地山が若干の影響を受けていた。このため本来は南方向かもしくはコの字を描くような溝であった可能性もある。幅約 1.5m、深さ約 40㎝。溝の掘削後に屈曲部から南側の 2 箇所で炭化物の堆積を確認した。いずれも藁灰層と炭化物・焼土塊を含む層が交互に堆積する。溝の西側に堆積が見られ、投棄されたものと思われる。また、溝の土層図と灰層堆積状況①は同一箇所で記録したものである。

出土遺物（第 56・66 図）

14 は陶器椀で、薄い灰釉が掛かる。釉は光沢があり、ほぼ均一な厚さで掛かっているとともに剥落がない。胎は黒色粒子を多く含む。産地不明、17 世紀のものか。15 は瓦質土器の摺鉢で、体部外面はケズリ、外底には板状圧痕が残る。外面は器面が摩滅しているものの変色はないが、内面は暗褐色に変色している。煮沸によるものではないようなので、炭化物が器面に吸着したものかもしれない。16 は瓦質の火鉢で、脚の欠損部が残っている。脚との接合部から緩やかな逆台形であったものと考えられる。２条の貼り付け突帯の下に菊花文のスタンプ列があるが、脚との接合部にはスタンプされていない。器面は内外にぶい暗黒褐色、胎は黄橙白色を呈する。17 は硯の陸部分の基部片で欠損面は新しい。輝緑凝灰岩製なので赤間硯だろう。丁寧に研磨されており、陸部は墨汚れがある。17.4 g を測る。

第 66 図 27･28 は 2 点の刀子片で、27 は刃部、28 は関部が残っており先端部が折れ曲がる。このほか 51g の鉄滓が出土している。

28 号溝（図版 26、第 32 図）

Ｄ地区東側に位置する。24 号溝状遺構に切られ、西に 30 mほど延びたところで地形の落ちにより消滅する。幅約 50㎝～２m、深さ約 10㎝。掘立柱建物跡が近くにあり、23・24 号溝と平行・直行することから区画溝である可能性もある。瓦質摺鉢片や青磁片が出土するが、いずれも小片で図化できない。時期は不明であるが、24 号溝状遺構との大きな時期差はないと思われる。

SX

性格不明な遺構を SX として取り扱った。出土遺物がない遺構の図は割愛した。

SX01（図版 24、第 57 図）

A 地区南側、1 号井戸に付設する。幅約 7.6 m、深さ約 28㎝を測り、緩やかに落ちている。1 号井戸上から焼土塊の広がりが見られた。井戸の検出面には焼土塊が見ら、廃絶後に堆積したものである。また、SX01 は 4 号溝状遺構へ緩やかに流れ込むように接続している。本来、1 号井戸と 4 号溝を結んだ遺構と考えられる。

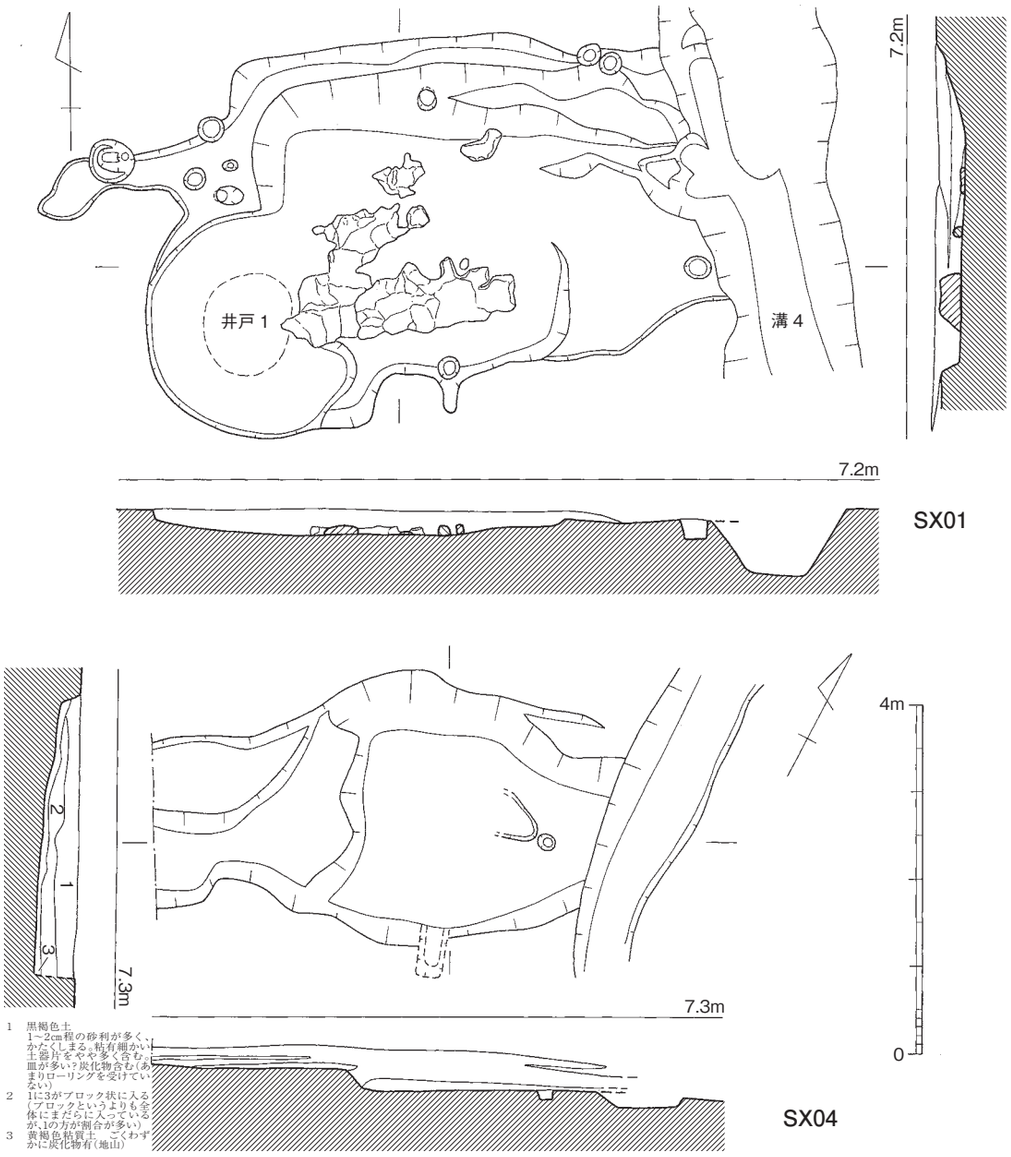
出土遺物（第 58・66 図）

１は李朝陶器の粉青沙器椀で、見込みに砂目跡が残る。畳付は釉剥ぎで、見込みと高台内は重ね焼きのため白土釉のガラス化が不十分である。16 世紀後半。２は瓦質土器の火鉢で、外面口縁下の２条の貼り付け突帯の間に菊花文のスタンプ列が入る。摩滅のため器面調整は不明。やや焼成不

良で、内外器面は黒灰色だが、胎は橙白灰色を呈する。3～6は瓦質土器である。16世紀代。3は摺鉢で、外面はナデ、内面は目幅の広いヨコハケが入り、肥厚した口縁部との内面接合部は沈線状に仕上げられている。須恵質に近く内外青灰色で変色なし。17世紀初頭。4～6は鍋の口縁部で、脚付の可能性もある。4･6は黒灰色から淡灰色で、外面は使用変色で淡茶褐色を呈す。内外ナデで、6は胴部まで残っており、内面にヨコハケが入る。同一個体の可能性が高い。5は内器面が剥離しているが煮沸使用変色がないので鉢だろう。外面は黒灰色の器面が残っているが、斑状剥離があり、口唇部から器面が失われていることから、地面に作り付けて使用していたものと思われる。4から6は16世紀後半から17世紀初頭。

第66図5は鉄釘の先端部であろう。

SX02（図版27、第31図）



第57図　SX01・04実測図（1/80）

C 地区南東、17 号土坑に切られる。覆土は灰黄色土で、壁の立ち上がりは緩やかである。自然の落ち込みと思われる。

出土遺物（第 57 図）

７は土師器小皿で、焼成不良のため赤橙色を呈する。外底回転糸切りで、板状圧痕が見られる。見込みは螺旋状回転ナデを中央部に施し、その後中央部を高く残すように縁部をナデ窪めている。器面摩滅で調整不明。８は焼成時の歪みが大きく、図は本来の径・傾きなのかわからない。外底は回転糸切りが端部まで明瞭に残っており、板状圧痕はなかった。胴部は３段ナデで、ナデ工具の工具傷が胴下位に残っている。見込みは螺旋状回転ナデ後未調整。14 世紀後半から 15 世紀前半。

このほか図化していないが土壁と見られる平坦面をもつ粘土塊が出土している。炉壁にしては火を強く受けてガラス化した痕跡がなく、棒状の空間があるので、木質の骨組みに塗ったものと見られる。

SX03（図版 26、第 32 図）

D 地区東側、20 号溝状遺構の南側に位置する。南北約 150㎝、東西約 80㎝、深さ約 3㎝の長楕円形を呈する。床面は被熱で硬化し、床面直上には土器片が見られた。浅いため被熱の範囲の記録のみ行った。焼却場として使用されたか。

出土遺物（第 58 図）

９は龍泉窯系の花弁口縁皿で、口縁部内面にヘラ描きの花文が入る。焼成やや不良で、内面口縁部に釉溜まりがある。胎は暗灰白色。7 号土坑出土の第 41 図２に近似するが、花弁の凹凸が不明瞭で屈曲部が一致しないので別個体である。15 世紀前半。10 は備前焼の壺で、口縁部は外に折り返して肥厚させている。口縁形状から 15 世紀後半の所産である。

SX04（図版 26、第 57 図）

D 地区南西隅に位置し、21 号溝状遺構に切られる。覆土は黒褐色土が堆積し、土器はこの層からの出土。北側は緩やかで、南は急激に落ちている。南側はもう少し掘削できた可能性もある。地形の落ちに自然に堆積したものと考える。

出土遺物（第 58 図）

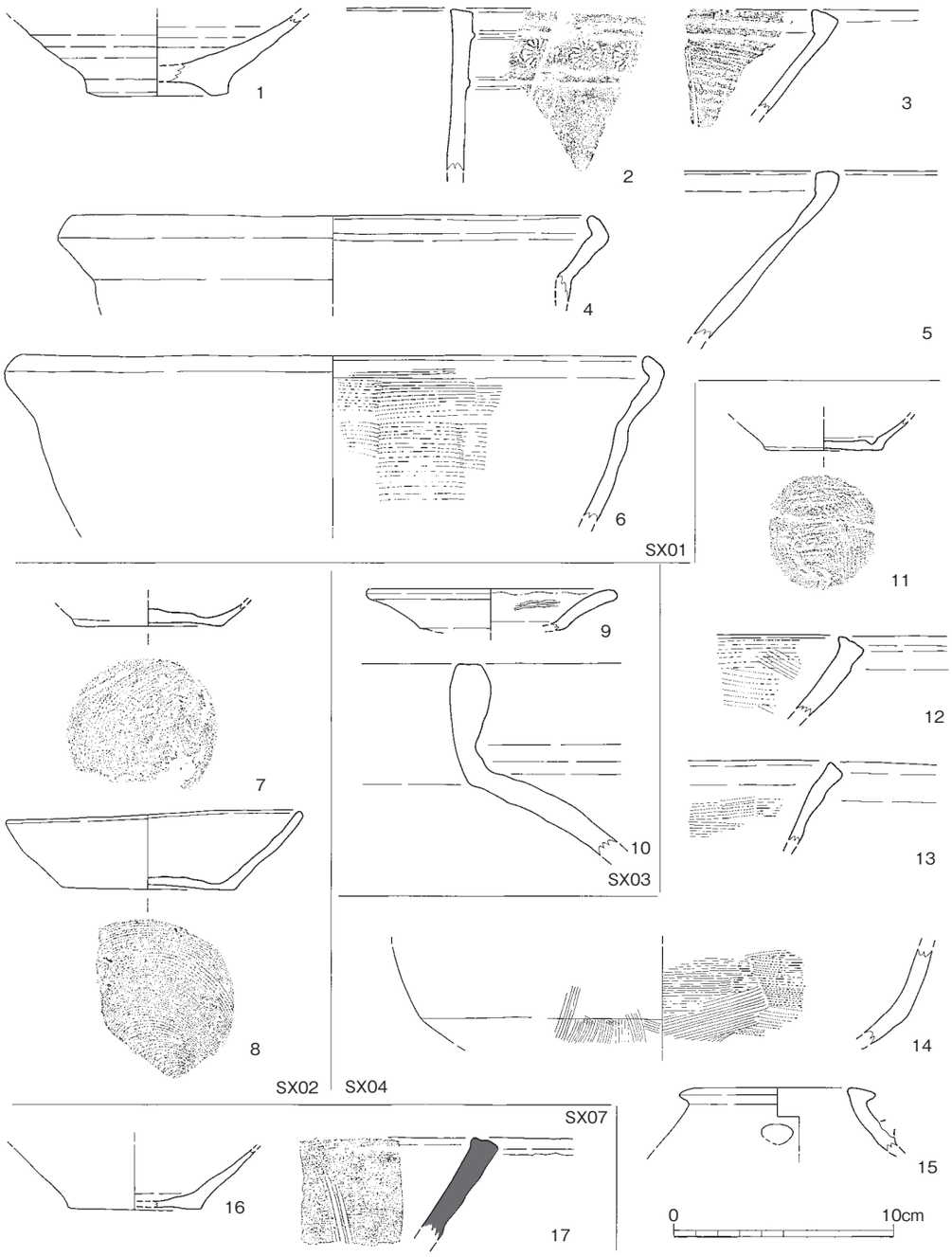
11 は土師器小皿で、外底回転糸切りで、板状圧痕が見られる。見込みは螺旋状回転ナデを中央部に施した跡ナデ痕跡を消している。その後、縁部を凹線状にナデ窪めている。器面摩滅で調整不明。胎土は金雲母を多く含み、ざらつく。12 は土師質土器で、鍋の可能性がある。外面は口縁部がナデ、胴上位はケズリ後未調整。内面は目幅の広いヨコハケが入る。内外器面摩滅だが本来黒灰色を呈していたと考えられる。胎土は角閃石が目立つ。17 世紀初頭。13 は土師質土器の鍋で、外面は口縁部がナデ、胴上位はケズリ後未調整。内面はヨコハケが入る。内外にぶい黒灰色で、胎は黄橙色を呈する。また外面には炭化物が付着する。17 世紀初頭。14 は土師質土器の湯釜で、外面の屈曲部より上位はケズリ後未調整、下位はタテハケが入る。内面は丁寧なハケが施されており、器面がよく残っている。外面は煮沸により変色しており、内面は暗灰色を呈する。15 は中国製の褐釉陶器四耳壺で、耳部が欠損している。内外釉薬がかかり、口唇部には部分的に釉が剥がれるところや砂目が残る。15 世紀前葉の所産である。このほか 195.5g の鉄滓が出土している。

SX05（図版 26、第 32 図）

D 地区南半中央、25 号溝状遺構を切る。不整形で地形の落ち際にあり、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

SX06（図版 28、第 32 図）

D 地区、4 号掘立柱建物跡の西側に位置する。不整形で遺構の立ち上がりは緩やかである。落ち



第 58 図　SX01 ～ 04・07 出土遺物実測図（1/3）

込みに堆積したものと思われ、一部埋土が反転する箇所があった。また、埋土は地盤とよく似ており、検出はやや難しかった。出土遺物はなく時期は不明。

SX07（図版 26、第 32 図）

D 地区北西隅に位置する。南北約 2.5 m、東西約 3 m、深さ約 20㎝。不整形で、床面も一定でない。落ち込みに自然堆積したものとおもられる。

出土遺物（第 58 図）

16 は外底回転糸切りで、板状圧痕が部分的に見られる。見込みは螺旋状回転ナデだが、凹凸が小さい。器面摩滅のため調整不明。胎土は精良で軟質。褐色パミスを含む。17 は須恵質の摺鉢で、内外ナデだが外面胴部はオサエのみで未調整。青灰色を呈し、変色なし。17 世紀初頭であろう。

井戸

A、B、D 地区でそれぞれ 1 基ずつ検出された。いずれも石組みであった。

1 号井戸（図版 24、第 57 図）

A 地区中央北側、SX01 と接する。掘り方直径約 245㎝、井戸約径 1m、深さ約 2 m を測る。SX01 と接続しており、検出時には SX01 で見られた焼土が一部被っていた。下位に井戸桶は見られなかったが、中位で木片が見られたため朽ちたと思われる。

出土遺物（第 60 図）

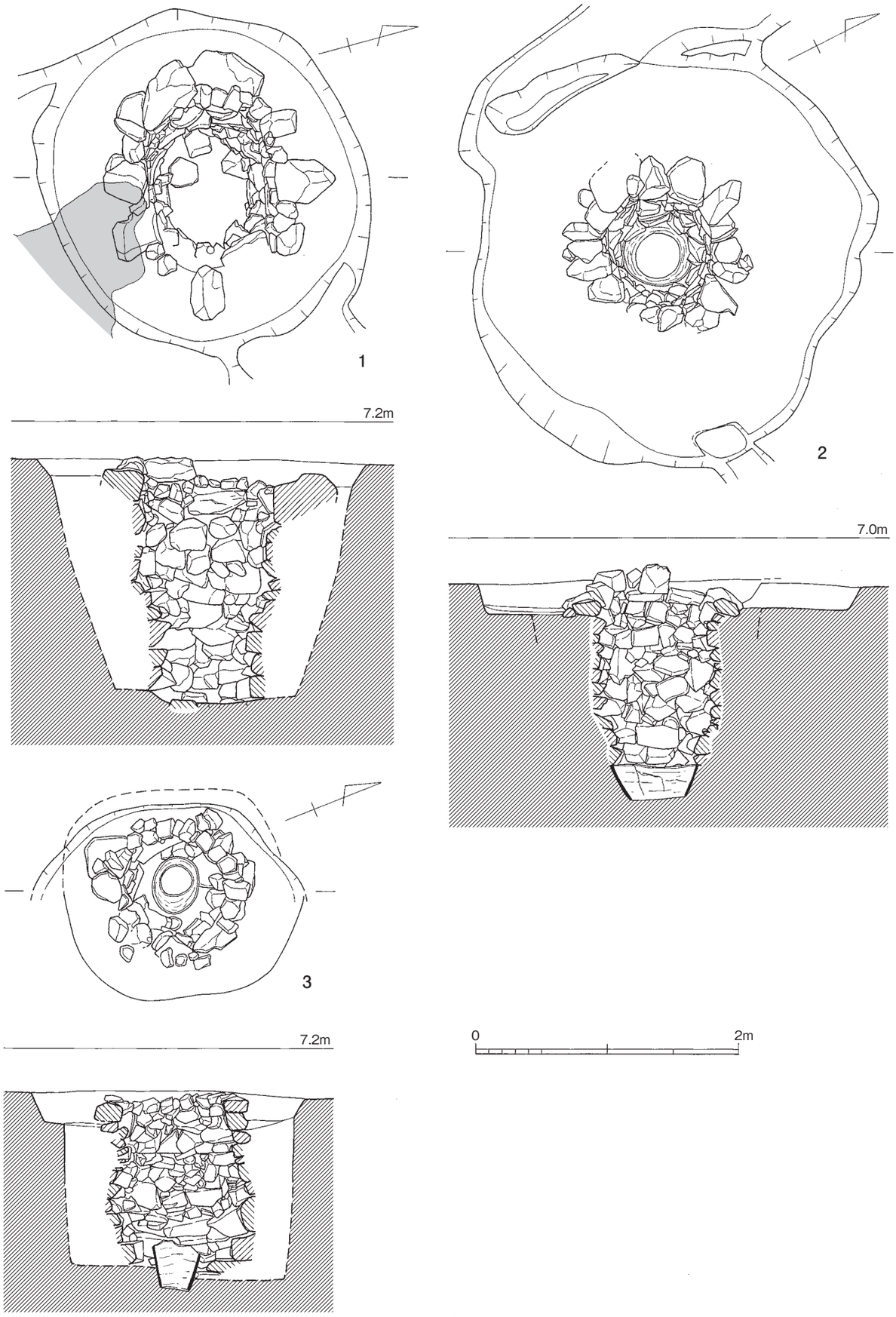
1 は東播系須恵器の椀で、外底部は回転糸切りで、底部の一端に融着防止の粘土塊を付着させる。見込みは螺旋状回転ナデ後、中央をナデ消し。内外にぶい暗青灰色を呈する。底部器壁の薄さと胴部の立ち上がりから 13 世紀後半から 14 世紀前半か。2 は李朝陶器の粉青沙器で、外面は灰釉を全面に掛けた後に胴部に白化粧土をハケ掛けし、内面は白土釉を厚く掛けている。畳付は釉剥ぎで、その上に 4 ヶ所の砂目があり、見込みに砂目とともに釉が剥落した部分が 4 ヶ所残っている。胴下位は回転ヘラケズリによる凹凸が大きく、高台貼り付け後接合部をヘラケズリしている。灰釉は白化粧土の影響で透明度が低い。3 は土師質土器の鍋で、内面は平滑にナデているが、外面は口縁部以外は指頭圧痕を残す。器面が摩滅しているが一部に煤の付着や変色が残る。胎土は精良で混入物はほとんどなく、黄灰白色を呈する。4 は備前焼の摺鉢で、歪みが大きく、図の径と傾きは不確実である。

2 号井戸（図版 34、第 59 図）

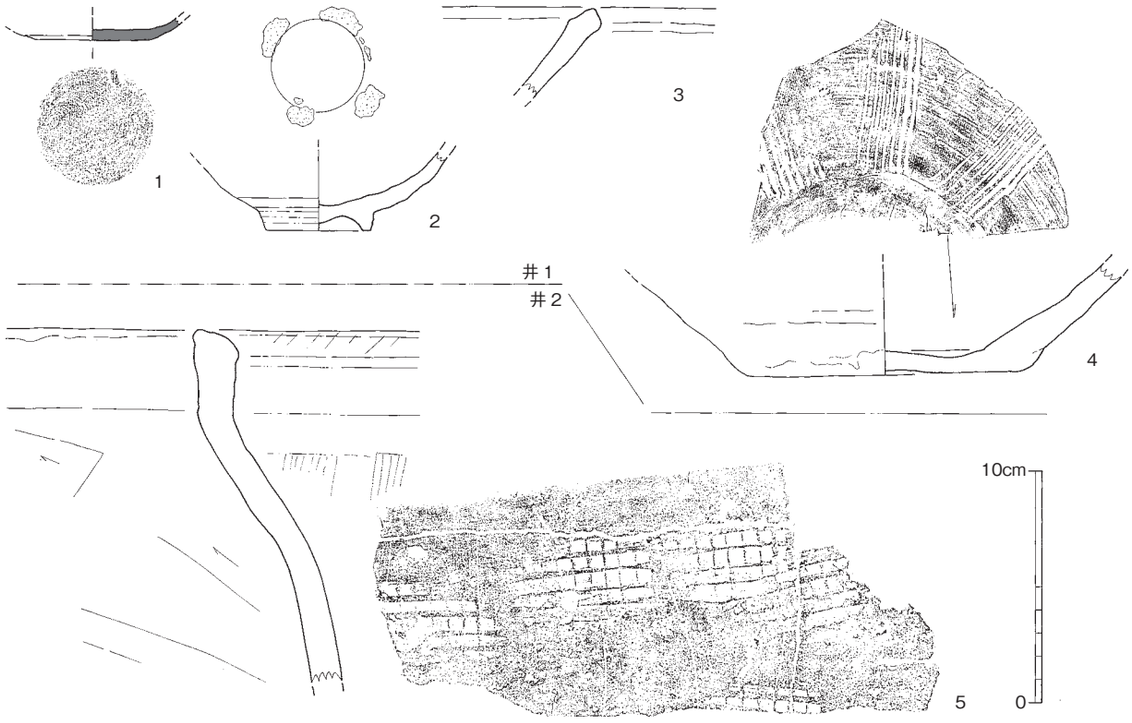
B 地区西側で検出した。図上において彫り方に見えるのは井戸を検出する際に掘り下げた跡である。本来の彫り方は検出が困難であった。井戸径は約 1 m、深さ約 2m を測る。最下部には桶が確認されたが、取り上げには至っていない。また記録後に半裁を試みたが、地表下約 50㎝から脆い砂地となっており、湧水と作業の水しぶき等で崩落し始めたため井戸半裁の作業を中止した。

出土遺物（第 60 図）

5 は防長産の瓦質大甕で、外面は格子目タタキが残る。タタキ痕を切って 6 条の縦方向の沈線が



第 59 図　1 ～ 3 号井戸実測図（1/40）



第60図　1・2号井戸出土遺物実測図（1/3）

等間隔に入るが、文様でも調整に関するものでもないので、運搬や使用時の痕跡かもしれない。内面は口縁部ナデ、肩部以下はケズリ。器面は灰色、胎は灰白色で燻し瓦に近い硬さである。内面のみ斑状剥離が見られるので液体を入れたものだろう。

３号井戸（図版34、第59図）

Ｄ地区北西にあり、21号溝状遺構の屈曲部に位置する。掘り方径180㎝、石組み径80㎝、深さ150㎝を測る。最下部には井戸枠が良好に残る。井戸上位～中位は20㎝程度の礫を使用し、これより下位は30～40㎝ほどの礫をつんでいる。他の井戸に比べると使用している礫が小さく、浅い。東側の掘り方は記録前に掘り下げてしまったため、推定ラインを破線で示している。時期が検討できる遺物の出土はなかった。

出土遺物（第67図）

井戸の最下層に設置してあったものである。下端から4㎝上方側面に径9㎝の孔が穿たれる。側面から浄水を湧き出させ、井戸内の水を綺麗に保つ効果があったと考えられえる。保管の際に乾燥してしまい、現状では口縁部が波打つが、本来は直線的であったものと考えられる。表面にわずかに炭化した部分が見られる。乾燥のため不明瞭だが、全面を削りにより成形している。

その他の遺構

ピット 190（図版 32、第 61 図）

一辺 50cmほどの方形のピットで、深さ約 20cmを測る。壁の立ち上がりは急で、床面は北東がやや高くなる。

出土遺物（第 66 図）

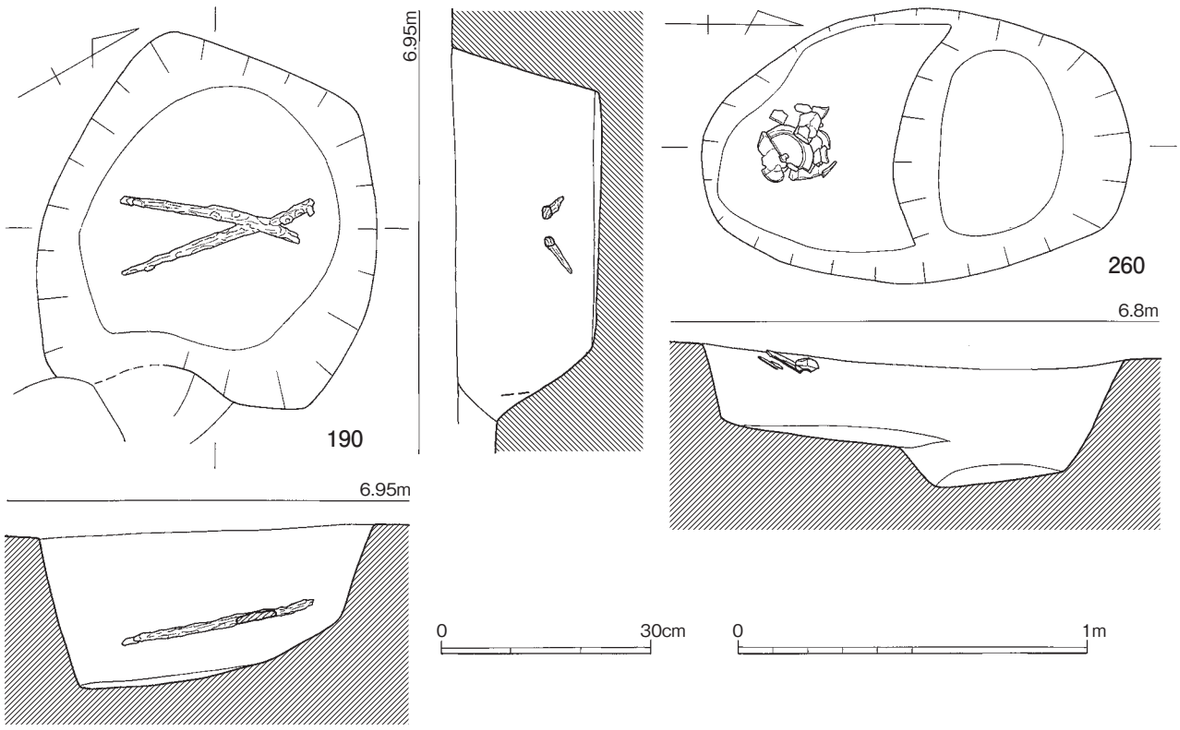
第 66 図 29 は棒状鉄製品である。当初鋏と想定したが、錆を落としても鋏などは認められなかった。2 本の鉄の棒が銹着している。共に断面四角形で直線的に伸びる。一部欠損するものの、長さ 30cm近くになるものと考えられる。

ピット 260（第 61 図）

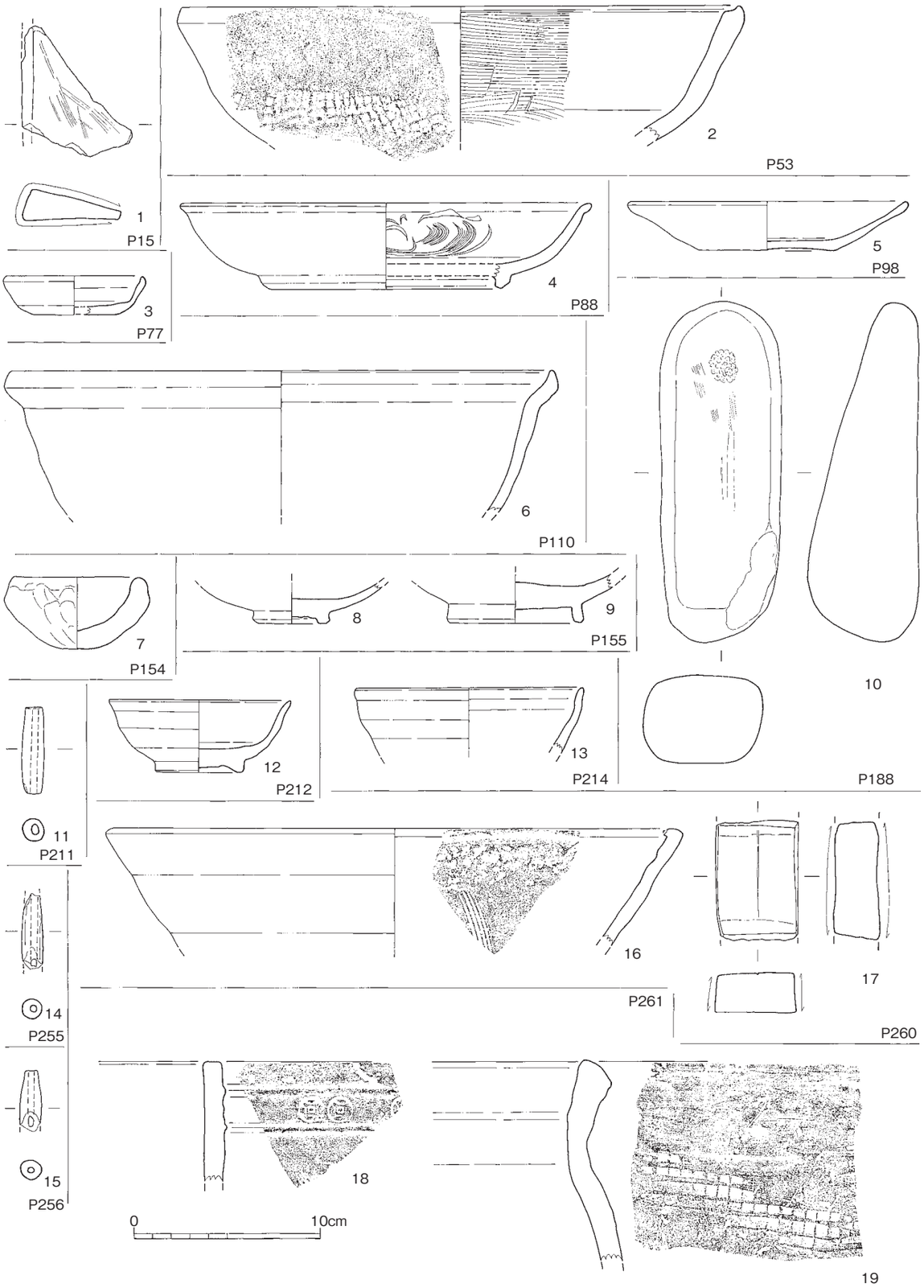
南北約 120cm、東西約 80cmの長楕円形を呈する。床面は中央部で 2 段になる。南側上面で遺物が集中して出土した。しかし、いずれも取り上げ時に激しく破損してしまい、図化できるものはごく一部となった。

出土遺物（第 62 図）

16 は瓦質土器の摺鉢で、外面口縁部はケズリ、口縁下は指頭圧痕のみ、内面はヨコナデ。色調は灰白色だが、本来は灰黒色を呈していたと思われる。胎土は風化花崗岩粒子を含む。端部が残っていないが口縁部内側を突出させている。その突出部から内面口縁下の器表面に小さな班状剥離があるので、摺鉢としてではなく特殊な使い方をしていたようだ。口唇部に丸みがないことから 15 世紀後半代の所産である。17 はピット 260 出土の砥石で、4 面使用しており、上面中央に深い刃傷が残っている。天草石製の仕上げ砥。小口面は欠損後整形されているので、欠損品の再利用品である。121.1 g を測る。



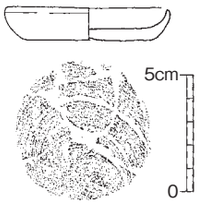
第 61 図　ピット 190・260 遺物出土状況（ピット 190 は 1/10、ピット 260 は 1/20）



第 62 図　Ⅰ区ピット出土遺物実測図①（1/3）

その他のピット出土遺物（第 62・64・65・66 図）

1はピット 15 出土の砥石で、3面使用で使い込んでいるため薄くなっている。欠損品の再利用だろう。頁岩製で、46.4 g を測る。2はピット 53 出土の土師質土器の鍋で、外面は口縁部がヨコナデ、胴部は上半に目の細かいタテハケ、下半から底部は格子目タタキ。内面はヨコハケが丁寧に入る。外面は使用変色しており、口縁部に煤が付着している。口唇部から内面は変色がなく黄灰白色を呈するので、湯沸しだろうか。胎は比較的精良で軟質、褐色パミスを含む。14 世紀後半。3はピット 77 出土の小皿で、器面摩滅で底部切り離し技法はわからない。外面胴部は胴下位・中位はナデ窪み、口縁部は膨らみをもたせる。内面胴部は2段ナデで底部との接合部は工具端により沈線が入る。見込みは平坦な回転ナデ。胎土は精良で金雲母を多く含む。黄橙白色で変色なし。4はピット 88 出土の龍泉窯系青磁皿で、内面に片切彫りと櫛描きによる花文が入る。口縁部は玉縁状に肥厚する。青磁釉は畳付まで掛かっているので、高台内釉剥ぎであろう。焼成は良好で淡緑灰色に発色し、胎は灰白色。14 世紀中葉の所産である。5はピット 98 出土の土師皿で、口縁部か底部が大きく湾曲しているため傾きと径は不明確である。胎土は精良で金雲母を多く含む。見込みは螺旋状回転ナデ後、未調整。底部は回転糸切りだが、器面摩滅のため板状圧痕の有無は不明。淡黄橙白色を呈するが、内外口縁部は黄灰白色である。変色がグラデーションなので重ね焼きによる差異だろう。おそらく本来は瓦質土器だったが、焼成不良で瓦質化せず、重ね焼き部分は土師器の色調を残したものと考えられる。16 世紀代。6はピット 110 出土の土師質土器の鍋で、器面剥落が著しく調整はわからないが、外面口縁下にケズリの痕跡を残す。端部にわずかに器面が残っており、本来は暗茶褐色であったことがわかる。砂粒を多く含む。16 世紀前半。7はピット 154 出土の土師器の取瓶である。手捏ね成型で器面調整なく凹凸が大きい。外面胴下位は黄灰白色を呈し、胎は砂粒を含む。内面から外面口縁下まで表面がガラス化しており、鉄分の付着も認められるので、鉄器の鋳造が行われていたことがわかる。8･9はピット 155 出土である。8は中国製白磁小皿で、高台内は削り出しで、畳付は外端部を斜めに切っている。白磁釉は光沢があり厚く掛かっている。胴下位以下は露胎だが、高台の中心に直線的に釉が付着している。露胎部分は煤が付着しているが、これは埋没時の影響だろう。15 世紀前半の所産である。9は龍泉窯系青磁碗の底部で、焼成不良で淡緑白色に発色し、胎は橙白色を呈している。畳付まで釉が掛かっており、高台内は蛇の目釉剥ぎしている。14 世紀後半から 15 世紀前半の所産である。10はピット 188 出土の砥石で、2面使用している。擦痕はわずかだが平滑で、1面に敲打痕があり、叩石にも使っている。図面下部は握るのによく、先端部分で叩いたものである。安山岩製で密度が高く硬質なので、粗砥だろう。1,064.5 g を測る。11はピット 211 出土の管状土錘で、器面が摩滅しているがわずかに一部欠損するのみでほぼ完形である。6.2 g を測る。12はピット 212 出土の李朝陶器の粉青沙器小椀で、見込みと畳付に砂目跡が6ヶ所残る。畳付は釉剥ぎで、見込みと胴下位から高台内は重ね焼きのため釉薬のガラス化が不十分である。高台は貼り付け後接合部を回転ヘラケズリ。16 世紀代。13はピット 214 出土の天目茶碗で、天目釉が口縁部から下に向かって流れており、口縁部のみ光沢がない。胎はにぶい暗灰白色で建窯製である。14はピット 255 出土の管状土錘で、黒灰色を呈する。両端が欠損しており、4.6 g を測る。15はピット 256 出土の管状土錘で、黒灰色を呈する。半分が残っており、3.5 g を測る。18・19はピット 261 出土

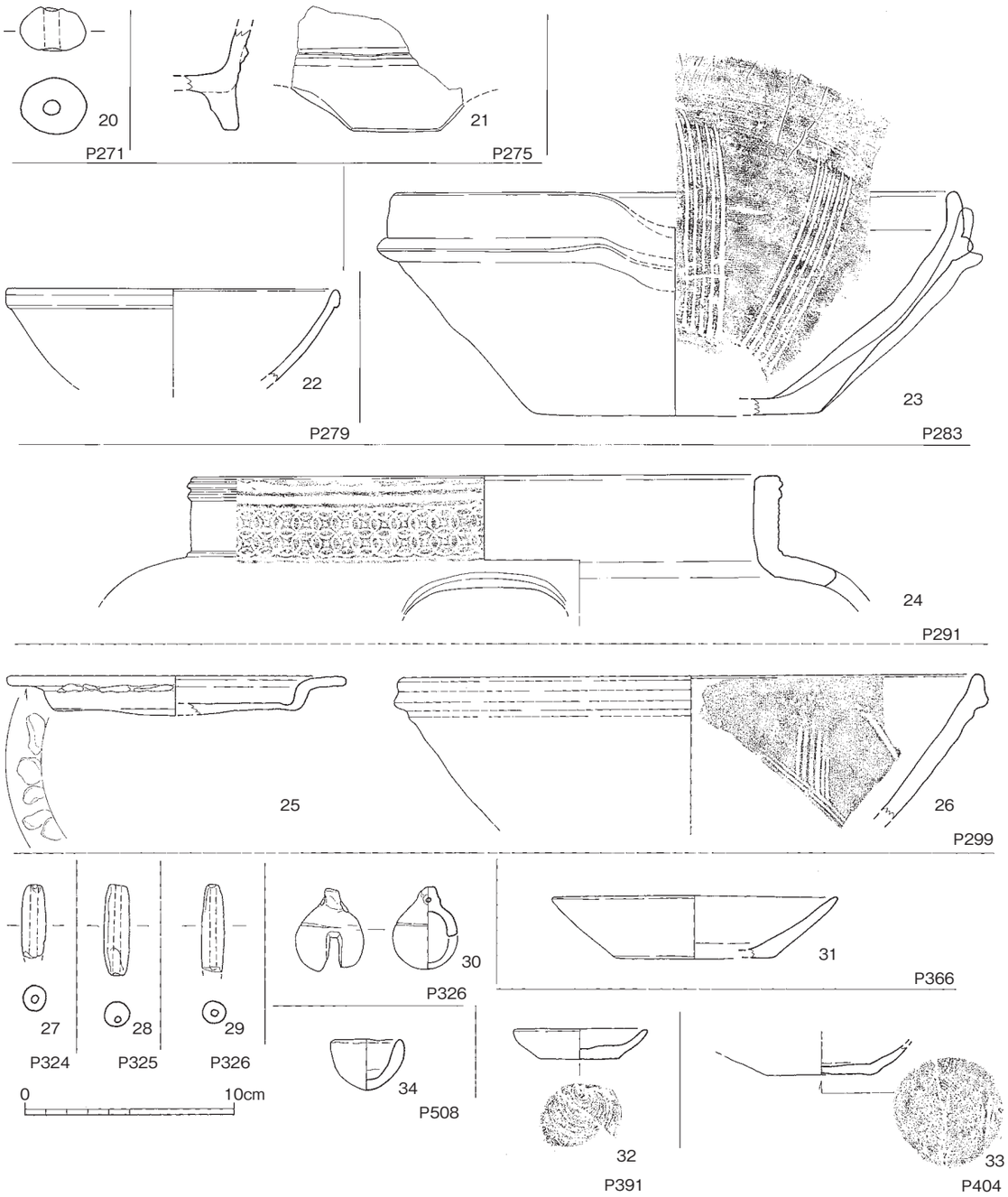


第63図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図（1/3）

である。18 は瓦質土器の火鉢で、外面口縁下の２条貼り付け突帯の間には七宝文の同じスタンプが入る。内外黒灰色。16 世紀代。19 は防長産の瓦質大甕で、外面は格子目タタキが残る。タタキ痕を切って２条単位の縦方向の沈線が等間隔に３箇所入り、右斜めにも等間隔に沈線が４条入る。文様でも調整に関するものでもないので、運搬や使用時の痕跡かもしれない。内面は口縁部ナデ、肩部以下はケズリ。器面は灰色、胎は灰白色で燻し瓦に近い硬さである。内面のみ班状剥離が見られるので液体を入れたものだろう。15 世紀後半から 16 世紀前半。

20 はピット 271 出土の球状土錘で、手捏ね成型の偏球に穿孔がある。孔は正円の中心にないので紡錘車ではない。完形品で 1.60 ｇを測る。21 はピット 271 出土の瓦質の火鉢で、逆台形の脚が貼り付けられており、接合部の調整は粗い。外面に１条の貼り付け突帯があるが、残存度から見て上にもう１条突帯があった可能性もある。突帯の接合部はナデ窪んでいるが、上と下を交互にナデたため、突帯がその影響を受けて波打っている。残存部内にスタンプ文は残っていないが、スタンプ列の空閑地である可能性もある。器面は摩滅し、胎の橙色が露出している。胎は混入物がやや多く、角閃石と褐色パミスが目立つ。22･23 はピット 285 出土である。16 世紀後葉。22 は中国製白磁碗で、調整が不十分なため成型痕が残っており、釉薬が均一に掛かっていない。11 世紀末から 12 世紀前半の所産である。23 はピット 285 出土の備前焼の摺鉢で、片口部が部分的に残っている。内面胴下半の器面は使用のため摩滅している。24 はピット 291 出土の土師質土器の風炉で、口縁から頸部と肩部は別作りの型押し成型で、内面肩部には指頭圧痕列が残り、頸部との接合部には接合痕が残る。頸部の七宝繋ぎ文や口縁部の突帯はスタンプでなく型押しによるもので、突帯の接合部のナデはない。肩部に楕円形の透かしが入る。器面は外面と内面口縁部は淡黒灰色で、内面は黄白色、胎は黒灰色を呈する。胎は精良で軟質。16 世紀代。25・26 はピット 299 出土で、25 は土師質土器の蓋で、天井部と裾部を接合している。裾部の上面の指頭圧痕は成型時のもので、下面のものは接合痕であり、器面調整をしていないので、成型痕により器面の凹凸が大きい。器面は淡灰黒色で、胎は黄橙色を呈する。天井部下面は器面の摩滅が著しいので、湯釜の蓋と考えられる。26 は土師質土器の摺鉢で、摺目が交錯している。外面口縁下は貼り付け突帯があり、その下部は接合部を沈線状にナデている。体部外面はケズリ。器面は明灰褐色を呈するが、埋土中の変色の可能性が高い。胎は黄白色で金雲母を多く含む。東播系須恵器の影響を受けた在地産土器と見られ、12 世紀末から 13 世紀初頭だろう。27 はピット 324、28 はピット 325、29 はピット 326 出土の管状土錘である。27 は半分強残っており 4.6 ｇを測る。28 は完形で、器面は摩滅している。7.3 ｇを測る。29 は一部欠損しており 4.9 ｇを測る。30 はピット層 26 出土の土師質土器の土鈴で長方形の透かし孔部分が欠損しているので、内部の球は残っていない。紐を手捏ね成型で貼り付け、天井部を仕上げている。銅鈴を模倣して体部上位に沈線がある。胎土は精良でにぶい暗黄灰色を呈する。

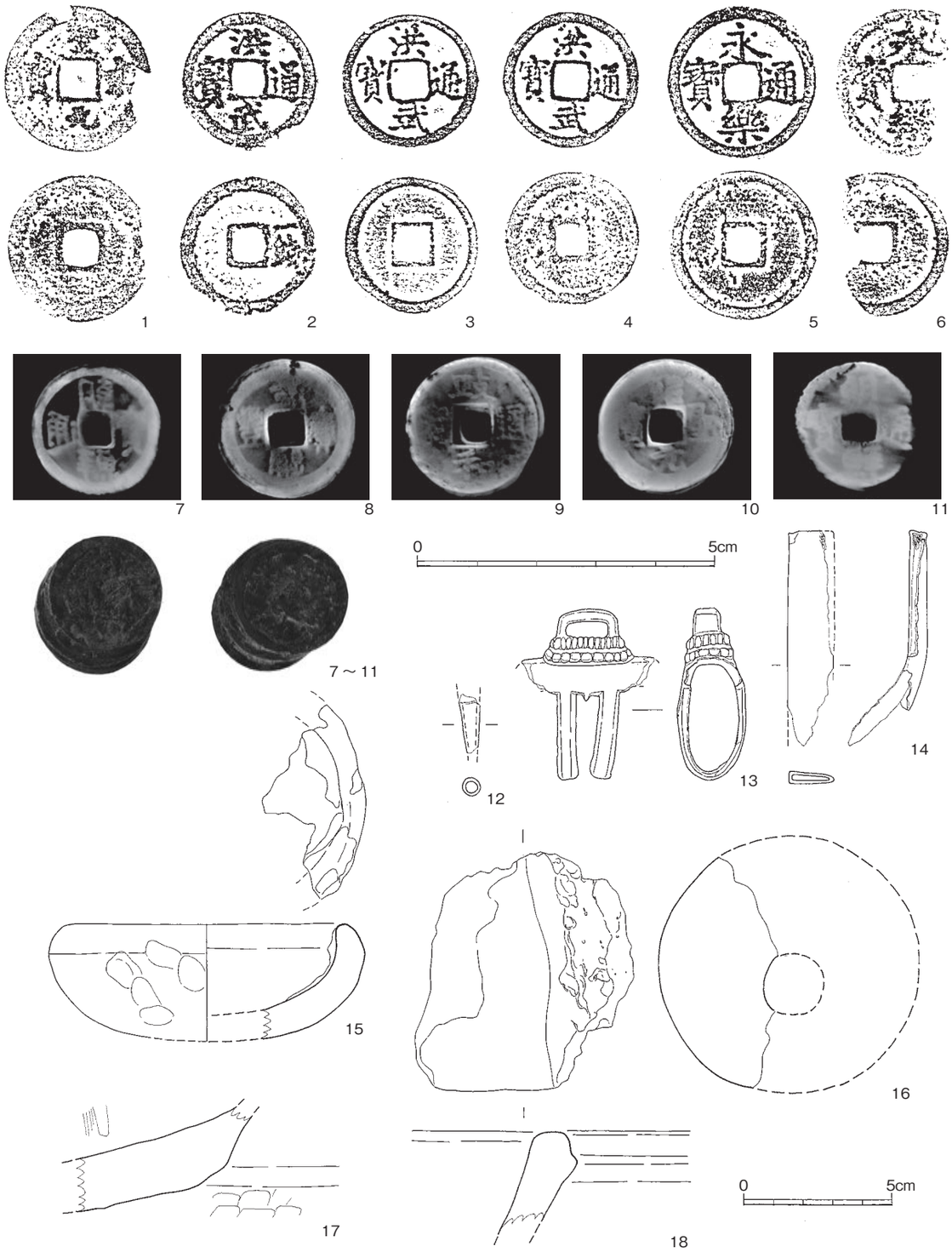
31 はピット 366 出土の土師器皿で器面剥落のため調整と切り離し技法は不明。また、本来にぶい黄灰白色を呈するが、胎の赤灰白色が露出している。胎はわずかに砂粒を含む。14 世紀後半から 15 世紀前半。32 はピット 391 出土の土師器小皿で、外底回転糸切り見込みは螺旋状回転ナデで、体部は１度のナデで仕上げている。内外暗黄橙色で使用変色は認められない。胎土は精良で金雲母を含む。14 世紀後半から 15 世紀前半。33 はピット 404 出土の土師器皿で、器面はほとんど残っていない。見込みには螺旋状回転ナデがあるが、最後に中央部をタテナデしている。外底には一部回転糸切りと板状圧痕が残っている。胎は精良で混入物は少なく軟質。



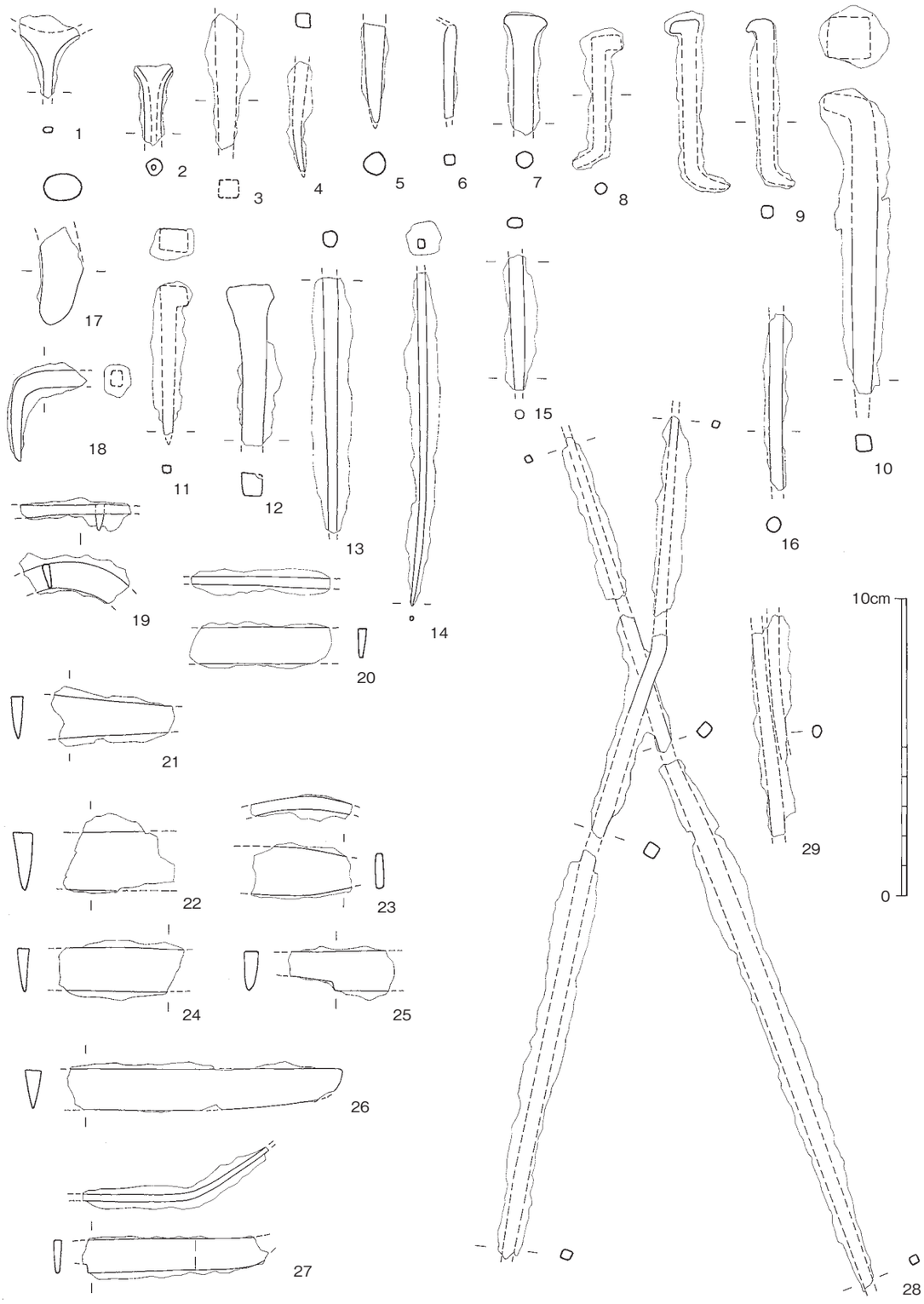
第 64 図　Ⅰ区ピット出土遺物実測図②（1/3）

第 65 図 1 はピット 333 出土の行書体の聖宋元寶である。宋銭で初鋳は 1101 年。第 65 図 2 はピット 6、3 はピット 48、4 はピット 04 出土の洪武通宝である。2 は裏側に「一銭」の文字が見られる。明銭で初鋳は 1368 年。第 65 図 6 はピット 345 出土の永楽通宝である。明銭で初鋳は 1408 年。第 65 図 18 はピット 279 出土の滑石製石鍋で内外面共にケズリを施し、外面に煤が付着する。側面に切断痕を残すが、小片なので再利用のために切断した残欠だろう。29.2g を測る。

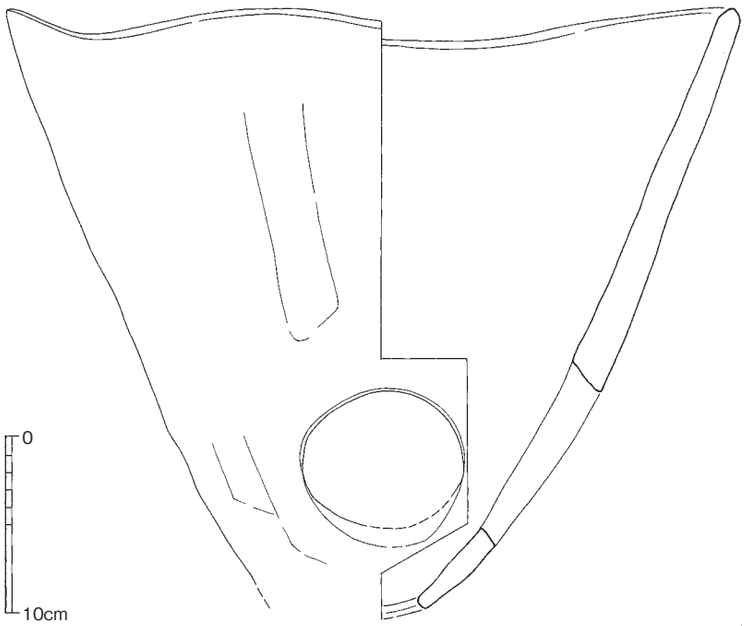
第 66 図 7 は鉄釘で、上端を折り曲げて敲面を作り出している。第 66 図 13 はピット 289 出土で、鉄釘か鉄鏃の茎部と見られる。第 66 図 17 はピット 431 出土の不明鉄製品で、断面楕円形を呈す



第 65 図　Ⅰ・Ⅳ区出土特殊遺物実測図①（1 ～ 6 は 1/1、7 ～ 11 はおよそ 1/1、12 ～ 18 は 1/2）



第 66 図　Ⅰ・Ⅳ区出土特殊遺物実測図②（1/3）



第 67 図　３号井戸出土井戸枠実測図（1/4）

る。第 66 図 24 はピット 225 出土の刀子の関部分である。第 66 図 29 はピット 190 出土の棒状鉄製品である。当初鋏と想定したが、錆を落としても鋏などは認められなかった。2 本の鉄の棒が銹着している。共に断面四角形で直線的に伸びる。一部欠損するものの、長さ 30cm 近くになるものと考えられる。

このほか、ピット 23 から略球状の軽石、ピット 62 から 34.0 g の鉄滓、ピット 82 からは弥生土器片、ピット 97 から 29.6g の鉄滓、ピット 272 から枢府院系白磁片、ピット 278 から象嵌の入った高麗青磁碗、ピット 289 から鑿状の鉄製品、ピット 466 から土鈴片、ピット 322 から 1.25k g の粘土塊群と 51.4 g の鉄滓が出土している。

遺構外出土遺物（第 65・66 図）

第 65 図 12 は遺構検出面出土の不明青銅製品である。中空になり、ソケット状のものとなるか。第 65 図 15 は出土地不明の坩堝である。内面に金属が著しく付着する。手づくねにより成形する。第 65 図 16 は出土地不明の羽口である。先端部片で鉄分の付着が見られる。第 66 図 22 はＢ区の１段下げ時出土、25 は遺構面出土の刀子の刃部片である。

小結

宝山桑ノ木遺跡Ｉ区では現代の農業用水路の都合から 4 つの地区に分割して調査を行い、掘立柱建物跡や井戸とそれに伴う区画溝が検出された。遺物は弥生・古墳・中世が見られるが、弥生・古墳は包含層からの出土で遺構は確認できず、遺構の中心は中世である。

Ａ地区の 1 号掘立柱建物跡は総柱形式の住居で、4 隅の柱穴に地鎮の古銭が納められていた。この建物の近辺のピットからも古銭が出土している。古銭から室町期の建物と想定される。建物、井戸およびピット群を囲むように並行する 2 条の区画溝が検出された。調査範囲が限られているため、溝・集落の全容が不明であるのが惜しまれる。掘立柱建物跡は 14 世紀後半、溝は 16 世紀の遺物が多く見られるが 4 号溝状遺構の床面から 14 世紀代の灯明皿と思われる土師皿が重なって出土した。集落の形成時期と廃絶時期を考える目安となる。

Ｂ地区はＡ地区に比べて区画溝が顕著ではないが、溝の内側に遺構が集中する様相はある。Ｂ地区では調査区北側に土坑が集中しており、中には土坑墓も見られる。特に 9 号土坑は灰層で、床

面直上から土師皿が出土しており火葬墓とも考えられる。

C 地区の遺構はB 地区から続くものである。掘立柱建物跡の検討はしたものの、特定には至っていない。

D 地区は溝により 4 つに分かれる。B 地区から続く調査区北西では遺構は希薄である。調査区北東には墓と思われる土坑が集中し、18 号土坑では瓦器椀が床面から出土し、22 号土坑では遺構上部に六銅銭と土師皿が約 10 枚と多量に出土した。この一帯はそれぞれの遺構に時期差はあるが墓域であったと考えられる。調査区南西ではピット群と井戸を検出している。この区画に掘立柱建物は確認できていないが調査区西側に遺構が続く可能性もあり、全容は不明である。調査区南東では掘立柱建物が 2 棟検出された。

Ⅰ区全体を通して焼土塊や炭化物が多く見られがた、特に 1 号溝の脇には焼土塊が集中している。宝山城と同時期に焼き討ちもしくは大きな火事があったとの地元住民に残る話があるため、その痕跡の可能性もある。また鉄滓も多く出土し、椀形滓・羽・坩堝など鍛冶に関する遺物が見られた。遺構から出土した遺物をみると 14 ～ 16 世紀の遺物が主体をなしている。鞘金具など金属製品も少量であるが確認され、硯や墨書土器なども出土している。宝山城の築城が 14 世紀中ごろとされ、1615 年の一国一城令により破却となっていることから当遺跡が宝山城下の集落跡とよいだろう。また、小片であるが弥生土器が出土し、トレンチ調査において包含層から古墳時代の須恵器が多く出土した。遺跡の周辺においてこれらの時期の遺構も期待できる。

Ⅱ区

Ⅱ区は、行橋市大字宝山 75-2、77-1、80-1、90、93、95、96、99、100、102、103、106-2、108、111、115-1･2、118-1･2、119-1･2、122-1、131 の範囲で、開発工事の工程上の都合もあってⅡ－ 1 ～Ⅱ－ 3 区に分けて調査を行なった。

Ⅱ－ 1 区は、平成 22（2010）年 12 月 6 日から重機による表土掘削作業を開始し、12 月 20 日から人力による掘削作業、3 月 17･18 日にラジコンヘリによる全体写真撮影、22 日までに記録類を含めた調査をすべて終了し、24 日から重機による埋め戻し作業を行なった。

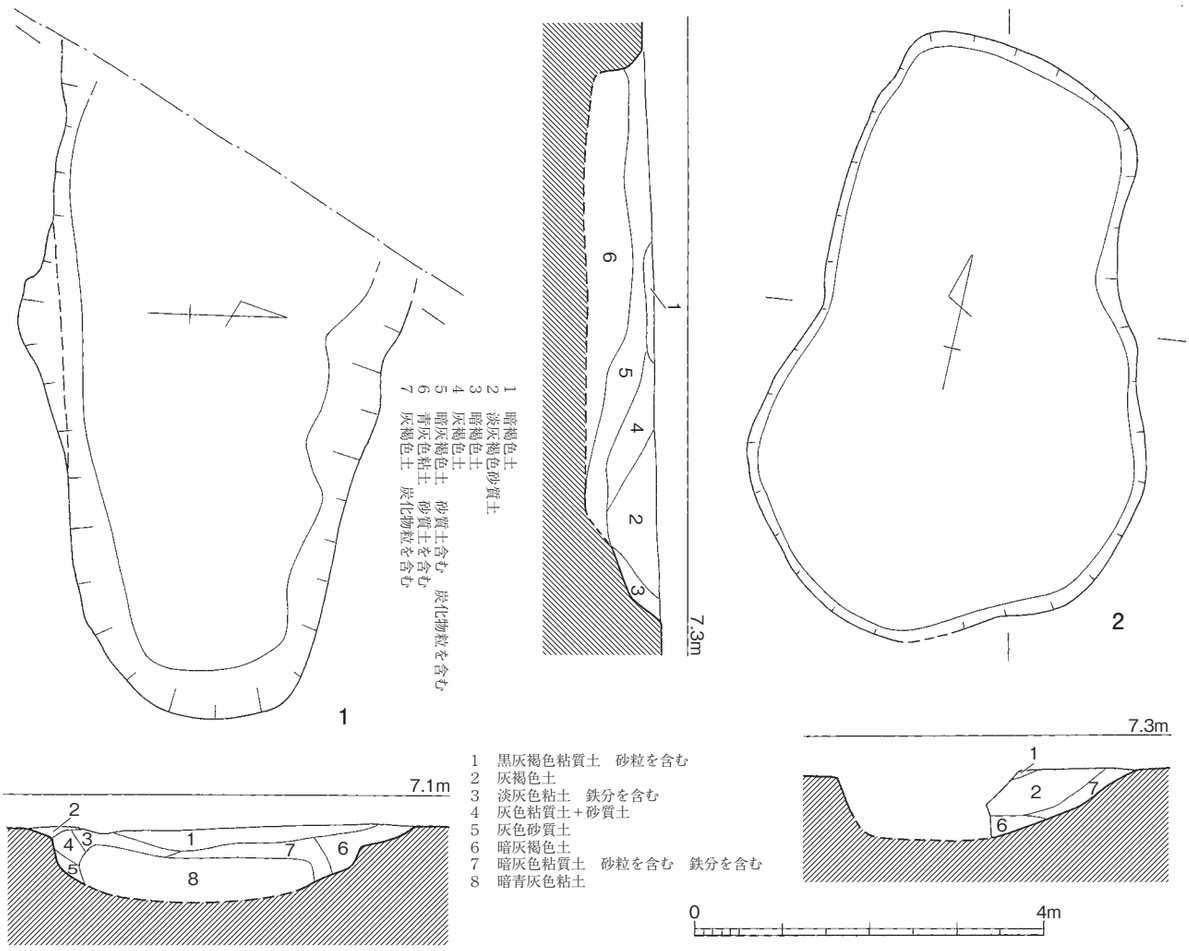
Ⅱ－ 2 区は、平成 23（2011）年 7 月 5 日から重機による表土掘削作業を開始し、29 日から作業員による手作業での掘削開始、11 月 16 日にラジコンヘリによる空中写真撮影、29 日に調査をすべて終了し、12 月 6 日から重機による埋め戻しを行なった。

Ⅱ－ 3 区は、同年 12 月 12 日から表土掘削作業を開始し、24 年 1 月 11 日から手作業による調査、3 月 8 日にラジコンヘリによる全体写真撮影、14 日には全ての作業を終了した。なお、埋め戻しについては開発工事の施工業者が行なった。

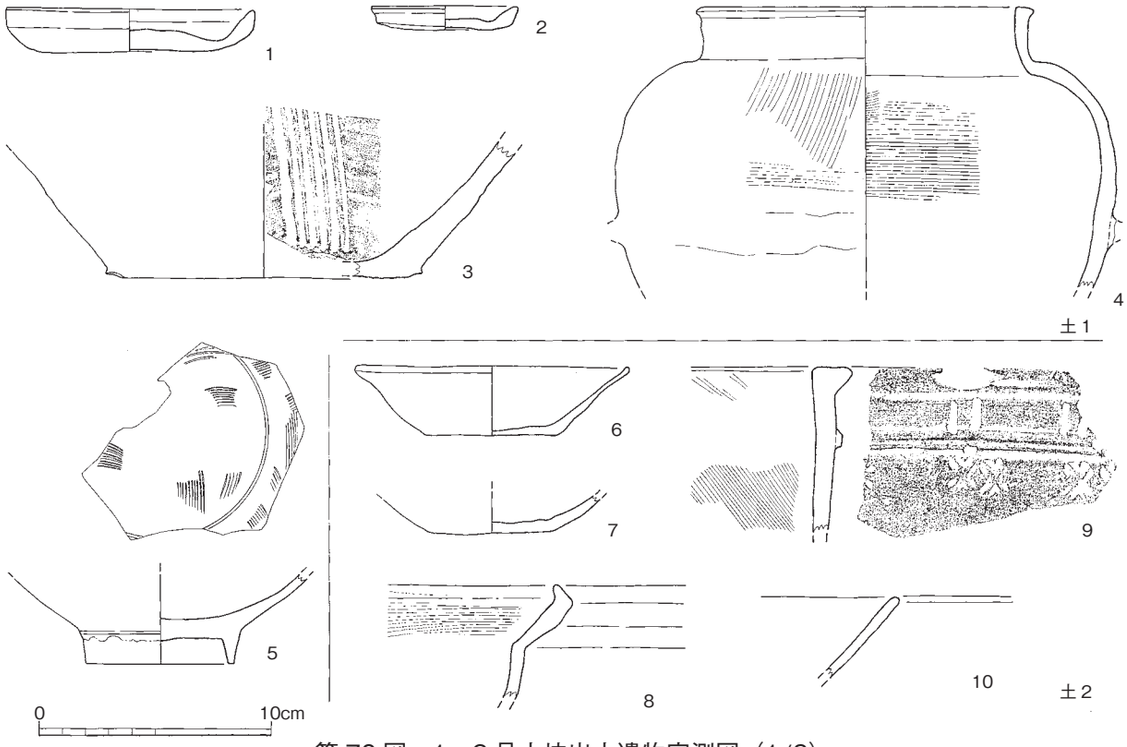
土坑

1 号土坑（図版 37、第 69 図）

Ⅱ－ 2 区の 17 号溝の北 5 mにあり、遺構の一部は北西側調査区外に延びるが、大形の土坑であろう。東西に長い形状で、西半部は不明であるが本来は平面楕円形に近いものか。遺構は淡灰色砂層の地山を掘り込んでおり、埋土を掘り上げると同時に湧水のために徐々に崩れていく状況で、正確な平



第 69 図　1・2 号土坑実測図（1/80）



第 70 図　1・2 号土坑出土遺物実測図（1/3）

面および断面形を図示し得ない。調査区内部分で長さ 9.7 m、最大幅 5.2 m、深さ 0.8 m程度である。

出土遺物（図版 54、第 70 図）

1・2 は土師器皿で、2 点とも体部内外面はヨコナデ調整、底部内外面をナデ調整で仕上げる。1 は口径 10.8㎝、底径 7.8㎝、器高 1.9㎝。2 は口径 6.5㎝、底径 6.0㎝、器高 1.1㎝。3 は備前系摺鉢で、内外面ともヨコナデ調整の後、体部内面には 6 本一単位の櫛歯を配する。復元底径 13.6㎝。4 は瓦質土器釜で、体部の最大径は上位にある。体部内面は横方向の細かいハケメ調整の後ナデ調整、外面は上位は斜め方向、つば部分の上は横方向の粗いハケメ調整、つば部分の下はヨコナデ調整。軟質で、外面の器面は熱のためか細かく剥離している。復元口径 14.6㎝、体部最大径 21.5㎝。5 は白磁椀で、高台が高く、内面には櫛目文を有する。胎土は灰白色で、釉はわずかに緑がかった灰色、体部と高台の境まで施釉する。高台径 6.3㎝。

2 号土坑（図版 38、第 69 図）

Ⅱ－2 区の北部､4 号溝の東 2 mの位置にある大形土坑。平面形は不整楕円形で､長さ 7.0 m､幅 4.4 m、深さ約 0.8 m。淡灰色砂層の地山を掘り込んでおり、湧水と崩れのために正確な断面形を図示し得ない。

出土遺物（図版 54、第 70 図）

6・7 は土師器坏である。6 は糸切りで、復元口径 11.8㎝、底径 5.5㎝、器高 3.0㎝。7 は内面の体部と見込みの境に凹線がめぐり､底部は糸切り後の板状圧痕が残る。底径 5.5㎝。8 は瓦質土器鍋で、口縁端部を内側に折り曲げる。また、焼成は堅緻である。9 は瓦質土器火鉢。口縁部を外方に突出させ、口縁部下には 1 条の断面台形の突帯をめぐらせ、口縁部と突帯に挟まれた部分に棒状あるいはヘラ状の工具で縦方向のキザミを入れ、突帯の直下にはスタンプ施文する。内面は斜め方向の細かいハケメ調整の後、上位はヨコナデ調整で仕上げる。10 は朝鮮王朝時代の陶器椀である。胎土は灰色で砂粒を含み、透明釉を全面にかける。

溝

1 号溝（図版 35・36、第 68 図）

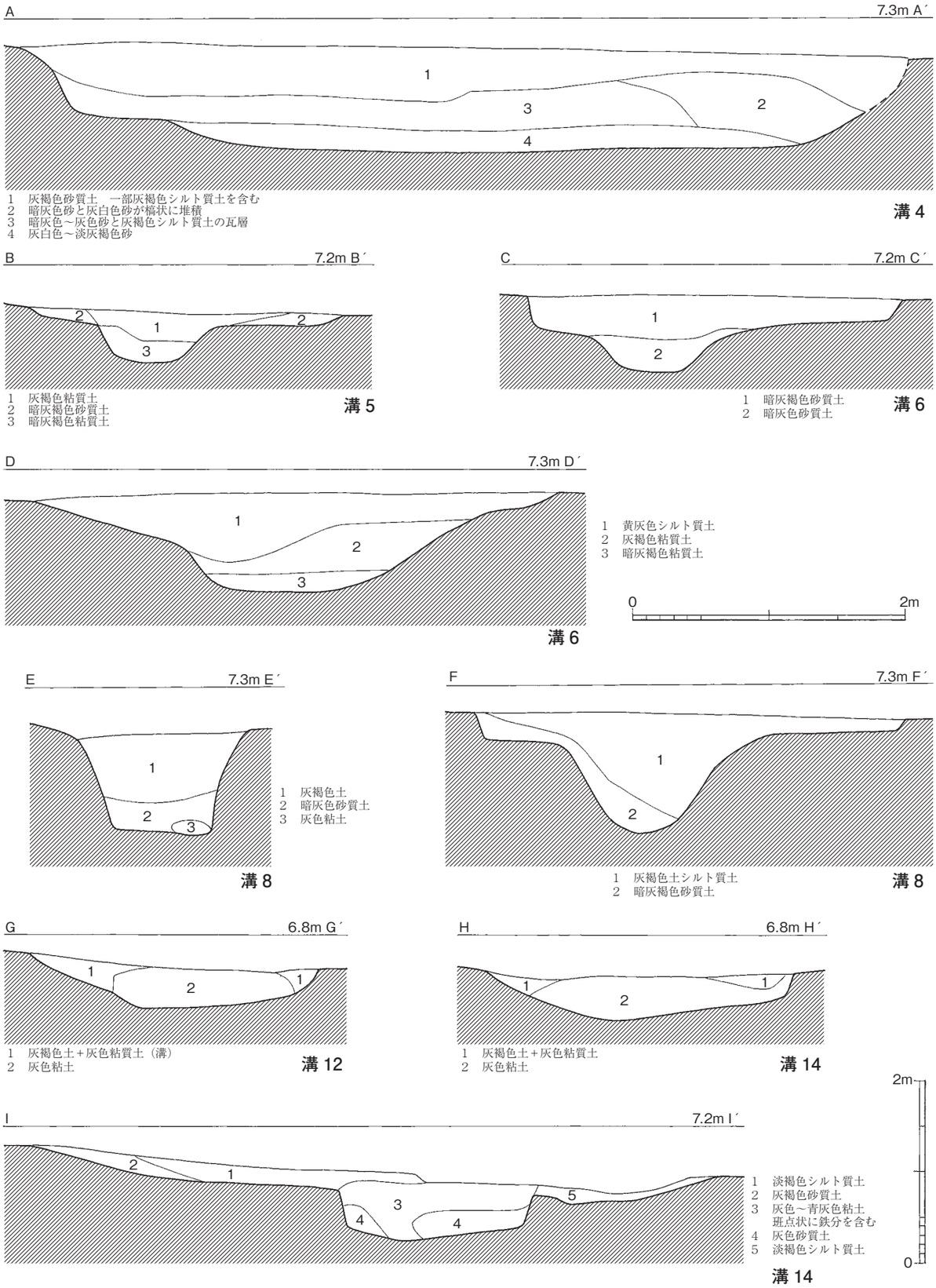
Ⅱ－1 区北西部で、1 ～ 4 号溝と 5･6 号溝の一部が密集して並んだ状態で検出した。1 号溝は、その西端部でわずかに確認した南北方向の溝である。調査区内部分で長さ 6.5 m、幅 1.0 ～ 2.1 m、深さ 20㎝。

出土遺物（第 72 図）

1 は瓦質土器摺鉢で、黒色を呈し、口縁部内側がわずかに突出する。外面には縦方向のハケメが残り、内面は横方向のハケメ後櫛歯 4 本が確認できる。2 は土師器坏。底部は糸切で、復元口径 6.0 ㎝。胎土は精良である。

2 号溝（図版 35・36、第 68 図）

1 号溝の東 2.5 m程の間隔で並ぶ南北溝である。調査区内で 10 m分を検出し、南端部は途切れている。幅 0.5 m、深さ 5㎝。



第 71 図　4 ～ 6・8・12・14 号溝土層実測図（1 /40、14 は 1/60）

3 号溝（図版 35・36、第 68 図）

2 号溝の東側にある南北溝で、北端部は途切れている。遺構の一部は東側の 4 号溝と接し、南端部は西側にわずかに広がっている。4 号溝を挟んで向かい合う 5 号溝とある程度対応した配置をしているのであれば、3 号溝はこの位置で西側に折れている可能性もあるものと考えられる。長さ 15.5 m、中央部付近で幅 2.0 m、深さ 20㎝。

4 号溝（図版 39、第 68・71 図）

西側の 3 号溝と東側の 5･6 号溝に挟まれる南北溝で、Ⅱ－1 区の北端部付近から始まり、Ⅱ－2 区の中央部分まで直線的に延び、さらに調査区外へと続いている。長さ 80 m、幅はⅡ－1 区中央部付近で 3.2 m、Ⅱ－2 区の溝の南端部付近で 6.5 m、深さは南端部付近で 0.8㎝。この 4 号溝を基準として、左右の 3･5･6･17 号溝などが配置されている様子が窺える。

出土遺物（図版 54・55、第 72 図）

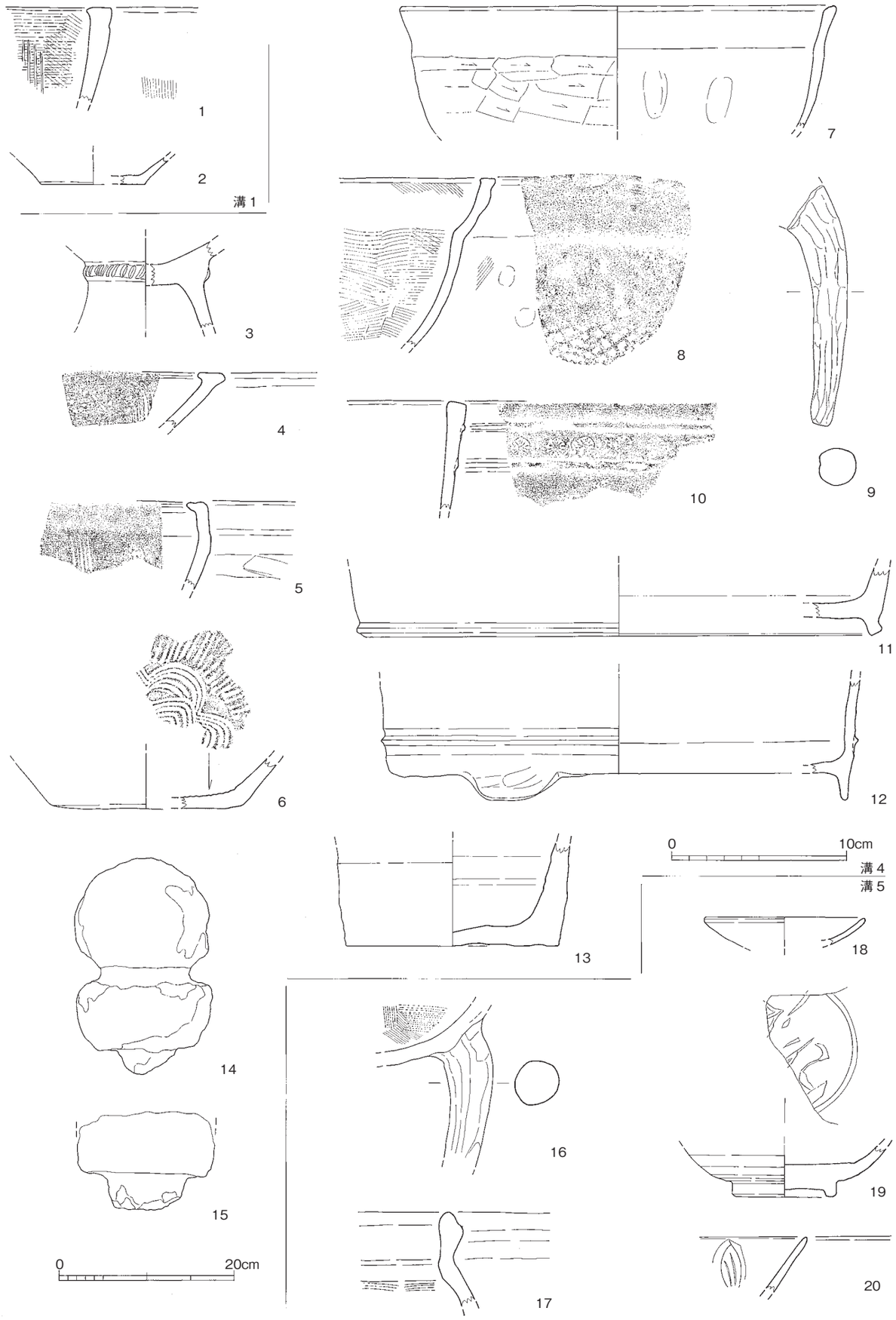
3 は弥生土器高坏で、坏部と脚部の境に突帯を有し、ヘラ状工具でキザミを入れる。内外面とも磨滅している。4 ～ 6 は瓦質土器摺鉢で、4 は口縁部を内側に折り曲げ、内外面ヨコナデ調整の後櫛歯 4 本以上を刻む。5 は口縁部が直立し端部を内側に折り曲げる。体部内面には単位 5 本の櫛歯を刻み、外面はケズリ調整で仕上げる。6 は体部は放射状に、底部は青海波状に櫛歯を施す。焼成は土師質に近い。7 ～ 9 は瓦質土器鍋。7・8 とも口縁部が長く、7 は直線的に、8 は内彎して立ち上がり端部を内側にわずかに突出させる。7 は焼成が堅緻で、体部外面はヘラ削り調整、外面は全面に煤が付着する。8 は灰色～灰白色を呈し、やや軟質である。内面は横方向のハケメ調整、外面はヨコナデ・ナデ調整で、体部下半部には格子目文のタタキ痕が残りこの部分には煤が付着する。9 は脚である。灰白色～黒灰色を呈する。10 ～ 12 は瓦質土器火鉢。10 は口縁部外面の 2 条の突帯の間に菊花文をスタンプ施文する。11 は底部に高台が､12 は脚が付く。13 は陶器壺の底部であろうか。焼成は須恵質で堅緻で、外底部には砂粒が融着する。14・15 は五輪塔の空風輪であるが、14 は風化が激しく枘の一部を欠失し、15 は空輪部分を欠失する。14 は凝灰岩製で、15 は安山岩製である。

5 号溝（図版 35・36・39、第 68・71 図）

4 号溝の東側にある「L」字形に検出した溝。北側調査区外から 4 号溝に沿って南に進み、16.5 mで直角よりもやや鋭角に折れ曲がって東に 37 m延び、8 号溝に接続する。5 号溝と 8 号溝が組み合わさって方形の区画を造り出しており、区画は東西 33.5 m、南北は 14.5 m以上で調査区外北側へと広がるものと思われる。区画内西半部では、径 20 ～ 60㎝程度の円形小穴を比較的まとまって検出したが、掘立柱建物柱掘形と考えられるものは確認できなかった。また、5 号溝の南北部分は西側の 4 号溝と平行しており、両者の間隔は最も狭い部分で 0.5 mであり、東西部分は南側の 6 号溝と平行しており、間隔は中央部付近で 1.5 mである。この 2 条の区画溝に挟まれた部分は通路として利用された可能性があるものと考えられる。

出土遺物（図版 55、第 72 図）

16・17 は瓦質土器。16 足鍋で体部内面は細かいハケメ調整、底部外面には格子目文タタキの痕跡が残る。17 は甕の口縁部で､やや軟質である。体部内外面には横方向のハケメ調整がわずかに残る。18 は白磁皿。胎土は白色、釉は透明感のある白色で、内面と外面上半部に施す。19・20 は青磁椀で、



第 72 図　1・4・5 号溝出土遺物実測図（1 /3、14・15 は 1/6）

2点とも龍泉窯系、内面に片切彫で文様を描く。19は底部が厚く、高台畳付以内は露胎である。

6号溝（図版35～37・40、第68・71図）

5号溝の南側に、これと対となる形で並ぶ区画溝である。遺構はⅡ-1･2･3区にまたがり、東側を8号溝に接続する「コ」字形を呈し､8号溝と組み合わさって方形の区画を造る。溝は延長で92ｍ、幅は西側の残存状況の良いと思われる部分で3.5ｍ、深さ30㎝。区画は東西33.5ｍ南北は東側で31ｍ、西側では23ｍ程のややいびつな方形であり、区画内の東側は6号溝から分岐した7号溝と9号溝でさらに区画されている。さらに、6号溝内の9号溝と分岐する部分の付近には、南側肩部もたれるように瓦質土器大甕が据えられていた。また、区画内の北西部では土坑状の穴や円形の小穴を検出したが、掘立柱建物跡と認められるものは無かった。

出土遺物（図版55、第73図）

1は縄文土器浅鉢。内外面を丁寧に磨き､胎土は精良で角閃石を含む。2は土師器坏。底部は糸切で、底径6.8㎝。3は瓦器椀で、内面ナデ調整、外面ヘラケズリ調整。復元口径12.0㎝。4・5は瓦質土器甕。4は復元口径27.0㎝､体部内外面はハケメ調整で､焼成は軟質で体部外面には剥落が見られる。5は大形品で、内面には粘土帯を積み上げた痕跡が残り、板状工具によるナデ調整の後、部分的にナデ調整。体部外面には肩部と下位に格子目の叩打痕が残り、部分的にハケメ、ナデ調整。底部には板状圧痕がみられる。復元口径60.8㎝。体部最大径61.5㎝、底径15.6㎝、器高44.8㎝。6は土師質土器鍋。口縁部先端を内側に屈曲させ、体部外面には斜め方向のハケメが残る。7は瓦質土器片手鍋の把手部分で、中空になる。8は瓦質土器火鉢口縁部で、2条の突帯の間にスタンプ施文する。9～11は備前系鉢。9は口縁の屈曲部分外面を突帯状に突出させ、体部外面は露胎。11は片口部分である。9･11には櫛歯が認められる。12は備前系甕で、口縁部を外方に折り曲げて肥厚させる。13は龍泉窯系青磁椀である。胎土は灰白色で、高台畳付部まで施釉される。内面見込みにはヘラ描きの草花文を配し、体部外面は蓮弁文であろう。

7号溝（図版35・36・41、第68図）

6号溝の北側東西部分の東3分の1弱の箇所から分岐して南に延び、6・8号溝で囲む空間をさらに区画するが､6号溝南側東西部分にまでは達しておらず約5.5ｍの間隔がある。長さ24ｍ、幅1.0～1.5ｍ、深さ最大60㎝で、西側の6号溝南北部分との間隔は24～26ｍ程度である。

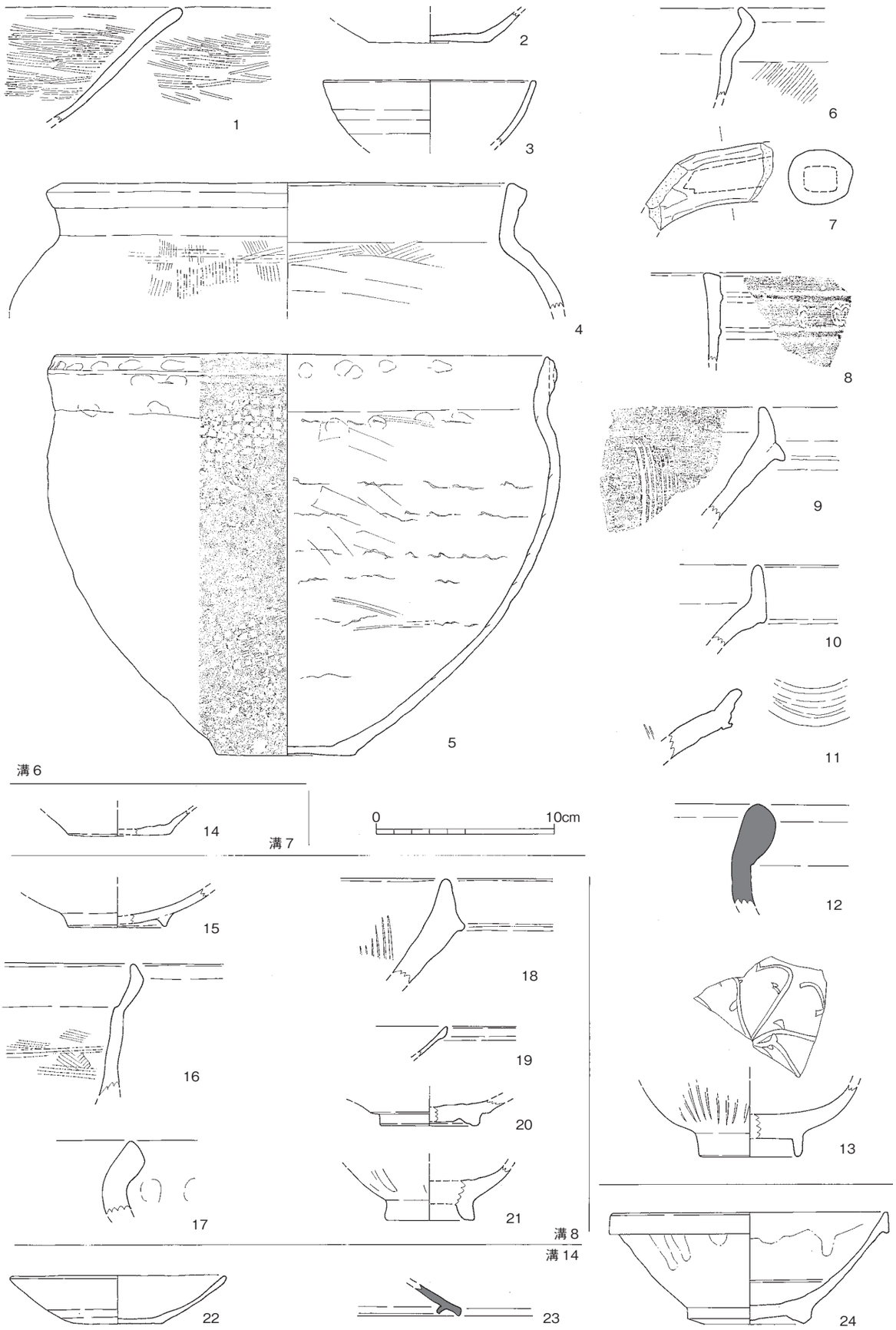
出土遺物（第73図）

14は土師器坏で、復元底径5.8㎝。

8号溝（図版35～37、41、第68・71図）

規模の大きな南北溝で、Ⅰ－Ｄ区からⅡ－1・3区を縦貫してⅣ区にまで延び、中央部分が若干東側に膨らむ。調査区内で長さ98ｍ、幅はⅡ-3区北端部で2.0ｍ、6号溝と交差する箇所周辺で5.5～6.0ｍ程度、深さは約60㎝。また、Ⅱ－1区で平行する東西方向の5・6号溝と接続し、Ⅱ－3区では6号溝と直角に交わってさらに東側の14号溝にまで達している。5･6号溝と組み合わさって方形の区画を形成している。

出土遺物（図版55・56、第73図）



第 73 図　6・7・8・14 号溝出土遺物実測図（1 /3）

15 は瓦器椀で、高台は断面三角形を呈し、復元高台径 5.6㎝である。16 は瓦質土器鍋。口縁端部を上方に折り曲げ、体部内面はハケメ調整、外面は風化のため不明であるが、脚が付く痕跡が認められ、また煤が付着する。17 は瓦質土器甕で、屈曲する頸部外面には指頭痕が残る。18 は陶器摺鉢。内面は露胎、外面は施釉し、釉は灰白色を呈する。19・20 は白磁椀であろう。19 は口縁部に小さな玉縁を有し、釉は透明感のあるガラス質でやや黄緑色に発色し、全面に貫入がみられる。20 は内面見込の周囲の釉を輪状に掻き取っており、釉は灰緑色を呈する。復元高台径 5.6㎝。21 は龍泉窯系の青磁椀。釉は厚く、内面見込は露胎、外面は高台外面まで施釉する。体部外面の片切彫りの文様は蓮弁文か。復元高台径 5.0㎝。

9 号溝（図版 36・37、第 68 図）

Ⅱ－3 区で 6 号溝が 8 号溝と交差する箇所のわずか 1.2 m手前で分岐して北に延びる溝で、結果的に 6・8 号溝で囲った方形区画の東端部付近をさらに区画する。ほぼ平行する東側の 8 号溝との間隔は 1.5 ～ 2.5 m。6 号溝との分岐点から北に 14 mでⅡ－1 区へと続くが、Ⅱ－1 区の調査段階ではこの溝を検出し得ていない。しかしながら、事後に確認した限りでは、溝はほぼ両区の境あたりで途切れているようである。

10 号溝（図版 36・37、第 68 図）

Ⅱ－3 区の 8・14 号溝に挟まれる位置で検出した南北溝である。6 号溝が 8 号溝と交差してさらに東に延びる形で 14 号溝に接続する手前から分岐して北に延びる。Ⅱ－3 区の北境を超えてさらに北へと続くが、Ⅱ－1 区の調査時点ではこの溝を検出し得ていない。確認した長さ 13 m、幅 1.0 m、深さ 30㎝。

11 号溝（図版 35・36、第 68 図）

Ⅱ－1 区北東部で検出した 11 ～ 14 号溝はほぼ平行し且つ密集している。11 号溝は、そのうち最も西にある南北溝である。北側調査区外から直線的に 12.5 m南に延び、端部はわずかに東側に折れる。幅 1.3 m、深さ 20㎝。

12 号溝（図版 35・36、第 68・71 図）

11・14 号溝の間にある。北側調査区外から 12.3 m南に延び、端部はわずかに東に折れて 14 号溝に接する。北端部で幅 2.2 m、深さ 50㎝。

13 号溝（図版 35・36、第 68 図）

11・12 号溝の南端部の中間付近から始まって南に約 7 mで途切れる、やや不整形な南北溝。最大幅 1.1 m、深さ 15㎝。

14 号溝（図版 35 ～ 37・41、第 68・71 図）

今回の調査区内では最も東側にある規模の大きな南北溝で、Ⅱ－1･3 区を縦貫しⅣ区にまで延び、8 号溝とほぼ平行している。Ⅱ－3 区で 8 号溝と交差する 6 号溝と接続する。調査区内部分で長さ

76 m、幅はⅡ－3区北半部で広がっているが、それ以外の部分では2.0～3.5 m、深さ40㎝。

出土遺物（図版56、第73図）

22は土師器坏。器壁が薄く、底部は糸切で板状圧痕が残る。復元口径12.2㎝、底径5.1㎝、器高2.7㎝。23は須恵器蓋でかえりを持ち、軟質で灰白色を呈する。24は白磁椀で、口縁部に玉縁を持ち、内面体部と底部の境に沈線が巡る。胎土は灰白色、釉は灰緑色で、外面体部下半は露胎である。復元口径15.5㎝、高台径7.0㎝、器高6.3㎝。

15号溝（図版36・37・42、第68図）

Ⅱ－3区南西部分、6号溝の南側、8号溝の西側にある。2条の溝の直行する部分に沿う形で15号溝も屈曲して、それぞれの溝にほぼ平行して西と南に延びる。西側はⅡ－2区へと続くが、この部分は重機による掘削段階で若干掘り過ぎており、既に失われている。北側に並ぶ5・6号溝などの形状から推測すれば、15号溝は、平行する4・8号溝に挟まれた部分を方形に区画する溝の一部と考えられる。延長で約27 m、幅1.5～2.0 m程度、深さ50㎝。Ⅳ区の12号溝と接続する。

出土遺物（図版56、第74図）

1は土師質土器足鍋。内面はハケメ調整、外面はナデ調整だが底部には格子目の叩打痕が残る。2は瓦質土器摺鉢で、内面には5本一単位の櫛歯を配し、体部外面はヘラケズリ調整で仕上げる。3は瓦質土器火鉢で、底部には脚を有し、内面は横方向のカキメ状のハケメ調整がみられる。復元底径27.8㎝。4は白磁椀である。釉は灰白色で、内面見込の周囲を輪状に掻き取り、高台以内は露胎。復元高台径6.4㎝。5は龍泉窯系青磁椀で、体部外面に片切彫の文様がある。全面に施釉した後、外底部は輪状に掻き取る。高台径5.8㎝。

16号溝（図版35・36、第68図）

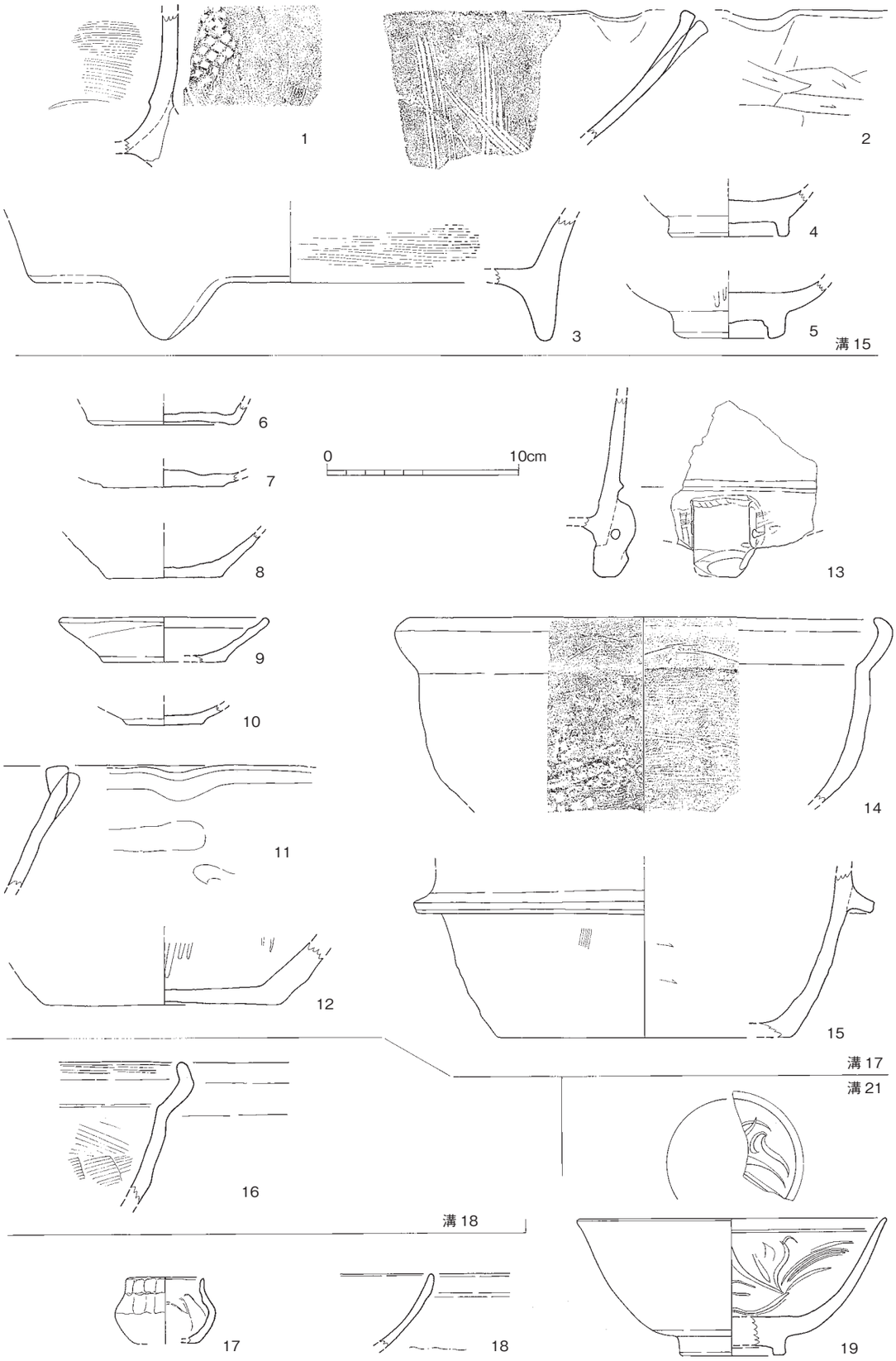
Ⅱ－2区の北部にあり、4号溝の西4.0～4.5 mにある南北溝で、北西側調査区外に続き、また土坑状の穴に数箇所を切られる。長さ7.5 m、幅0.8 m、深さ20㎝程で、規模は大きくないが、東側の4号溝と平行している。人為的な遺構であろうが、区画溝の一部であるかは不明。

17号溝（図版35・36、第68図）

Ⅱ－2区中央部にあり、2箇所で直角に近く屈曲し、南側に開く「コ」字形を呈する。溝の東側南北部分は、東の4号溝と1.5～2.0 mの間隔でほぼ平行する。17号溝は4号溝の西側の空間を方形に区画する溝であろうが、遺構の南西半部は流水によるものか大きく乱れており、本来存在したであろう南側の東西部分は失われている。溝は延長で50 m以上、比較的残存状況の良い東側で幅1.5 m、深さ30㎝。区画した範囲の南西部で石組み井戸1基を確認した。また、区画内周辺で多数の平面円形あるいは楕円形の小穴を検出したが、掘立柱建物柱掘形と認められるものは確認し得なかった。

出土遺物（図版56、第74図）

6～8は土師器坏で、底部は糸切り、復元底径6.0～7.9㎝。9・10は土師器皿であろう。底部は糸切りで、9は復元口径11.0㎝、復元底径6.4㎝、器高2.3㎝。10は復元底径4.0㎝。11～15は瓦質土器。11・12摺鉢で、11は軟質で器面の風化がみられる。12も軟質で、体部外面には二次焼成の



第 74 図　15・17・18・21 号溝出土遺物実測図（1 /3）

痕跡がみられ器面が剥落している。底径 12.4㎝。13 は火鉢で、底部を高台状に上底にし、さらに脚を貼り付ける。脚は装飾的なもので、棒状工具による穿孔がみられ、また脚の上には 1 条の突帯がめぐる。14 は鍋で、口縁端部は内側に屈曲し、復元口径 21.6㎝。また、体部内面は横方向のハケメ調整、外面下位には格子目の叩打痕が残り、外面には煤が付着する。15 は瓦質土器茶釜で、体部と底部の境は屈曲して平底気味になる。底部外面は火を受けて剥落しており、煤も付着する。復元体部最大径 22.0㎝。

18 号溝（図版 35・36、第 68 図）

Ⅱ－ 2 区南西部にあり、8 m分を検出した。北西－南東方向の溝で、これまで見た区画溝とは若干方向が異なる。幅 0.8 m、深さ 20 m。

出土遺物（図版 56、第 74 図）

16 は瓦質土器鍋で、口縁端部を内側に屈曲させ、体部内面はハケメ調整、外面はナデ調整。

19 号溝（図版 35・36、第 68 図）

Ⅱ－ 2 区南端部周辺には不整形の落ち状の遺構が大きく広がっている。この部分はⅡ－ 2 区内で最も低く、隣接する水田に水が入っている期間は常時水没していて最後まで手を付けられなかった。遺構は一部が大きく乱れるが、Ⅳ区との関係で溝と考えられる部分がある。19 号溝は、東側調査区外から西に 14 mのところで屈曲して北西に延びる。合計 24 m分を検出したが、遺構の西半部は大きく乱れている。東側で幅 1.0 m、深さ 20㎝。Ⅳ区の SX02 に対応する。

20 号溝（図版 35・36、第 68 図）

19 号溝の南にある東西方向の溝であるが、乱れが大きく判然としない。東端部で幅 1.3 m、深さ 30㎝。4 区の 1 号溝の延長である。

21 号溝（図版 35・36、第 68 図）

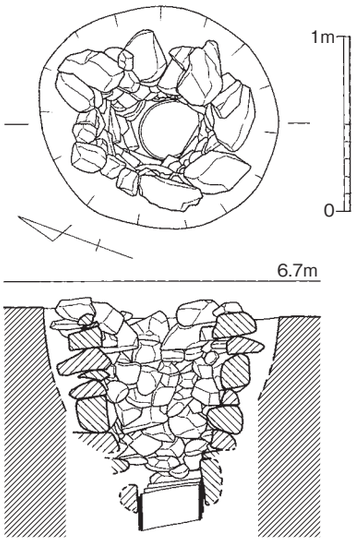
北西－南東方向の溝で、長さ 14 m、幅 0.4 ～ 1.1 m、深さ 15 m程度の不整形である。

出土遺物（図版 56、第 74 図）

17 は手捏ね土器で、壺形のもの。復元口径 4.2㎝、体部径 5.3㎝、器高 3.5㎝程度。18 は白磁椀で、口縁部に玉縁を持つ。胎土は灰白色で、釉は透明感のあるガラス質で細かい貫入が入る。19 は龍泉窯系の青磁椀で、内面には片切彫で草花文を描く。全面に施釉後、外底部は掻き取っており、体部前面に貫入が認められる。復元口径 16.2㎝、復元高台径 5.6㎝、器高 7.2㎝。

22 号溝（図版 35・36、第 68 図）

調査区南西端部で検出した東西溝で、長さ 4.5 m、幅 0.6 m、深さ 20㎝。Ⅳ区の 2 号溝の延長にあたる。



第 75 図　1 号井戸実測図
（1/40）

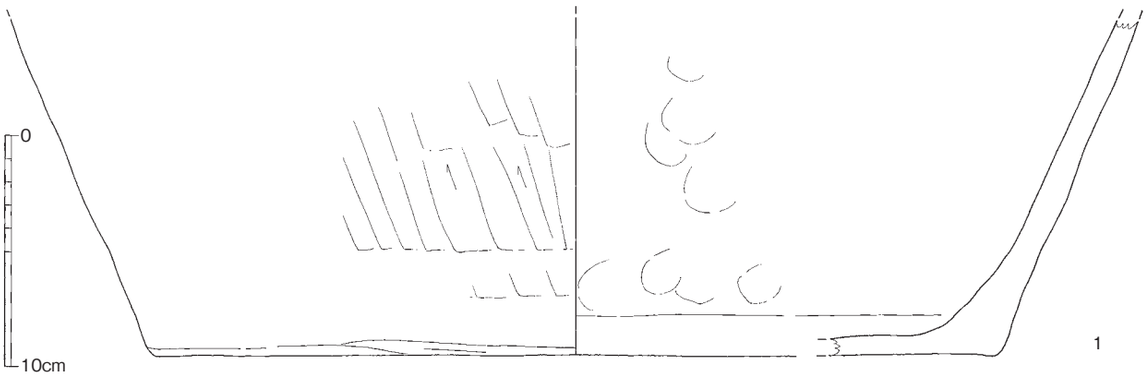
井戸

1 号井戸（図版 42、第 75 図）

17 号溝で囲まれた区画内の南西部で検出した石組み井戸である。堀形は径 1.25 ～ 1.35 mの平面円形で、深さは井筒下端部から判断して 1.25 m以上であろうが、湧水による崩落のために上部から 30㎝程度しか確認し得ていない。井側は掘形の中央部に自然石を円形からやや楕円形に積み上げ、径は上部で 65 × 50㎝、下部で 35㎝程度。石は最下段のみ縦位に据え、2 段目からは平積みで比較的粗く積み上げる。井筒には曲物を使用しており、径 35㎝、高さ 20㎝。

出土遺物（第 76 図）

1 は備前系の甕。内面は横方向のナデ調整で、工具痕、指頭痕が残り、外面は縦方向のケズリ調整の後ナデ調整、底部外面は不定方向のナデ調整。復元底径 36.0㎝。



第 76 図　1 号井戸出土遺物実測図（1/3）

小結

宝山桑ノ木遺跡では、区画溝と考えられる溝 22 条と、これに伴う井戸、土坑等を検出した。

工事の工程上の都合もあって、調査はⅡ区をさらに 3 地区に分割して順次行なった。調査時期が違い、条件も異なったため、Ⅱ－ 1 区ではⅡ－ 3 区で検出した 9・10 号溝の延長を確認し得ていない。また、Ⅱ -2 区北東部分では、重機で表土掘削作業をする過程で下げ過ぎたために、15 号溝の延長部分を失っている。

Ⅱ区では、規模の大きく平行して延びる 3 条の南北溝、4・8・14 号溝を基準として、これに挟まれた空間を比較的規模の小さな 5・6 号溝が 8 号溝と接続して方形に区画している。南側の 15 溝も 8 号溝とは接続しないものの同様な性格の区画溝と考えられ、また 4 号溝の西側の 17 号溝でも南半部は失われているが同じく方形に区画されている。区画の規模は、6・8 号溝で囲まれた最大部分で 34 mである。

これと同様な連続する区画は、宝山桑ノ木遺跡の他の調査区でも、また市道を挟んで北西に連続する宝山小出遺跡でも確認している。両遺跡は、溝が連続する部分もあり、一連の遺跡であることは確実である。二つを合わせれば延長で 400 mを超える長大な遺跡であり、区画溝の問題を含めて全体で考えたい。

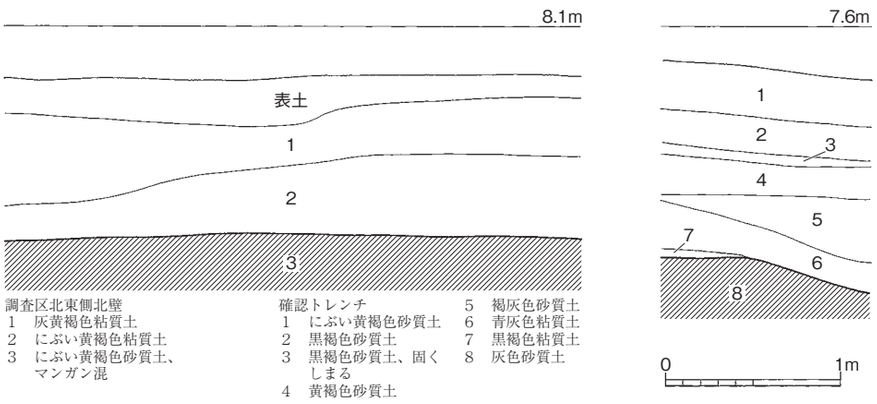
Ⅲ区

Ⅲ区は東九州自動車道建設に伴う宝山桑ノ木遺跡調査範囲の南西部にあたる。本遺跡には、既にⅠ・Ⅱ区として2パーティーで調査を行っていたが、工事予定の関係で急ぐ箇所であることから、Ⅲ区として城門が着手した。平成23年10月6日に重機を搬入し、同17日より建機を搬入し、人力による掘削を開始した。他の地点に比べ残りがよく、遺構の認識が易しかったため、西側より順に検出、遺構掘削を進めていった。調査地点は行橋PAの建設予定地内に当たり、区域内で工事が進められていた関係で着手状況に合わせて調整を行う必要があり、本調査期間においても設置したテントの移設や駐車場の変更など、その都度現地で協議を行った。11月15日にはほぼ全ての遺構掘削が終了したことからラジコンヘリによる写真撮影を行った。本調査区は、他の地点に比べて遺構面のレベルが高いことから、特に西側に関して下層に遺構がある可能性があった。そのため、11月21日に中央部及び西側に重機および人力によりトレンチを掘削した。遺構面からの深さ1mほどで青灰色粘質土が確認され、遺構・遺物は発見されなかった。また、その上層に黒色粘質土が確認されたが、この層からも遺物は認められなかった。下層が確認できなかったことから、11月22日に建機を撤収し、調査を終了した。なお、10月24日には本館事業の安全パトロールが行われ、副館長以下4名が来跡し、安全面等のパトロールを行った。

調査区内の地山は黄褐色粘質土ないしは褐灰色粘質土で、標高が低くなる東側では砂質土が地山となる。東側には旧河川が位置しており、河川堆積ならびに侵食作用によるものと推測される。遺構埋土は褐灰色粘質土、灰黄褐色粘質土である。

先に述べたように他の調査区に比べて1mほど上部で遺構面が検出され、遺構の残存も良好であった。当初は他の調査区と大きく遺構面の標高が異なるため、2面に分かれる可能性も想定し、中央部にトレンチを掘削した（第78図）。遺構面の1m下位で黒褐色粘質土が確認されたものの、遺物は発見できず、他のトレンチでも遺物は発見されなかった。また、標高が高い西側で、弥生時代～古墳時代の遺構が確認されていること、北側のⅡ区が中世を主体とする時期であることから、2面あった可能性は低いと考える。河川による堆積・侵食作用によって形成された丘陵であろうか。

検出された遺構は、土坑14基、溝25条、ピット多数である。時代は弥生時代が最も古く、古墳時代中後期、中世に属する。しかし、弥生時代～古墳時代までの遺構は希薄であり、中世を主体とする。



第78図　基本土層・確認トレンチ土層実測図（1/40）

土坑

土坑は調査区内で 14 基検出された。性格はいずれも不明である。

1 号土坑（図版 43、第 79 図）

調査区の南側に位置し、2 号土坑を切る。規模は 115 × 90cm、深さ 230cm の楕円形土坑である。掘削中は下層が粘質土であり、湧水が見られることから井戸と考えたが、遺構面からの深さ 70cm、北西寄りの位置で径 10cm 程の木杭が見つかった。200cm 以下は崩落の危険性があったため重機で掘削したが、底面に刺さっていることが確認された。杭には、上端から 40cm の位置で、8cm × 4cm、深さ 4cm の長方形孔が確認された。井戸枠の支柱の可能性もあるが臍穴などは確認されなかった。

出土遺物（第 82 図）

1 は瓦器椀である。口縁端部がやや肥厚し、内外面にミガキを施す。この他、後述する不明鉄製品が出土している。

切り合いと出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

2 号土坑（第 79 図）

調査区の南側に位置し、1 号土坑に切られる。規模は 110cm 以上 × 100cm、深さ 55cm の楕円形土坑である。規模は 1 号土坑と類似するものの浅く、レンズ状堆積をなす。

図化に耐えうる資料はなく、瓦器・土師器片が出土している。切り合いと出土小片から中世前期に属するものか。

3 号土坑（第 79 図）

調査区の北東側に位置する。規模は 140 × 100cm、深さ 30cm の長方形土坑である。南側の床面が若干高く、レンズ状を呈する。

図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。出土小片から中世に属するものか。

6 号土坑（第 79 図）

調査区の南西端に位置し、9 号溝を切る。規模は 160cm × 95cm 以上、深さ 30cm の方形土坑である。調査区外に伸びているため、全体の形態・規模は不明である。

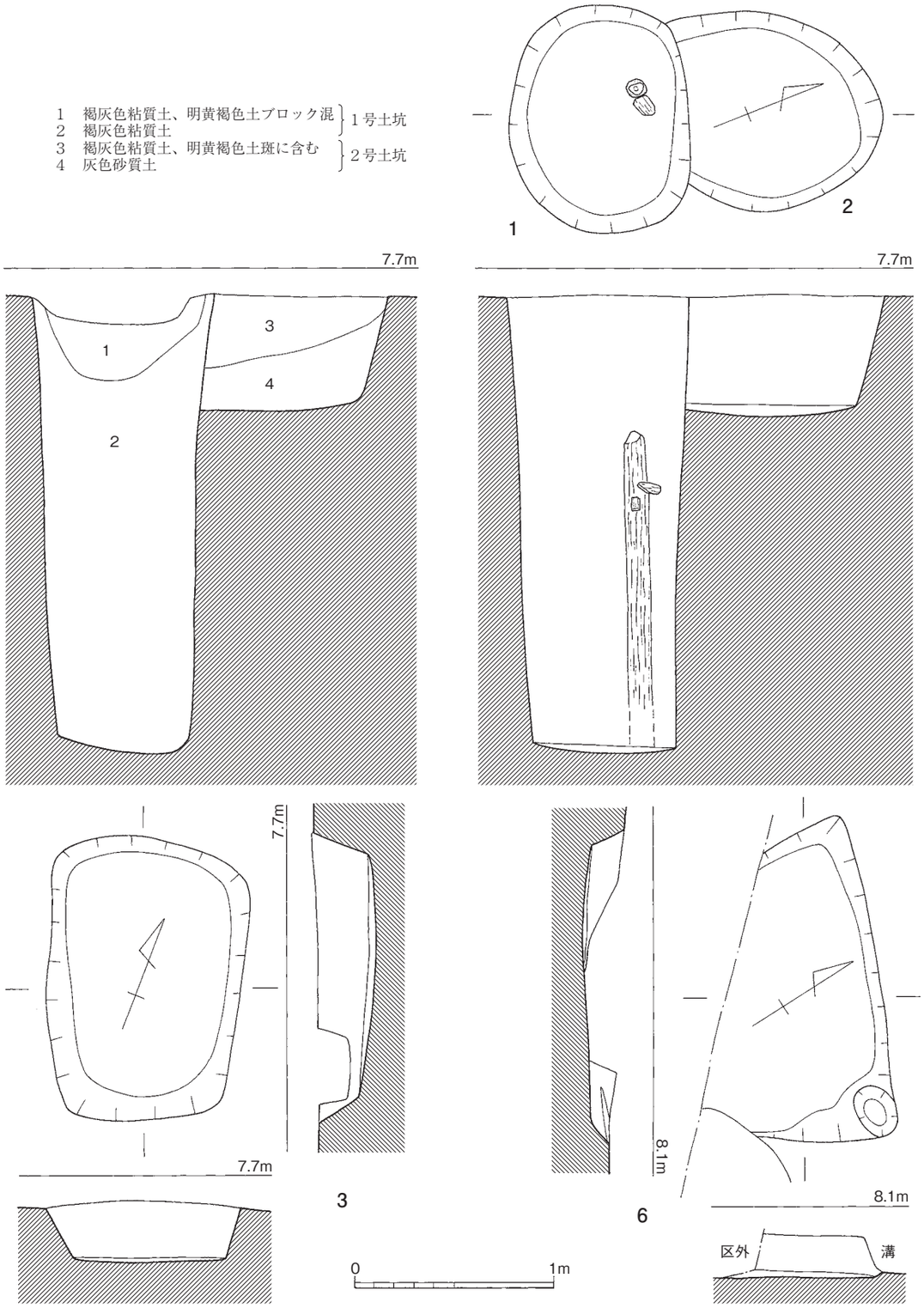
出土遺物（第 82 図）

2 は瓦器椀である。内外面にミガキを施す。3 は土師器の坏か。磨滅が著しいが底部に糸切の痕跡が残る。

切り合いと出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

4 号土坑（図版 43、第 80 図）

調査区の北端に位置し、20 号溝を切る。規模は 300cm × 270cm 以上、深さ 60cm の不整形土坑である。調査区外に伸びており、全体の形態・規模は不明である。床面からいくつかのピットが検出された。



第 79 図　1 ～ 3・6 号土坑実測図（1/30）

出土遺物（第 82 図）

4 は瓦器椀である。断面三角形で低い高台が付き、内外面共にミガキを施す。5 は瓦質土器の擂鉢である。底部に 4 本 1 単位の擦り目が残る。6・7 は青磁碗である。6 は底部内面に花弁文様、7 は流水文が施される。この他、後述する鉄鏃が出土している。

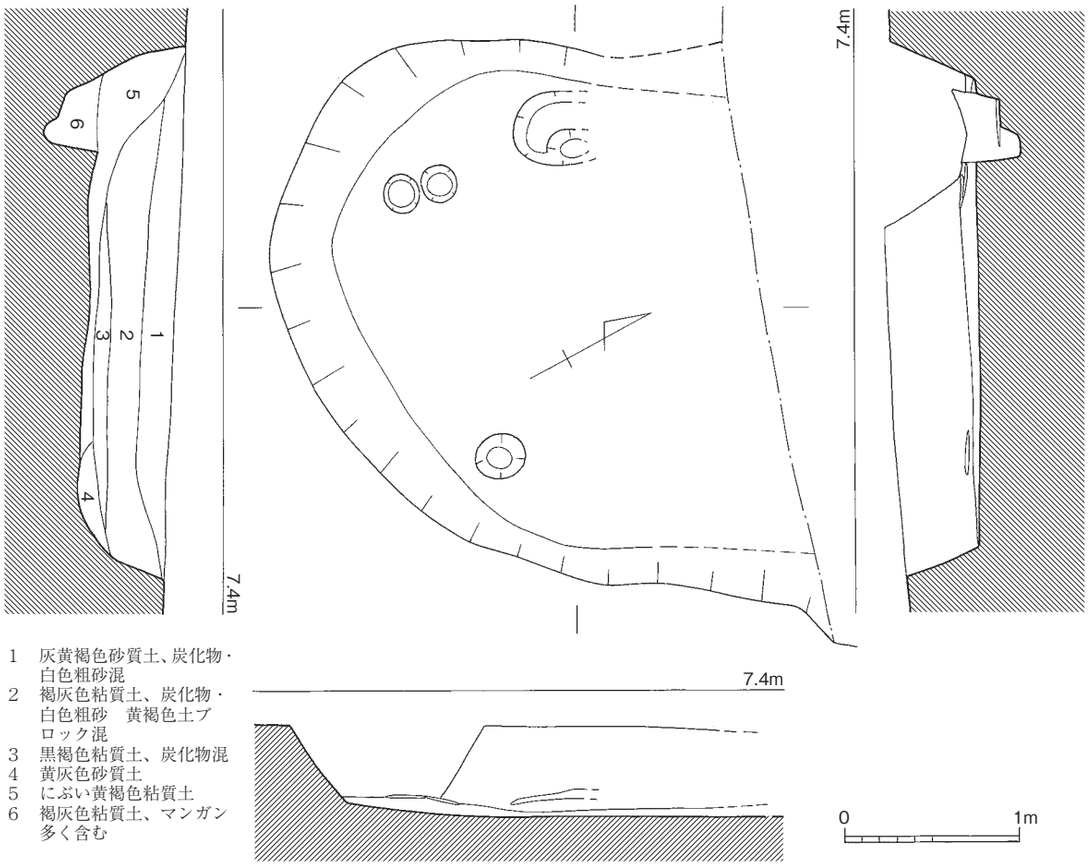
切り合いと出土遺物から、12 ～ 13 世紀に属するものと考えられる。

5 号土坑（図版 44、第 81 図）

調査区の西側に位置し、8・9 号溝を切り、5 号溝に切られる。規模は 420 × 350cm、深さ 50cm の長方形土坑である。掘削時は住居跡の可能性を考えていたものの、床面から柱穴が確認されず、土坑とした。

出土遺物（第 82 図）

8・9 は瓦器椀である。共に内外面共にミガキを施す。10 は白磁の皿か。底部外面は露胎となる。11･12 は青磁椀である。11 は外面に蓮弁文、12 は線描きの文様が見られる。13 は弥生土器の鉢である。磨滅が著しいが、内面にナデが残る。14・15 は高坏である。14 は口縁部内外面ヨコナデ、坏部内面ミガキ、外面ハケ後ミガキを施す。外面に黒斑が見られる。15 は脚部のみが遺存し、4 孔が穿たれる。13 ～ 15 は弥生時代終末～古墳時代初頭の混入品か。この他、後述する砥石が出土している。



第 80 図　4 号土坑実測図（1/40）

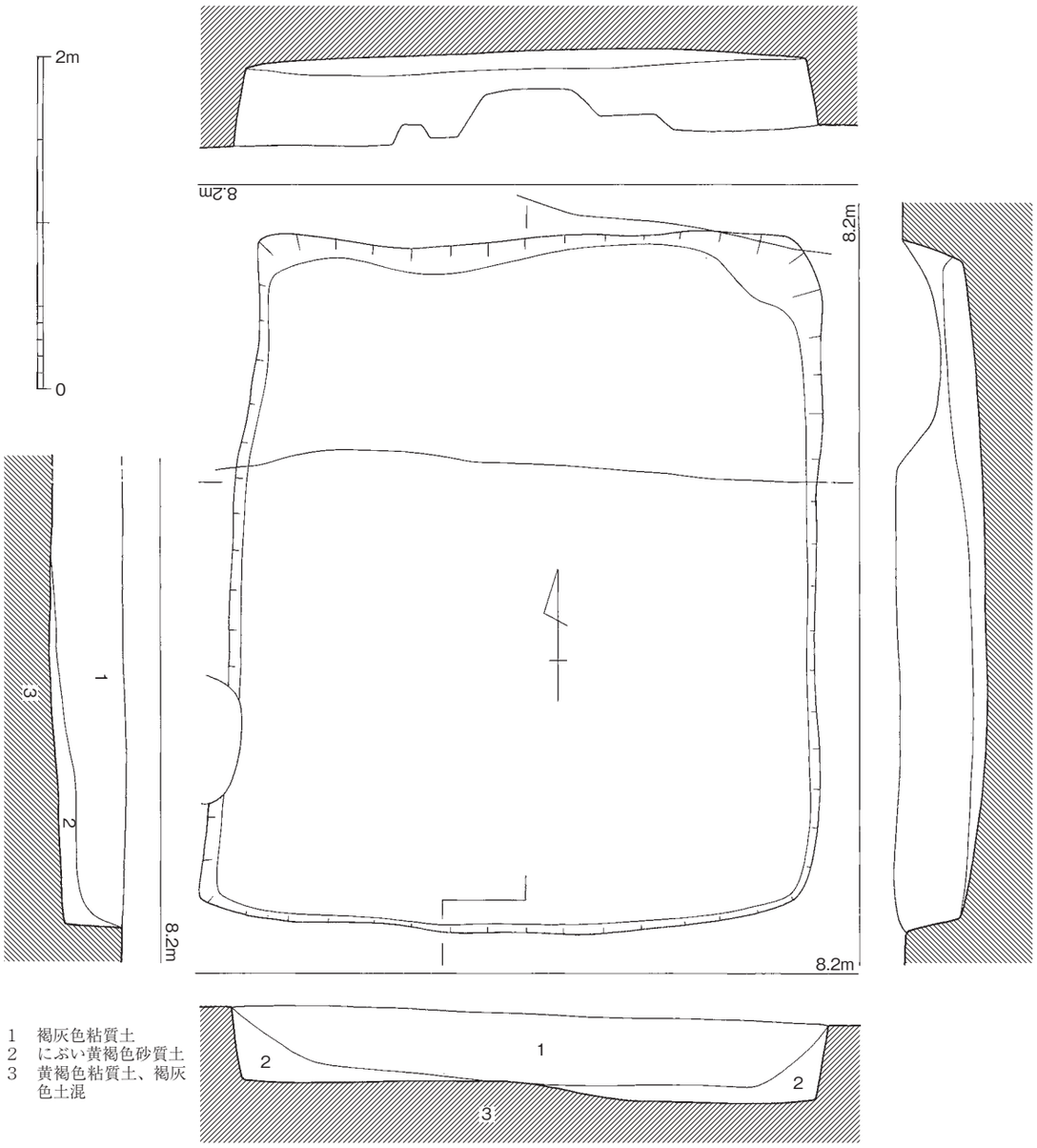
切り合いと出土遺物から、12 ～ 13 世紀に属するものと考えられる。

7 号土坑（図版 44、第 83 図）

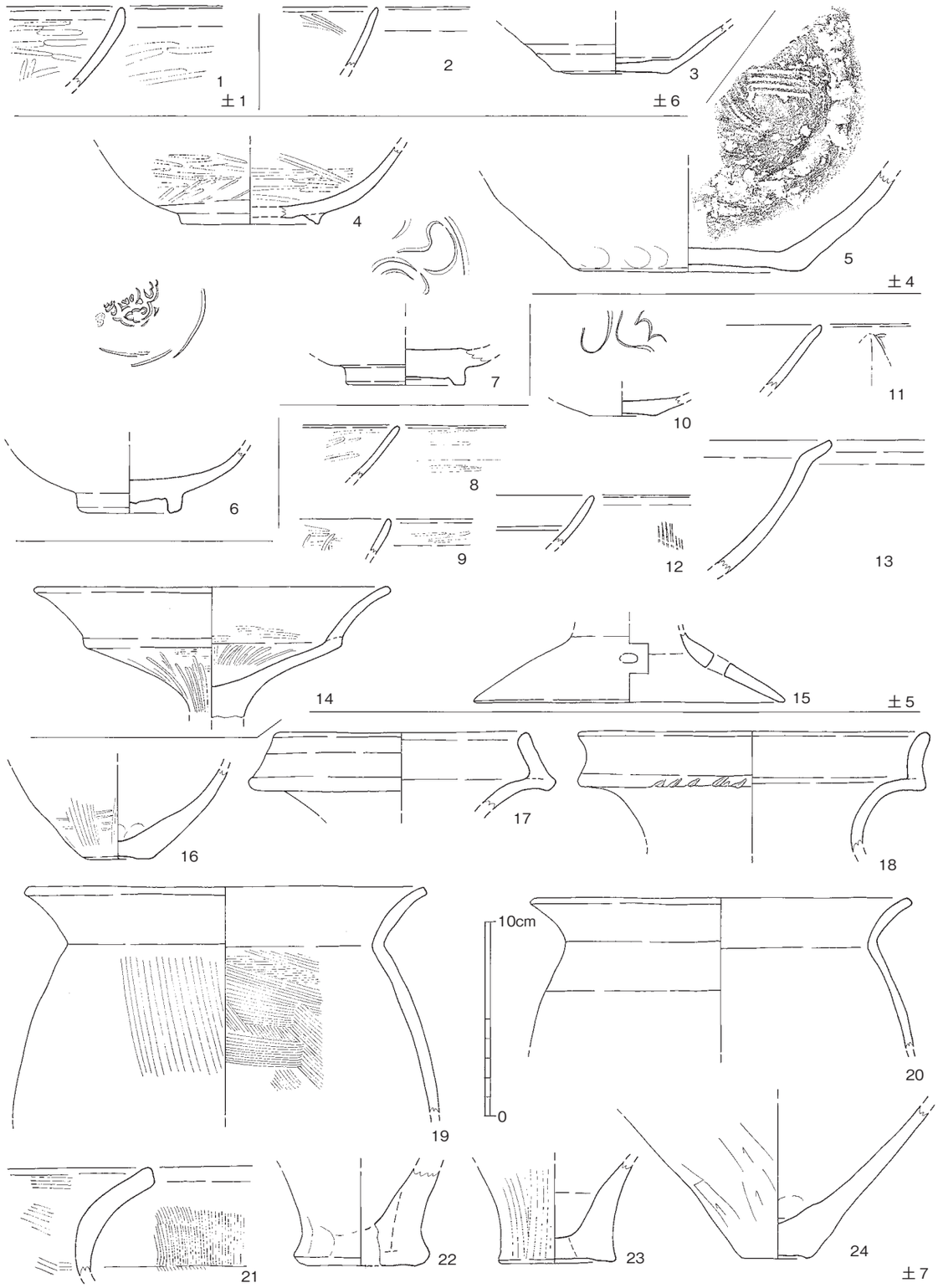
調査区の南東側に位置し、20 号溝に切られる。規模は 360cm 以上× 160cm、深さ 20cm の長楕円形土坑である。床面からやや浮いた位置で土器が多量に出土しており、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第 82・84 図）

16 ～ 18 は壷である。16 は小型の壷で、外面タタキ後ハケを施す。17・18 は二重口縁壷である。17 は内外面共にヨコナデを施し、18 は磨滅が著しいが屈曲部に一部キザミが残る。19 ～ 24 は甕である。19 は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ハケを施す。外面に黒斑が見られる。20 は磨滅のため調整不明である。21 は口縁部のみが遺存し、外面ハケ、内面ハケ後ナデを施す。22 ～ 24 は



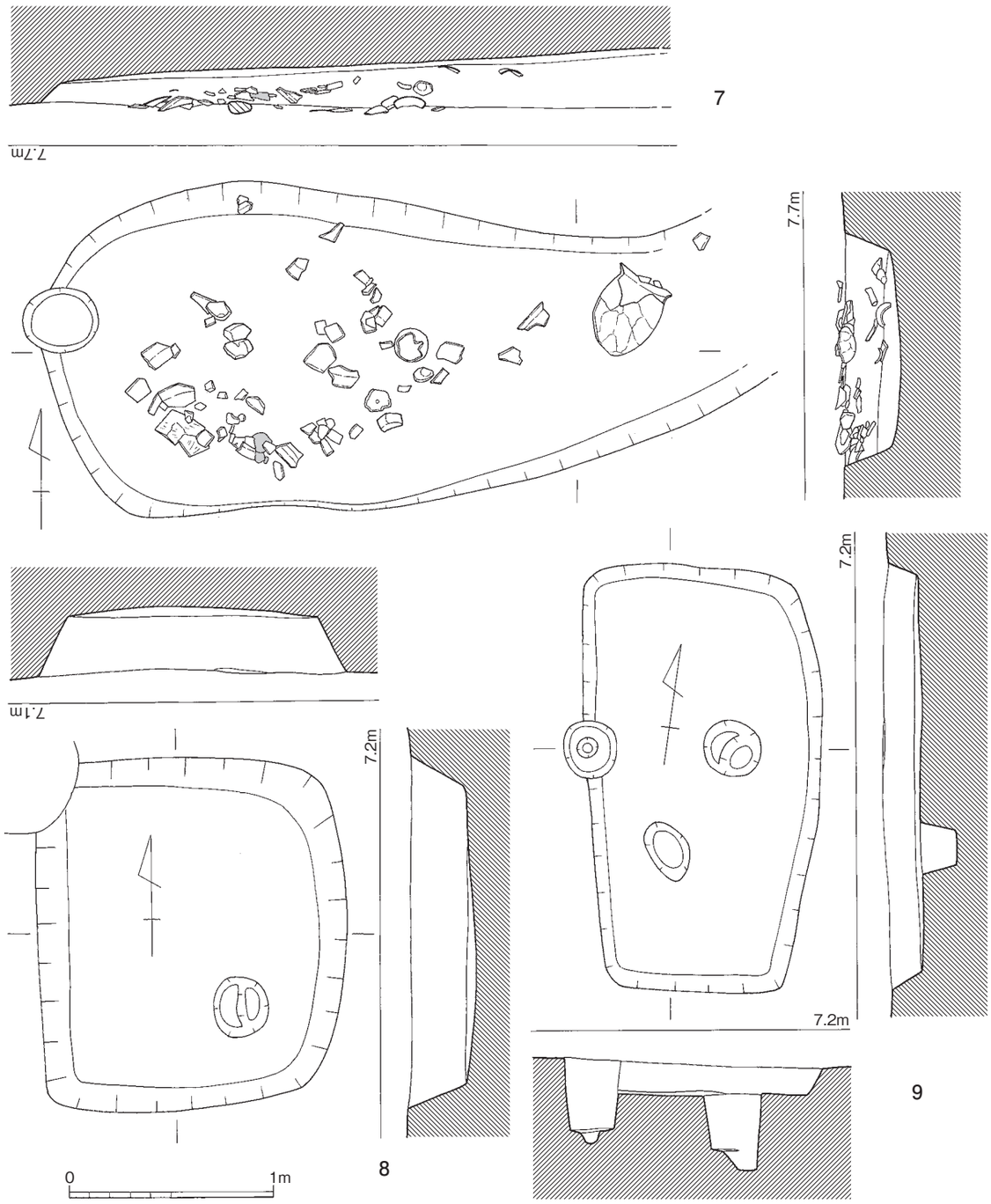
第 81 図　5 号土坑実測図（1/40）



第 82 図　1・4 ～ 7 号土坑出土遺物実測図（1/3）

底部である。いずれも平底で、24 は底径が小さい。22 は内外面ナデ、23 は内外面ハケ、24 は外面ケズリ、内面ナデを施す。第 84 図 1・2 は高坏である。口縁部が強く外湾する。磨滅が著しいが、外面にハケが残る。3 は椀である。混入品か。4 は支脚である。磨滅するが、外面ハケ、内面指頭圧痕が残る。5・6 は器台である。上方が大きく抉れるタイプである。共に磨滅が著しいが、5 の内面にケズリが残る。この他、後述する管玉が出土している。

切り合いと出土遺物から、弥生時代後期後半～終末に属するものと考えられる。



第 83 図　7 ～ 9 号土坑実測図（1/30）

8 号土坑（第 83 図）

調査区の北東寄りに位置する。規模は 170 × 150cm、深さ 30cm の長方形土坑である。床面はわずかに中央が低くなる。出土遺物はなく、時期等は不明である。

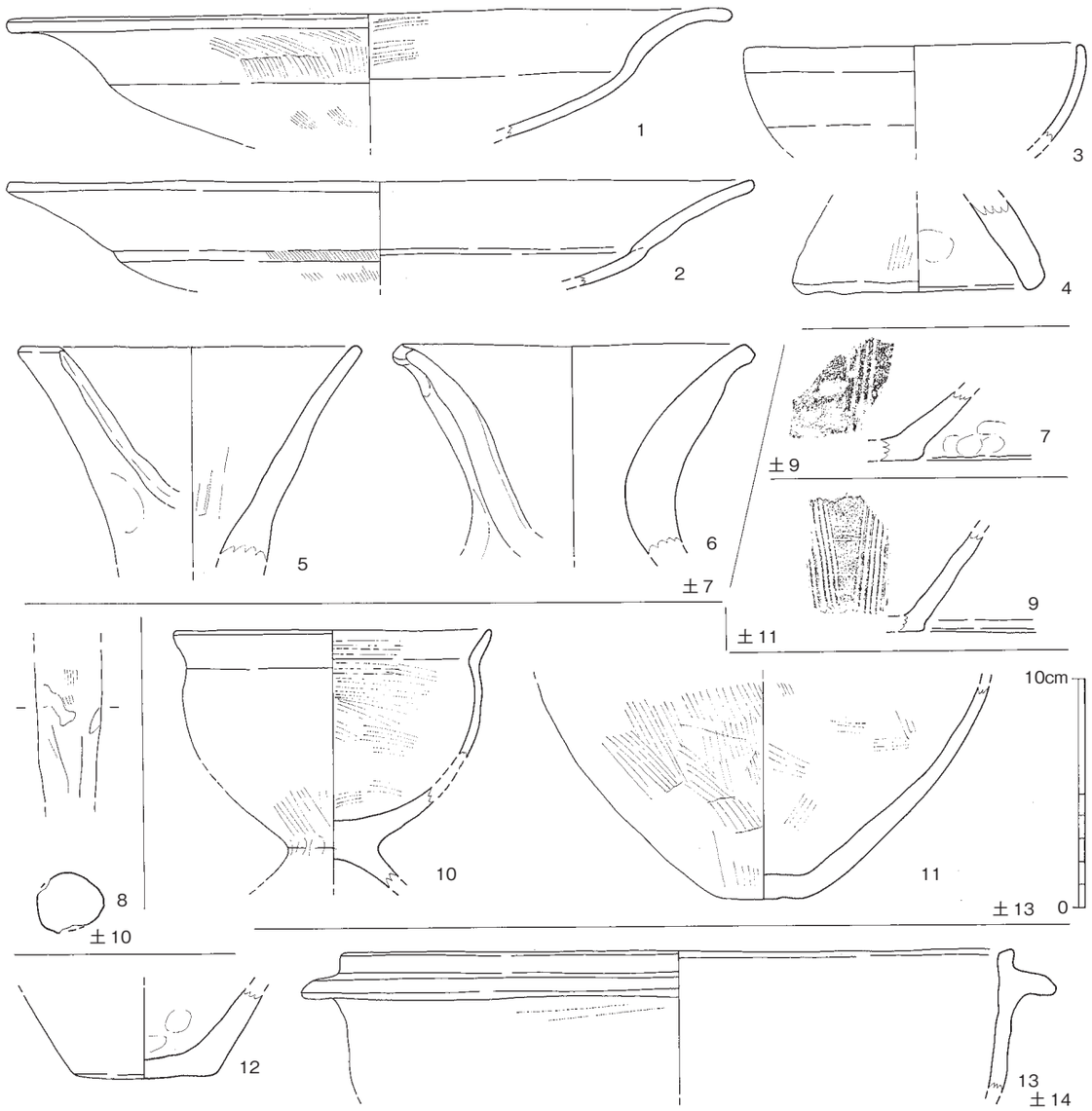
9 号土坑（第 83 図）

調査区の北東よりに位置する。規模は 210 × 120cm、深さ 15cm の長方形土坑である。床面で径 20 ～ 30cm、深さ 20、40cm のピットが 2 基検出された。

出土遺物（第 84 図）

7 は瓦質土器の擂鉢である。内面に 4 本 1 単位の擦り目が見られる。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。



第 84 図　7・9 ～ 11・13・14 号土坑出土遺物実測図（1/3）

10 号土坑（第 85 図）

調査区の北東側に位置する。規模は 340cm 以上× 240cm、深さ 50cm の不定形土坑である。北側を試掘トレンチに切られる。中央の幅 110cm 程が深くなっており、本来は長方形土坑であった可能性もある。

出土遺物（第 84 図）

8 は瓦質土器鍋の脚部か。全体にナデを施す。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

11 号土坑（第 85 図）

調査区の北東側に位置する。規模は 130 × 80cm、深さ 50cm の長方形土坑である。断面台形で、床面は中央がやや低くなる。

出土遺物（第 84 図）

9 は瓦質土器の擂鉢である。内面に 5 本以上 1 単位の擦り目が見られる。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

12 号土坑（第 85 図）

調査区の東側に位置し、24 号溝を切る。規模は径 200cm、深さ 50cm の円形土坑である。断面台形を呈し、床面はほぼ水平をなす。

図化に耐えうる資料はなく、土師器･陶磁器片が出土している。出土小片から中世に属するものか。

13 号土坑（第 86 図）

調査区の南東側に位置する。規模は 310 × 75cm、深さ 30cm の長楕円形土坑である。床面から 10cm ほど浮いた位置で土器が出土している。床面はほぼ水平であるが、西端のみやや深くなる。

出土遺物（第 84 図）

10 は脚付鉢か。磨滅が著しいが、胴部内外面ハケ、脚部内面ナデが残る。胴部・脚部内面に黒化が見られる。11 は壷か。平底を呈し、内外面ハケ後ナデを施す。内面に黒化が見られる。

出土遺物から弥生時代後期後半～終末に属するものと考えられる。

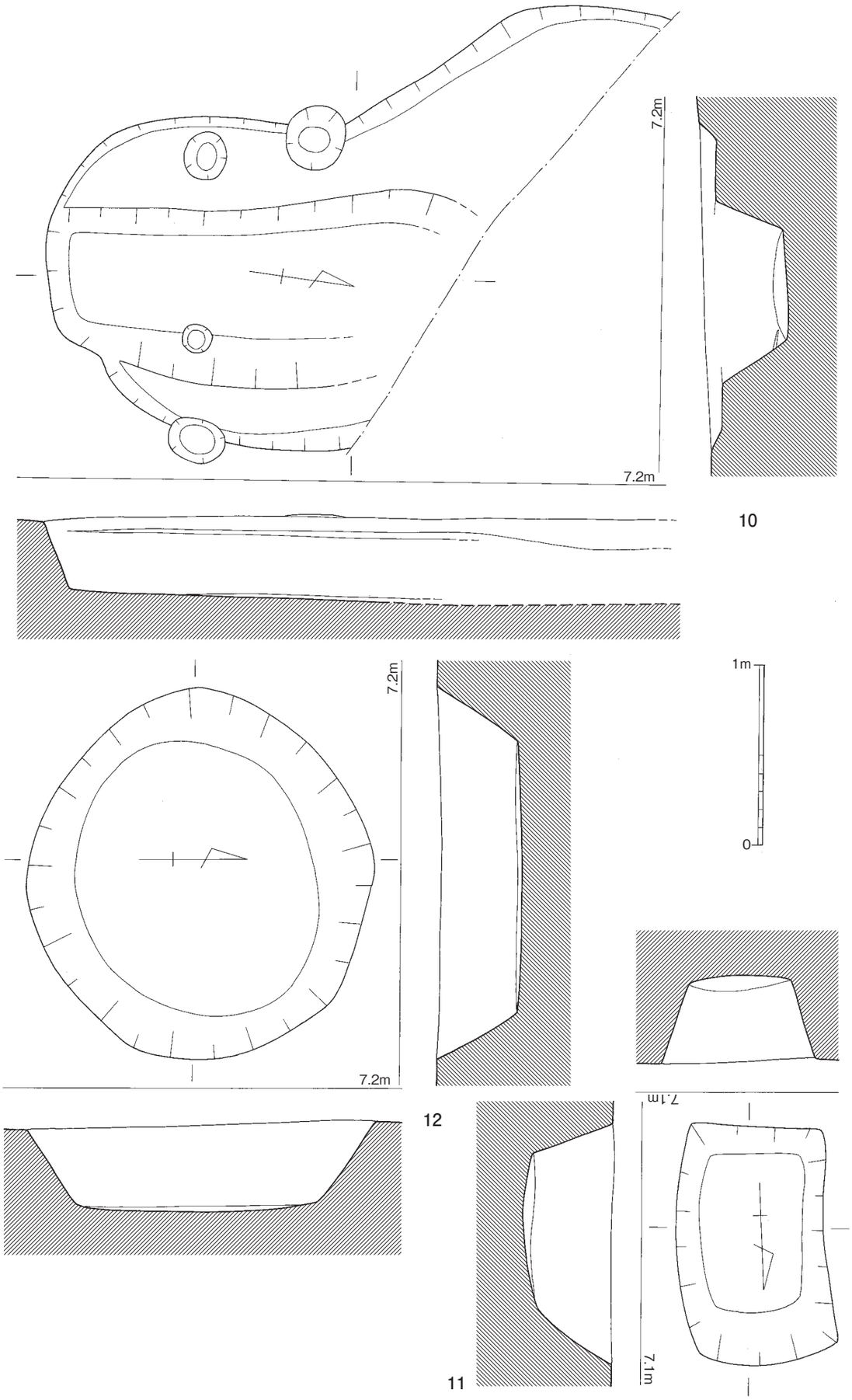
14 号土坑（第 86 図）

調査区の北側に位置し、6・20 号溝に切られる。規模は 185 × 125cm、深さ 180cm の長方形土坑である。床面は中央部が低くなる。

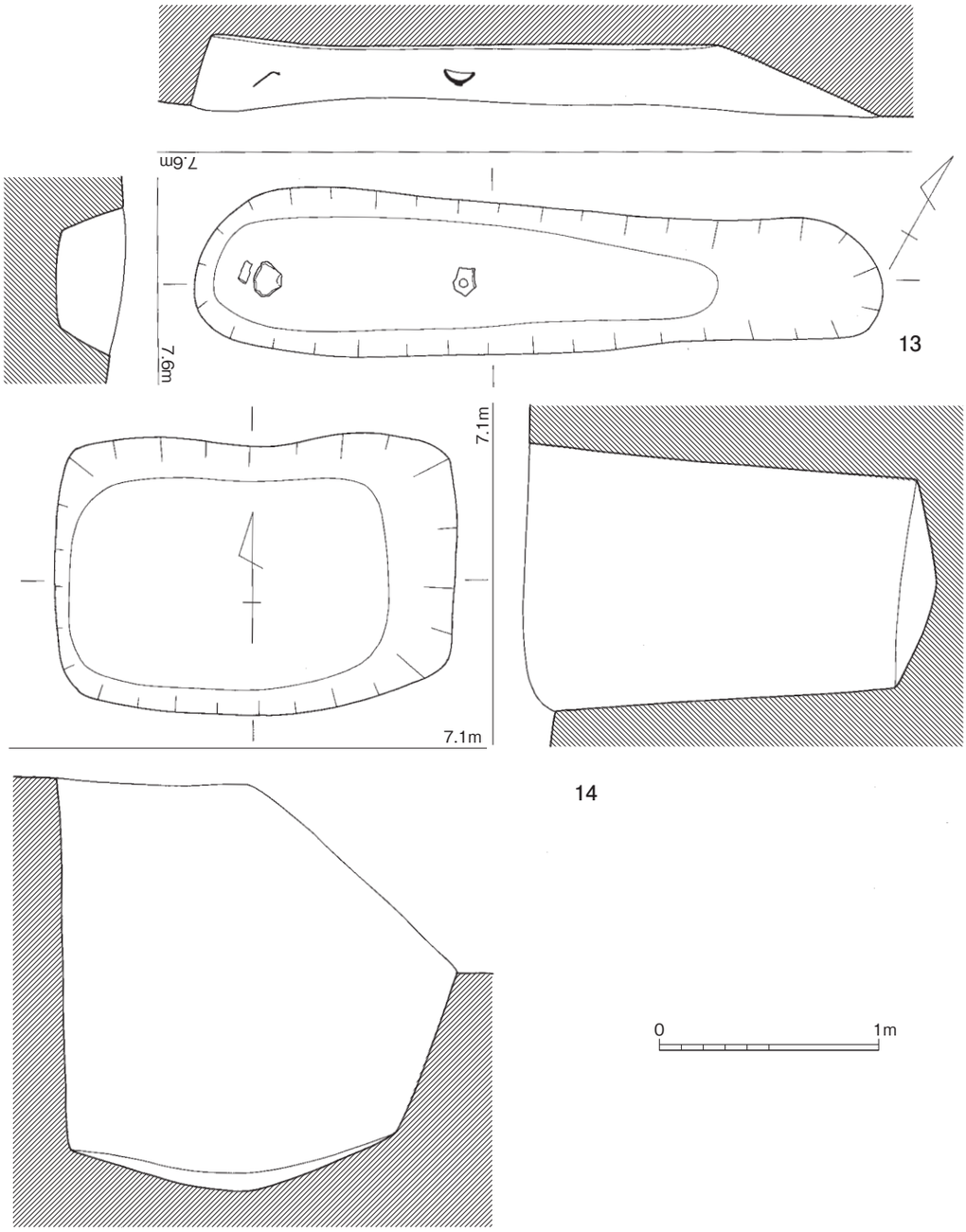
出土遺物（図版 57、第 84・87 図）

12 は土師器の甕か。磨滅のため調整は不明である。外面に黒斑が見られる。13 は土師器の釜である。口縁下に高さ 2cm 程の突帯が 1 条付される。口縁部外面ヨコナデ、他はナデを施す。第 87 図の 1 ～ 4 は土師器の鍋である。いずれも外面に煤が付着し、内面にハケを施す。鍋破片は他にも多く出土しており、4 個体以上あったものと考えられる。

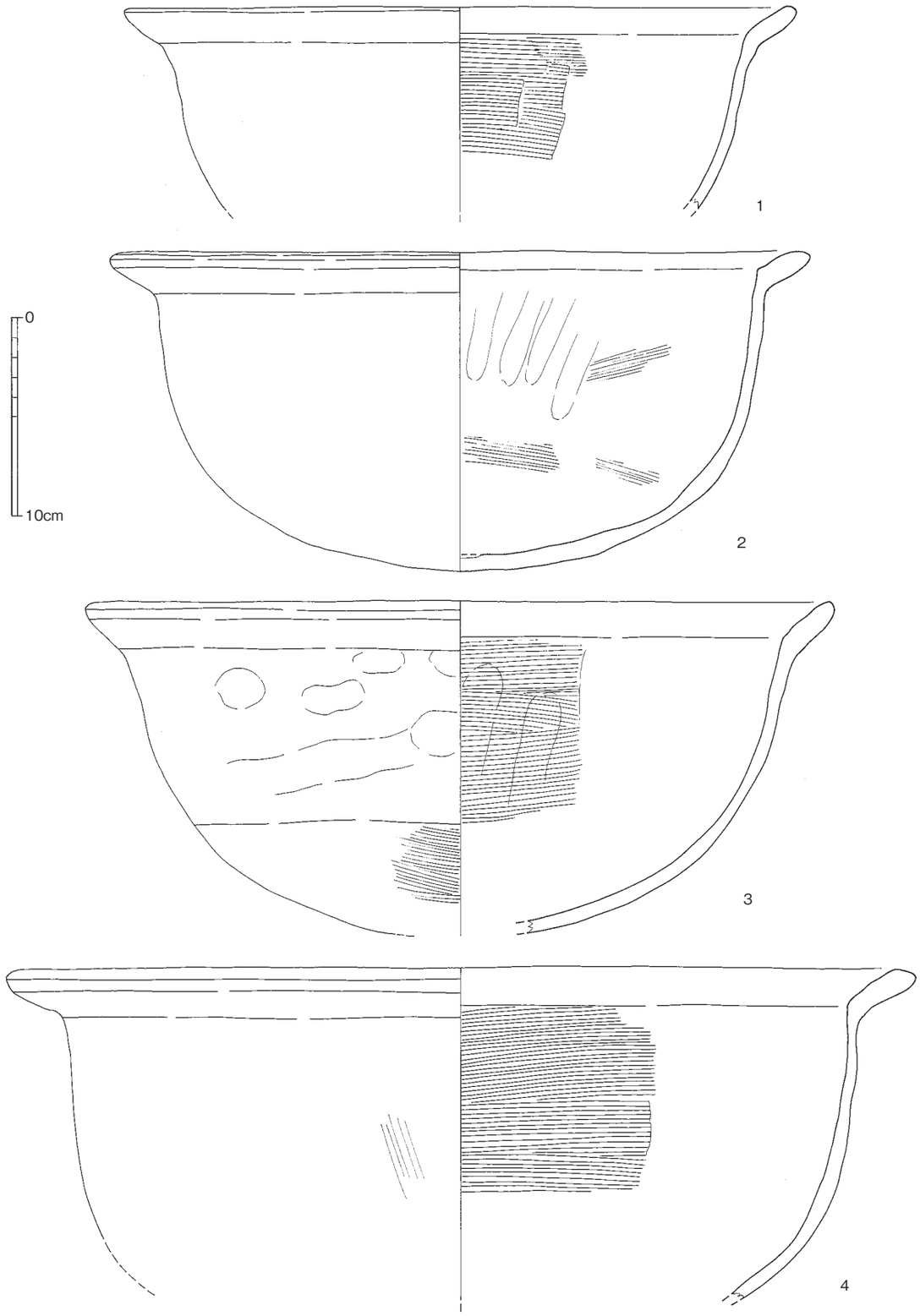
切り合いと出土遺物から、10 世紀後半～ 11 世紀に属するものと考えられる。



第 85 図　10 ～ 12 号土坑実測図（1/30）



第 86 図　13・14 号土坑実測図（1/30）



第 87 図　14 号土坑出土遺物実測図（1/3）

溝

溝は調査区内で25条検出された。調査区が狭いためか、Ⅰ・Ⅱ区で確認されたような区画溝は確認できず、性格はいずれも不明である。

1号溝

調査区の北西端に位置し、3号溝を切り、4号溝に切られる。規模は長さ4.5m以上、幅0.7m、深さ25cmで西流する。調査区外に続いており、全体の規模は不明である。

図化に耐えうる資料はなく、土師器・陶磁器片が出土している。出土小片から中世に属するものと考えられる。

2号溝

調査区の西端に位置し、3号溝を切る。規模は長さ6.5m、幅1.2m、深さ20cmで床面はほぼ水平である。西側に行くほど幅が広くなっており、調査区外に伸びる。

出土遺物（第88図）

1は青磁の椀か。口縁のみが遺存する。2は瓦質土器の火鉢である。胴部下位に断面蒲鉾形の突帯が1条付される。この他、後述する土錘が出土している。

切り合いと出土遺物から15世紀前後に属するものか。

3号溝

調査区の西側に位置し、1・2・5号溝に切られ、7号溝を切る。規模は長さ5.2m、幅2.4m、深さ40cmで南流する。2号溝に切られ、2号溝以南は幅130cmと西側に拡大して検出されたが、埋土の状況などから同一遺構と考えられる。北端に向かって幅が狭くなることから、不定形の土坑であった可能性もある。

出土遺物（図版57、第88図）

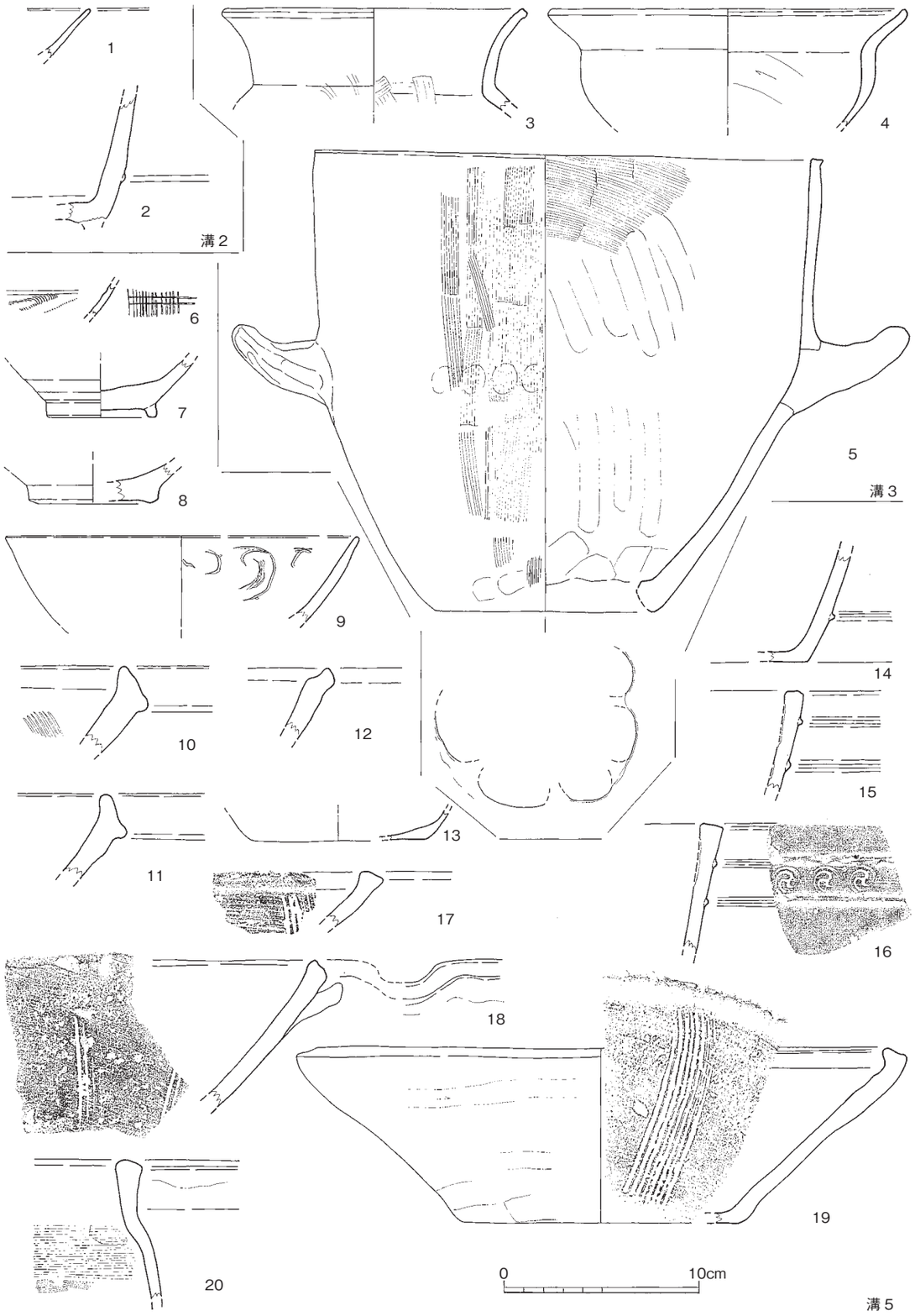
3は土師器の壺である。口縁端部がわずかに外方に突出する。磨滅が著しいが、外面ハケ、内面工具によるナデが残る。4は鉢である。口縁端部が上方にわずかに突出する。磨滅が著しいが胴部内面にケズリが残る。5は甑である。口縁端部がわずかに外方に突出し、把手は差し込み式である。外面ハケ、内面上部ハケ、中位から下位ケズリ後ナデ、下端ケズリを施す。底部は欠損するものの7つほどの孔があったものと考えられる。

切り合いと出土遺物から、古墳時代後期前半頃に属するものと考えられる。

4号溝

調査区の北西側に位置し、1号溝を切る。規模は長さ6.7m、幅0.2m、深さ30cmで東流する。当初は埋土から撹乱の可能性も考えたが、新しい遺物の出土がなかったため溝としている。

図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。切り合いと出土小片から中世に属するものと考えられる。



第88図　2・3・5号溝出土遺物実測図（1/3）

5 号溝

調査区の西端から中央にかけて位置し、5 号土坑、5 ～ 7 号溝を切る。規模は長さ 17.5m、幅 1.85m、深さ 35cm で東流する。東側に行くほど浅くなっており、削平されたものと考えられる。

出土遺物（第 88 図）

6 は青磁の皿である。龍泉窯系である。7・8 は白磁椀である。共に外面は露胎となる。9 は青磁椀である。内面に流水文が施される。10・11 は陶器の擂鉢である。小片のため擦り目の単位は不明である。12 は土師器の鍋か。ヨコナデを施す。13 は土師器の坏か。磨滅のため調整は不明である。14 ～ 16 は瓦質土器の火鉢である。いずれも外面に断面蒲鉾形の突帯が付される。16 は 2 条の突帯間に巴文のスタンプが付される。17 ～ 19 は瓦質土器の擂鉢である。18 は受口が残り、内面に 4 本 1 単位の擦り目が付される。外面ケズリ後ナデ、内面ヨコハケが施される。19 は内面にハケ後 8 本 1 単位の擦り目、外面ケズリ後ナデが施される。20 は瓦質土器の甕か。口縁部ヨコナデ、胴部外面ナデ、内面ハケを施す。この他、後述する不明鉄製品が出土している。

切り合いと出土遺物から、13 ～ 15 世紀に属するものと考えられる。

6 号溝

調査区の西側から中央北寄りにかけて位置し、5 号溝に切られ、14 号土坑、20 号溝を切る。規模は長さ 22.3m、幅 1.1m、深さ 20cm で東流する。

出土遺物（第 89 図）

1 は瓦質土器の鉢である。外面ケズリ後ナデ、内面ハケを施す。2 は瓦質土器の擂鉢である。外面ケズリ、内面 4 本 1 単位の擦り目を施す。3 は弥生土器の甕である。口縁下に断面三角形の突帯を付す。混入品である。

切り合いと出土遺物から、中世前期に属するものと考えられる。

7 号溝

調査区の西側に位置し、3･5･6 号溝に切られる。規模は 3.1m、幅 0.4m 以上、深さ 15cm で東流する。

図化に耐えうる資料はなく、土師器・須恵器片が出土している。切り合いと出土小片から古墳時代後期に属するものと考えられる。

8 号溝

調査区の南西側に位置し、5 号土坑に切られる。規模は長さ 8.6m、幅 0.6m、深さ 15cm で、床面はほぼ水平である。9 号溝と 60cm 程の間隔を持って並行する。

出土遺物（第 89 図）

4 は瓦質土器の鉢か。外面ケズリ後ナデ、内面ナデを施す。5 は須恵器の蓋である。回転ナデを施す。この他、後述する石剣が出土している。

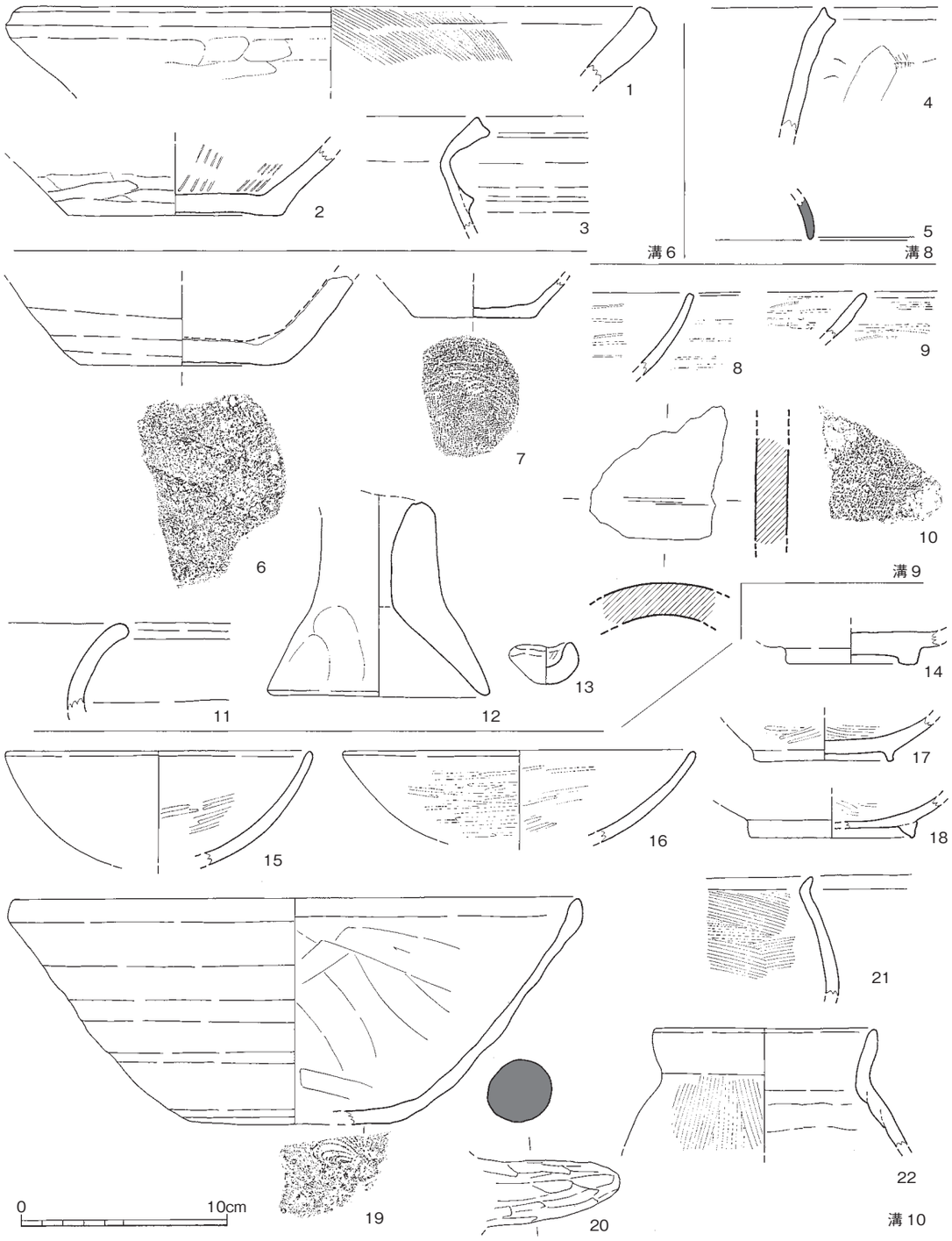
弥生時代および古墳時代後期の遺物が見られるものの、切り合いから中世前期に属するものと考えられる。

9 号溝

調査区の南西側に位置し、5・6 号土坑に切られる。規模は長さ 8.4m、幅 0.6m、深さ 20cm で南流する。8 号溝と 60cm 程の間隔を持って並行する。

出土遺物（図版 57、第 89 図）

6 は瓦質土器の甕ないしは鉢か。磨滅が著しいが、底部外面に木目状の痕跡が見られる。7 は土



第 89 図　6・8 ～ 10 号溝出土遺物実測図（1/3）

師器の坏である。磨滅が著しいが、底部に糸切が見られる。8・9は瓦器椀である。内外面共にミガキを施す。10は丸瓦である。外面ナデを施し、内面には布目痕が残る。11は土師器の壷か。磨滅のため調整は不明である。12は支脚である。磨滅のため調整は不明である。13は手づくね土器である。ユビナデで全体を調整する。この他、後述する銭貨が出土している。

いくつか古墳時代に属すると考えられる遺物が出土しているものの、切り合いから中世前期に属するものと考えられる。

10号溝

調査区の南西側から中央にかけて位置し、11号溝を切る。規模は長さ13m、幅0.85m、深さ30cmで東流する。溝の中央部までは床面がほぼ水平であるが、そこから徐々に低くなる。

出土遺物（第89図）

14は青磁椀である。高台部から内面が露胎となる。15～18は瓦器椀である。一部磨滅するが概ね内外面ともミガキを施す。19は瓦質土器の鉢である。底部に糸切の痕跡が見られる。内面工具ナデ、外面ヨコナデを施す。20は須恵器の把手である。全体にケズリ状の調整で仕上げる。21・22は土師器の壷である。共に口縁が緩やかに屈曲し、21は内面ハケ、22は外面ハケ、内面ナデを施す。11号溝の混入品か。

一部古墳時代の混入品が見られるも、切り合いから、12世紀頃に属するものと考えられる。

11号溝

調査区の中央やや南西寄りに位置し、10号溝に切られ、12号溝を切る。12号溝との切り合いは誤認した可能性がある。規模は長さ4.2m、幅0.7m、深さ30cmである。中央部の80cm程がピット状に1mほど低くなっており、遺構が切りあっていた可能性がある。

出土遺物（第90図）

1は土師器の壷である。口縁がほぼ直立する。磨滅が著しいが、外面ハケ、内面ケズリが残る。2は高坏である。磨滅のため調整は不明である。3は甑である。底部に6孔を穿つ。外面ケズリ、内面ナデを施す。

切り合いと出土遺物から、古墳時代中期後半～後期前半に属するものと考えられる。

12号溝

調査区の南西側に位置し、11号溝に切られ、14・18号溝を切る。11号溝との切り合いは誤認した可能性がある。規模は長さ8m、幅0.3m、深さ15cmである。床面は凹凸があるが低い方向等は明確でない。13号溝と1.2mの間隔を持って並行する。

図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。切り合いと出土小片から中世に属するものと考えられる。

13号溝

調査区の南西側に位置する。規模は長さ7.7m、幅0.3m、深さ10cmで南流する。12号溝と1.2mの間隔を持って並行する。

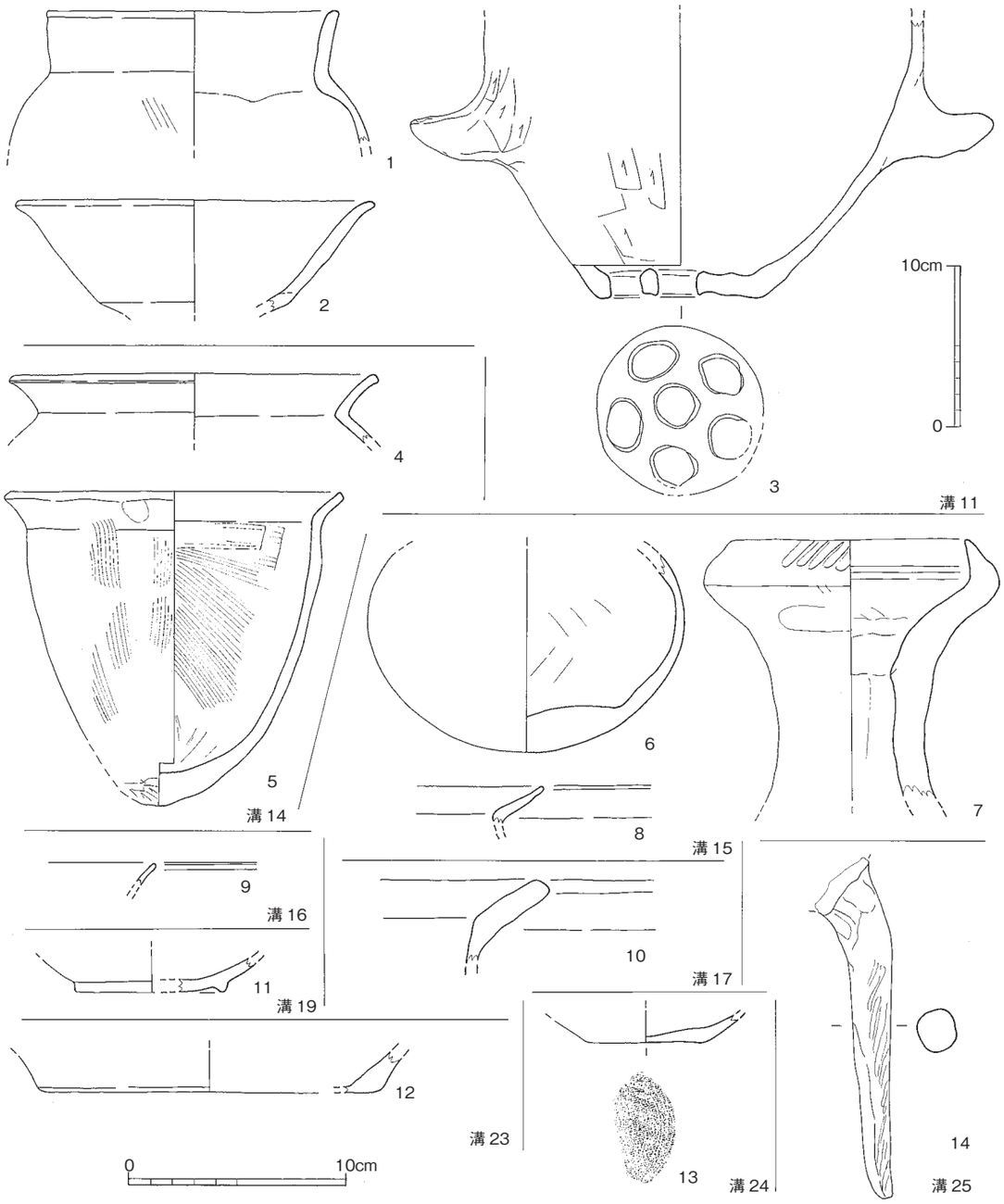
図化に耐えうる資料はなく、土師器片が出土している。切り合いと出土小片から中世に属するものと考えられる。

14 号溝

調査区の南西側に位置し、12 号溝に切られる。規模は長さ 2.9m、幅 0.7m、深さ 15cm で東流する。

出土遺物（第 90 図）

4 は甕である。口縁部ヨコナデ、胴部内面ナデを施す。5 は鉢である。口縁部ヨコナデ、胴部内



第 90 図　11・14 ～ 17・19・23 ～ 25 号溝出土遺物実測図（1/3、3 は 1/4）

外面ハケ、底部外面ケズリを施す。

切り合いと出土遺物から、弥生時代終末～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

15 号溝（第 91 図）

調査区の西側に位置する。規模は長さ 4m、幅 1m、深さ 10cm で東流する。床面からピットがいくつか検出されているが、溝に伴うものであるかは不明である。床面から土器が出土している。

出土遺物（第 90 図）

6 は壷である。底部が厚く、外面ナデ、内面工具後ナデを施す。床面出土。7 は袋状口縁壷である。口縁端部にタタキ状の窪みが見られ、内外面ナデ、一部指頭圧痕を施す。床面出土。8 は甕である。口縁部のみが遺存し、ナデを施す。

出土遺物から、弥生時代後期前半～中頃に属するものと考えられる。

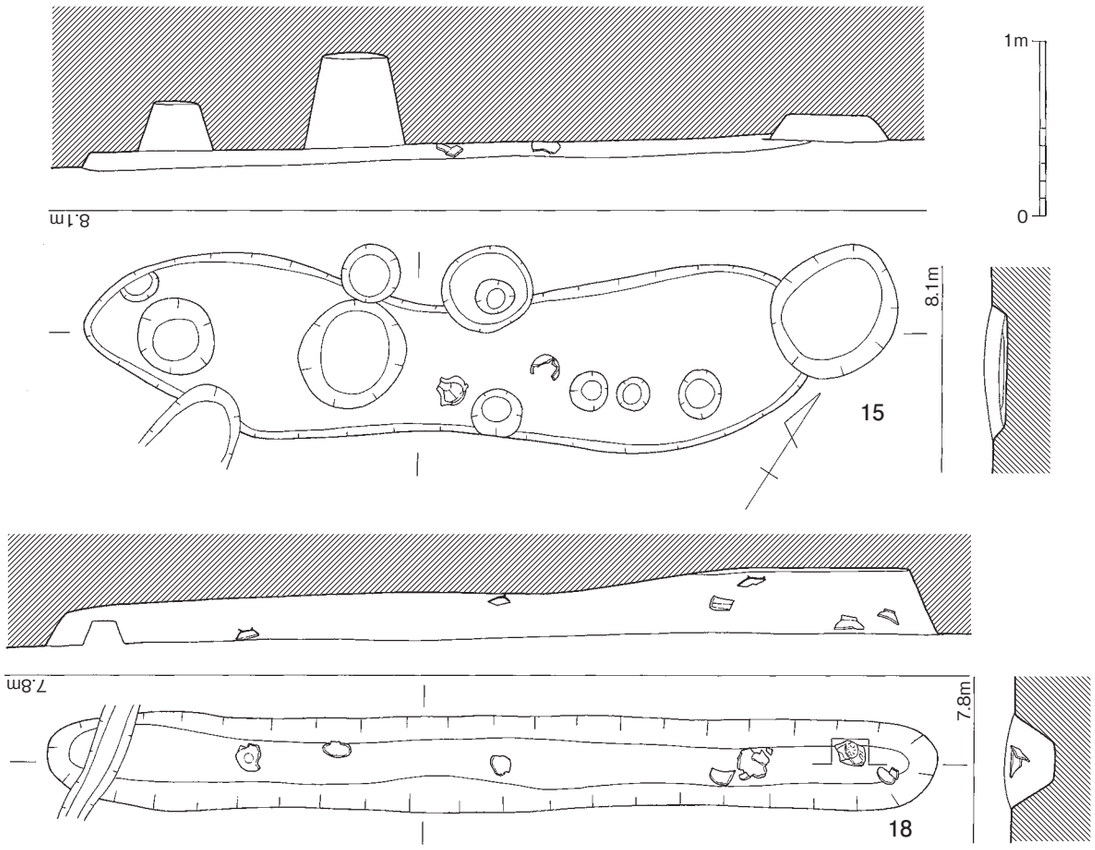
16 号溝

調査区の西端に位置する。規模は長さ 1.7m、幅 0.65m、深さ 10cm で東流する。

出土遺物（第 90 図）

9 は青磁の皿か。口縁のみが遺存する。

出土遺物から、中世前期に属するものと考えられる。



第 91 図　15・18 号溝実測図（(1/40）

17 号溝

調査区の西端に位置する。規模は長さ 2.3m、幅 0.5m、深さ 0.5m で東流する。東端がピット状にわずかに窪む。

出土遺物（第 90 図）

10 は土師器の鍋である。外面に煤が付着する。口縁部ヨコナデを施す。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

19 号溝

調査区の西端に位置する。規模は長さ 1.7m、幅 0.4m、深さ 0.3m で床面はほぼ水平である。

出土遺物（第 90 図）

11 は瓦器椀である。磨滅のため調整は不明である。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

21 号溝

調査区の東側に位置する。規模は長さ 5.5m、幅 0.3m、深さ 15cm で床面はほぼ水平である。22・23 号溝と 60・190cm の間隔を持って並行する。

図化に耐えうる資料はなく、土師器・瓦質土器片が出土している。出土小片から中世に属するものと考えられる。

22 号溝

調査区の東側に位置する。規模は長さ 4.7m、幅 0.3m、深さ 8cm で南流する。21・23 号溝と 60・120cm の間隔を持って並行する。

出土資料はなく、時期等は不明である。

23 号溝

調査区の東側に位置する。規模は長さ 2.8m、幅 0.35m、深さ 15cm で南流する。21・22 号溝と 190・60cm の間隔を持って並行する。

出土遺物（第 90 図）

12 は瓦質土器の壷か。磨滅のため調整は不明である。

出土遺物から中世前期に属するものと考えられる。

24 号溝

調査区の東側に位置し、12 号土坑に切られる。規模は長さ 3.4m、幅 0.85m、深さ 20cm で南流する。12 号土坑と一体の遺構を形成していた可能性もある。

出土遺物（第 90 図）

13 は土師器の坏か。磨滅が著しいが、底部外面に糸切の痕跡が残る。

切り合いと出土遺物から、中世前期に属するものか。

25 号溝

調査区の北西側に位置する。規模は長さ 2.8m、幅 0.9m、深さ 8cm で東流する。床面から土器が出土している。

出土遺物（第 90 図）

14 は瓦質土器鍋の脚部である。外面にタタキ状の痕跡が残る。

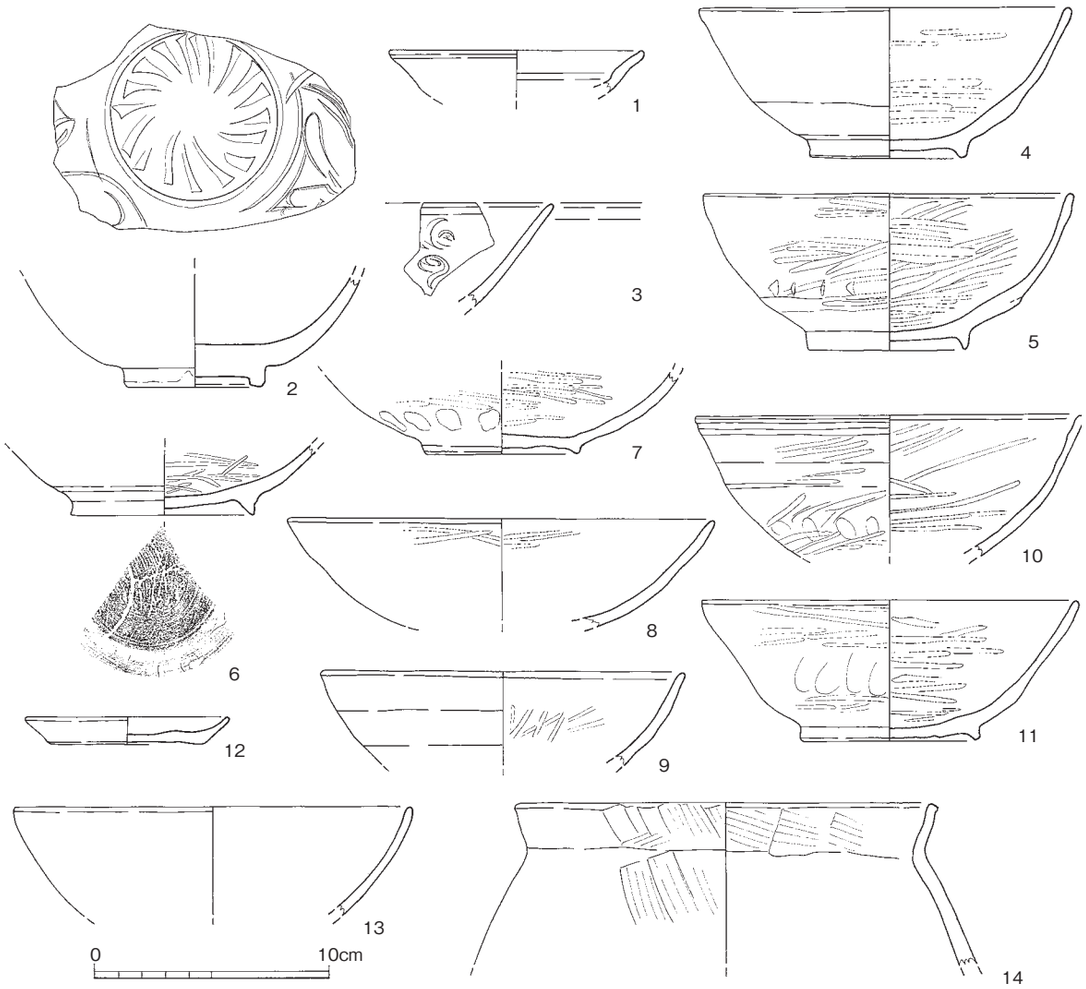
出土遺物から、中世に属するものと考えられる。

18 号溝（第 91 図）

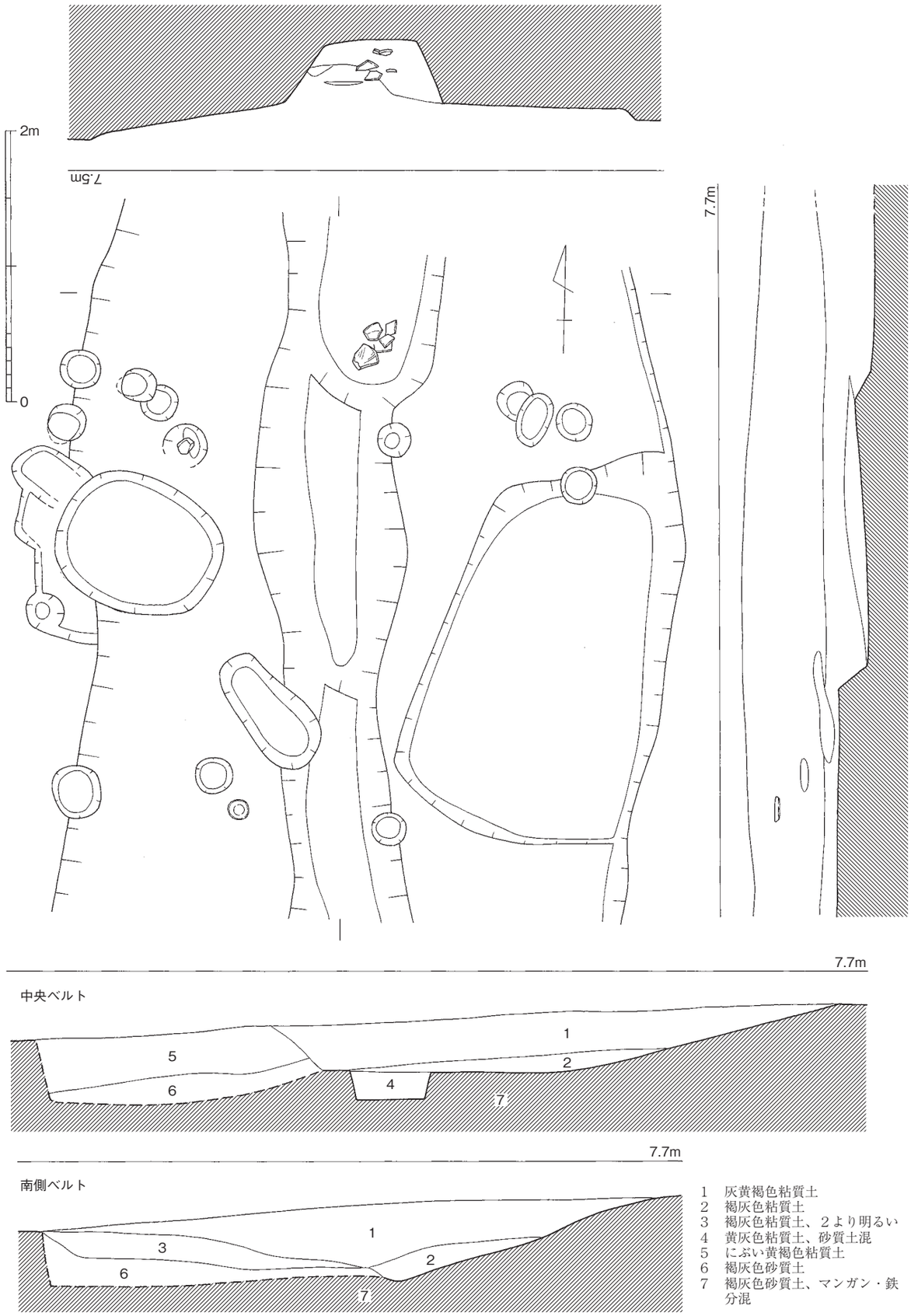
調査区の南側に位置し、12 号溝に切られる。規模は長さ 5.1m、幅 0.5m、深さ 25cm で東流する。床面および浮いた位置から土器が多数出土した。

出土遺物（図版 57、第 92 図）

1 は白磁の皿である。中位で内面が強く屈曲する。2・3 は青磁の椀である。2 は底部が露胎となり、内面に文様が施される。3 は口縁部のみが遺存し、内面に流水文が施される。4 ～ 11 は瓦器椀である。一部磨滅するものの、内外面共にミガキを施す。5・7・10・11 は外面下位に指頭圧痕が



第 92 図　18 号溝出土遺物実測図（1/3）



第 93 図　20 号溝実測図（1/40）

見られる。6は底部に×状の記号が付される。12は土師器の皿である。磨滅のため調整は不明である。13は土師器の椀である。磨滅のため調整は不明である。14は土師器の甕である。口縁部内外面ハケ、胴部外面ハケ、内面ナデを施す。混入品か。

切り合いと出土遺物から、12～13世紀頃に属するものと考えられる。

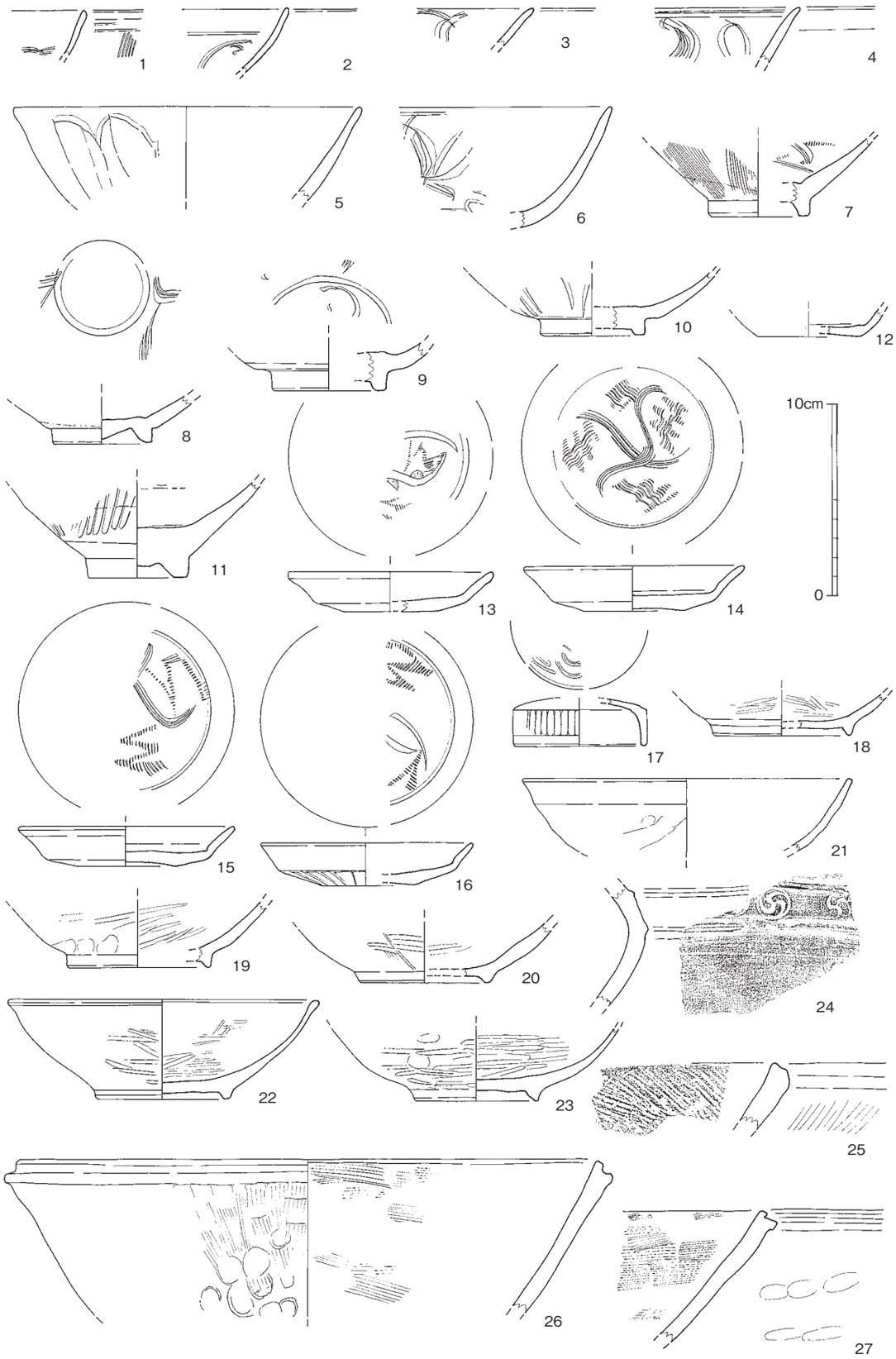
20号溝（図版45、第93図）

調査区の中央やや西側を南北方向に縦断する。4号土坑、6号溝に切られ、7・14号土坑を切る。規模は長さ30.8m、幅420cm、深さ45～60cm程で北流する。断面が逆凸形に近く、中央部が幅120cm程深くなる。中央から北寄りでは3段の段差が形成され、北にいくほど深くなる。最深部は、遺構面から90cmほどである。中央部で土器が多少出土している。

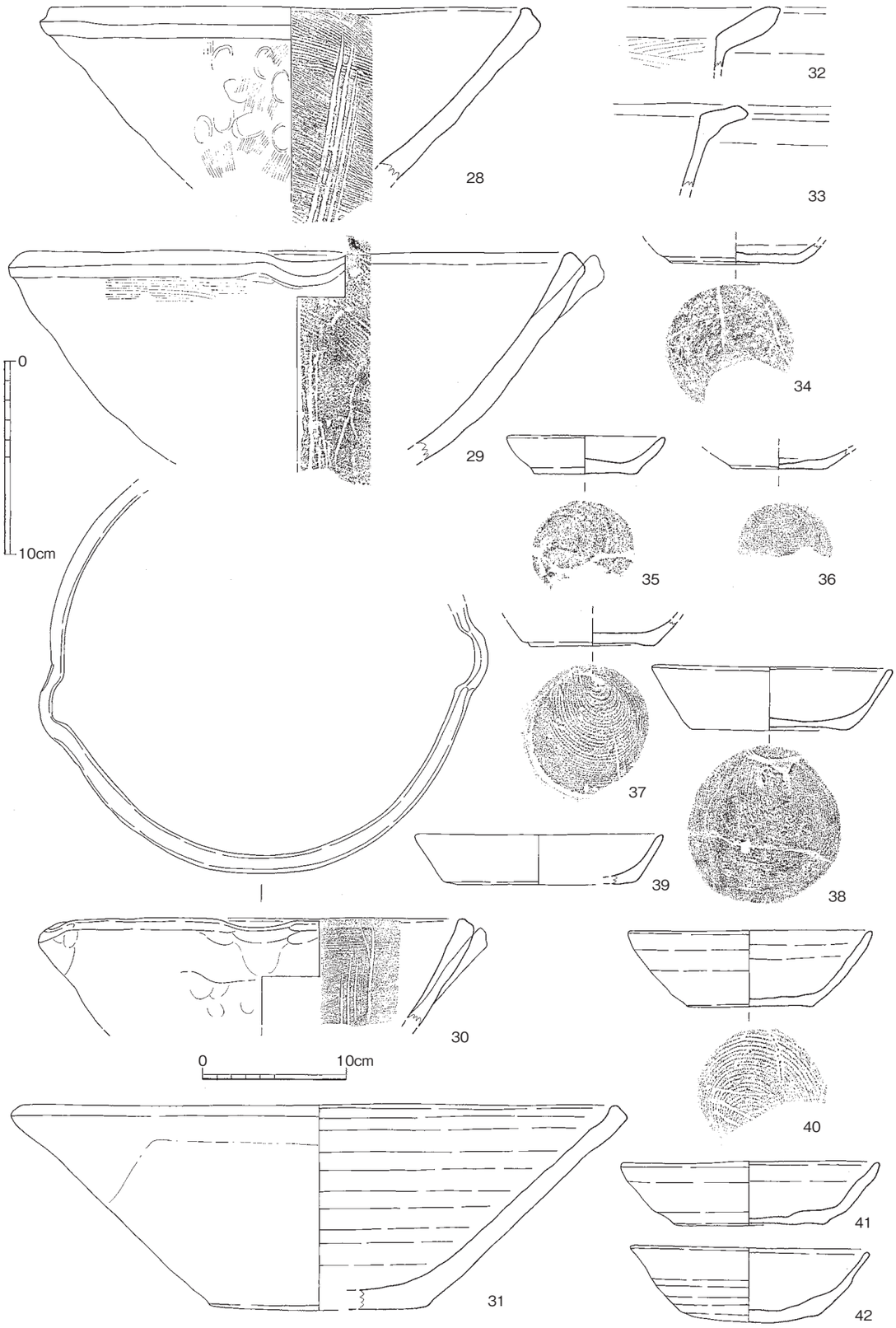
出土遺物（図版57、第94～96図）

1～11は青磁の椀である。底部はいずれも露胎となり、11のみ胴部外面まで露胎が伸びる。内面には流水文が施されるものが多く、外面は5に蓮弁文、7に細いハケ状の文様、11にタタキ状の文様が施される。12～16は青磁の皿である。底部は概ね屈曲部まで露胎となり、内面に流水文が施される。17は白磁の蓋である。口縁部内面は露胎となり、外面に沈線状の文様が施される。18～23は瓦器椀である。21など磨滅が一部著しいものの、概ね内外面共にミガキが施される。20は外面に工具痕が見られ、19・21・23は指頭圧痕が見られる。24は瓦質土器の壷か。断面三角形の突帯間に巴文のスタンプが施される。25は瓦質土器の鉢である。内外面にハケが施される。26・27は瓦質土器の鍋である。共に口縁部に突帯状の突出部が施され、受け部になる。26は外面に煤が付着する。28～30は擂鉢である。いずれも内面ハケ後擦り目が施される。29は1つ、30は対称からややずれた位置に2つの受け口が見られる。30は外面に煤が付着する。31は瓦質土器の捏鉢である。底部外面糸切後ナデ、他はヨコナデを施す。32・33は土師器の鍋か。33は外面に煤が付着する。34～36は土師器の皿である。いずれも底部に糸切の痕跡が残る。37～42は土師器の坏である。磨滅して一部不明なものもあるが、37～41は糸切の痕跡が見られる。42は底部に回転ヘラ切りを施す。43は須恵器の蓋である。44は須恵器の壷か。高台が付き、内外面共に回転ナデを施す。45は須恵器の高台坏である。46は須恵器瓹である。口縁部下に波状文が施される。47は土師器の坏である。高台が外方に開き、底部はやや丸みを帯びる。底部内外面ナデ、他は回転ナデを施す。48・49は壷である。48の外面、49の内面にミガキが見られる。50～54は甕である。50は口縁部が強く屈曲し、54は平底の底部のみが遺存する。55・56は高坏である。55は口縁部のみ、56は脚部上端のみが遺存する。57は甑の把手である。ユビナデで成形する。58・59は下層出土遺物である。58は青磁の椀である。底部が露胎となる。59は土師器の椀で、底部は直線的になり、底部以外は回転ナデを施す。60～62は上層出土遺物である。60・61は土師器の甕である。共に磨滅のため調整は不明である。62は土師器の皿である。底部に糸切の痕跡が見られる。この他、後述する銭貨・土錘・不明鉄製品・釘・刀子が出土している。

弥生時代～古墳時代、古代、中世に至るまで出土遺物が見られるものの、切り合いと出土遺物から、概ね9～13世紀頃に属するものと考えられる。



第 94 図　20 号溝出土遺物実測図①（1/3）



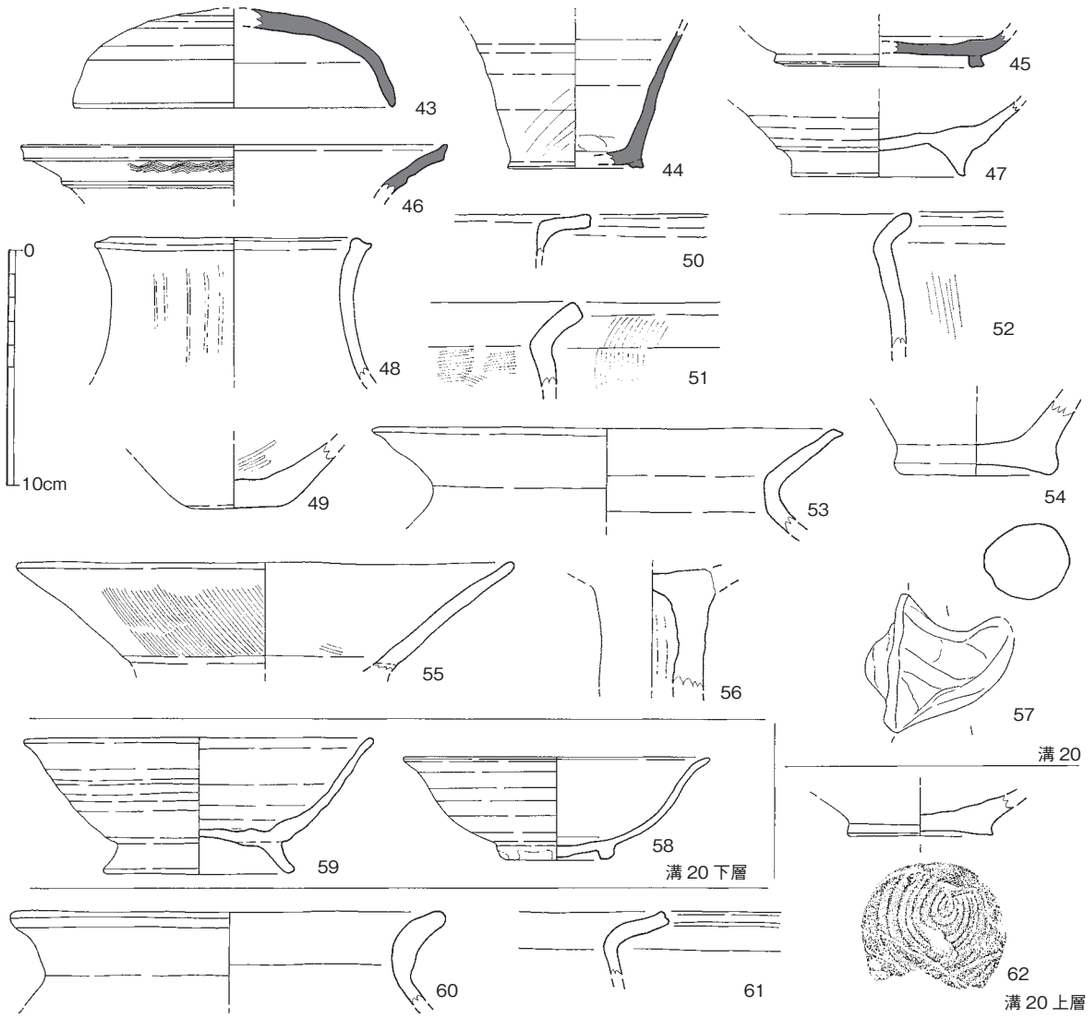
第 95 図　20 号溝出土遺物実測図②（1/3、30 は 1/4）

その他の遺構

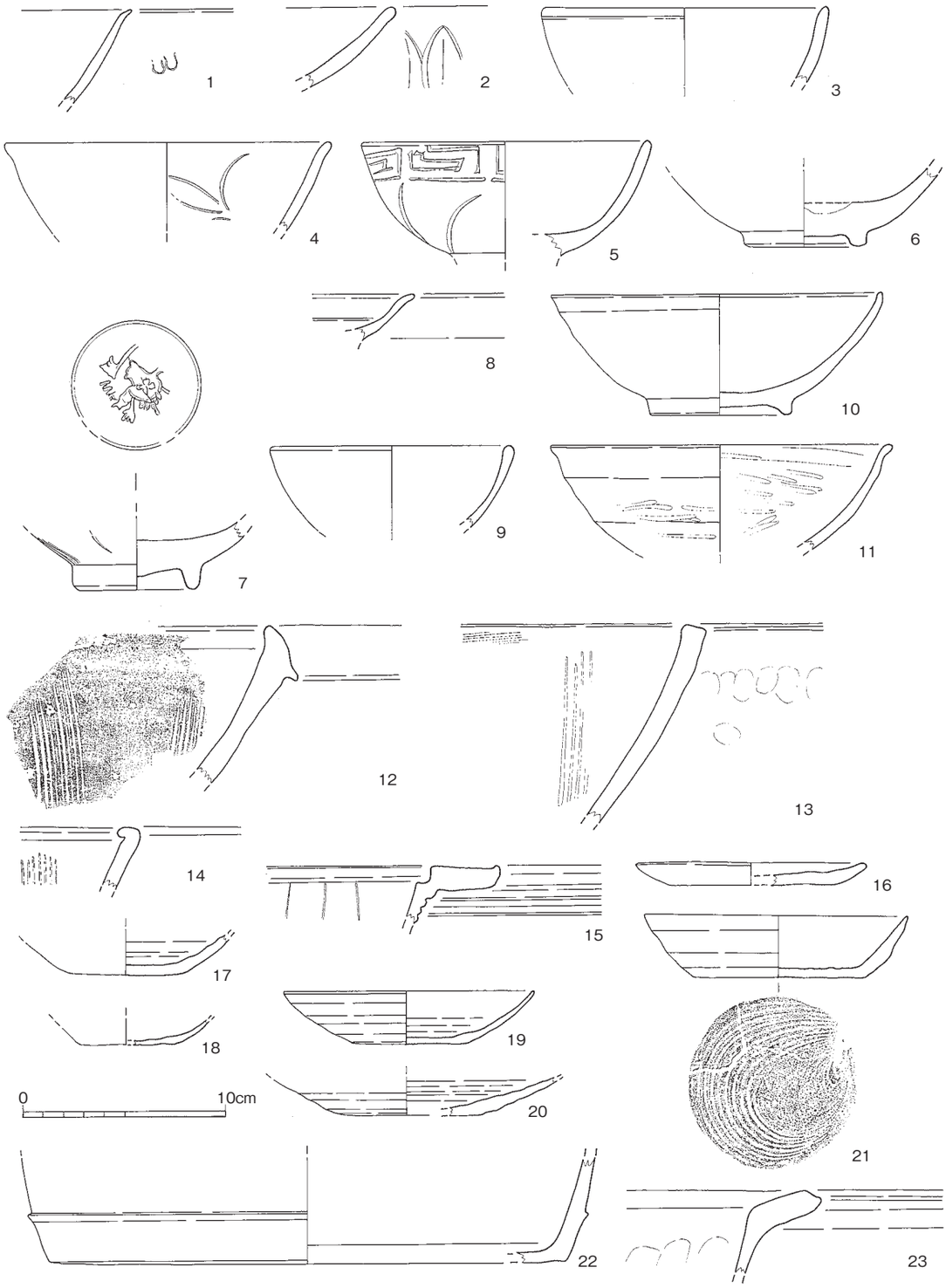
ピットや遺構外出土の土器について報告する。

ピット出土遺物（図版 57・58、第 97 ～ 99 図）

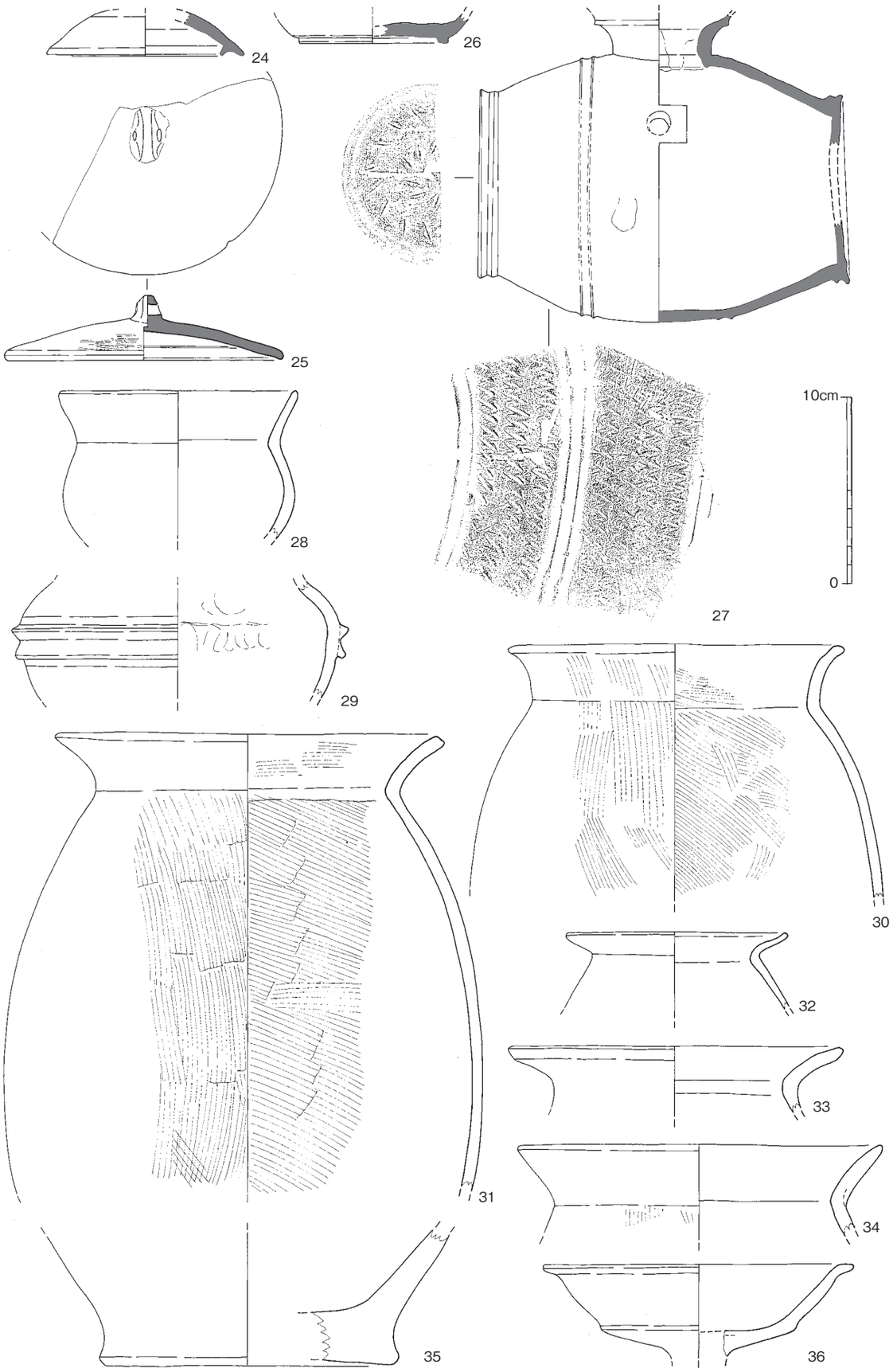
1 ～ 7 は青磁の椀である。1 は口縁端部が外方に突出する。P-340 出土。2 は外面に蓮弁文が施される。P-230 出土。3 は口縁下に 1 条の沈線が施される。P-205 出土。4 は内面に花弁状の文様が施される。P-259 出土。5 は外面上位に雷文が施される。P-218・219 周辺上層出土。6 は底部のみが遺存し、全体に施釉される。P-337 出土。7 は内面底部に花文のスタンプが付される。P-57 出土。8 は白磁の皿か。内面に 1 条の沈線状の文様が施される。P-190 出土。9 ～ 11 は瓦器椀である。9 は内面から口縁部外面ナデ、胴部外面ケズリが施される。P-189 出土。10 は磨滅が著しく調整不明である。P-355 出土。11 は内外面共にミガキが施される。P-88 出土。12 ～ 14 は瓦質土器の擂鉢である。12 は 9 本 1 単位の擦り目が施される。P-74 出土。13 は内面にハケ後ナデ、その後擦り目、外面ナデ一部指頭圧痕が施される。P-218・219 周辺上層出土。14 は口縁が内方に突出し、7 本以上



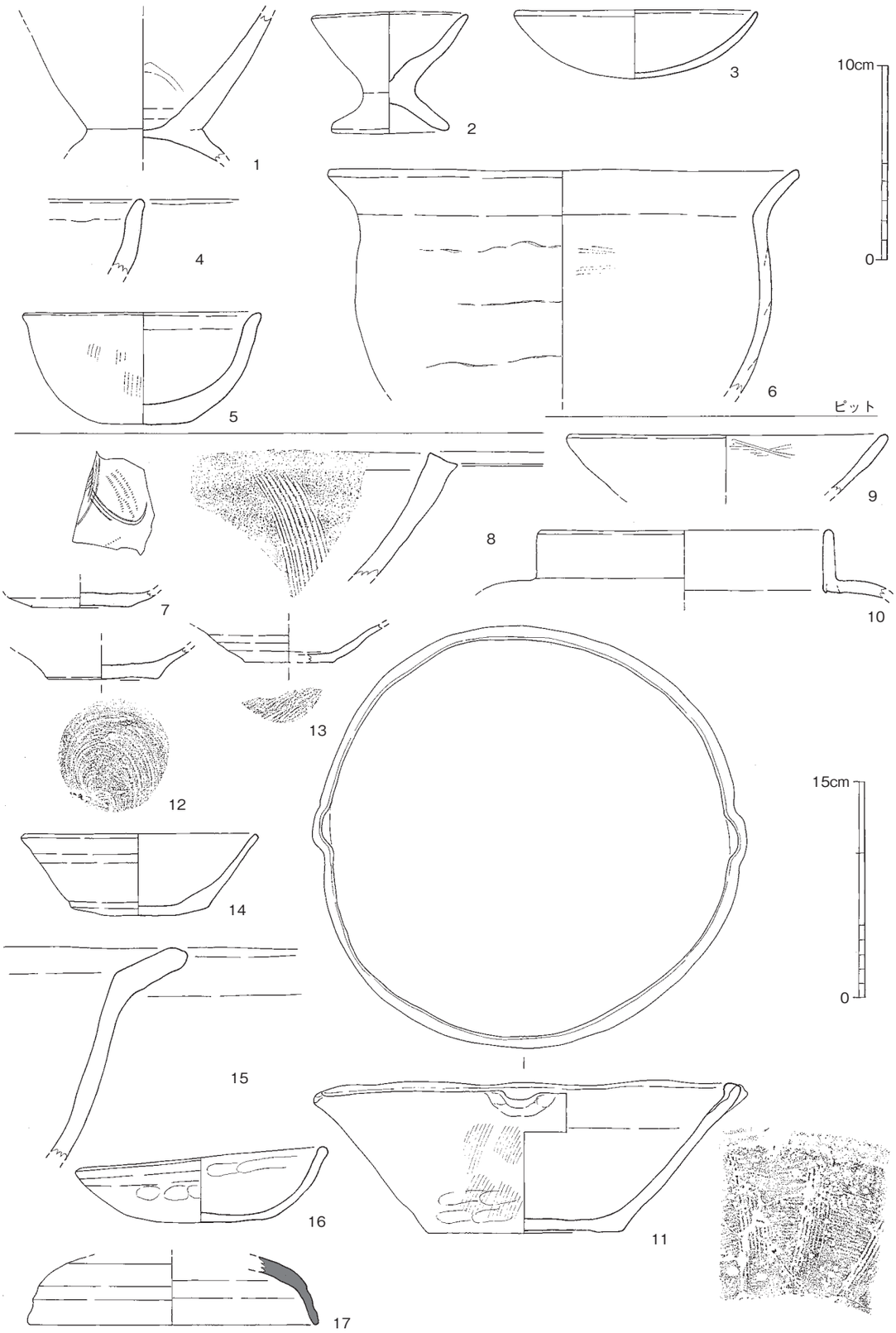
第 96 図　20 号溝出土遺物実測図③（1/3）



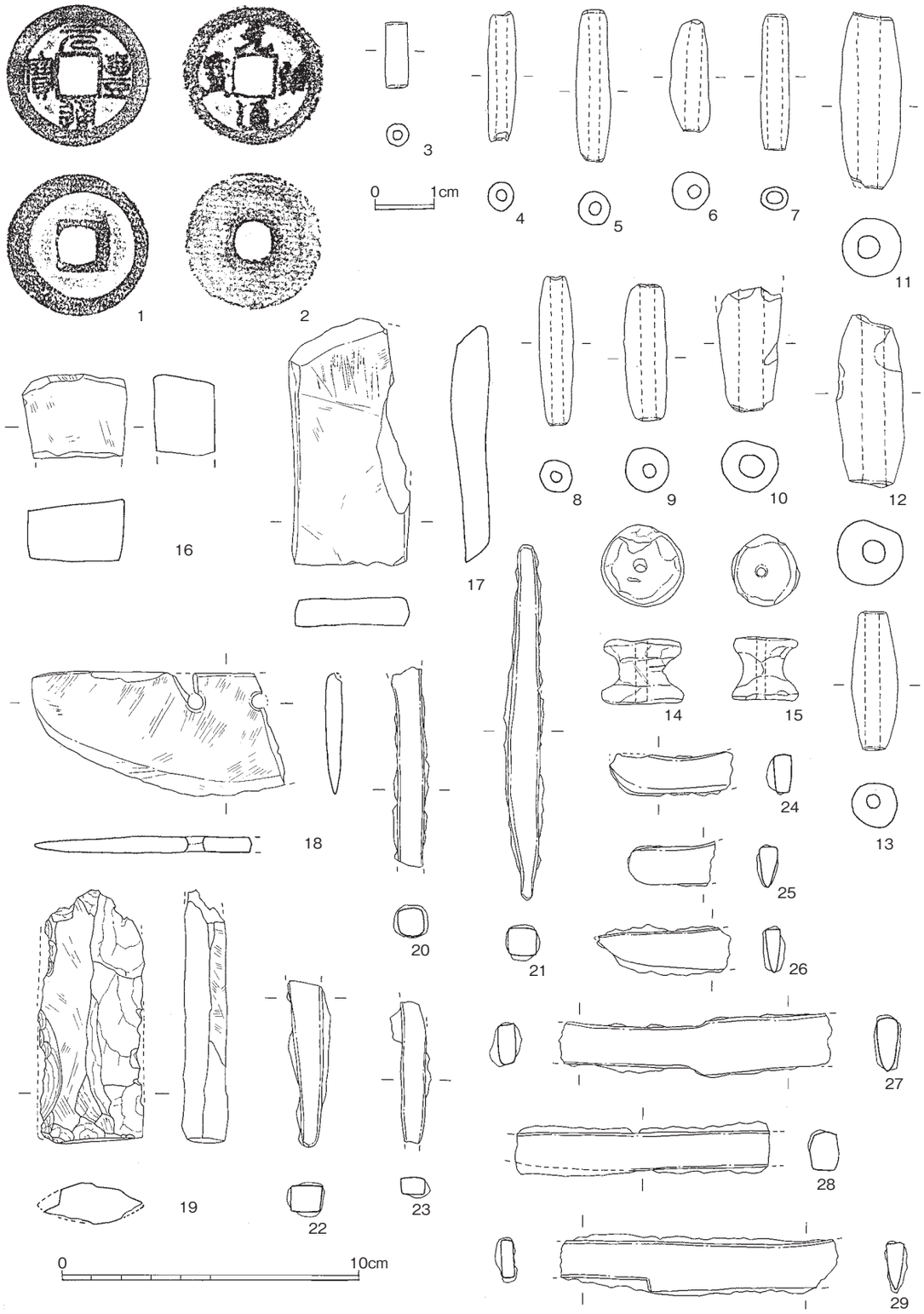
第 97 図　ピット出土遺物実測図①（1/3）



第 98 図　ピット出土遺物実測図②（1/3）



第 99 図　ピット・その他の遺構など出土遺物実測図（1/3、11 は 1/4）



第 100 図　出土特殊遺物実測図（1/2、1 ～ 3 は 1/1）

の擦り目が施される。P-205 出土。15 は瓦質土器の鉢か。口縁がほぼ水平をなし、直下に沈線が 4 条以上施される。P-271 出土。16 は土師器の皿である。磨滅のため調整は不明である。P-48 出土。17 ～ 21 は土師器の坏である。17 は磨滅するがわずかに糸切の痕跡が見られる。P-205 出土。18 は磨滅するが、わずかに底部に板圧痕の痕跡が見られる。P-198 出土。19 は底部糸切後ナデ、他は回転ナデを施す。P-96 出土。20 は底部がほとんど遺存していないものの、ナデを施すか。P-74 出土。21 は底部に糸切が見られる。P-376 出土。22 は土師質の火鉢である。底部からやや上位に断面三角形の突帯が付される。P-103 出土。23 は土師器の鍋である。外面に煤が付着する。P-290 出土。24･25 は須恵器の蓋である。24 は逆刺が低く、宝珠形のつまみが付くものと考えられる。P-216 出土。25 は鈕状のつまみが付き、孔が穿たれる。外面ミガキ、内面ナデが施される。P-64 出土。26 は須恵器の坏である。低めの高台が付く。P-64 出土。27 は須恵器の樽形瓶である。両端ならびに端部から 1/3 の位置に 2 条の突帯がつき、突帯間に波状文が施される。両側には刺突文が円形状に付され、製作時に右側で蓋をしたことがわかる。上半ならびに口縁部内面、底部内面には灰被りが見られ、外面中位には自然釉垂れが見られる。P-264 出土。28 は土師器の壷である。磨滅のため調整は不明である。P-347 出土。29 は弥生土器の壷である。胴部に断面三角形の突帯が 2 条付される。内外面ナデ、一部指頭圧痕を施す。30 ～ 35 は弥生土器・土師器の甕である。30・31 は内外面ハケを施し、長胴の甕になるか。30 は P-375 出土。31 は P-379 出土。32 は口縁端部がわずかに上方に突出し、内外面ともにナデを施す。P-3 出土。33 は口縁が緩やかに外湾し、内外面共にヨコナデを施す。P-3 出土。34 は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面板ナデを施す。P-269 出土。35 は底部である。器壁が厚く、平底を呈する。内外面ナデを施す。P-132 出土。36 は土師器の高坏である。口縁端部が外方に突出する。磨滅のため調整は不明である。P-269 出土。第 99 図 1・2 は器台か。1 は外面に黒斑が見られ、赤化している部分も見られる。被熱を受けたものか。P-375 出土。2 は内外面共にナデを施す。P-7 出土。3 は土師器の坏である。磨滅のため調整は不明である。P-214 出土。4･5 は土師器の鉢である。4 は磨滅のため調整は不明である。P-222 出土。5 は平底を呈し、口縁端部がわずかに外湾する。口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ナデを施す。P-222 出土。6 は土師器の鉢か。磨滅のため調整は不明瞭だが、3cm 毎に粘土紐の接合痕が見られる。

その他の遺構など出土遺物（図版 58、第 99 図）

7 は青磁の皿である。内面に流水文が見られる。8 は陶器の擂鉢である。10 本 1 単位の擦り目が施される。9 は瓦器椀である。磨滅が著しいが、内面にミガキが残る。10 は瓦質土器の釜である。外面に煤が付着する。11 は瓦質土器の擂鉢である。内面ハケ後 7 本 1 単位の擦り目が施される。左右対称の位置に 2 つ受け口が作られる。12 ～ 14 は土師器の坏である。12 は糸切、13 は板圧痕が見られる。14 は底部回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデを施す。口縁端部が黒変する。15 は土師器の鍋である。内外面ともにナデを施す。16 は坏である。磨滅するが、ミガキ一部指頭圧痕を施すか。17 は須恵器の蓋である。回転ナデを施す。

特殊遺物（図版 58、第 100 図）

Ⅲ区で出土した特殊遺物についてまとめて報告する。

1 は元豊通宝である。篆書で描かれる。北宋銭で 1078 ～ 1085 年の鋳造である。9 号溝出土。2

は元祐通宝である。北宋銭で 1086 ～ 1093 の鋳造である。20 号溝出土。3 は管玉である。完形品で中央に径 1.5mm の孔を穿つ。碧玉製。7 号土坑出土。4 ～ 13 は土錘である。いずれも焼成は良好で、黄橙色、赤橙色、茶灰色等を呈する。9 は P-233、10 は 2 号溝、13 は P229、他は 20 号溝出土。14・15 は不明土製品である。両端が膨らむ糸巻き形を呈し、中央に径 3・4mm の孔を穿つ。焼成は良好で黒灰色を呈する。中央の凹み部分に横方向の擦痕が認められることから、実際に糸巻きとして使用した可能性もある。P-358 出土。16・17 は砥石である。16 は 4 側面を砥面とし、上面は研磨により面取りする。細粒砂岩製。5 号土坑出土。17 は表裏面のみ砥面とし、4 側面は研磨により面取りする。頁岩製。P-298 出土。石質と大きさから共に持ち砥の仕上げ砥と考えられる。18 は石庖丁である。外湾刃半月形を呈し、外孔 0.7cm、内孔 0.5cm、背孔 1cm、孔間 2.3cm を測る。砂岩製。P-291 出土。19 は石剣である。基部端は残存しており、無茎式となる。基部と刃部が大きく剥離しており、槍先などとして緊縛されていたため割れた可能性もある。全体的に研磨は粗い。凝灰岩製。8 号溝出土。20・21 は不明鉄製品である。20 は断面隅丸方形を呈する。5 号溝出土。21 は上下端が細くなり、特に下端で顕著である。断面四角形で完形品か。20 号溝出土。22 は釘か。断面方形で下端が狭い。20 号溝出土。23 は鉄鏃か。断面四角形を呈する。4 号土坑出土。24 は不明鉄製品である。先端が尖る平面形をなすものの、刃部は作り出されない。1 号土坑出土。25 は刀子か。先端が丸くなるものの刃部が形成される。27 と同一個体か。P-21 出土。26･27 は刀子である。26 は先端部分である。20 号溝出土。27 は基部から刃部までが遺存しており、両側に関が形成される。25 と同一個体か。P-21 出土。28 は不明鉄製品である。左側に向かって細くなるものの、断面形はいずれも方形である。20 号溝出土。29 は刀子である。下側に直角の関が見られる。20 号溝出土。

小結

本調査区では、土坑・溝およびピットのみが検出されており、建物跡も復元できなかったことから集落の全体像や特徴などは不明である。隣接する宝山桑ノ木Ⅱ区や北側の同Ⅰ区では、遺構面の高さが削平のためか 1m 程異なるものの、中世の区画溝および掘立柱建物跡などが検出されている。本調査区が東側に傾斜する斜面に位置していること、東側には旧河川が流れていたことから集落の縁辺に当たる可能性が高い。また、少なからず弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が認められることから、丘陵上方の西側に当該期の集落が広がっていたものと考えられ、地形の特質上本調査区は弥生時代～中世まで時期を通じて集落の縁辺部に当たっていたものと考えられる。

本調査区で出土した特徴的な遺物としては「樽形瓹」が挙げられる。管見の限りでは京築地域では初出土である。焼成の特徴から見ると、陶邑窯産の可能性が高い（註 1）と考えられるものの、口縁の形態がやや異なっており、畿内からの搬入品であるのか、未確認の周辺窯跡で焼成されていたのか等、詳細は不明である。ただし、地域内に少なからず初期須恵器が出土しているものの、これまで樽形瓹が見つかっていないことなどから、現段階では畿内からの搬入品の可能性が高いと考えたい。

（註 1）岡山理科大学、亀田修一氏の御教示による。

Ⅳ区

3区の北側、2区の南側に位置する。調査時には便宜上、平成23年度の調査部分をⅣ区、24年度の調査部分を3次調査として区別していたが両調査区は隣接しており、3次調査時にはⅣ区調査区から継続して調査を行ったため、3次調査区もⅣ区として報告する。

調査の経過

平成23・24年度の2ヵ年度をまたいで調査を行った。

平成23年度は調査区南半の調査を行った。1月27日に重機を投入し、表土剥ぎを開始した。2月2日にハウス等を設置し、表土剥ぎと平行して作業員による遺構検出を開始した。地盤が砂質で、場所によっては川砂のようにしまりのない堆積となっていた。雨の日が多く作業が思うように進まなかったが、3月15日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、翌16日には測量も終了し、年度内の作業を完了した。埋め戻しに関しては年内の埋め戻しが困難であり、NEXCOと協議の結果（株）フジタの協力で行う事となった。

24年度はⅣ区の北半分、当初3次調査区と設定した範囲の調査を行った。4月9日から重機を投入し、表土剥ぎを開始する。16日には作業員を投入し、表土剥ぎと平行して検出作業を行っていった。調査区東側は川砂の堆積で、粗く脆いため重機での表土剥ぎは困難であった。4月25日に23年度調査区から延びる溝5を検出する。調査区南西側では遺構が判然とせず、1段ずつ落としながら慎重に検出作業を行っていった。6月14日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。6月22日に個別図と平面測量を終了し、作業員を伴う作業を終了した。また、7月30日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。

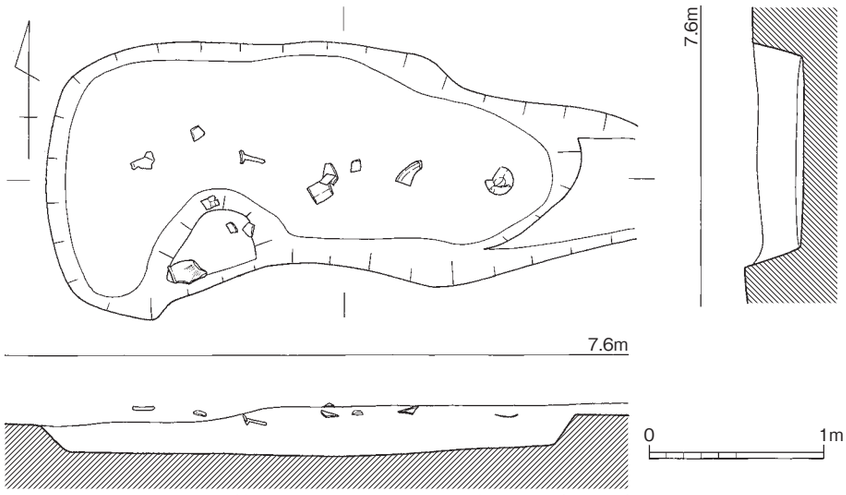
土坑

1号土坑（図版50、第102図）

南北約1.4m、東西約3ｍを測る。検出時には広い不整楕円形を呈する黒褐色土の広がりが見られた。一段落とした際にさらに内側に楕円形の遺構が確認できたため、この時点で土坑とした。遺構を確認した際に上面で遺物が集中して見られた。出土遺物のほとんどが上面からの出土であった。

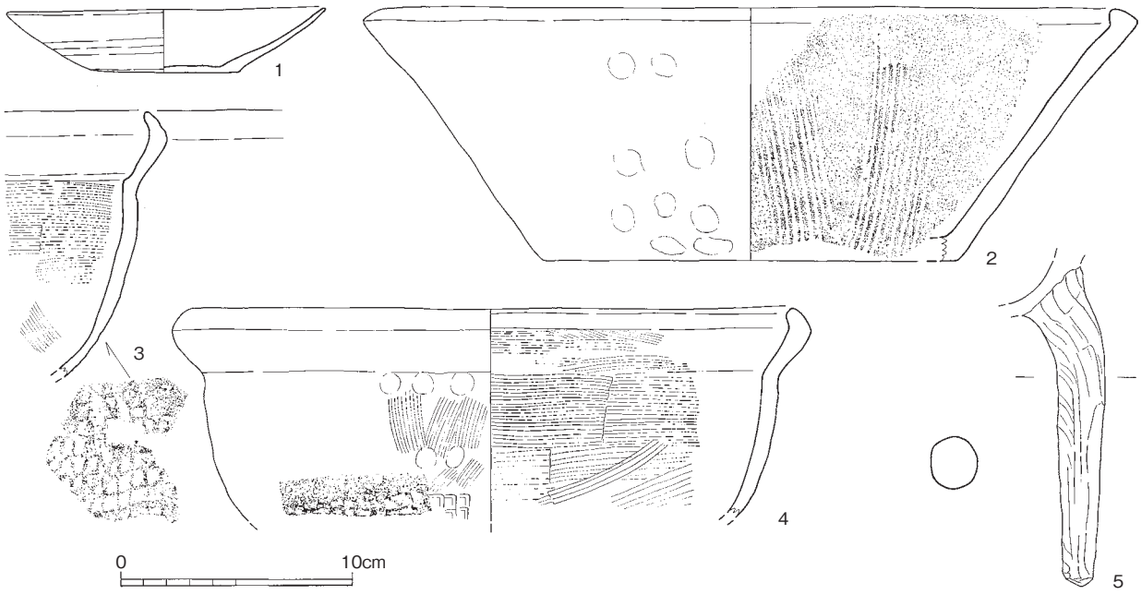
出土遺物（第103図）

１は土師器皿で、外底は回転糸切り後ナデられており、板状圧痕はない。内外胴部下半にナデ窪みが３段ある。見込みは平坦で、端部にナデ窪みがある。内面の器面の摩滅が著しい。胎土は精良で長石を多く含み、にぶい黄灰白色を呈する。16世紀後半。２は土師質土器の摺鉢で、口縁部は内面側を肥厚している。器面摩滅して胎の黄橙色が露出しており内面にのみ本来の黒褐色が部分的に残る。長石を多く混入する。調整は観察不能だが、外面胴部は器面の凹凸が目立つ。16世紀後半。３から５は瓦質土器の足鍋で、３は口唇部ナデで外側端部に丸みがある。内外口縁部はナデ、胴部は外面がケズリ状ナデのナデ消し。下位は格子目タタキが入る。胴部内面はヨコハケ。底部はタタキ当て具痕の窪みをナデ消している。内外灰白色で、外面は口縁部と内面頸部まで使用のため黒褐色に変色する。胎は堅緻で砂粒を含みざらつきがある。16世紀後半。４は口唇部ナデで外側端部



第 102 図　1 号土坑実測図（1/40）

に丸みがある。内外口縁部はナデ、胴部は外面がケズリ状ナデのナデ消し。下位は格子目タタキが入る。胴部内面はヨコハケ。底部はタタキ当て具痕の窪みをハケで消している。内外灰白色で、外面は口縁部から肩部に変色があり、内面は焼成時の色調差のみ見られるので、使用頻度が少なかったか未使用品だろう。胎は堅緻で砂粒を含みざらつきがある。16 世紀後半。5 は脚部で、手捏ね成型で、オサエ痕が目立つ。底部との接合部にはタタキは見られない。上半は煤が付着し、下半は暗灰白色なので下半まで灰に挿し込んで使用したものと考えられる。



第 103 図　1 号土坑出土遺物実測図（1/3）

溝

1号溝（図版47・48、第101・104図）

調査区南西に位置し、幅約1.5m、深さ約20㎝を測る。L字状に屈曲し、南北15m、東西約18m検出し、調査区外へ消える。炭化物が多く、西側調査区境付近では拳よりやや小さめの礫が1mほどに集中している箇所があった。ここでは上部に灰が堆積し、灰を除去すると礫がしき詰まっていた。被熱していたと思われる。記録前に状態が損なわれてしまった。区画溝と思われる。

出土遺物（第105図）

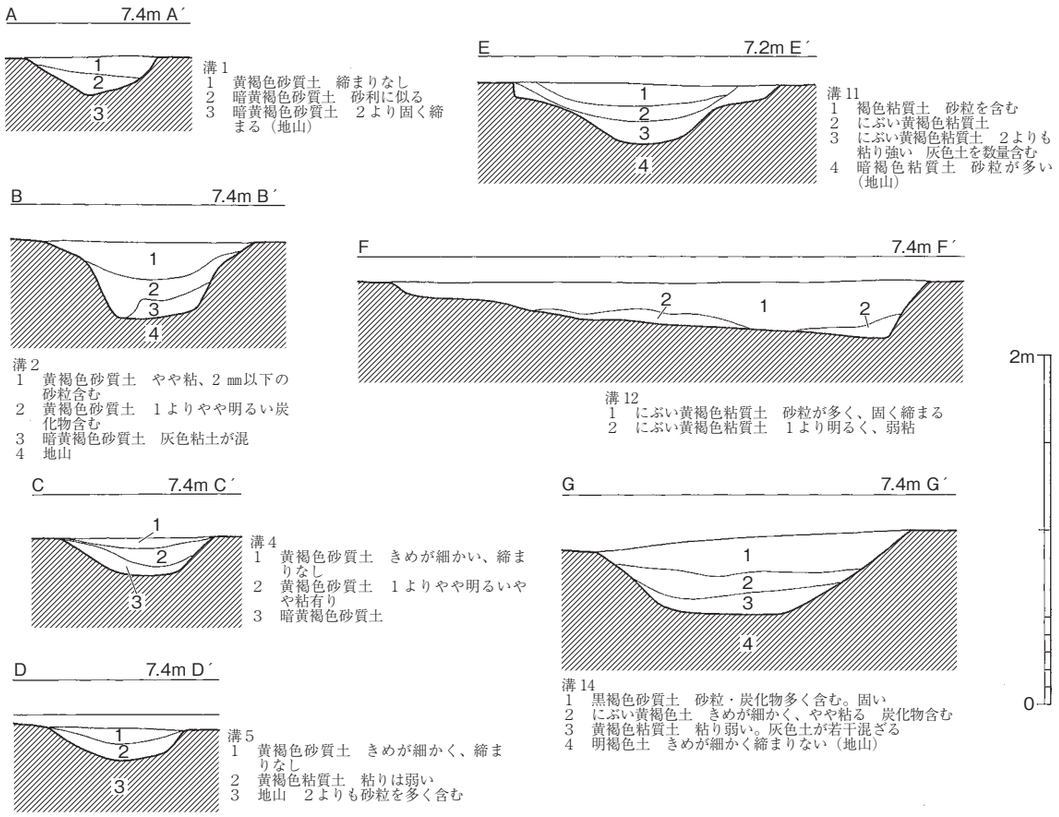
1は炭化物層から出土した瓦質土器の鍋で、外面は口縁部がヨコナデで外面側端部が突出する。胴部はケズリ状のナデ。内面はヨコハケが丁寧に入る。変色が著しいが本来は淡黒灰色を呈する。胎は比較的精良で堅緻。16世紀後半。このほか66ｇの鉄滓が出土している。

2号溝（図版47、第101・104図）

調査区南西に位置し、1号溝に沿う。幅約1.5ｍ、深さ約20㎝を測る。1号溝同様に区画溝と思われる。出土遺物に時期差があるが、小片1点のみであることから混入品と考えられる。

出土遺物（第105図）

2は同安窯系青磁碗の底部で、外面は胴下位が露胎。焼成は良く緑灰色に発色する。胎は灰色で、



第104図 1・2・4・5・11・12・14号溝土層実測図（1/40）

高台内削り出し。外面に櫛描き文が見える。12 世紀後葉。

3 号溝（図版 47、第 101 図）

1 号溝の屈曲部北東に位置する。全長 6 m、幅約 50cm、深さ約 20cm を測る。覆土は灰色で、比較的新しい。調査区東側の自然流路と同じ埋土であることから同様に自然流路と考えられる。出土遺物はない。

4 号溝（図版 47・48、第 101・104 図）

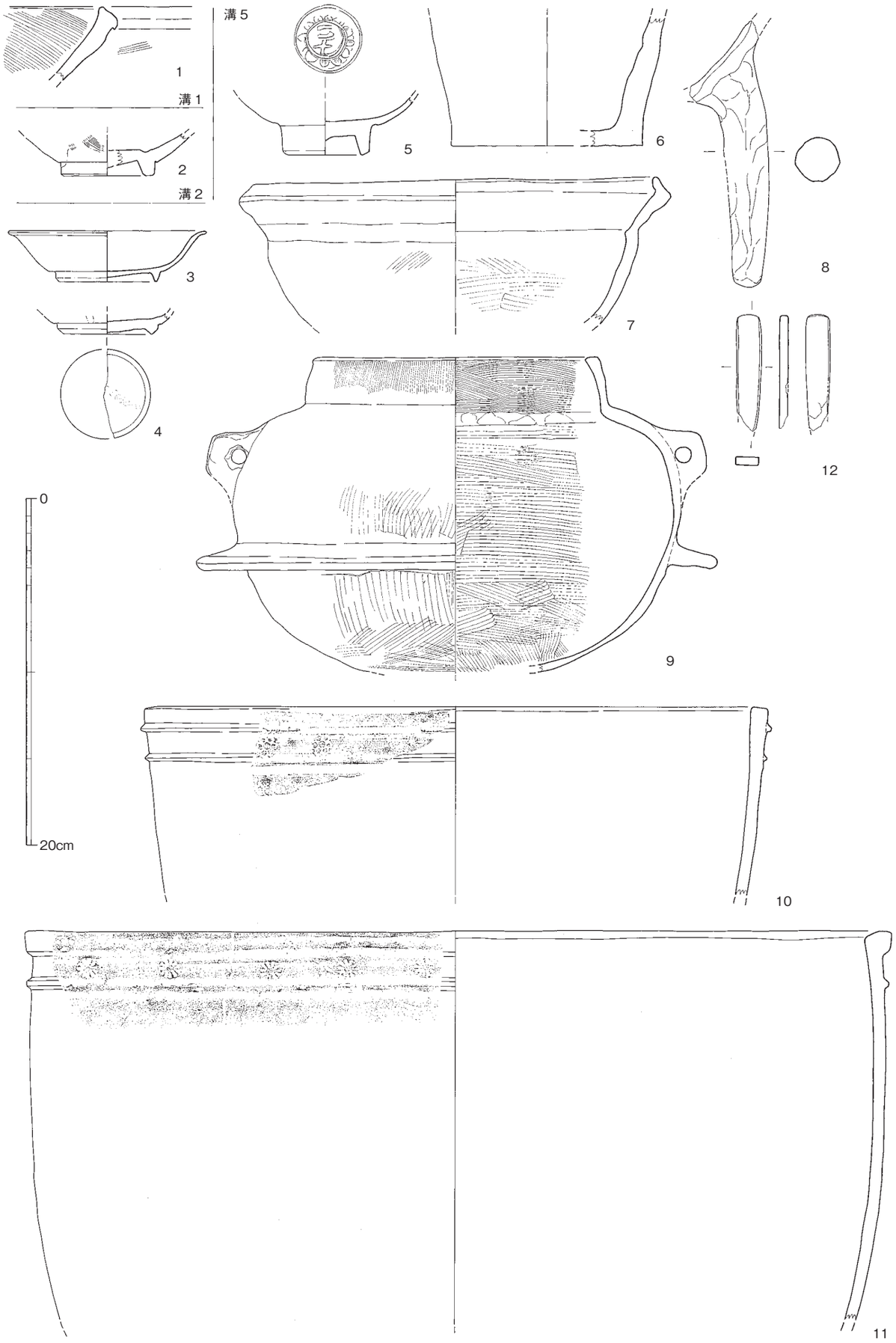
調査区南側、東西約 25 mの溝状遺構。幅約 1m、深さ約 30cm を測る。5 号溝状遺構と平行に走るが屈曲はせずに途切れるが、5 号溝状遺構とともに区画を形成する。青磁碗片や土師器小片が出土するが、図化に堪えない。

5 号溝（図版 47・49、第 101・104 図）

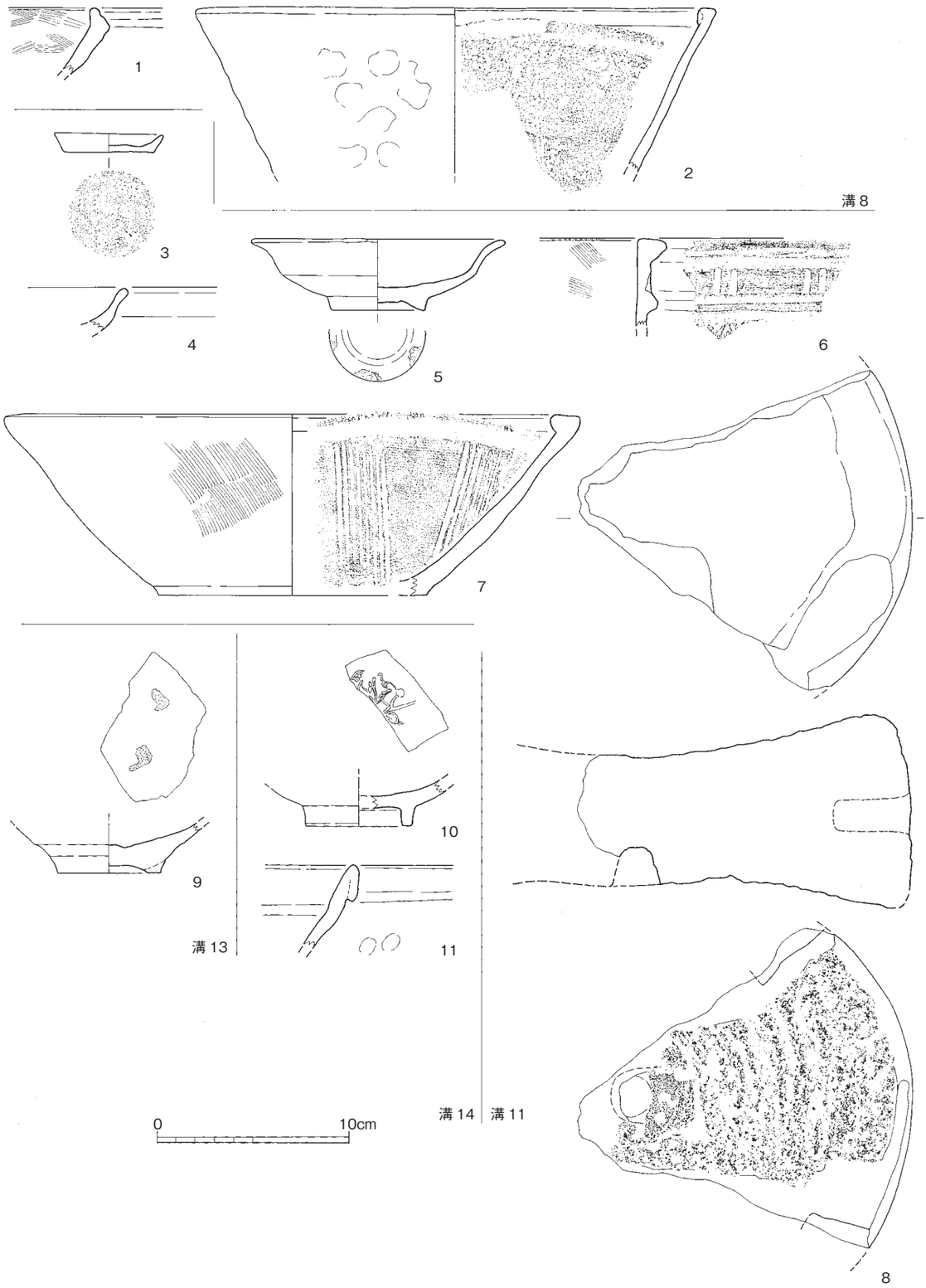
調査区中央に位置するコの字状の溝。区画溝と思われる。北側で 11 号溝状遺構と接続するが、南北・東西で遺構名を分けており、5 号溝状遺構と 11 号溝状遺構は同一の溝である。溝の東側は真砂土のため脆く、旧今川の影響を受けたものと思われる。このため遺構は無かった。

出土遺物（図版 59、第 105 図）

３は景徳鎮窯白磁皿で、発色が良い均一な乳白色の白磁釉で、器壁が薄いが歪みがない良品。畳付は尖り、釉剥ぎしている。16 世紀後葉。４は邵武窯系白磁小皿で、高台は畳付が斜めに削られている。胴下位から下が露胎で、外底に墨書が入る。胎はやや軟質で灰白色を呈する。15 世紀前半。５は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに「吉」字を中央に配する花文が陽刻になるようにスタンプされている。発色が悪く薄緑色を呈している。高台内のみが釉剥ぎで畳付まで釉が掛かっている。胎は黄灰白色。15 世紀後半の所産である。6 は備前焼の壺底部で、内外ナデ、底面は台の痕跡を残す。７は瓦質土器の鍋で、足鍋の可能性が高い。外面は口縁部がヨコナデで外面側端部が突出する。胴部はケズリ状のナデ。内面は口縁部から胴部までヨコハケが丁寧に入る。外面は使用変色しており、内面は本来の黒灰色を呈する。胎は比較的精良で堅緻。16 世紀後半。８は瓦質土器の足鍋の脚部で、手捏ね成型後接合。下半は灰白色で、上半は灰色だが、下半まで灰に挿して使用したものだろう。９は瓦質土器の湯釜で、外面口縁部目の細かいタテハケ、肩部は丁寧なヨコナデ、鍔の上下は粗いタテハケ、胴下位は粗いヨコハケ、内面は口縁部が目の細かいヨコハケ、肩部以下は目の粗いヨコハケ。紐部は型押し成型後貼り付けており、両側から穿孔しているため、両側に粘土の寄りが残っている。鍔は貼り付け後、接合部をナデているが、部分的に沈線状に工具端が残る。内面胴下位は押し出し技法時のオサエ痕の窪みが残っている。鍔は下面の先端のみ煤付着が著しい。色調は外面にぶい灰白色、内面黒灰色、外面胴下位に煤が付着する。胎は精良堅緻で灰白色を呈する。16 世紀前葉。10 は瓦質土器の火鉢である。口縁内側を肥厚させ、外面口縁下の２条貼り付け突帯間に花文のスタンプが等間隔に入る。内外丁寧なナデで、外面から口唇部まではにぶい暗黄灰色から青灰色、内面は黒灰色を呈する。16 世紀代。11 は土師質土器の火鉢である。口縁外側を断面方形に肥厚させ、口縁下の貼り付け突帯間に菊花文のスタンプが等間隔に入る。内外丁寧なナデで、全面にぶい暗灰褐色を呈する。16 世紀代。12 は頁岩製の小型砥石で、使用面は 1 面のみ。側面は丁



第105図　1・2・5号溝状遺構出土遺物実測図（1/3）



第 106 図　8・11・13・14 号溝状遺構出土遺物実測図（1/3）

寧に研磨しているが整形面。下面も研磨しているが、平滑でなく使用痕跡もない。10.8g を測る。このほか図化していないが、16 世紀中葉の備前焼摺鉢口縁部片と、93.4g と 640g の鉄滓が出土している。

6 号溝（図版 47、第 101 図）

調査区南西隅に位置する。幅約 50㎝、7 号溝に切られる。調査区西側へと延びる。出土遺物はなく、時期は不明。

7 号溝（図版 47、第 101 図）

調査区南西隅に位置する。6 号溝を切る。幅約 100㎝、深さ約 10㎝。丸く湾曲しており、調査区西側へ続く。出土遺物はなく時期は不明。

8 号溝（図版 47、第 101 図）

SX02 の北側、調査区西端に位置する。幅約 1m。4 m ほどで消滅する。自然堆積と思われる。

出土遺物（第 106 図）

１は炭化物層から出土した瓦質土器の鍋で、外面は口縁部がヨコナデで外面側端部が突出する。胴部はケズリ状のナデ。内面はヨコハケが丁寧に入る。変色が著しいが本来は淡黒灰色を呈する。胎は比較的精良で堅緻。16 世紀後半。２は瓦質土器の摺鉢で、口縁部内面側を肥厚させ、口唇部は平坦にナデている。外面口縁部ナデ、胴部はケズリ状ナデ、内面は丁寧なヨコハケ。器面は摩滅しているが、内外ともに黒灰色が残っており、変色なし。胎は黄白色が灰黒色を挟んでおり、長石を多く含む。16 世紀末から 17 世紀初頭。

9 号溝（図版 47、第 101 図）

調査区中央、西側に位置する。幅約 1m、長さ約 11m を測り、南北に延びる。自然堆積と思われ、遺物はなく時期は不明。

10 号溝（図版 47、第 101 図）

9 号溝の西側に位置し、調査区から 3.5 m延びる。溝状遺構として調査を行ったが深さは約 5 ㎝と浅く、溝状の落ち込みに自然堆積したものと思われる。

出土遺物

52g の鉄滓が出土している。

11 号溝（図版 49、第 101・104 図）

調査区北側に位置し、5 号溝と接続する。幅約 1.5 ～ 4m、深さ約 20㎝。5 号溝から西方向約 16m 延びた後に消滅する。西端の立ち上がりは緩やかであった。調査の便宜上、5 号溝と 11 号溝は区別しているが、同一の溝としている。出土遺物は西端からの出土。

出土遺物（第 106 図）

４は瀬戸焼の緑釉陶器の小皿で、軟質の胎に厚い緑釉が掛かる。釉は気泡が入り、貫入も目立つ。

５は李朝白磁の皿で、口縁部にケズリを入れて稜を作っている。高台は貼り付け後、内面を斜めに削り出し、端部が斜めに尖る。釉の発色が良く均一に全面に掛かっている。畳付と見込みに砂目跡があり、貫入も目立つ。16 世紀後半か。６は瓦質土器の火鉢である。口縁外側肥厚させ、口縁下の貼り付け突帯間に２条単位の凹線状のスタンプが等間隔に入る。さらに突帯下には何らかのスタンプ文が入る。内外面丁寧なナデで、特に口唇部は平滑だが、これはミガキによるものではなく使用によるものではないか。全面にぶい灰白色を呈する。16 世紀代。７は瓦質土器の摺鉢で、口縁部内面側を肥厚させ、口唇部は平坦にナデている。外面口縁部ナデ、胴部はケズリ状ナデ、内面は丁寧なヨコハケ。外器面は使用変色して黒褐色を呈するが、本来は内面の黒灰色であろう。胎は黄白色で、長石を多く含む。16 世紀末から 17 世紀初頭。８は石臼の上臼で、使用面が湾曲しており、摺り目は摩滅して残っていない。多孔質の凝灰岩製で、2.4kgを測る。

このほか図化していないが、鉄釉の掛かる陶器の茶入れや 15 世紀後半の備前焼摺鉢の口縁部が出土している。

12 号溝（図版 47、第 101・104 図）

幅約 3 m、深さ約 30㎝を測る。調査区北側から約 13 m延びたところで自然に消滅する。覆土はにぶい黄褐色土。東側の立ち上がりは急であるが、西側は緩やかに立ち上がる。出土遺物はなく、時期は不明。

13 号溝（図版 47、第 101 図）

SX05 から南へ約 26 m延びる。幅約 50㎝を測り、深さは一定ではない。溝として調査を行ったが、自然流路と思われる。

出土遺物（第 106 図）

9 は李朝陶器の粉青沙器椀で全面白土釉掛け。高台は貼り付け後、内面を斜めに削り出し、畳付は平坦で、胴下位にケズリによる段が入る。底部は重ね焼きのため焼成不良で乳白色に発色している。畳付と見込みに砂目跡がある。胎は黄白灰色で、軟質。このほか 42.6 ｇの鉄滓が出土している。

14 号溝（図版 49、第 101・104 図）

12 号溝の東側に位置し、調査区北側から 13 mほど延びる。幅約 2.5 m、深さ約 10㎝と浅く、北へ向かって浅くなり消滅する。覆土は黒褐色で、レンズ状の堆積を成す。遺物は覆土から出土した。

出土遺物（第 106 図）

10 は龍泉窯系青磁碗で、見込みに花文がスタンプされた底部で、高台が細いことから 14 世紀後半だろう。11 は瓦質土器の鉢で、口縁部が外面に玉縁状に肥厚するもので、在地系や防長系にはない特徴なので搬入品の可能性がある。14 世紀か。

SX

SX01（図版 47、第 101 図）

4 号溝状遺構の北側に位置する。覆土は灰色土で浅く、形状は不整形である。この周辺は川砂が

堆積したように地盤が脆く、落ち込みに自然堆積したものか。出土遺物はなく時期は不明。

SX02（図版 47、第 101 図）

1 号溝状遺構の北側に位置し、南北２m、東西８mの長方形を呈する。覆土は炭化物が混ざっていたが、検出時に明確な線引きができず、一段ずつ下げながら検出を行った。一度掘削を終了したが、さらに下層に炭化物の混入が確認できたためさらに掘り下げた。炭化物層が交互に入っており、廃棄坑として使われたか。

出土遺物（図版 59、第 108 図）

１は陶器の小皿で、胴下位に稜を持つ。灰釉を胴下位まで掛け、見込みと畳付は釉剥ぎ。肥前産で 16 世紀末から 17 世紀初頭。２は中国製陶器の壺の底部で、釉は掛かっていない。外面ケズリ、内面ナデ。焼成不良で胴部は灰青色、底部は黄橙色を呈し、やや軟質。13 世紀代のもので、器面摩滅しているので混入品だろう。

SX03（図版 47、第 101 図）

SX02 の北側、8 号溝状遺構の東に位置する。南北約３m、東西約 4.5 mを測り、楕円形を呈する。暗褐色土が堆積しており、深さ約 10㎝と浅い。遺物は出土しておらず、自然の落ち込みと思われる。

SX04（図版 47、第 101 図）

南北約４m、東西約３m、深さ約 20㎝の不整形な遺構。覆土は暗黄褐色土で、少量であるが焼土塊と土器片が出土している。自然の落ち込みと思われる。

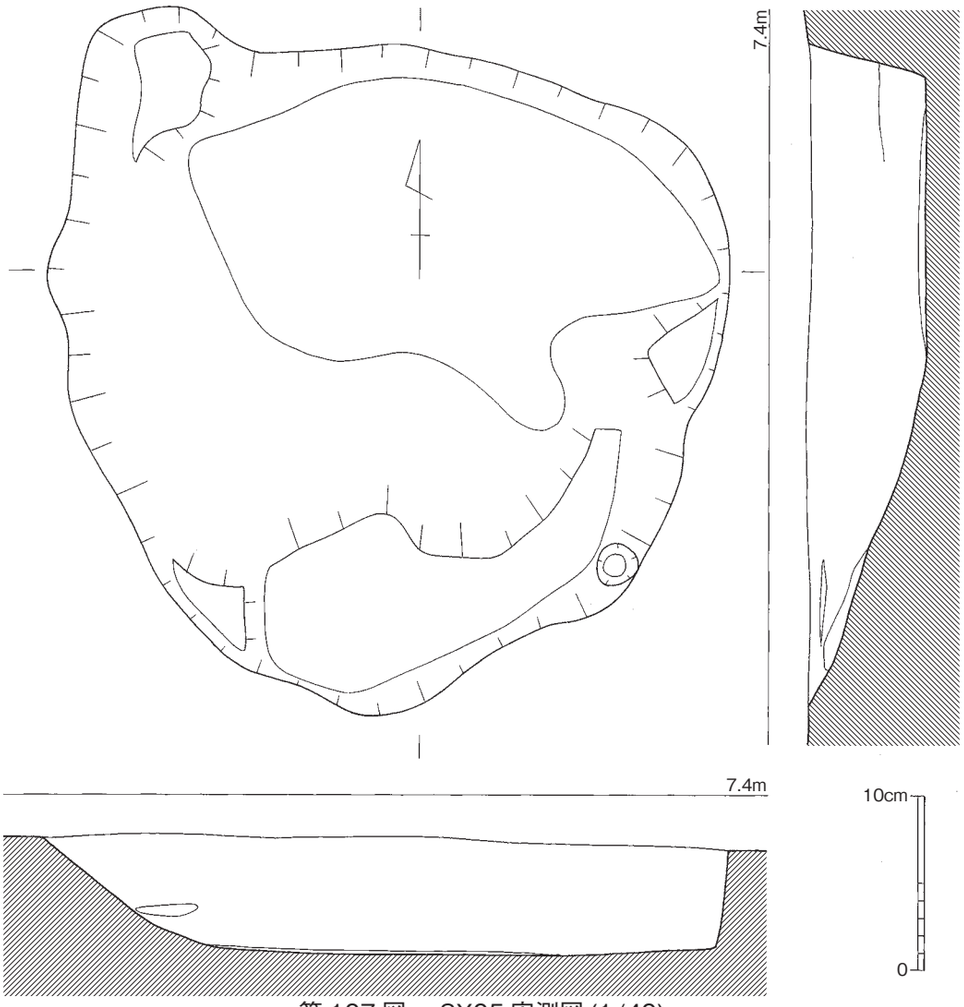
SX05（図版 50、第 101・107 図）

13 号溝状遺構の北側に位置する。直径約４mの円形。深さ約 80㎝。東壁の立ち上がりは急であるが、西側は緩やかである。覆土は黒色土が堆積するが、地山と似た土と交互に堆積していた。一部、黄褐色土が固まって見られたことから、崩落したと考えられる。出土状況の記録はないが、北壁に張り付くように土師皿が出土した。風倒木痕かとも考えたが、不明である。

出土遺物（第 108 図）

３は土師器皿で、外底は糸切りで板状圧痕はない。見込みは螺旋状回転ナデを残す。胴部は内外面３段ナデで、外面胴下位は膨らみを持つ。外面の段の間に工具端部痕で段が見られる。胎土は精良で金雲母・長石が混入している。本来は黄灰白色のようだが、口縁部だけで、ほかは暗茶灰褐色を呈するので、重ね焼き時の焼成不良だろう。16 世紀代。４は瓦器椀で、外面口縁下が屈曲する。底部は押し出し技法により丸みを帯びる。調整は、外面はヨコナデのみで、内面は口縁部がヨコミガキ、胴部以下はタテミガキが丁寧に入る。器壁が厚く、全面灰黒色を呈する。12 世紀後半から 13 世紀前半の豊前地方の瓦器椀とは、器形や法量こそ近いが、器壁の厚さや調整、色調が大きく異なっている。搬入品だろうか。

このほか図化していないが、15 世紀前半の邵武窯系白磁小皿の底部片が出土している。

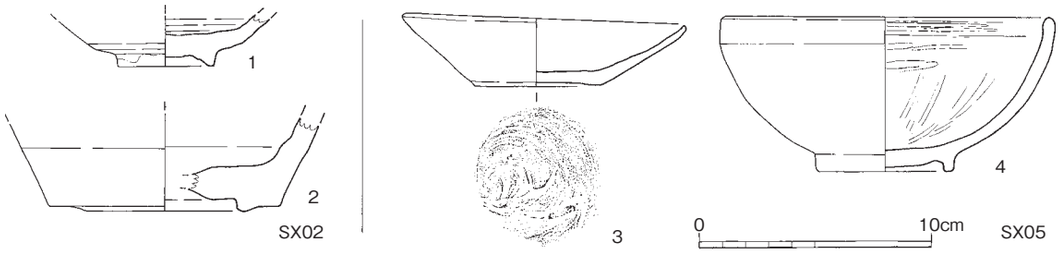


第 107 図　SX05 実測図 (1/40)

その他の遺構

ピット 36（第 109 図）

調査区南側に位置し、5 号溝状遺構に近接する。直径 60㎝、深さ 20cm。火鉢が埋設される。重機掘削の際に口縁部のみ確認できたため、ピットの周囲のみ人力で掘削した。底部は出土せず、意図的に取り除かれたと考えられる。墓とも考えられたが、溝に隣接しており、これに伴う施設か排



第 108 図　SX02、05 出土遺物実測図 (1/3)

泄施設と思われる。

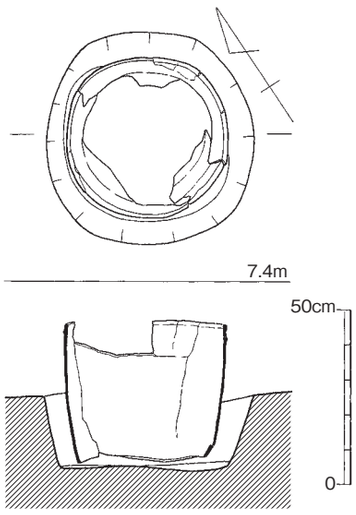
出土遺物（図版 59、第 110 図）

1･2 は瓦質土器の火鉢である。１は土師質土器の火鉢である。口縁外側肥厚させ、口縁下の貼り付け突帯間に２ないし３個単位の菊花文のスタンプが等間隔に入る。さらに突帯下には竹管文のスタンプが２個単位で菊花文スタンプの間に入る。外面丁寧なナデで、内面はヨコハケ。内外灰黒色を呈する。16 世紀代。２は口縁内側を肥厚させて、外面口縁下の２条貼り付け突帯間に菊花文のスタンプが等間隔に入る。底部には型作りした突起部と板状部分からなる脚部が３脚貼り付けられている。板状部は両端部に山形の切り込みがあり、突起部の側面には一方向から刺突がある。貫通していないものもあるので、穿孔ではなく突起部の焼成不良を避けるためのものだろう。内外丁寧なナデで、にぶい暗黄灰色から黒灰色を呈する。16 世紀代。

ピット出土遺物（図版 59、第 66・111 図）

第 111 図 1 はピット 15 出土の備前焼摺鉢胴下位部片で、外面はオサエによる凹凸がある。内面は使用により摩滅している。外底は未調整。摺り目下端が胴部と底部の境界に深く入る。暗青灰色を呈する。16 世紀中葉。114 図２はピット 44 出土の土師器皿で、小片のため復元径は不確実だが、小皿であることにはまちがいない。器面は摩滅しており器面調整は観察できない。色調は内外にぶい暗黄灰色で金雲母が目立つ。111 図３はピット 82 出土の土錘で、器面は摩滅しており、全面淡黒色で 11.3 ｇを測る。

111 図 4･5 はピット 89 出土で、４は土師器小皿で、外面には胴下半に２段の回転ヨコナデによる窪みがあり、上段のナデは口縁部を薄くしている。見込みは端部をナデ窪めているため中央部が高く残る。外底部は回転糸切り痕で、板状圧痕は確認できない。胎土は精良で金雲母を含む。内外にぶい黄灰褐色を呈する。16 世紀代。５は龍泉窯系青磁碗で、外面には片切り彫りで退化して蓮弁文が入る。釉は厚く掛かっており、にぶい暗緑灰色に発色し、胎は明灰白色。14 世紀末から 15 世紀初頭。



第 109 図　ピット 36 遺物出土状況 (1/20)

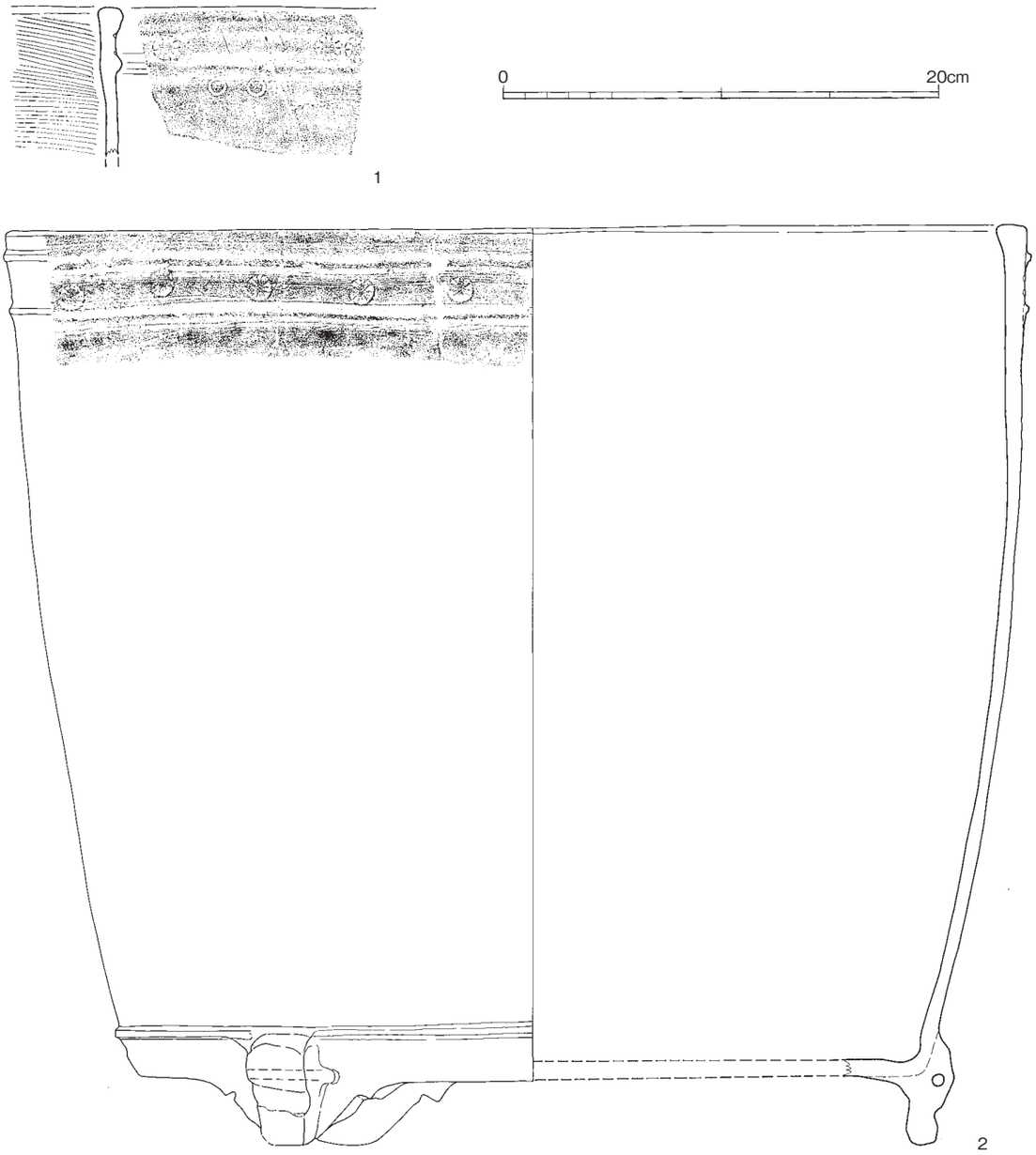
第 66 図 14 はピット 14、15 はピット 57、16 はピット 1 出土の鉄釘か鉄鏃の茎部と見られる鉄製品で、細長く直線的に伸びる。第 66 図 18 はピット 14 出土の鋏と見られる鉄製品、第 66 図 19 はピット 10 出土の鉄製飾り金具か。幅 9㎜の板が弧状に曲がり、1 ヶ所に径 3㎜の鋲が見られる。第 66 図 20 はピット 80 出土の刀子片である。

このほか図化していないが、ピット 14 からふいごの羽口、ピット 24 から合計 99.4g の鉄滓、ピット 50 から 33.6g の鉄滓、ピット 82 から 86g の椀形滓、ピット 83 から 61.7 ｇの鉄滓、ピット 95 から 38.8g の鉄滓が出土している。

遺構外出土遺物（図版 59、第 111 図）

６は青磁で、器壁が厚く、灰緑色を呈する。７は白磁碗で、発色のよい乳白色の釉が掛かり、高台は露胎。外底は削り出しで、

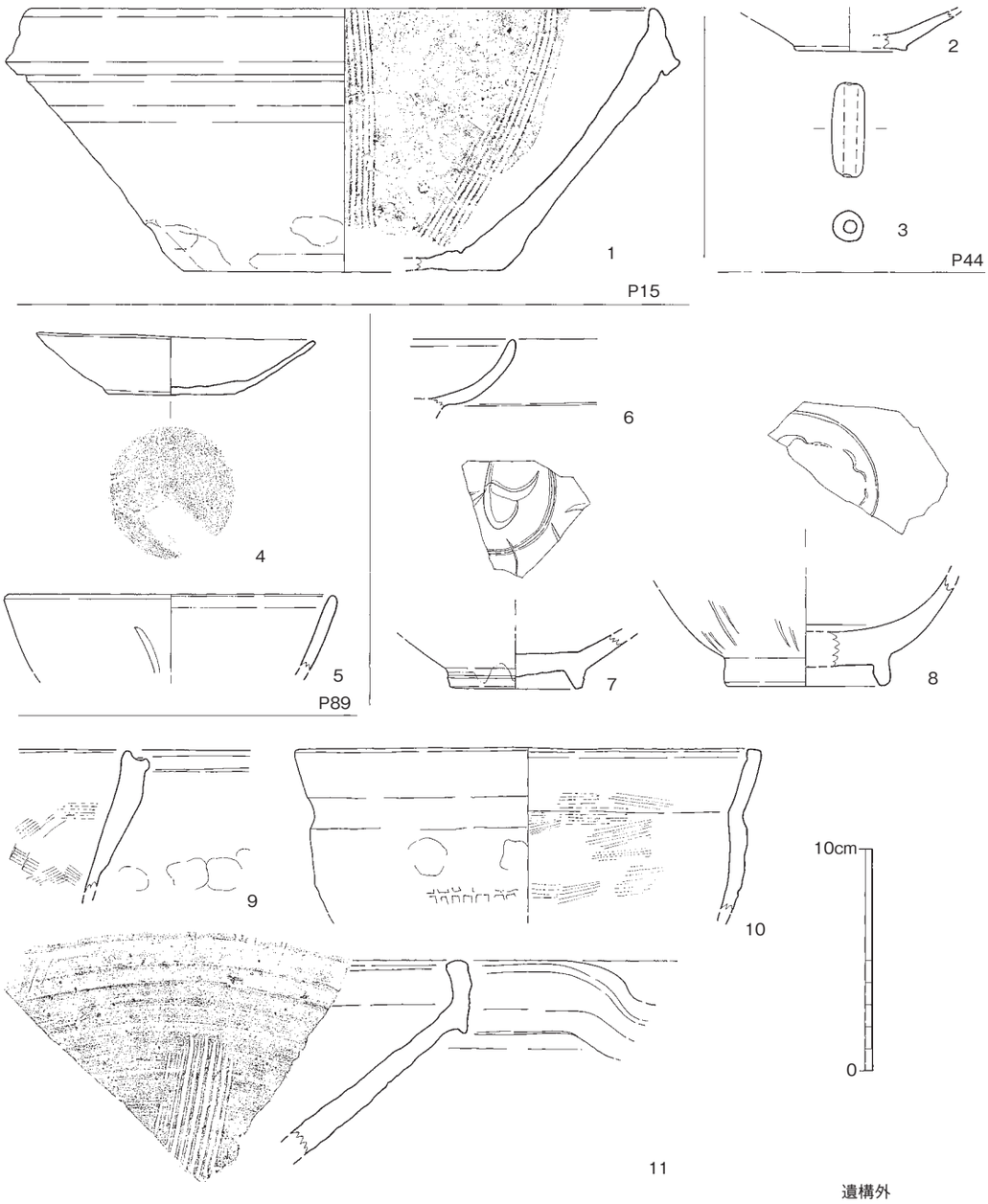
内面胴部と見込みに片切り彫りの花文が入る。12 世紀後半。８は龍泉窯系青磁の大振りの碗の底部で、見込みには片切り彫りによる花文が入る。胴部外面は蓮弁文が退化して２本単位の沈線になった文様が入る。釉は厚く掛かっており、外底のみ釉剥ぎされている。明淡緑白色に発色し、胎は明灰白色。15 世紀後半から 16 世紀前半。９は土師質土器の鍋で、外面口縁部は肥厚させ、口唇部を上から削って鍔を形成している。胴部はケズリで凹凸多い。内面はヨコナデと部分的にヨコハケが入る。器面が摩滅して胎の黄灰白色が露出している。外面に部分的に煤の付着が残る。胎は精良で軟質。13 世紀末。10 は土師質土器の鍋で、足鍋の可能性が高い。外面は口縁部がヨコナデ、胴部は上半に目の細かいタテハケ、下半から底部は格子目タタキ。内面は器面摩滅で観察不能。外面は



第 110 図　ピット 36 出土遺物実測図 (1/3)

使用変色しており、肩頸部以下に煤が付着している。内面は本来の黒灰色を呈する。胎は軟質。16世紀後半。11は遺構検出面出土の備前焼摺鉢で内外面ナデ、内面は摩滅してない。赤茶褐色を呈する。16世紀後葉。

このほか、遺構検出時出土の200.3gの鉄滓がある。



第111図　その他の遺構出土遺物実測図(1/3)

小結

ここでもⅠ区と同様に区画溝と思われる溝状遺構が検出された。このほかにも土坑やピット、自然流路なども検出されたが遺構密度は低い。

調査区東側では真砂土が堆積し、脆弱であるため遺構は見られない。そのほかの地盤も砂質土で脆い。調査区南側では溝状の堆積が見られる。覆土は黄褐色粘質土が堆積する。深さは5cm以下と浅く、幅は一定ではない。これらは地盤が真砂土のところに見られ、自然流露として取り扱った。Ⅳ区でも区画溝とそれに伴うピット群が検出されたが、遺跡北側に比べると溝が浅く、ピットも希薄である。土坑は1基､溝状遺構は14条検出された。このうち区画溝と思われるものは4条である。また、掘立柱建物や井戸などの遺構は見られなかった。しかしながらピット36の埋設された土器も見られ、生活の一端は垣間見られる。遺構から出土した遺物は14～16世紀のものが主体をなしており、遺跡北側同様に宝山城下に広がる集落の一部と考えられる。

地盤が砂質でもろく、調査区東側では現状を維持できない箇所もあった。調査区の東側には旧今川が用水路として残っており、川砂が堆積する箇所は当時の今川の氾濫原であったことも考えられる。また、地元住民の話ではこの付近では真砂土採取のために重機により掘削していた時期があるとのことで、遺構がカットされている可能性もある。いずれにしても旧今川の存在から西側に遺跡が広がっているものと思われる。

3)　まとめ

宝山桑ノ木遺跡と、市道を挟んでこれに連続する宝山小出遺跡で行なった今回の調査では、区画溝と考えられる多数の溝と、これに伴う掘立柱建物跡、井戸、土坑等を確認した。これらの遺構から出土した遺物は、弥生時代～奈良時代頃までのものは混入としても、主に 14 ～ 16 世紀頃の時期を示すと考えられる。

遺跡の現状は水田として利用されてきており、全体に削平を受けているものと考えられる。また、調査は合計 13 箇所の調査区に分割して行なっており、調査の際の条件によっては検出し得ていない溝もあるものと思われ、各調査区間で連続していない部分もある。

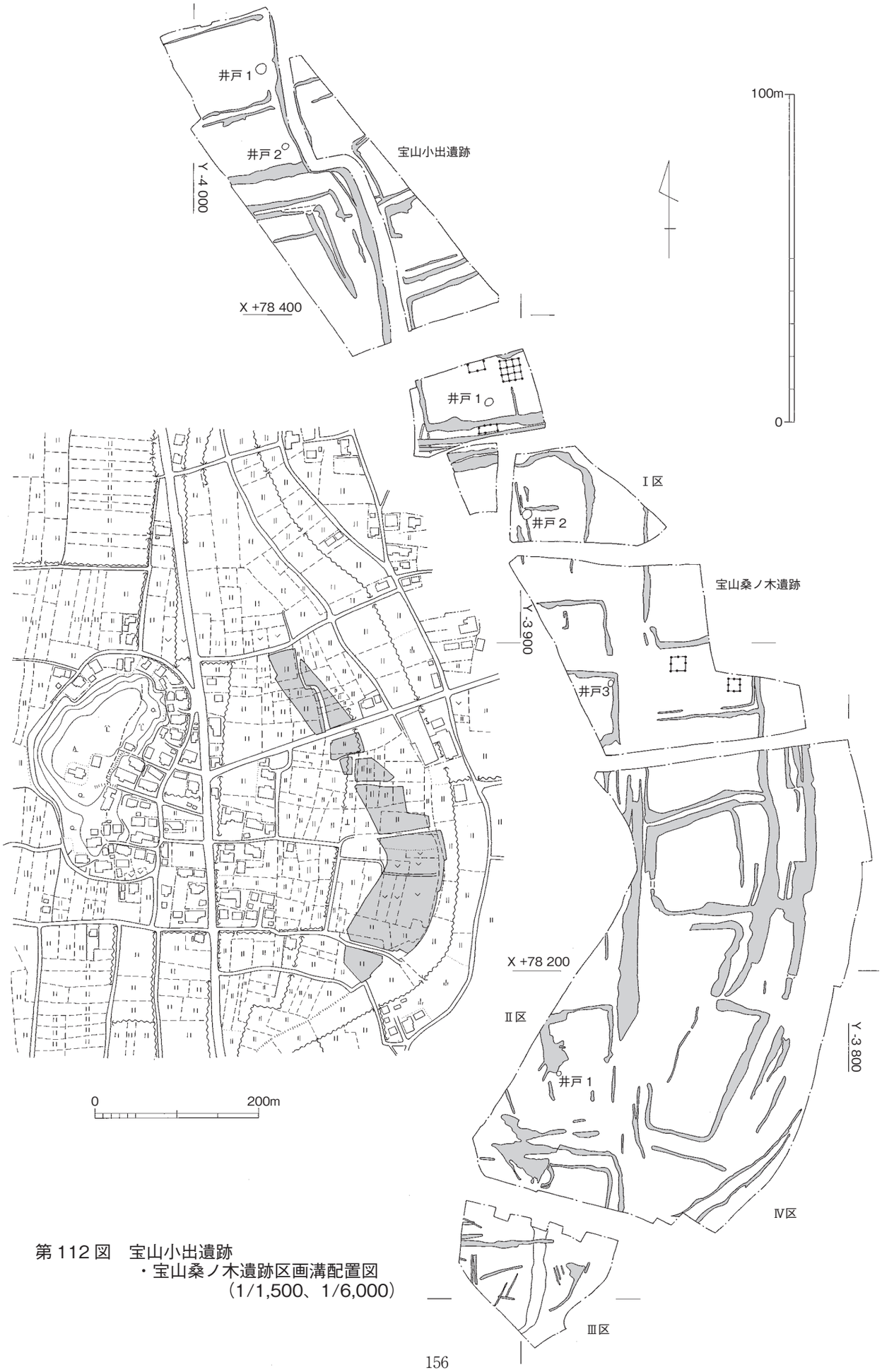
区画溝は、宝山小出遺跡 2 号溝、宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区 4 号溝、同 14 号溝の、比較的規模の大きな 3 条のほぼ平行して延びる南北溝を基準として、これに挟まれた幅約 50 mの部分を、規模の小さな溝でさらに方形に区画していく。結果的に南北に連続する方形区画を 3 列分検出した。それぞれの区画については、基本的には長方形であるが、地形と大溝に規制されたためかやや崩れた方形となる箇所もあり、また削平もあって溝が全周していないものが多く、逆に二重、三重となっている部分もある。区画内の一辺は 18 ～ 40 mが確認できる。また、区画溝どうしは宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区 8 号溝等を除いては基本的に接続せず、隣り合う 2 条の溝によって幅 1 ～ 3 m程の通路状の部分を残す。これが通路として利用されたか、あるいは塀、垣、柵等が存在したかは不明である。今回の調査では、東西約 200 m、南北約 400 mの範囲に、判然としない部分も多いものの 20 弱の区画を検出した。

この区画は、宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区の区画内にこれに伴う掘立柱建物跡があること、また合計 5 箇所の区画内に井戸が存在すること等からも、屋敷地であることは確実と考えられ、全体で集落を形成している。遺構の広がりについては、宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区 14 号溝の東側 10 数mで、現在の地形も段となって落ちているが、今川の旧河川敷に達すると考えられ、遺構の状態からもこの辺りが集落の東の限りと考えられそうである。また、宝山小出遺跡の北側についても、事前に実施した確認調査の結果では遺構を検出し得なかった。集落は主に今回の調査区の西側 100 mの距離にある丘陵の方向に展開するものと思われる。

さて、この丘陵であるが、東西 200 m、南北 280 m程の独立した小山で、今川と長峡川の氾濫によって周囲を削り取られた低位段丘であるという。宝山の地名の由来でもある。ここにはかつて宝山城が築かれたとされ、伝えられる存続期間は今回の調査成果とも大きく矛盾しない。そうであるならば、今回の調査で検出した集落跡は宝山城の城下町の一部であるといえそうである。

しかしながら、宝山城は『豊前古城記』の記載がほぼ唯一の根拠であり、以前周囲に濠があったとも、また土塁や曲輪の一部が残るともされるが、後世の改変もあってか現状では明瞭に確認できない。現在の地形から判断する限り、宝山城はその存在自体が未確定と言わざるを得ない。

とはいえ、現地に立って見上げれば、この丘の存在感は特別であり、現在の宝山の集落もその東麓を中心に広がり、頂部には王埜八幡宮と養徳寺があってこの地の精神的中心となっている。今回の調査で発見した集落が、この丘と無関係にこの場に占地したとは思えないし、比高差 10 mに満たないここを利用しなかったというのも考えにくい。集落の性格を判断するにあたって、宝山城跡の解明は避けて通れないと言えよう。



第112図　宝山小出遺跡
・宝山桑ノ木遺跡区画溝配置図
（1/1,500、1/6,000）

3. 流末溝田遺跡

1）概要

流末溝田遺跡は行橋パーキングエリア建設予定地の東端に位置する。用地内にある農業用水路から用水を引くために調査区を横断するように塩ビ管が埋設されている状態であった。このため調査区は７つの区画に分断される事となり、便宜上、北からⅠ区～Ⅳ区に分けて調査を行った。実際に調査を行ったのは路線図に見えるⅡ区～Ⅳ区と表記している箇所である。

Ⅱ区ではピット状の遺構が多数あり、遺物も確認できた。しかし、住居跡や生活跡の痕跡とは考えられなかった。

２号土坑は当初、一つの長楕円形の遺構と考えて掘削を行った。長軸を基準に半裁し、土層を確認したところ３つのピット状遺構が切り合って居ることがわかった。このため土坑ではなく、それぞれ単体のピットとして取り扱うことした。このため遺構実測図の掲載はしていないが、遺物の報告は２号土坑として行う。

Ⅲ区においてもⅡ区同様にピット状遺構と遺物が多数確認されているが、住居等を想定できる物はなかった。調査区東側では不整形な溝状の落ち込み（SX01）があり、遺物が多量に出土している。表土剥ぎの際に若干剥ぎ取ってしまっている。この遺構はⅣ区でもにも続いている。

Ⅳ区は北側の調査区よりは遺構や遺物の密度が希薄になっている。ここより南は遺構の広がりは期待できないと考える。調査区東側（用地外）へ遺跡が広がっている可能性はある。

ピットが多数検出されたが住居址など遺構となるものは確認されなかった。

平成 20 年５月 11 日から重機を投入し、１区の調査を開始した。表土を除去した段階で遺構や遺物が確認できず、調査区東側にトレンチを設けてさらに下層を確認した。青灰色の砂層で湧水してきたため、これから下層では遺構は望めないと判断した。このため１区では確認調査のみとなった。さらに１区の南側の区画においても確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。５月 14 日からⅡ区の表土剥ぎを開始した。Ⅱ区では耕作土と下層の褐色土を除去したところで黒褐色土と黄灰色土の遺構を確認した。表土剥ぎと同時に作業員による検出・掘削作業を行っていった。調査が梅雨時期であり、農繁期のため用水路に常に水が流れている状態であったため、雨と用水路から滲み出る水により作業中は常に水中ポンプを稼動しなければならず、夜の間に調査区が水没してしまうが排水場所がないことや排水に毎日半日近く費やすなど悪条件が重なり、調査は困難であった。Ⅱ区の表土剥ぎを終えるとⅢ区・Ⅳ区も先行して表土剥ぎを行っていった。７月２日にローリングタワーでの全景写真を撮り、７月６日に測量を終えてⅡ区の調査を終了した。引き続きⅢ区の調査を開始した。７月 13 日には連日降り続いた大雨により調査区から水があふれる寸前となり、ポンプ数台での排水に３日ほど要した。８月２日に SX01 の掘削を開始し、多量の縄文土器を確認した。８月 27 日に高所作業車により全景写真を撮影した。９月２日にバックホーで下層確認のためトレンチを入れるが、遺構等は確認できなかったためⅢ区の調査を終了し、Ⅳ区の調査を開始した。９月 30 日には掘削がほぼ終了し、10 月６日にローリングタワーで全景写真を撮影して流末溝田遺跡の調査を終了した。

第 113 図　流末溝田遺跡遺構配置図 (1/400)

2）遺構と遺物

土坑

1号土坑（第114図）

Ⅱ区中央東側で検出した遺構。南北約120㎝、東西約60㎝、深さ約40㎝を測る。床面はほぼ水平で壁の立ち上がりは急である。上層の黒褐色土には縄文土器が含まれていたが、小片であり図化に堪えなかった。この黒褐色土は上面の一部のみに堆積しており、これより下層からは遺物の出土はない。このため時期は不明である。

2号土坑（第113図）

Ⅱ区南側で検出した。当初土坑として調査を行ったが、経過の中で複数のピットが切りあったものと判明した。このため実測図は割愛し、出土遺物のみ取り上げた。

出土遺物（第133図）

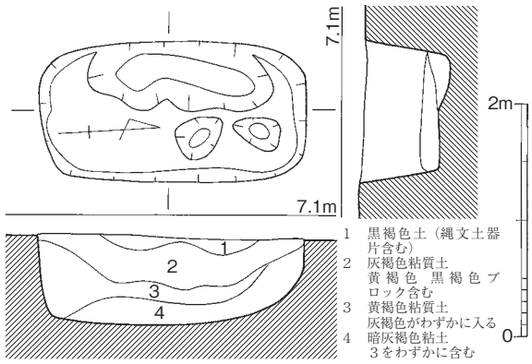
8は石錘である（第133図）。両側面に抉りを施し、抉り部を作り出す。緑色片岩製。23は磨製石斧である（第133図）。全体に横方向の粗い研磨を施し成形する。特に基部側の研磨が粗い。蛇紋岩製。

SX

SX01（図版61、第113図）

Ⅲ・Ⅳ区で検出した。Ⅳ区では16ｍにわたって遺構の続きと思われる落ちが確認できるが、東側は不明瞭で推定の域をでない。また遺物のほとんどがⅢ区に集中していることから遺構実測図はⅢ区のみの掲載とした。

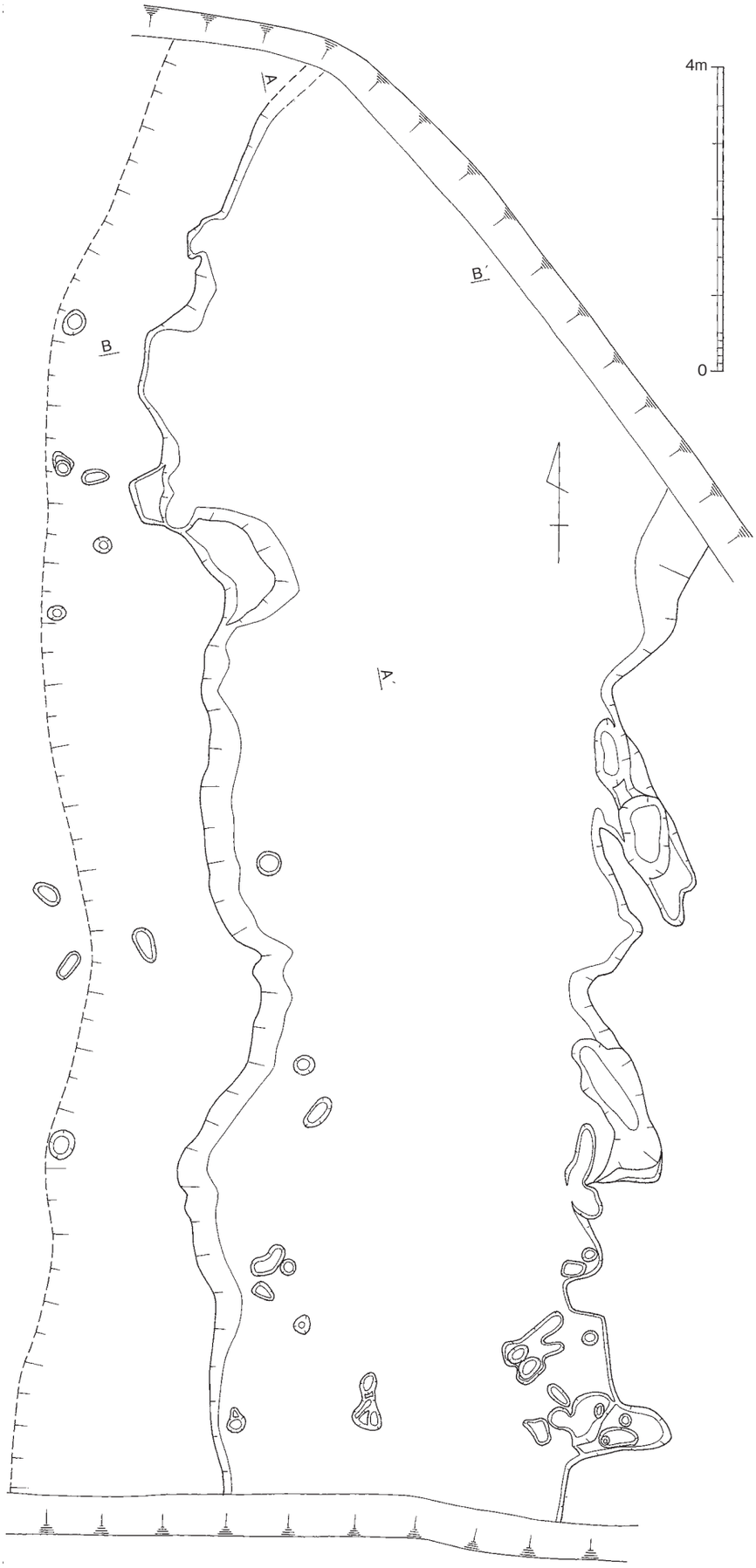
幅約６ｍ、深さ約10～20㎝の溝状の遺構である。黒色土が全体的に薄く堆積していた。本来、遺構配置図に記した破線のラインから堆積が見られたが、表土剥ぎの際に遺構に気づかず重機で掘削してしまった。遺構の淵は直線的でなく、蛇行している。遺構北側において縄文土器や石斧などの石製品がまとまって出土した。このほかからの出土はほとんどない。遺構は浅いが、後世に削平されている形跡はない。重機で掘削したことも考慮しても深さは20～30㎝と見られる。意図的に形成された溝ではなく自然流路のようなものと思われる。遺物が一箇所に集中しているが、流れ込みによるものか廃棄されたものかは判然としないが、遺物が表面にまばらにあることから流れ込みの可能性が強い。



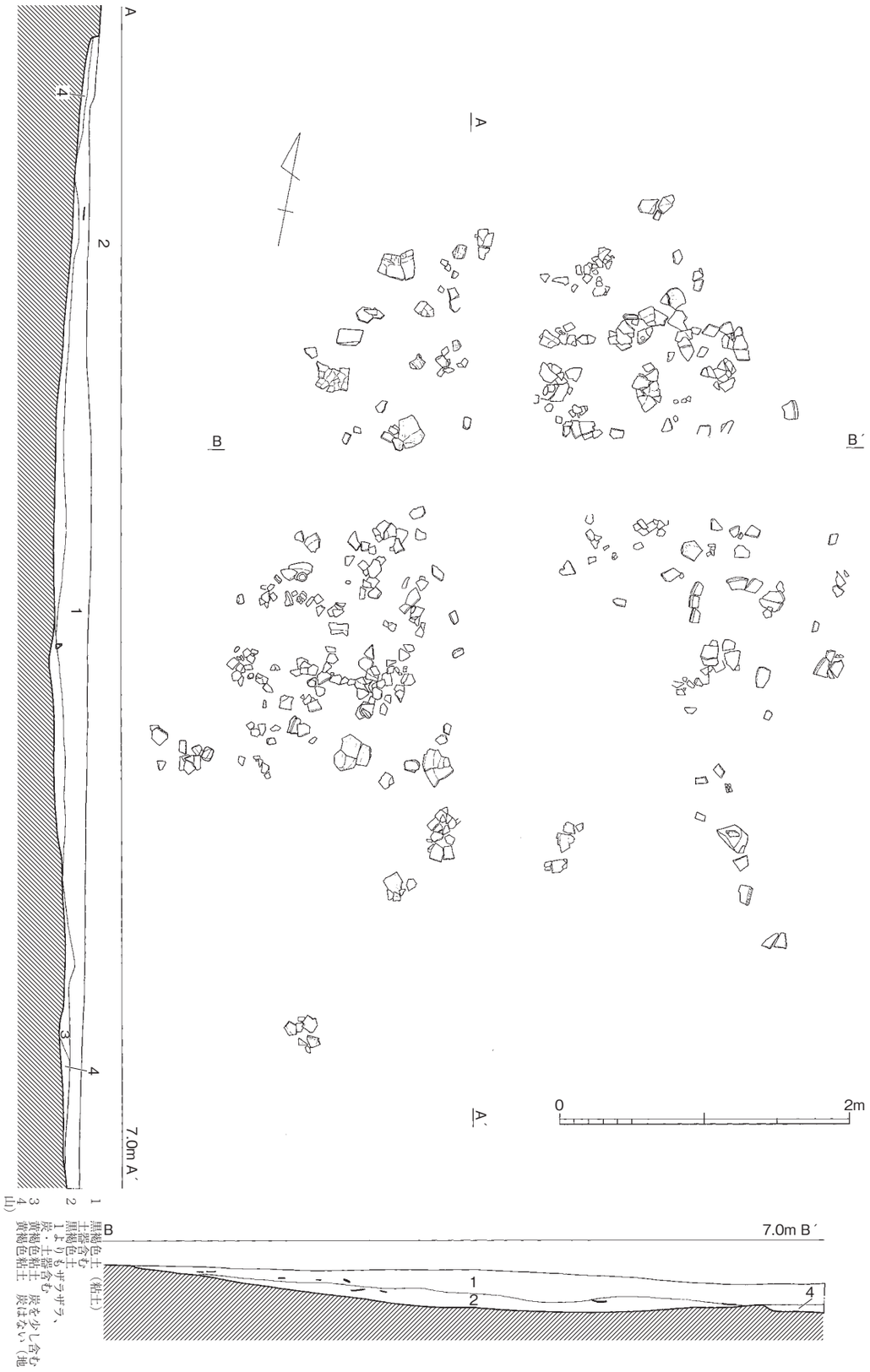
第114図　1号土坑実測図（1/60）

出土遺物（第117～135図、図版62～65）

深鉢は体部が砲弾形になるものと、上半部で逆く字形に屈曲するものがある。また、5・7・32のように体部に明確な屈曲が認められず口縁部が緩く外反するものもみられる。

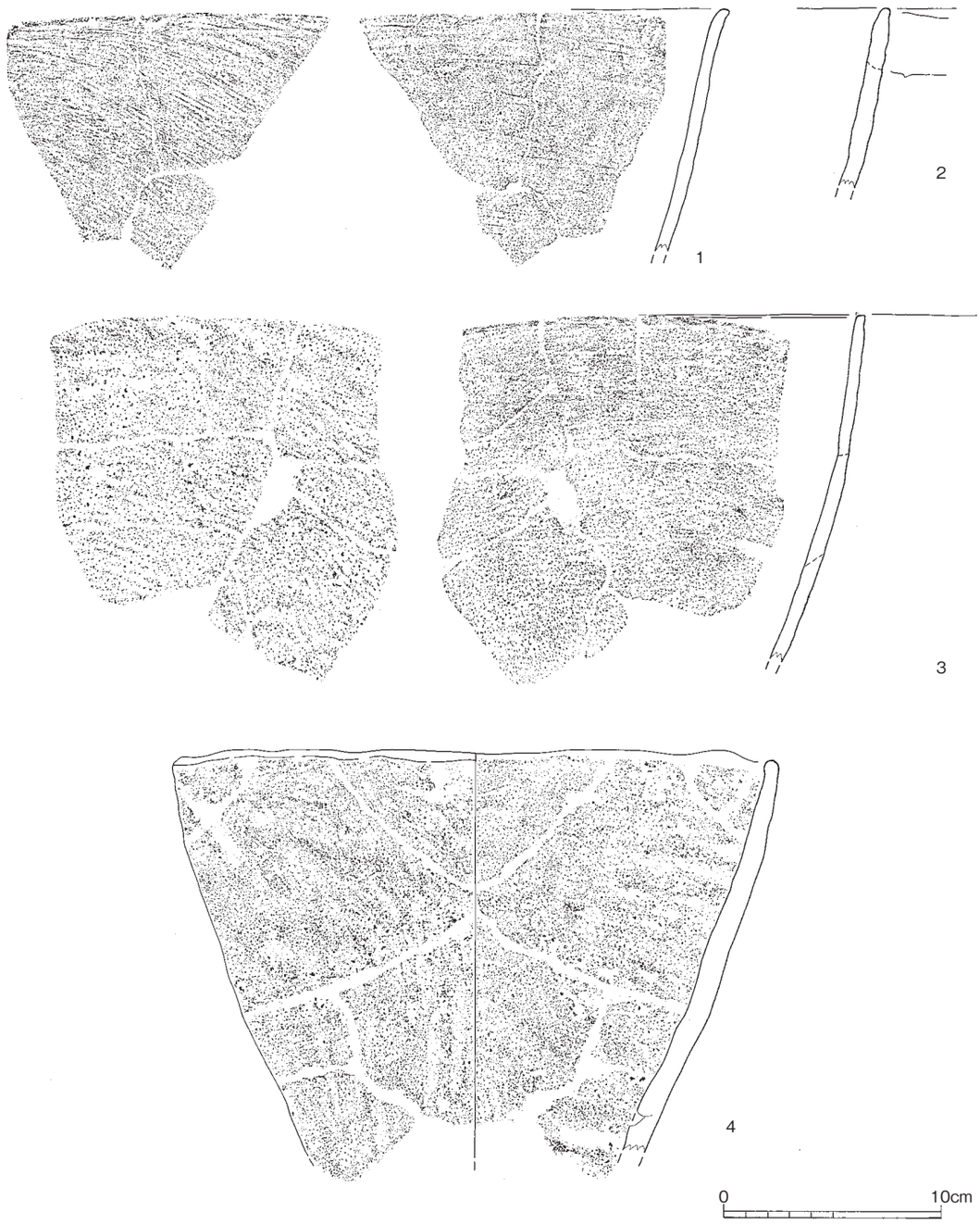


第 115 図　SX01 実測図（1/80）

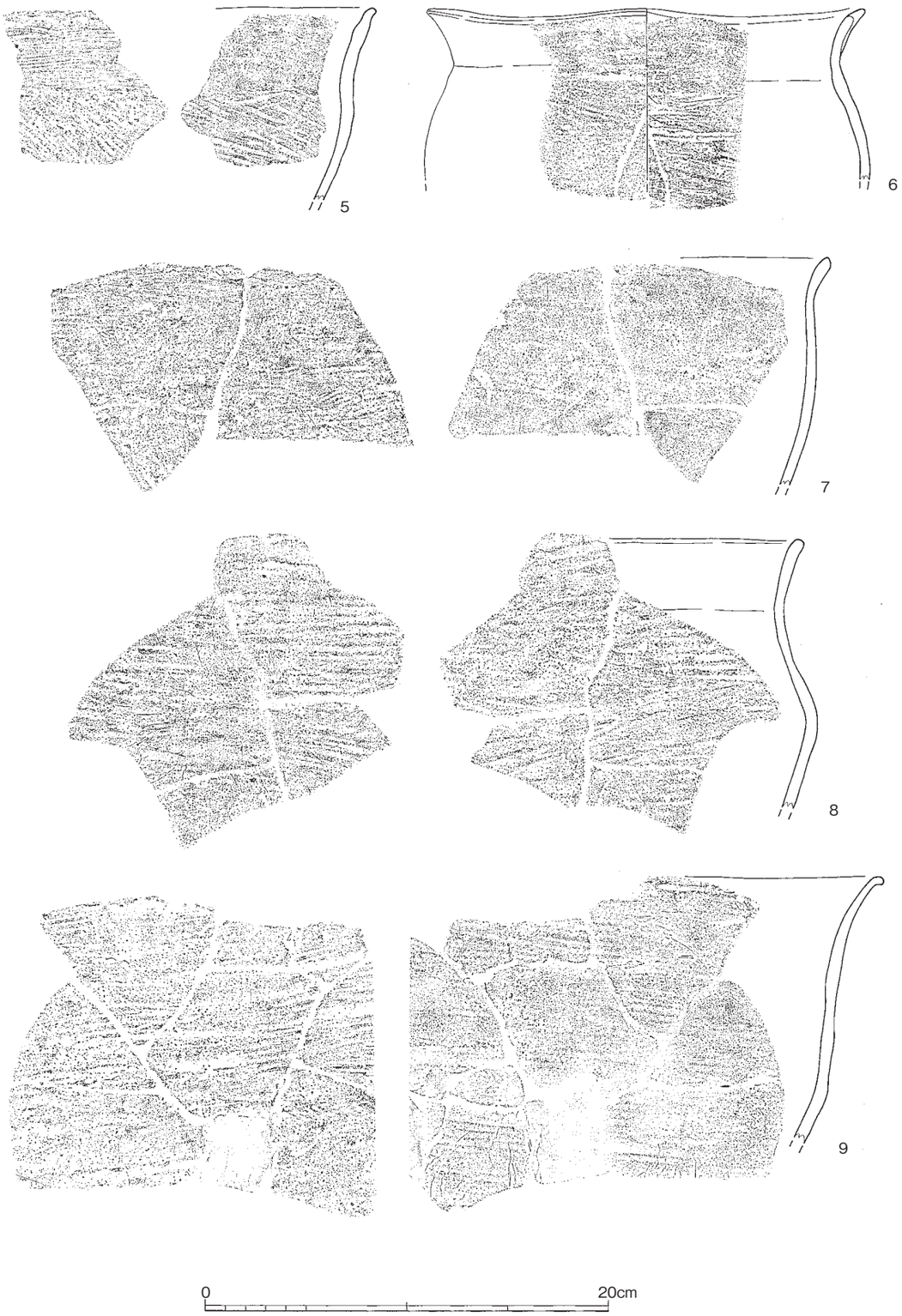


第 116 図　SX01 遺物出土状況（1/40）

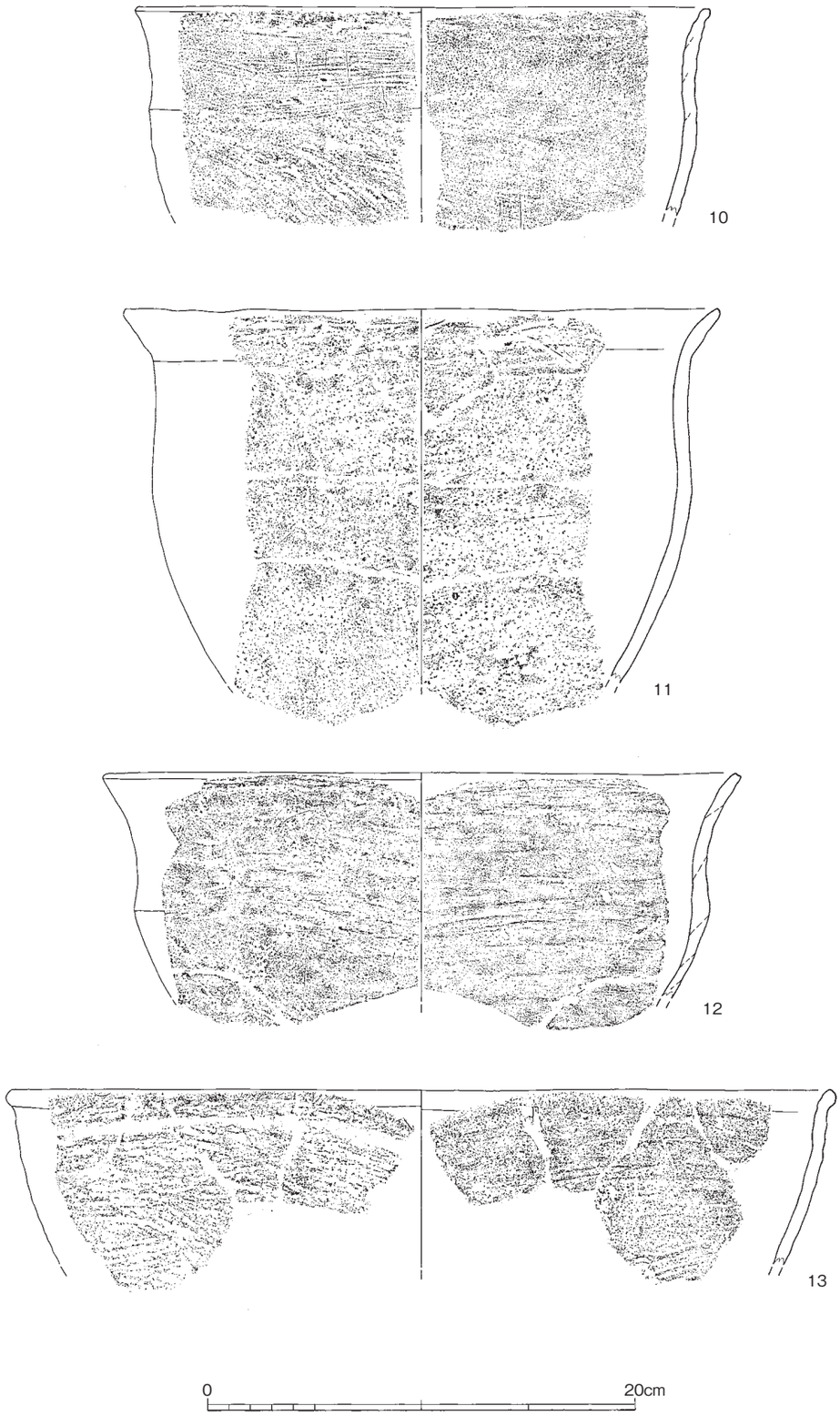
１～19は口縁部に刻みをもたないもの。１～４砲弾形になるもので、１・３のように口縁端部が面をなすものと２・４のように丸く収めるものがある。４は器壁が厚い。外面の凹凸が著しく作りの粗い個体である。調整は、外面は下から上へタテ方向にケズリ様のナデ（条痕）をおこなった後、下から斜め上方への工具ナデを行う。内面は半時計まわりの横位のケズリ様の工具ナデ。５～12・14～19は体部が屈曲するもの。13は口縁端部を外反させて丸く収める。砲弾形となるか。14は図上復元では浅いタイプとなるが傾きに不安が残る。いずれも内外面に条痕が残る。



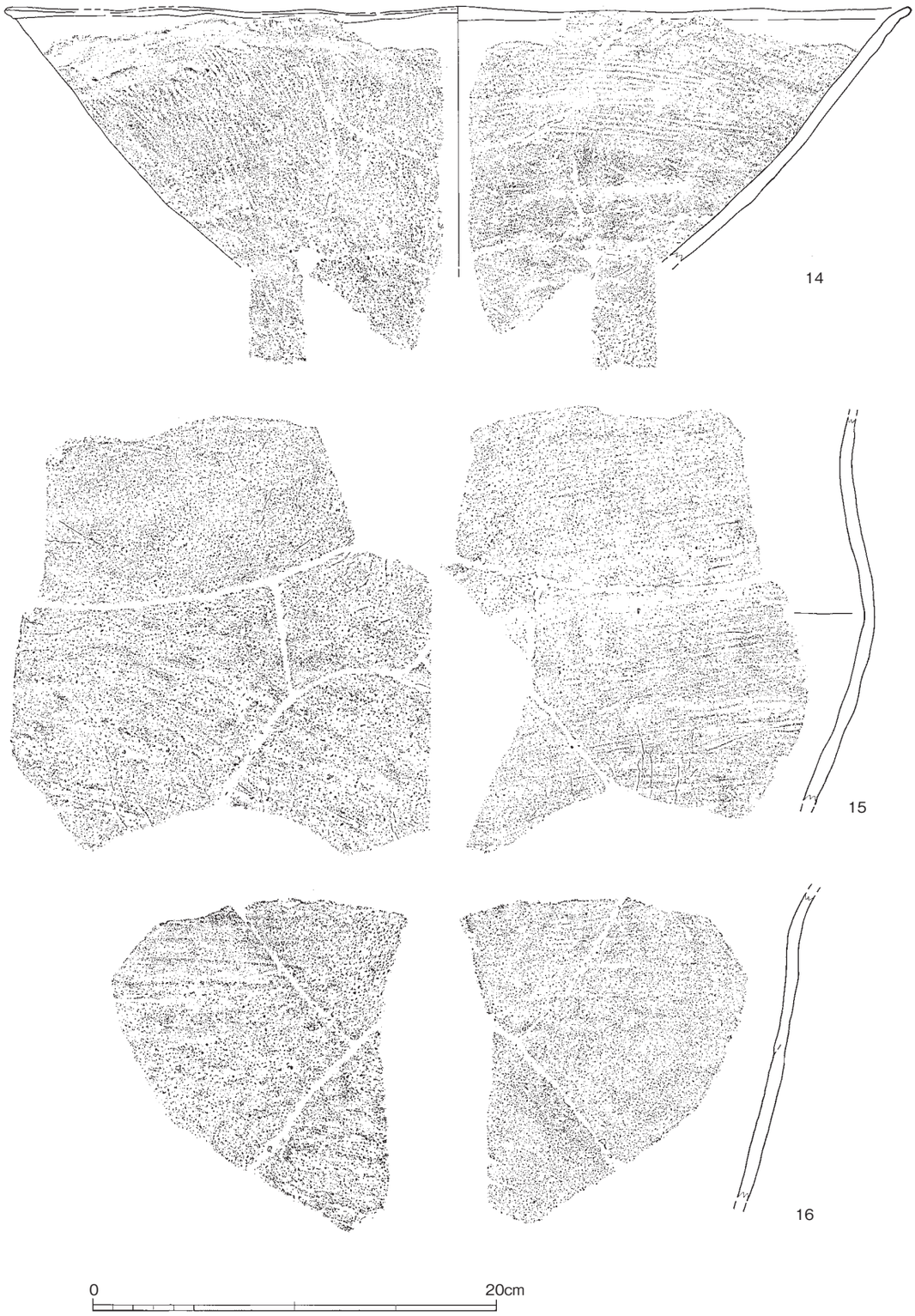
第117図　SX01出土土器実測図①（1/3）



第 118 図　SX01 出土土器実測図②（1/3）

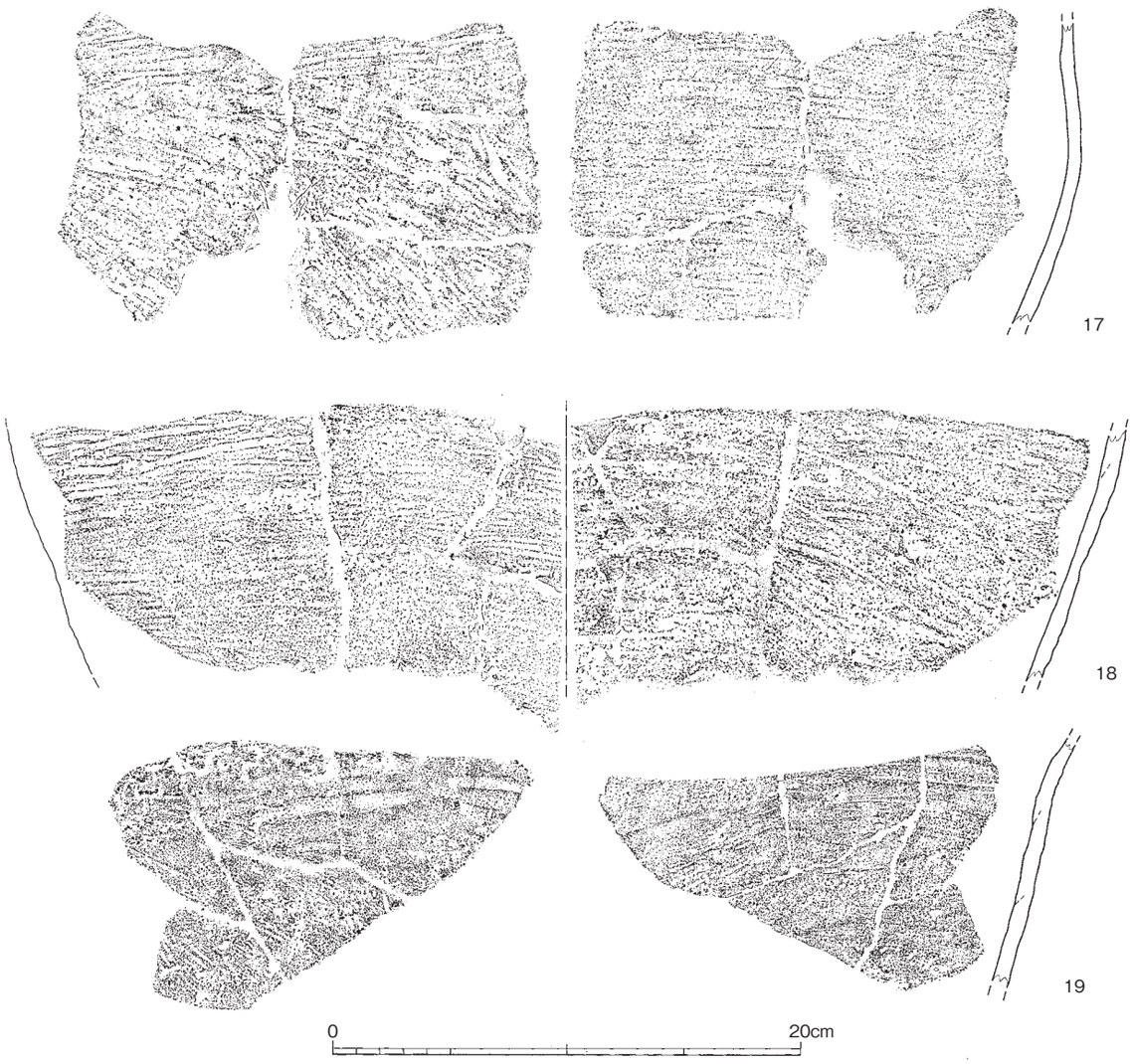


第 119 図　SX01 出土土器実測図③（1/3）

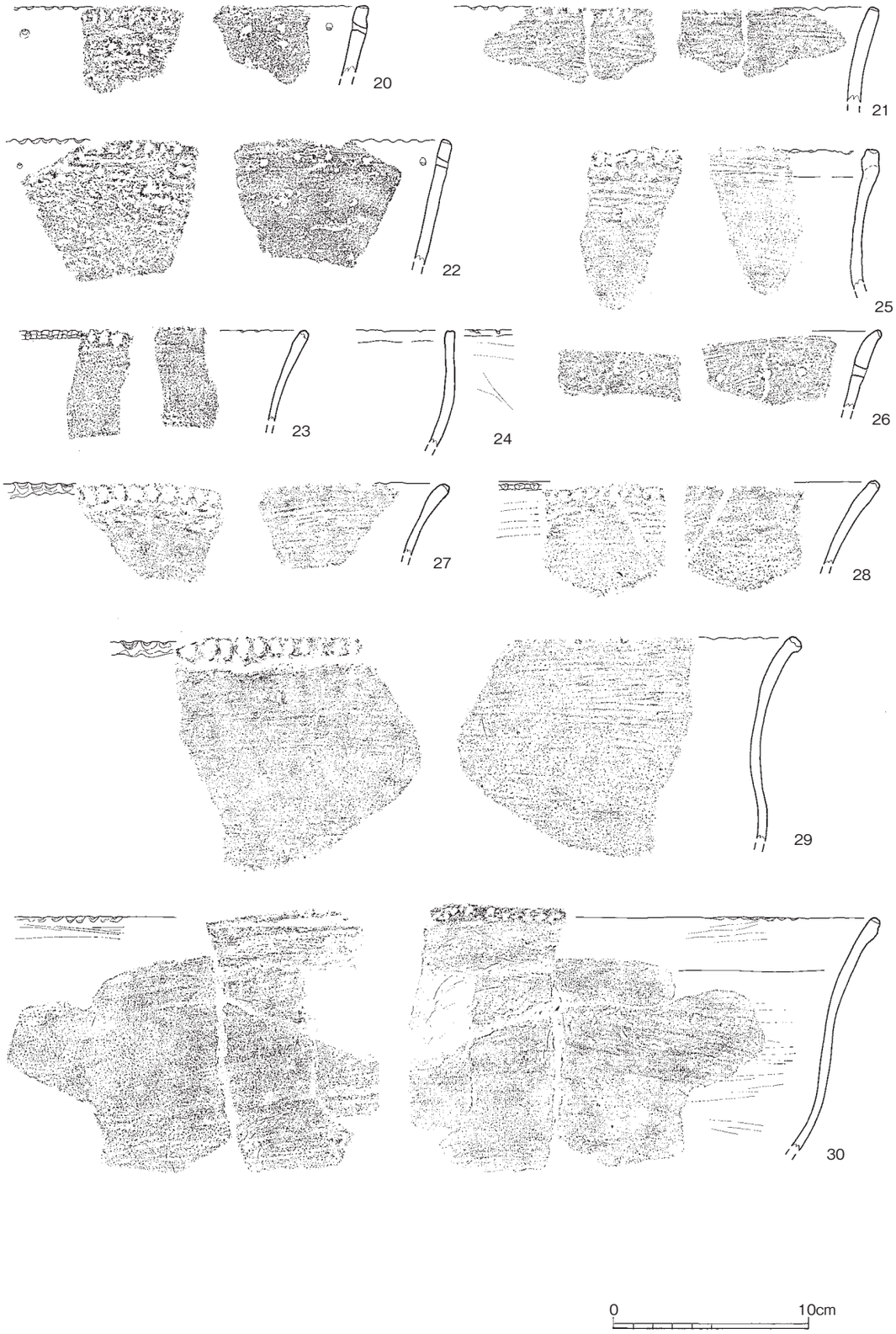


第 120 図　SX01 出土土器実測図④（1/3）

20 ～ 32 は口縁端部に二枚貝押圧による刻み目を入れるもの。口縁部が直立するものと外反するものがあり、前者は砲弾形、後者は体部で屈曲する形になるか。20 には径 4mm の孔が 2 ヶ所に、22 は径 3 mm の孔が 1.4 ～ 1.6cm のほぼ等間隔で 5 ヶ所に、26 には径 5mm の孔が 3 ヶ所に残る。32 は球形の体部に外反する口縁を有するもの。体部下半が被熱により赤変している。復元口径 25.8cm、残存高 23.4cm を測る。20・22 ～ 24 は内面がナデ調整で、それ以外は内外面ともに条痕が残る。30 は浅めの鉢形となる。内面の調整はミガキ。33 ～ 36 も口縁端部に二枚貝による刻み目を入れるが、突帯状に肥厚させている。37 ～ 40 は口縁部よりやや下位に 1 条の刻目突帯をもつもの。外反するものと内傾するものがみられる。41 は口縁端部を外反させて端部を丸く収める如意形口縁の甕に近いタイプである。42 ～ 52 は口縁上端面と口縁部やや下位の凸帯に二箇所に刻目をもつもの。49・55 は波上口縁の頂部に刳り込みがある。52 は突帯を持たないが、二箇所に刻み目を入れる。54 は口縁部外面とその下位にともに指頭圧痕による施文を行う。いずれも内外面とも



第 121 図　SX01 出土土器実測図⑤（1/3）

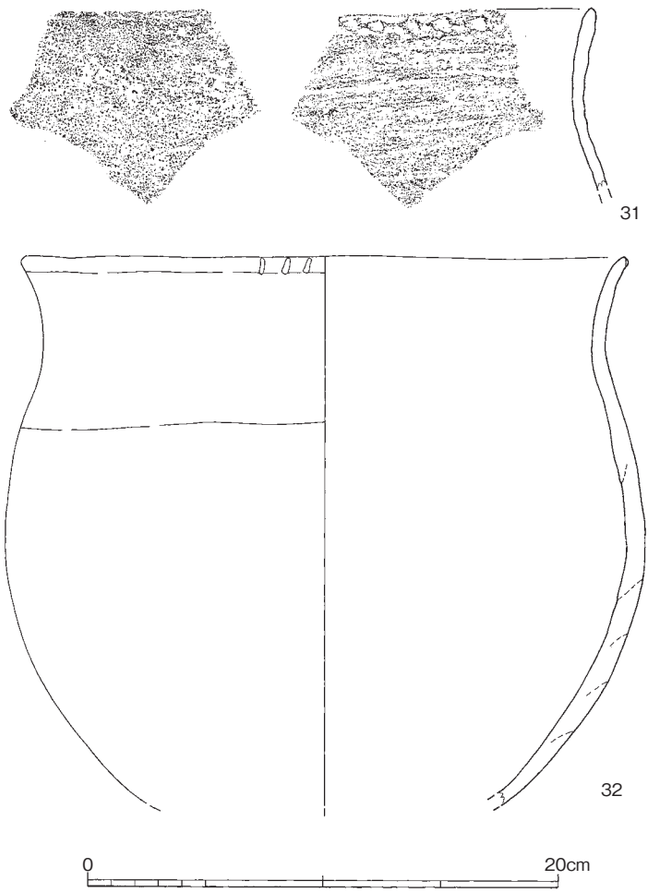


第 122 図　SX01 出土土器実測図⑥（1/3）

に条痕が残る。6・31・37・40・49・50・51・55は波状口縁。法量は復元口径21.6cm～39.0cm。56～58は胴部片で、屈曲部に刻み目を入れる。内面はナデ調整。59・60は底部。底径は11.6cm・14.0cm。

61～66は外面に鋭利なヘラ状工具先による文様を施す。62は口縁端部に刻み目を入れる。65は体部の屈曲部よりやや上位に二条の沈線をめぐらせ、その上位に文様を描く。61～66はいずれも胎土が比較的精良で、微砂粒を多く含む。色調は暗黄灰色～黄灰色を呈する。西部瀬戸内地域からの搬入品である可能性もある。66は「×」状のヘラ描きがあるが、胎土も他の文様を有する個体とは異なり粗めの砂粒を多く含んでいる。

浅鉢は大半が精製で、ミガキを施す。器形は胴部から屈曲して口縁部が短く開くもの（67～77・81～89など）、体部で屈曲して口縁部が大きく開く平口縁（78・79）などがある。前者では74・75・85のように屈曲部が明瞭なものと、84のように丸みを帯びるものとがある。また、後者のうち92・93は口縁端部に刻み目を入れ、波状口縁となる。74は口縁部にリボン状突起の一部が



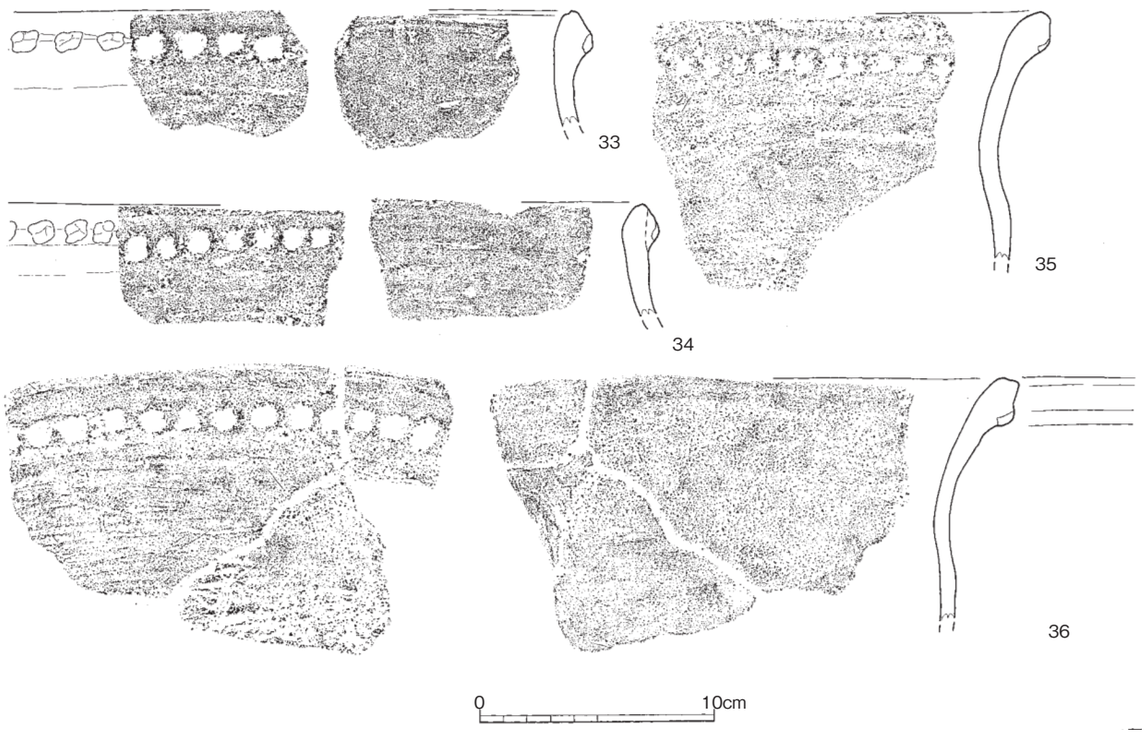
第123図　SX01出土土器実測図⑦（1/3）

残る波状口縁の方形浅鉢。77 は体部の 2/3 ほどが残存する。底部は踏ん張り気味の上げ底で、丸みを帯びて立ち上がる体部に、屈曲して短く開く口縁が付く。復元口径 30.0cm、底径 7.0cm、器高 16.5cm を測る。80 は体部の屈曲部に二個一対の瘤状隆起が貼付される。82 は 1/2 ほどが残存する。丸底。法量は、復元口径 22.2cm、器高 8.6cm を測る。77・80・81・84・86・89 ～ 91 の口縁部にはリボン状突起を有する。86 の調整は外面がミガキ、内面は横方向のナデ。外面は黒塗り。口縁部下に補修孔を両面からあける。92･93 は波状口縁。92 は口縁部下に補修痕を両面からあける。浅鉢の法量は復元口径 25.0 ～ 38.0cm を測る。94 ～ 98 は底部。94 は尖り底気味となり、外面には条痕が放射状に残る。97・98 は高台を持つ。後者は高台端部を肥厚させる。

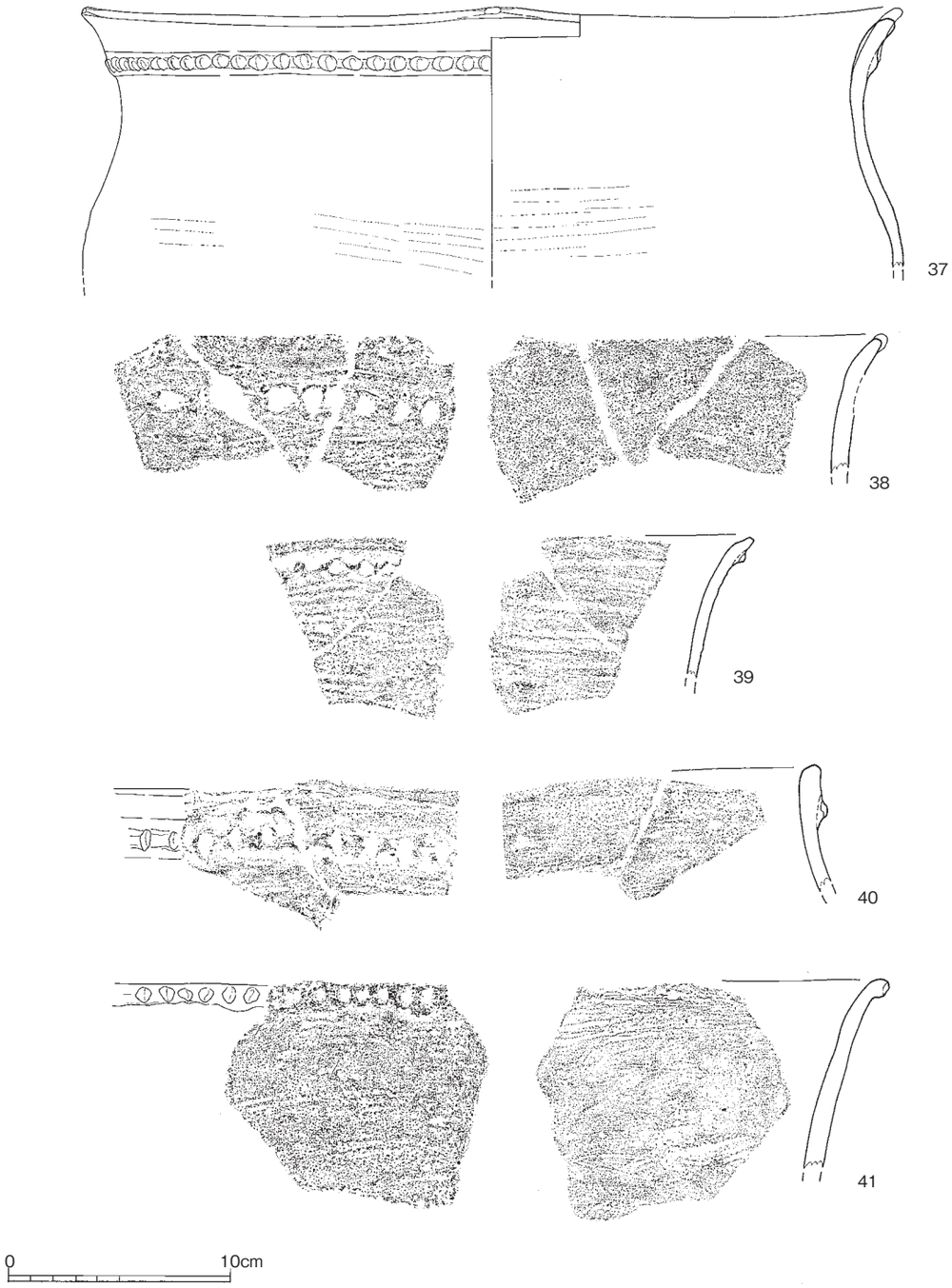
99 は精製の鉢と考えられる。調整は外面が条痕、内面がヘラミガキ。

100 は体部上半部の破片で、丸みを帯びた体部に直口する口縁が付くようである。外面にはリボン状になろうか､浮文の一部が残存する｡色調は黄灰色を呈する｡壷もしくは注口土器と考えられる。

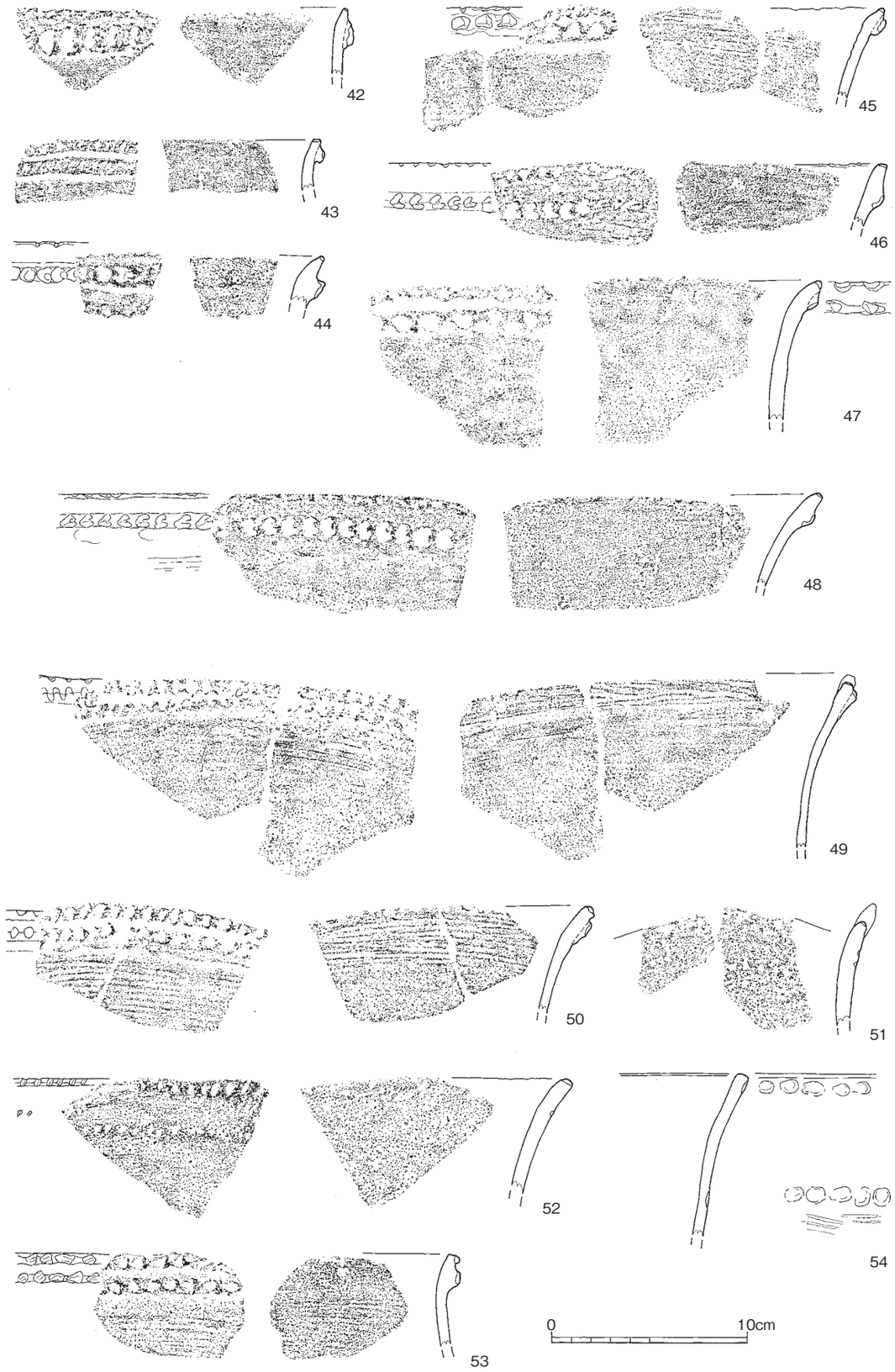
1・2 は打製石鏃である（第 133 図）。共に基部がごくわずかに凹む。安山岩製。4 は石匙か。側縁にのみ剥離を施し、中央には主要剥離面が残る。安山岩製。5・7・は石錘、6 は土錘である（第 133 図）。5・6 は縦方向に研磨を施し、抉り部を作り出す。5 は凝灰岩製。7 は上下ならびに右側に剥離を施し、抉り部を作り出す。片岩系石材製。9 ～ 13、17、19 ～ 21 は石鍬である（第 134 図）。いずれも両側縁を中心に剥離を施し成形する。11・13 はわずかに刃部が潰れ、使用痕と考えられる。17 は頁岩、他は片岩製。22 は磨製石斧である（第 134 図）。22 は乳棒状を呈し、前面に丁寧に研磨を施し成形する。蛇紋岩製。25・26 は砥石（第 135 図）。25 は表裏面を砥面とし、表面には刃部研磨痕が見られる。凝灰岩製。26 は 2 面を砥面とし、いずれも凹みが大きい。1 面に 2 本の刃



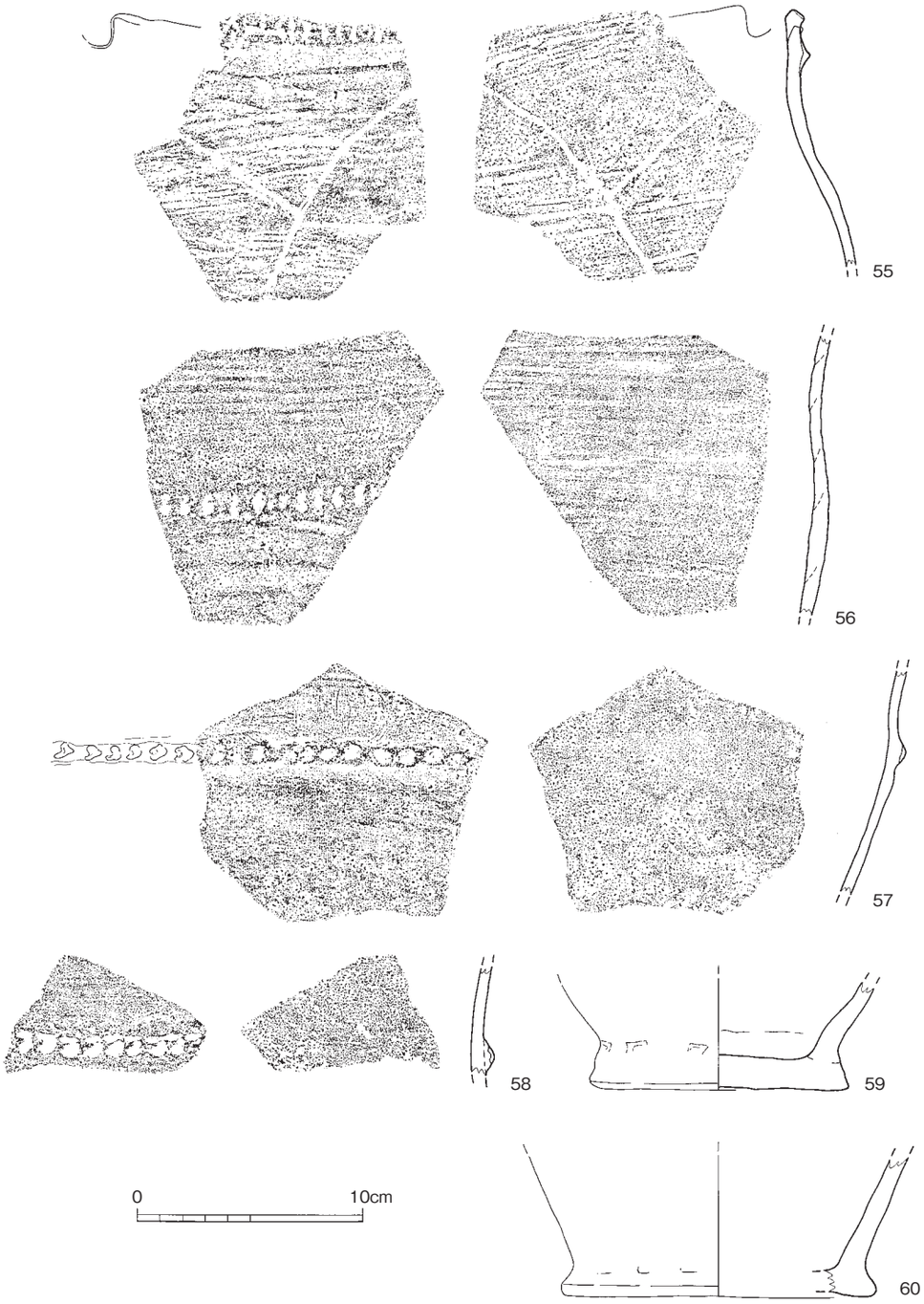
第 124 図　SX01 出土土器実測図⑧（1/3）



第 125 図　SX01 出土土器実測図⑨（1/3）



第 126 図　SX01 出土土器実測図⑩（1/3）



第 127 図　SX01 出土土器実測図⑪（1/3）

部研磨痕が見られる。凝灰岩製。27 は磨石である（第 135 図）。表裏面を磨り面とする。安山岩製。28・29 は台石である（第 135 図）。共に花崗岩製で石質も類似しており、同一個体の可能性もある。上面のみ磨り面としており、29 は左側の凹み部分にわずかに擦痕が見られる。

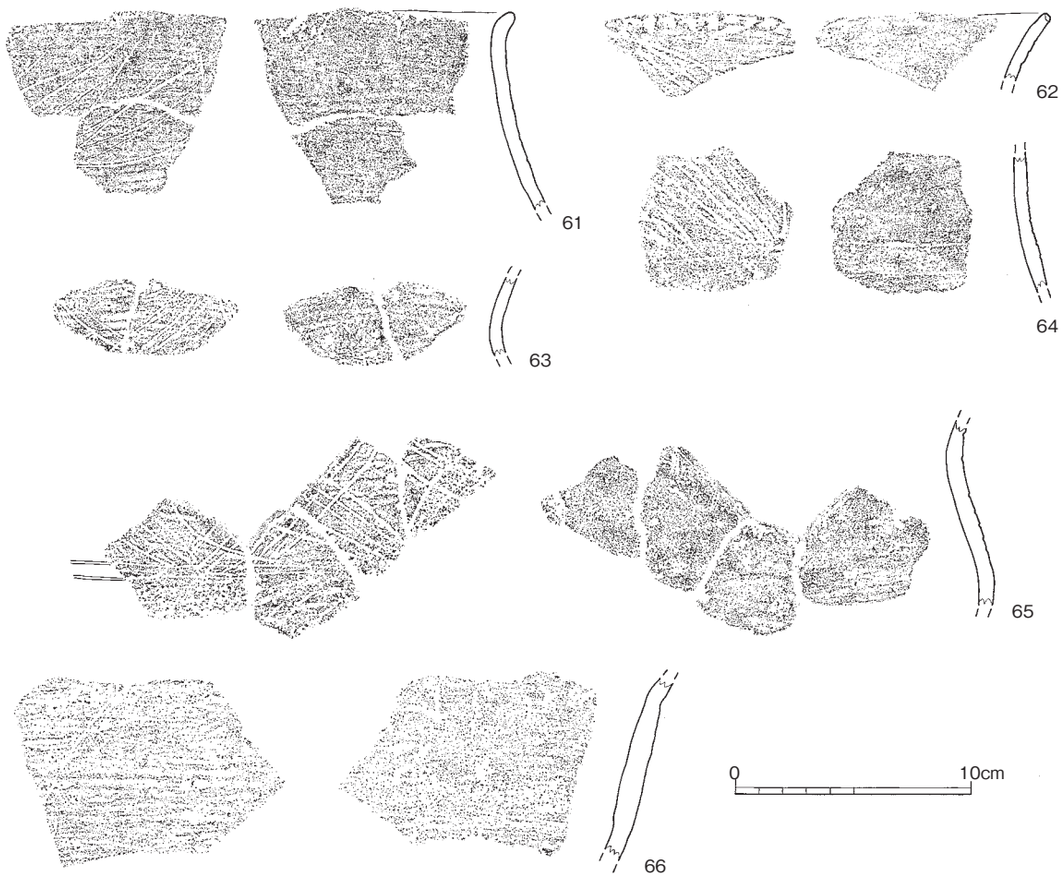
特殊遺物（第 133 ～ 135 図）

3 はスクレイパーか。下面に細かい剥離が認められ、使用痕と考えられる。頁岩製。P-109 出土。14 は側面上方に抉りを施し、紐掛けの抉り部を作り出す。15 は側面に剥離を施し、基部側を細く仕上げる。16 は先端に剥離が見られ、使用時に割れたものか。18 は他の例に比べて厚く、段が形成されるため未製品の可能性もあるが、先端がわずかに潰れており、製品として使用したものか。21 は出土例の中で最も大きい。先端が欠損しており、使用時のものか。17 は頁岩、他は片岩製。14 は遺構検出時、15・16 は遺構外出土、18 は P-95 出土。24 ～ 26 は砥石である。24 は上面のみを砥面とする。石質と大きさから持ち砥の仕上げ砥と考えられる。白色頁岩製。P-109 出土。

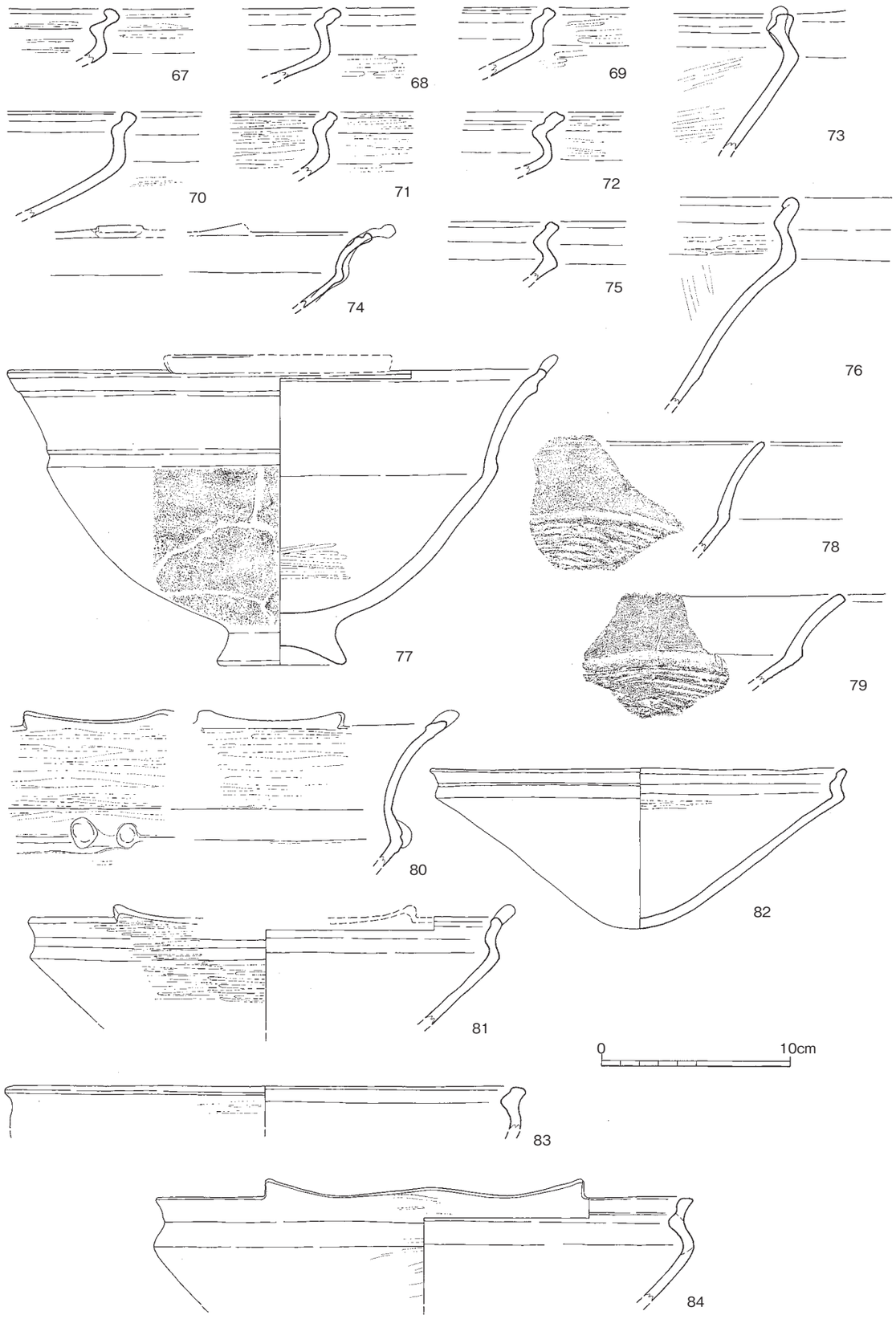
その他の出土土器（図版 65、第 132 図）

深鉢

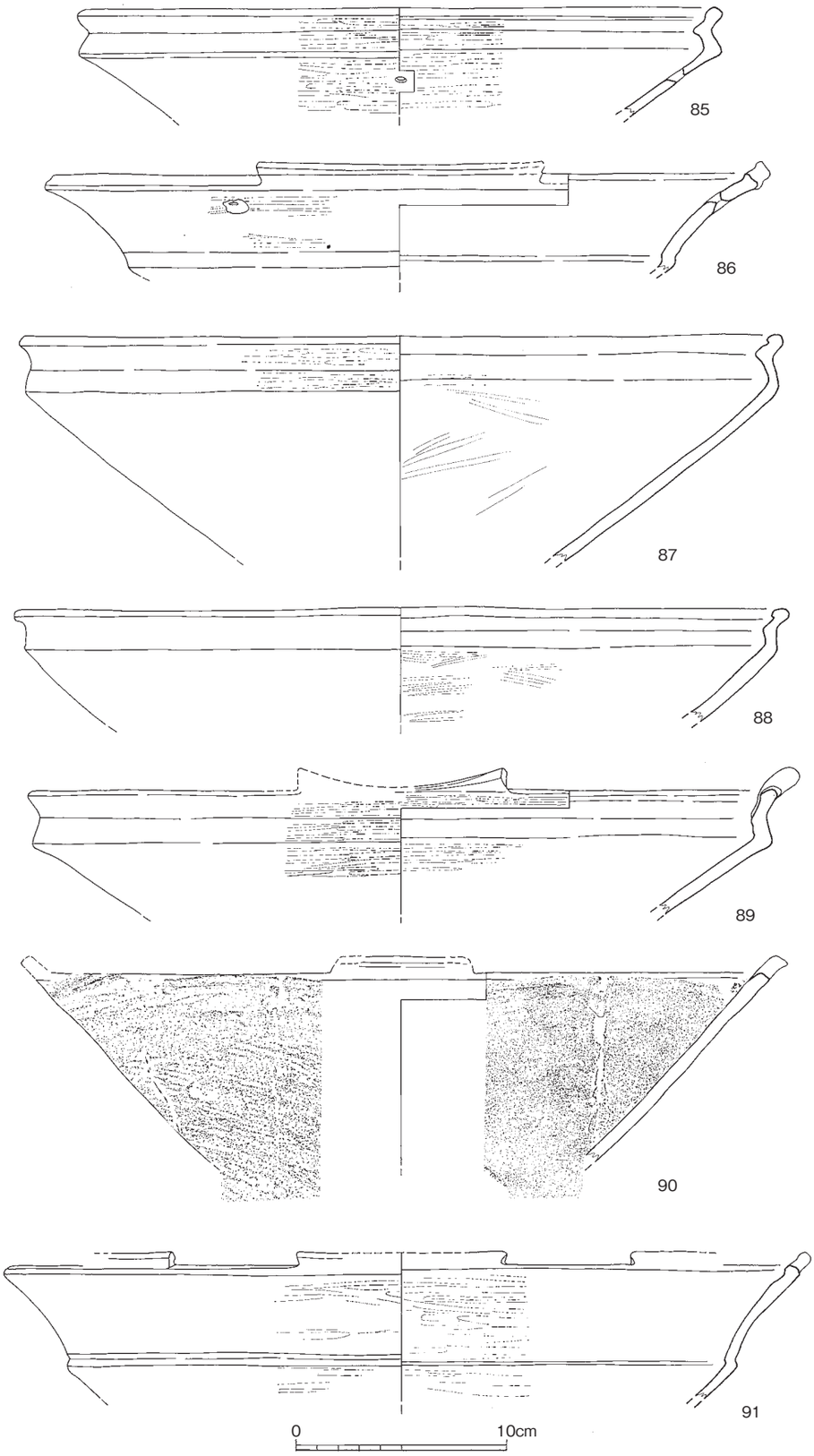
1 は口縁下に刻目凸帯をもつ。3 は屈曲部。4 は上げ底。1 ・ 4 は遺構検出時、2 ・ 3 は試掘トレンチ出土。



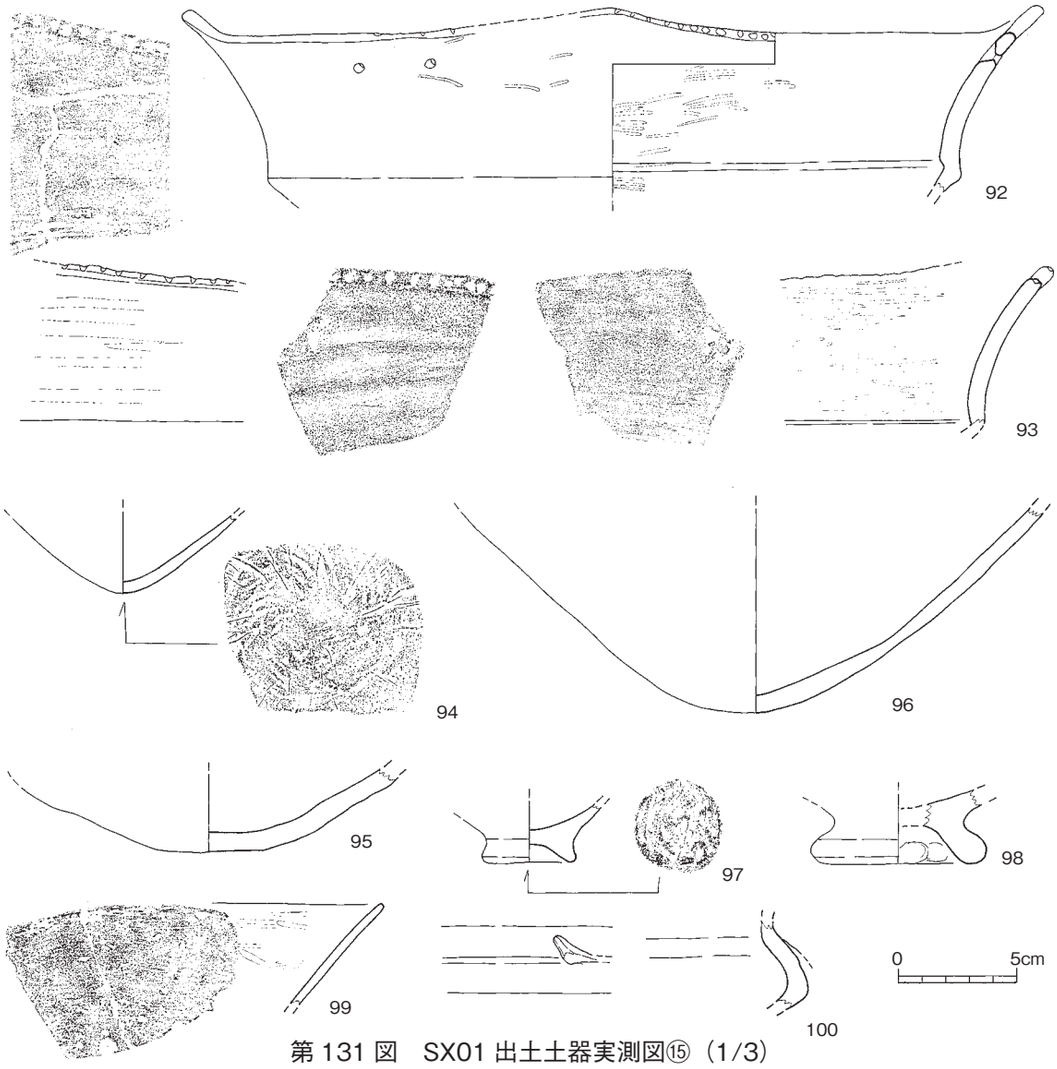
第 128 図　SX01 出土土器実測図⑫（1/3）



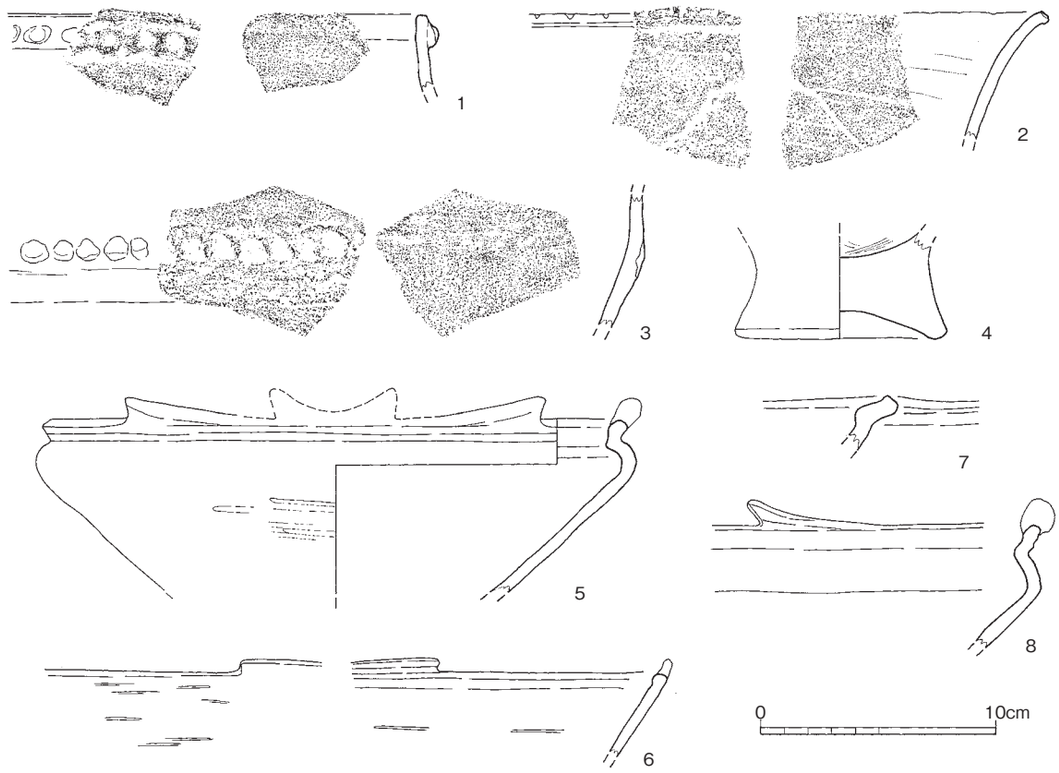
第 129 図　SX01 出土土器実測図⑬（1/3）



第 130 図　SX01 出土土器実測図⑭（1/3）



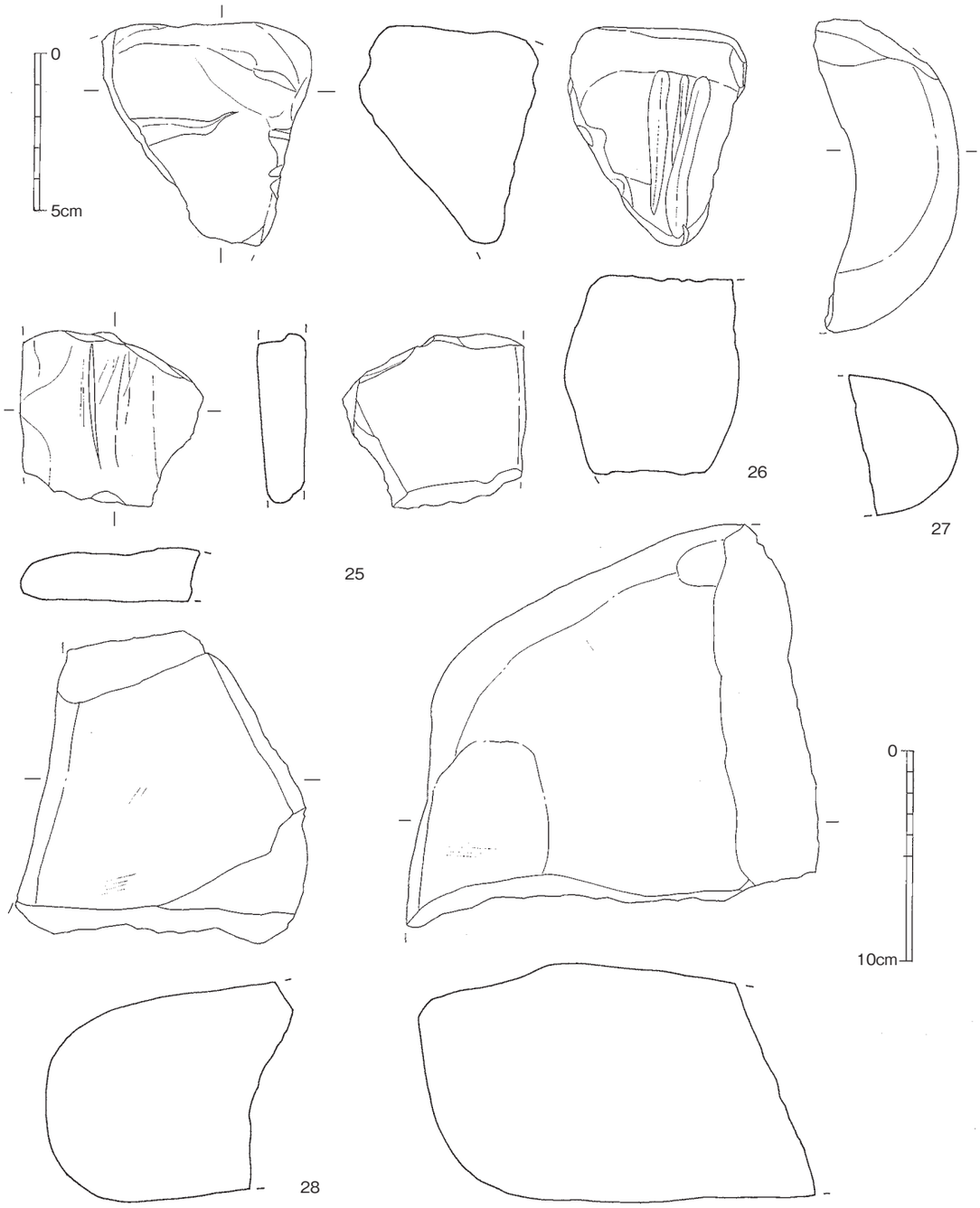
第 131 図　SX01 出土土器実測図⑮（1/3）



第 132 図　その他の出土土器実測図（1/3）

第 133 図　特殊出土遺物実測図①（1/2、1・2 は 2/3）

第 134 図　特殊出土遺物実測図②（1/2）



第 135 図　特殊出土遺物実測図③（1/2、28・29 は 1/3）

浅鉢

いずれも精製。５・６・８は口縁部にリボン状の突起をもつ。５・７はピット出土。

3）まとめ

流末溝田遺跡では縄文時代の遺構・遺物が確認された。当遺跡の北東約 700 mのところに宝山遺跡がある。ここからは縄文後期～晩期の土器が見つかっている。

今回の調査で出土した遺物のほとんどがSX01 からの出土であり、1 ヶ所に集中している。深鉢･浅鉢ともに口縁端部に刻み目を施すものがあり、深鉢ではさらに口縁部下に刻み目突帯を持つものもある。また、浅鉢はおおむね精製品であるが、体部に条痕を施す物がある。これらは瀬戸内地域で多く見られる特徴である。また、口縁部下に連続した穿穴が見られ、無文土器の孔列文に類似した土器も確認されている。

行橋市域においては縄文晩期の遺跡・遺物は希薄であり周辺地域においても希少である。SX01 から出土した遺物は破損しているものの状態が良い物が多く、当地域の縄文晩期の良好な資料となる。さらに瀬戸内地域との関係性を考える上でも重要な発見といえる。

図　版

1　宝山小出遺跡遠景
（空中写真、南から）

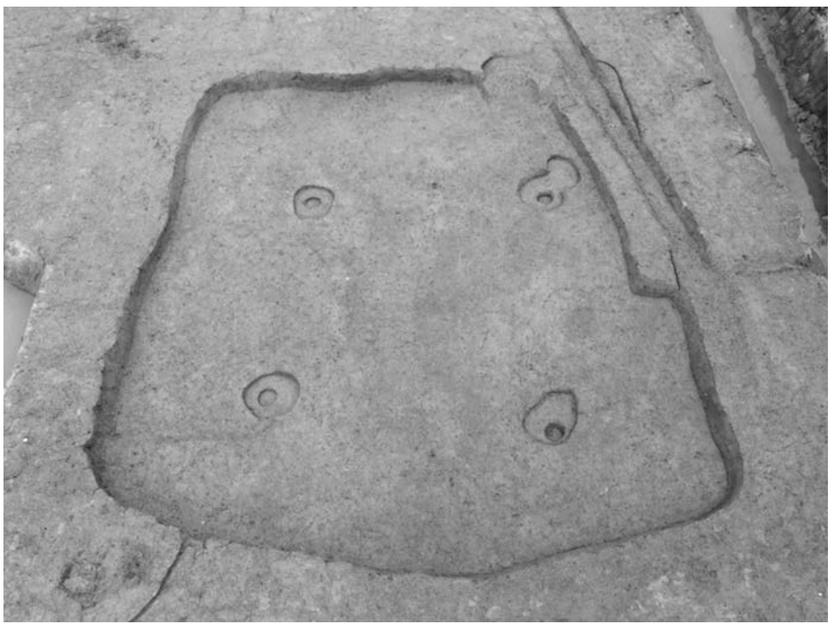
2　宝山小出遺跡遠景
（空中写真、東から）

図版２

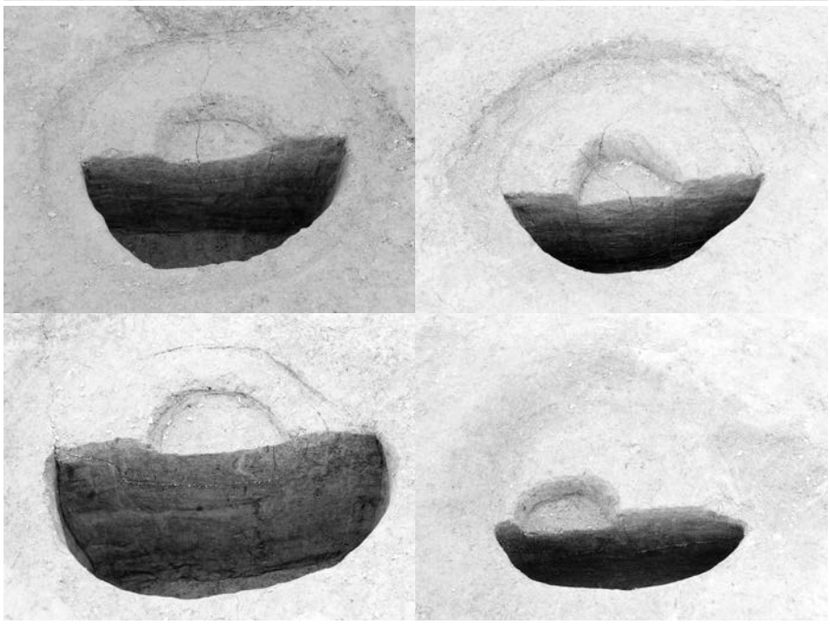
1　Ⅰ区遠景（空中写真、東から）

2　Ⅰ区全景（空中写真）

3　Ⅱ区全景（空中写真）



1　１号竪穴住居跡（南から）



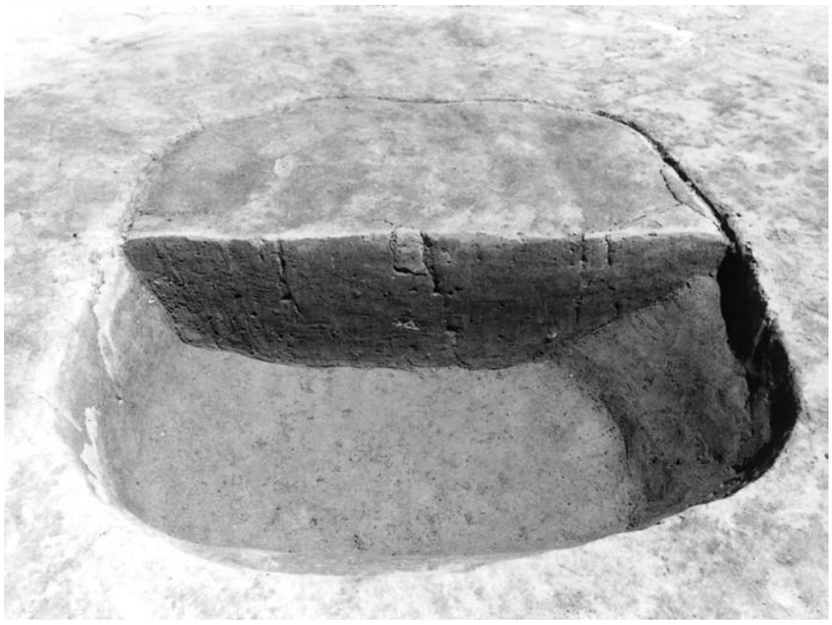
2　１号竪穴住居跡柱掘形

3　１号竪穴住居跡カマド(南から)

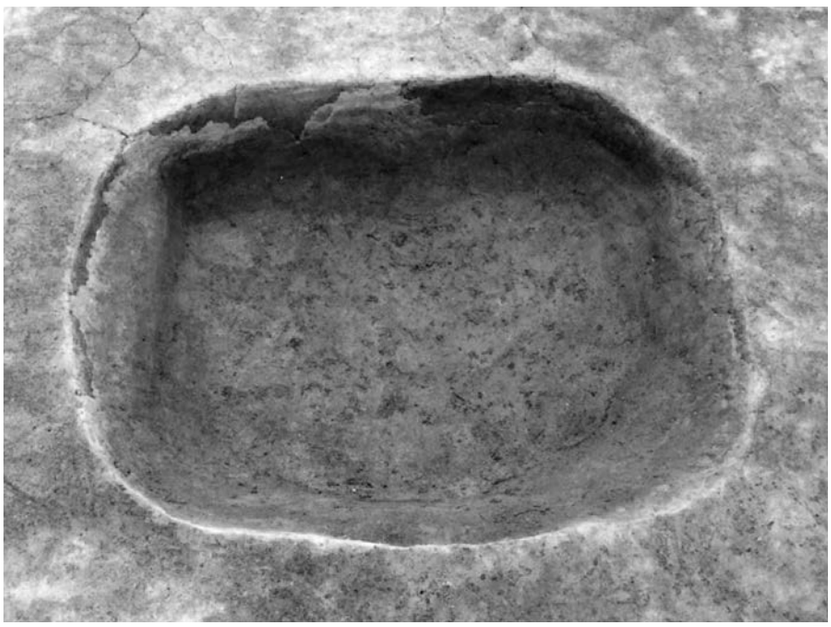
図版４

1　１号土坑土層（北東から）

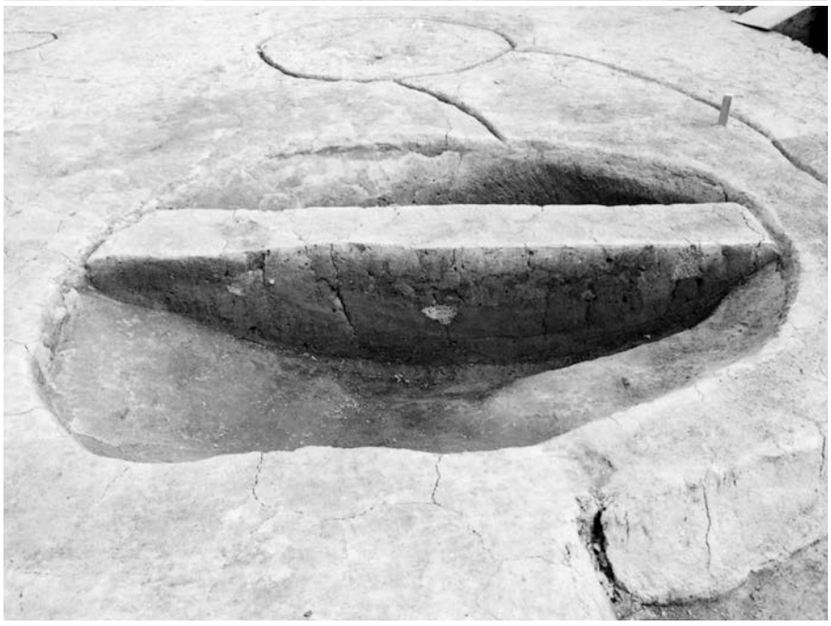
2　１号土坑（西から）



3　２号土坑土層（南から）



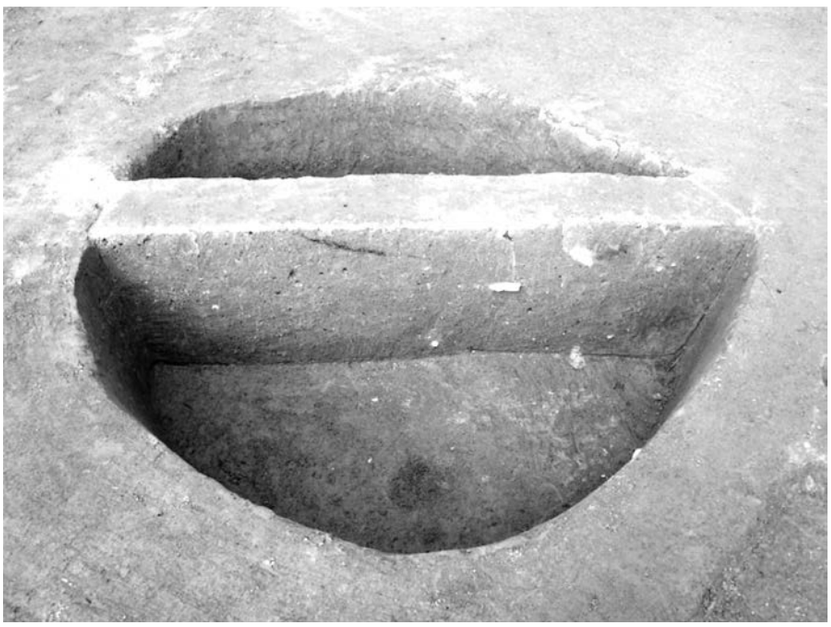
１　２号土坑（東から）



２　３号土坑土層（南から）

３　３号土坑（北から）

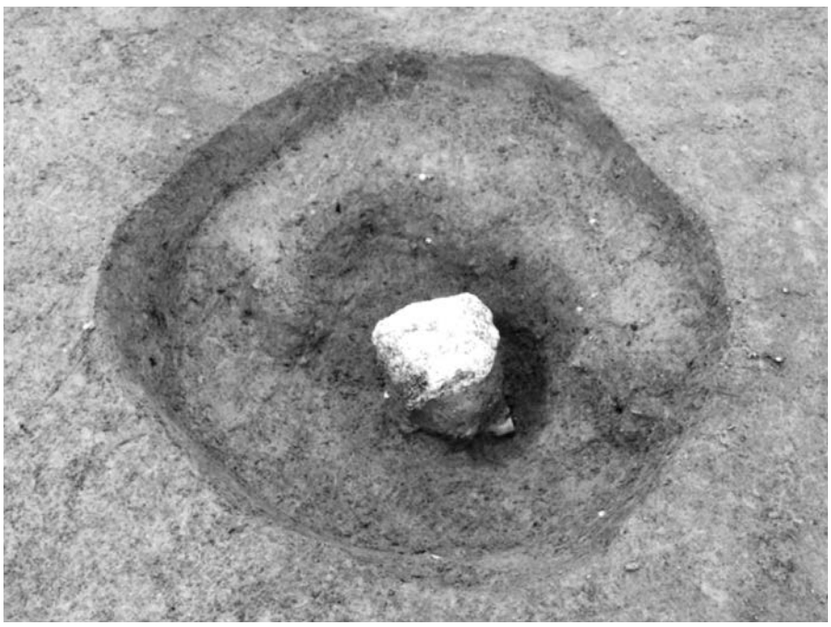
図版６



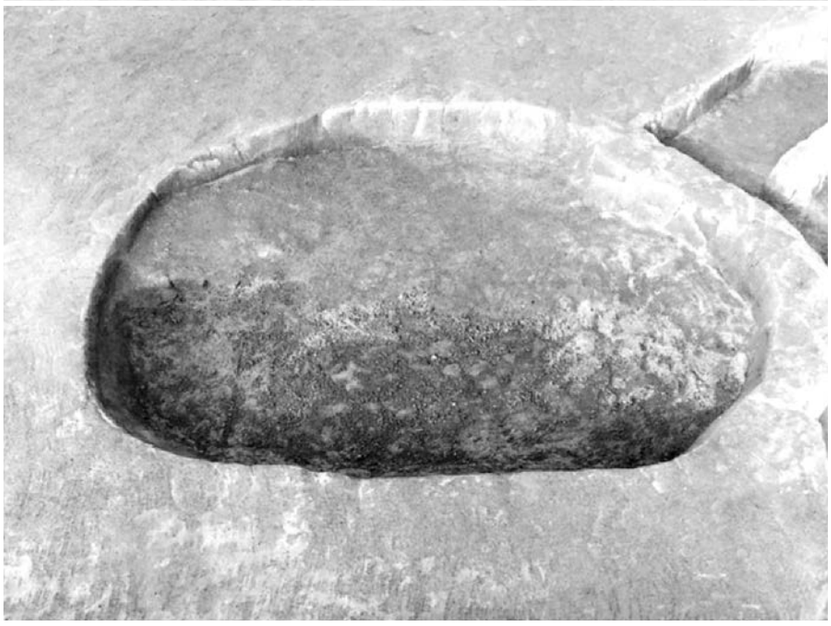
1　４号土坑土層（南から）

2　４号土坑（南から）

3　５号土坑土層（南から）



1　５号土坑（北から）



2　６号土坑（北から）

3　２号溝南端部土層（北から）

図版８

1　６号溝土層（西から）

2　６号溝（西から）

3　８号溝土層（南から）

1　１号井戸（西から）

2　１号井戸井筒（南から）

3　２号井戸（北から）

図版 10

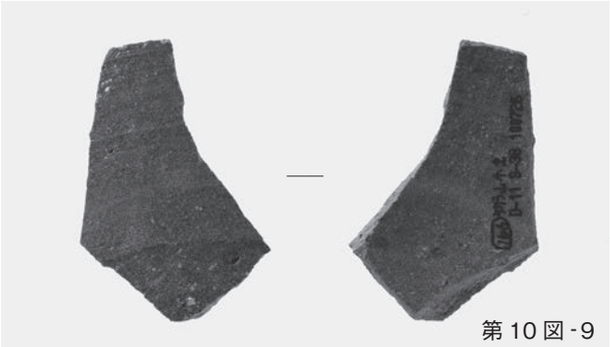
第 7 図 - 1

第 10 図 - 4

第 10 図 - 5

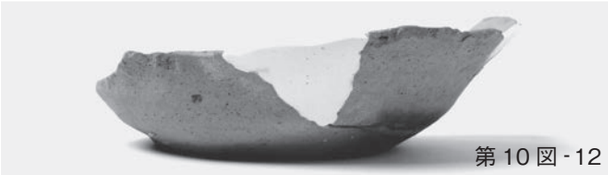
第 10 図 - 7

第 10 図 - 8


第 10 図 - 9

第 10 図 - 10

第 10 図 - 11


第 10 図 - 12

第 10 図 - 13

第 10 図 - 15

第 10 図 - 19

宝山小出遺跡出土遺物①

第 12 図 - 1

第 12 図 - 5

第 12 図 - 2

第 12 図 - 6

第 12 図 - 8

第 12 図 - 3

第 12 図 - 9

第 12 図 - 4

第 12 図 - 11

宝山小出遺跡出土遺物②

第 13 図 - 12

第 13 図 - 14

第 13 図 - 15

第 13 図 - 16

第 13 図 - 17

第 13 図 - 18

第 13 図 - 19

第 13 図 - 20

第 13 図 - 21

第 13 図 - 25

第 13 図 - 26

第 13 図 - 27

第 13 図 - 29

第 13 図 - 33

第 13 図 - 35

宝山小出遺跡出土遺物③

第 14 図 - 36

第 14 図 - 37

第 14 図 - 41

第 14 図 - 42

第 14 図 - 43

第 14 図 - 44

第 14 図 - 45

第 14 図 - 47

第 14 図 - 50

第 14 図 - 51

第 14 図 - 52

第 14 図 - 53

第 14 図 - 54

第 14 図 - 55

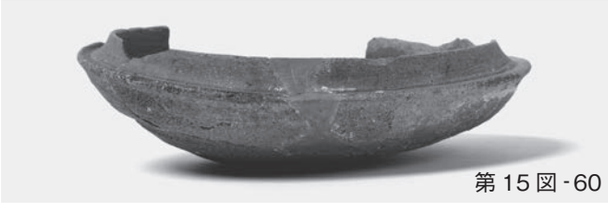
第 14 図 - 56

宝山小出遺跡出土遺物④

図版 14

第 14 図 - 58

第 15 図 - 59


第 15 図 - 60

第 15 図 - 63

第 15 図 - 64

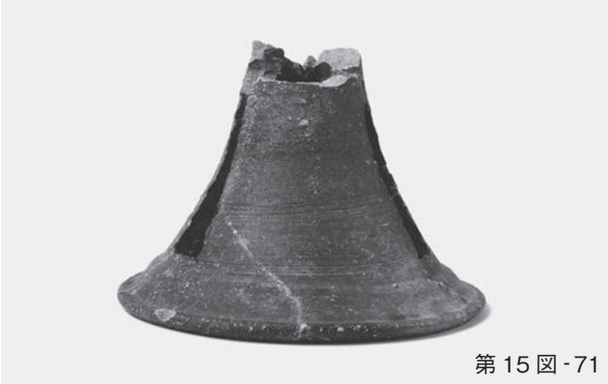
第 15 図 - 65

第 15 図 - 66

第 15 図 - 67

第 15 図 - 68

第 15 図 - 69


第 15 図 - 71

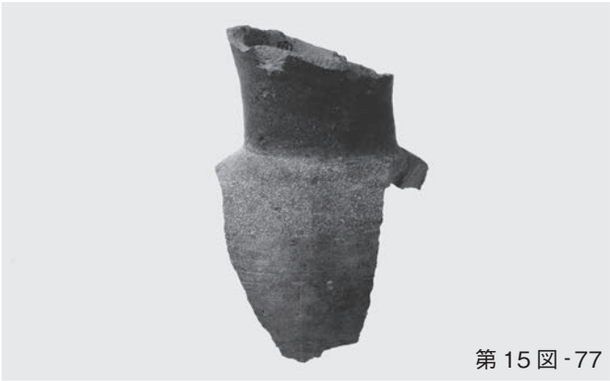
第 15 図 - 73

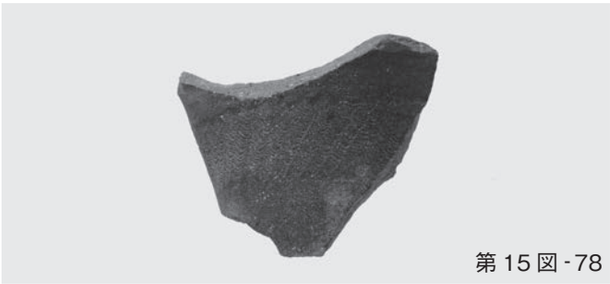
第 15 図 - 74

第 15 図 - 75

宝山小出遺跡出土遺物⑤

第 15 図 - 76


第 15 図 - 77


第 15 図 - 78

第 15 図 - 79

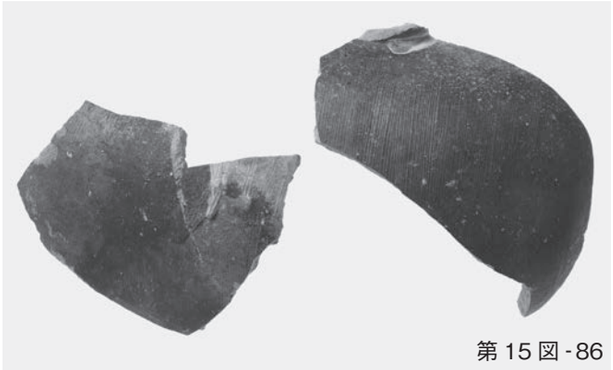
第 15 図 - 80

第 15 図 - 82

第 15 図 - 83

第 15 図 - 84

第 15 図 - 85

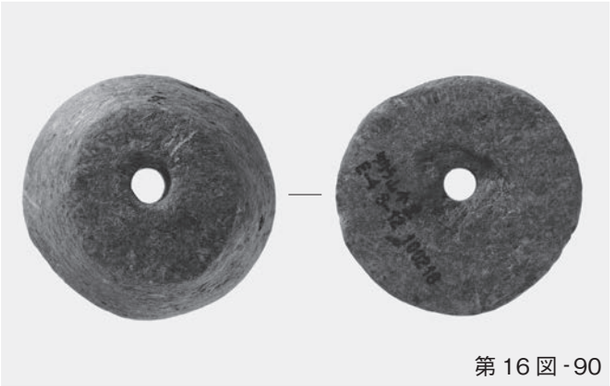

第 15 図 - 86

第 15 図 - 88

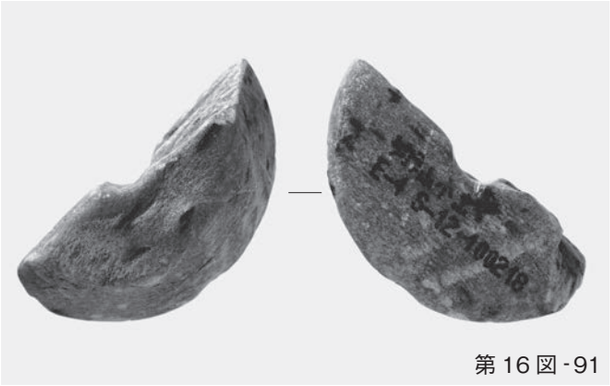
第 15 図 - 89

宝山小出遺跡出土遺物⑥

図版 16



第 16 図 - 90



第 16 図 - 91

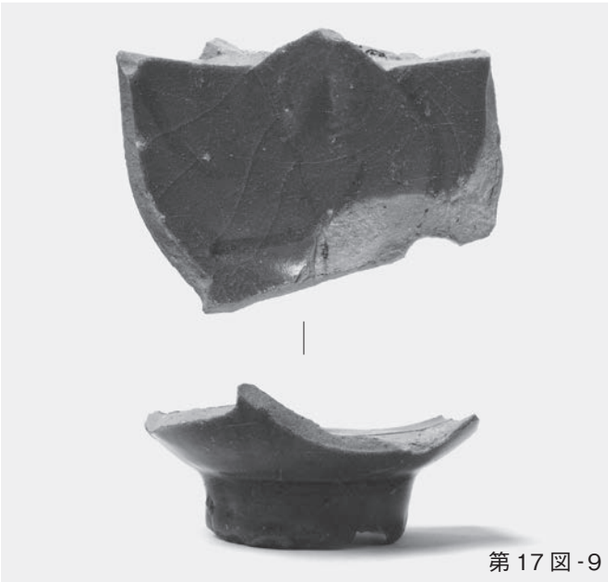
第 17 図 - 2

第 17 図 - 3

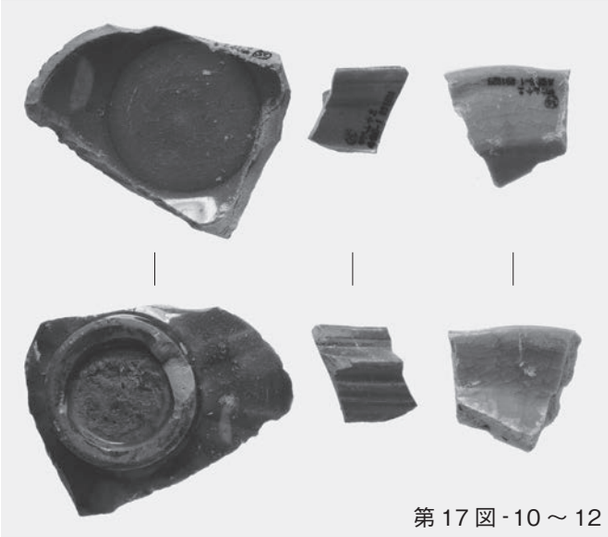
第 17 図 - 4

第 17 図 - 6

第 17 図 - 8

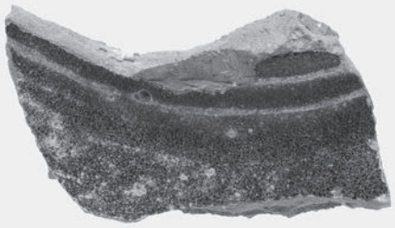


第 17 図 - 9

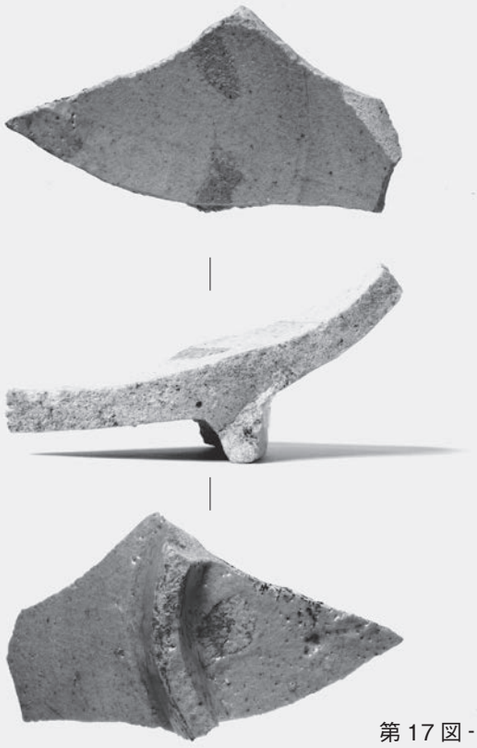


第 17 図 - 10 ～ 12

宝山小出遺跡出土遺物⑦

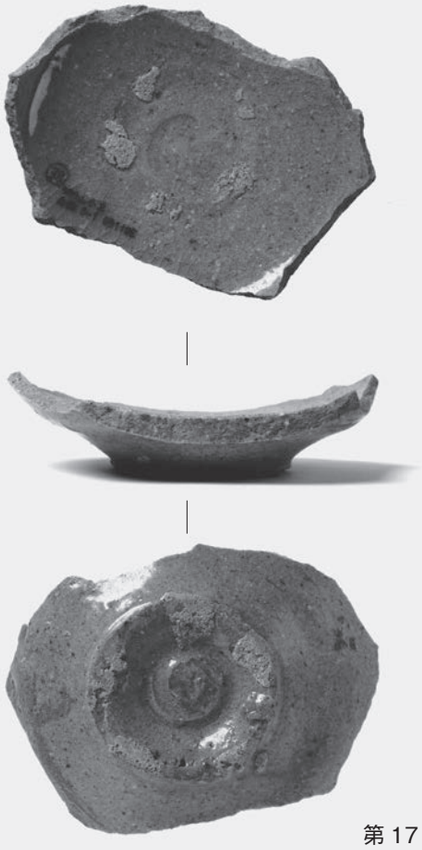


第 17 図 - 13



第 17 図 - 14

第 17 図 - 15



第 17 図 - 16

第 18 図 - 17

第 18 図 - 18

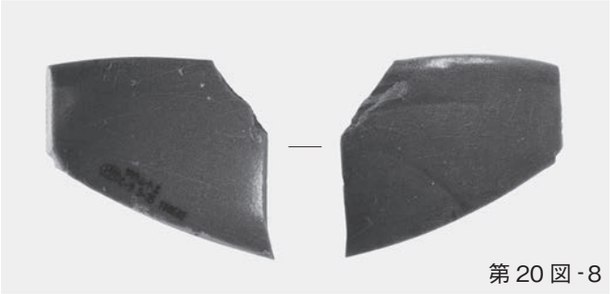
第 19 図 - 12

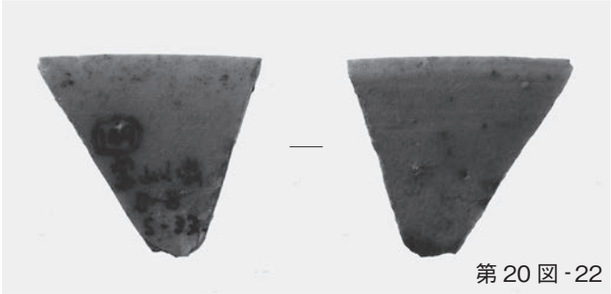
宝山小出遺跡出土遺物⑧

図版 18

第 20 図 - 2

第 20 図 - 16

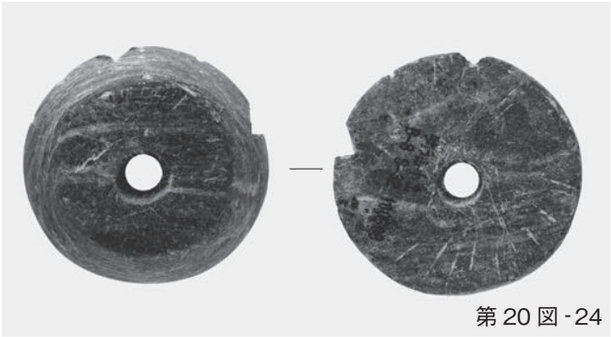

第 20 図 - 8


第 20 図 - 22

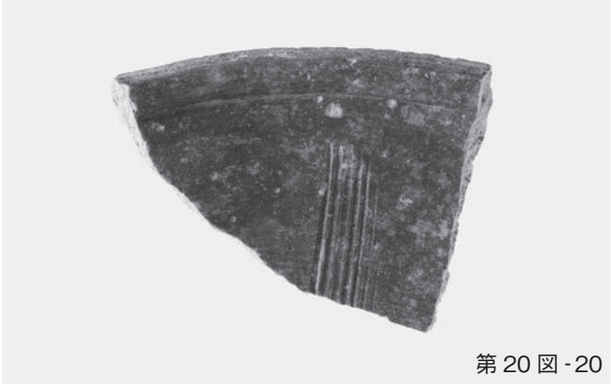
第 20 図 - 9

第 20 図 - 23

第 20 図 - 11


第 20 図 - 24

第 20 図 - 12


第 20 図 - 20

第 20 図 - 13

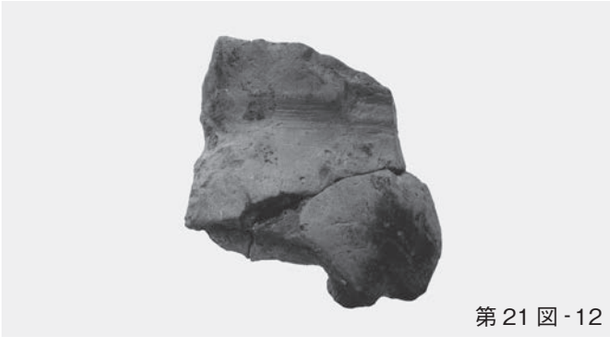
第 20 図 - 21

宝山小出遺跡出土遺物⑨

第 21 図 - 4

第 21 図 - 5

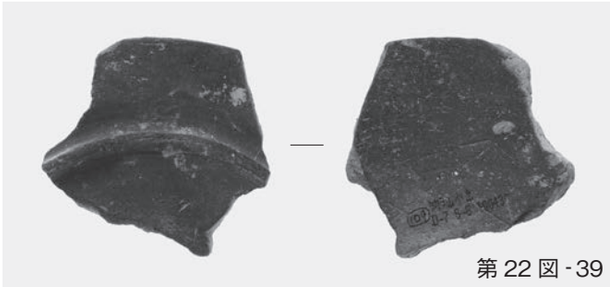
第 21 図 - 7


第 21 図 - 12

第 21 図 - 13

第 21 図 - 14

第 22 図 - 31


第 22 図 - 39

第 22 図 - 40

第 22 図 - 41

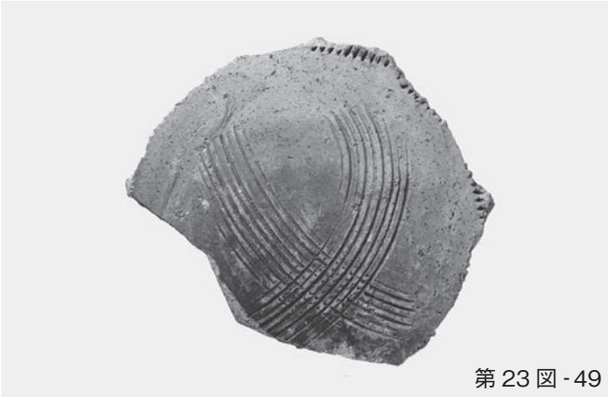
第 22 図 - 42

第 22 図 - 43

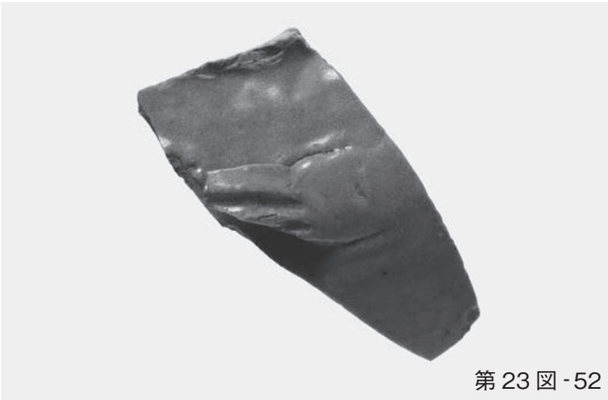
第 22 図 - 45

宝山小出遺跡出土遺物⑩

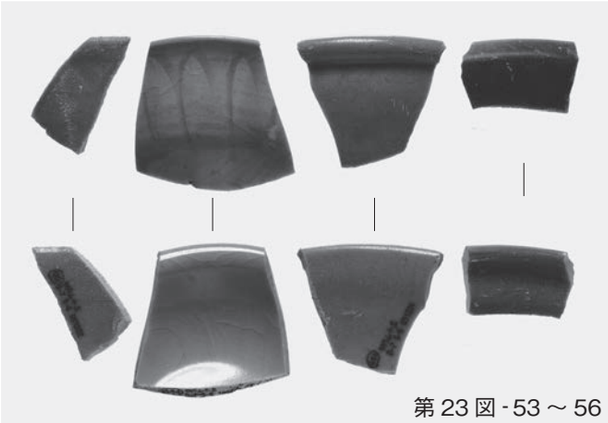
第 22 図 - 47



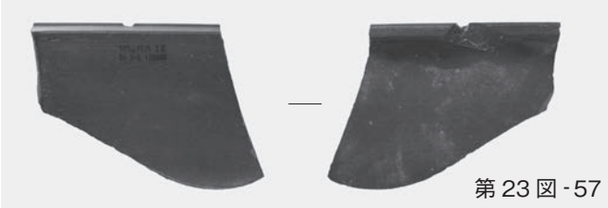
第 23 図 - 49



第 23 図 - 52

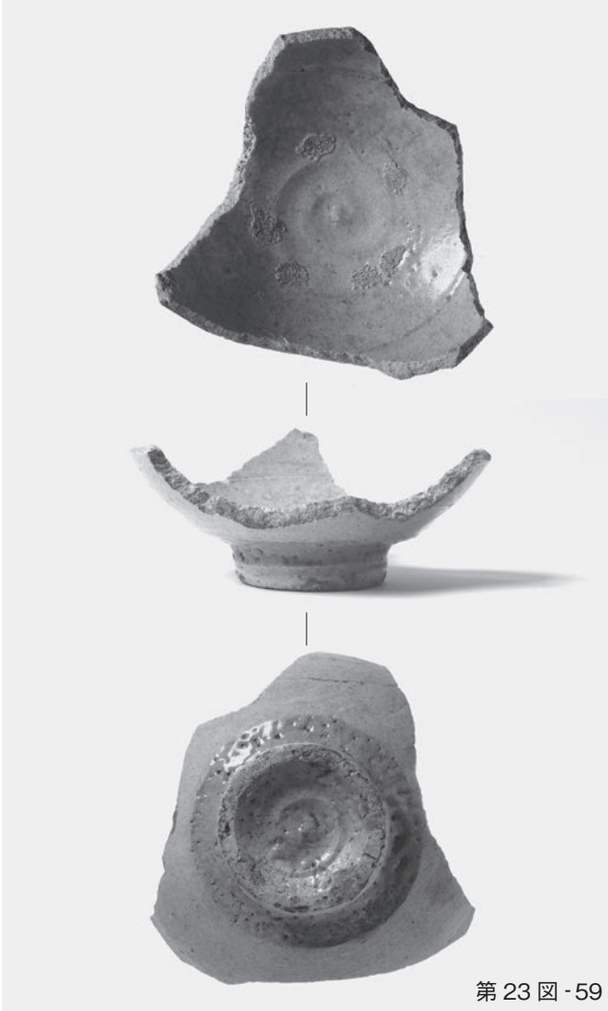


第 23 図 - 53 ～ 56



第 23 図 - 57

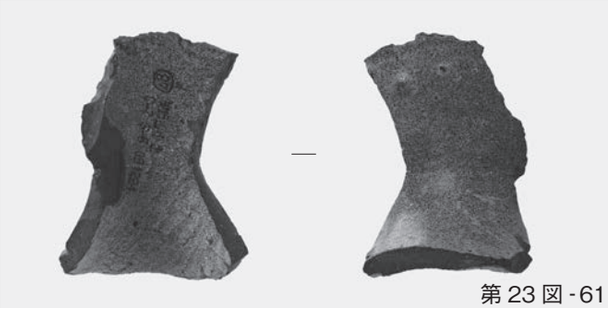
第 23 図 - 58



第 23 図 - 59

宝山小出遺跡出土遺物⑪

第 23 図 - 60


第 23 図 - 61

第 24 図 - 63

第 24 図 - 64

第 24 図 - 65

第 24 図 - 66

第 25 図 - 2

第 25 図 - 7

第 26 図 - 2

第 26 図 - 4

宝山小出遺跡出土遺物⑫

第 26 図 - 5

第 26 図 - 6

第 26 図 - 7

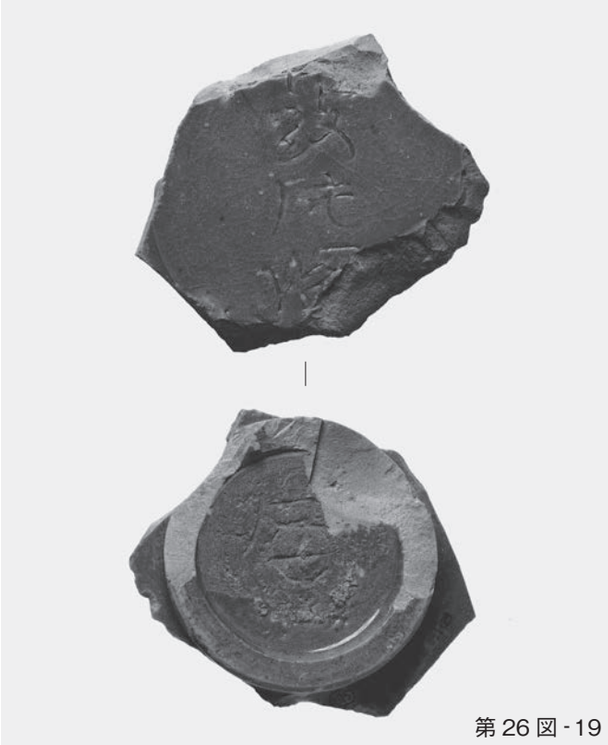
第 26 図 - 14

第 26 図 - 15

第 26 図 - 16

第 26 図 - 17

第 26 図 - 18

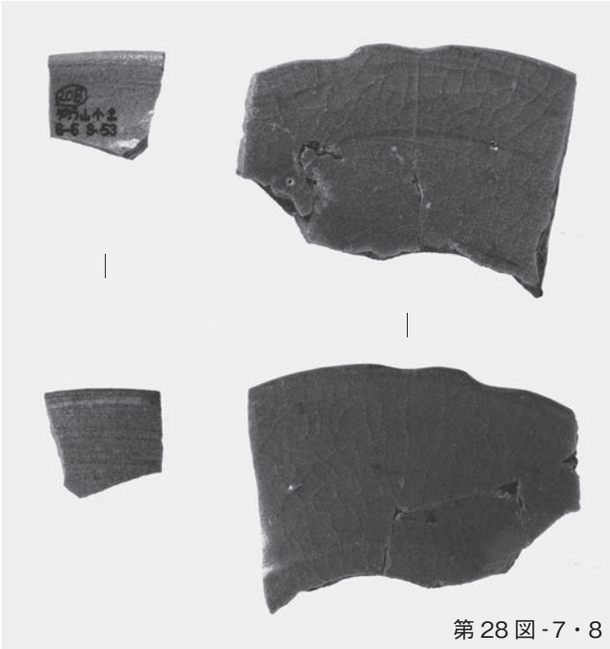

第 26 図 - 19

第 26 図 - 20

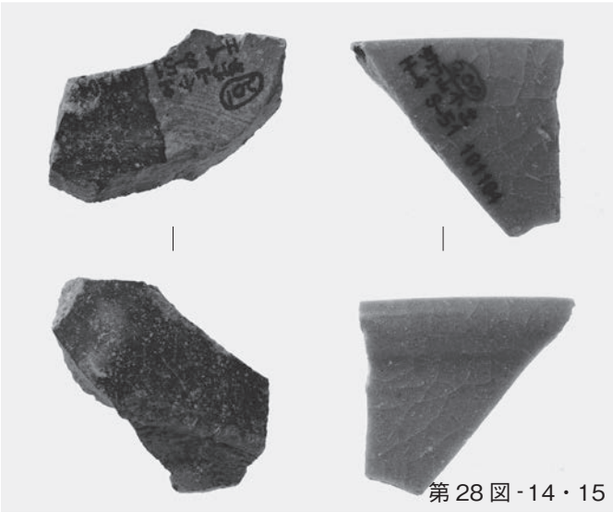
宝山小出遺跡出土遺物⑬

第 27 図 - 12

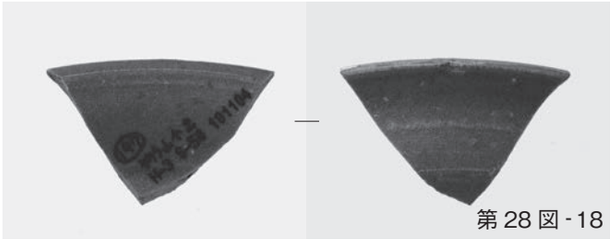
第 27 図 - 18



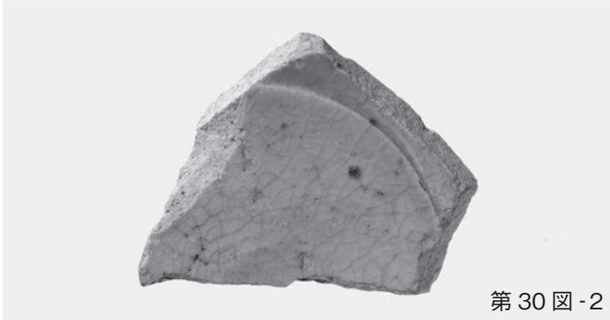
第 28 図 - 7・8



第 28 図 - 14・15



第 28 図 - 18

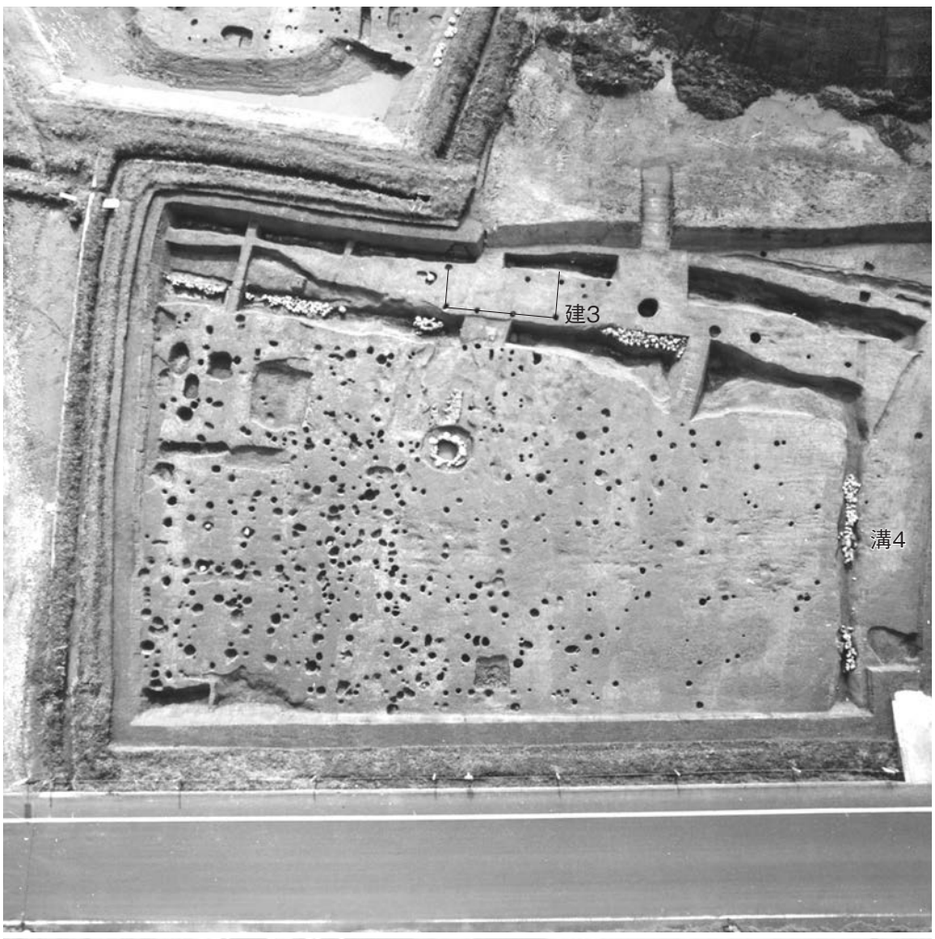


第 30 図 - 2

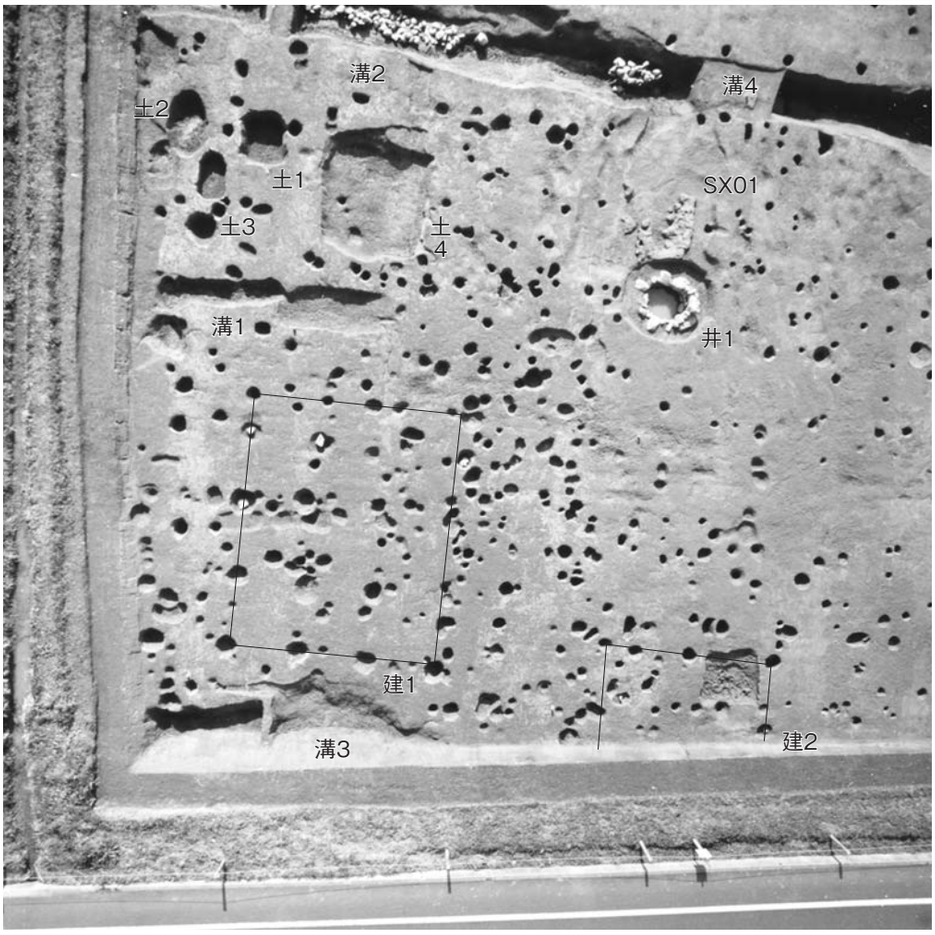
第 30 図 - 3

第 30 図 - 4

宝山小出遺跡出土遺物⑭



1　宝山桑ノ木遺跡
　Ⅰ区Ａ地区全景（空中写真）



2　Ⅰ区Ａ地区（空中写真）

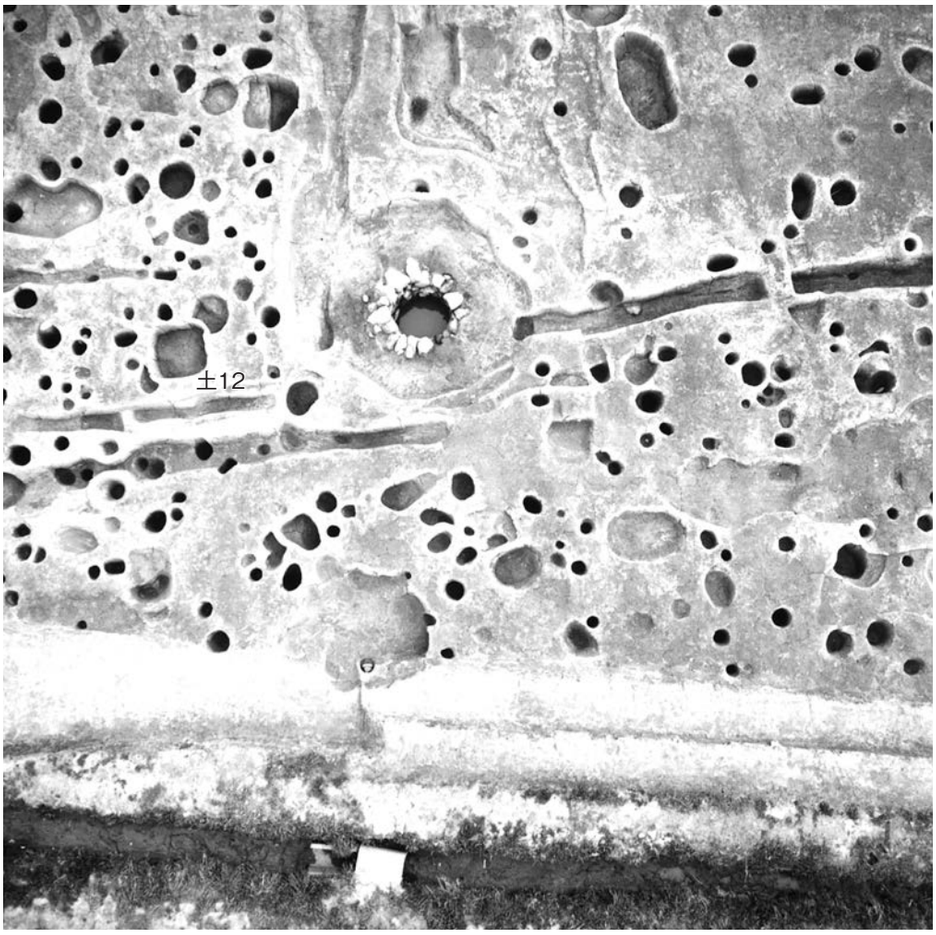
1　Ⅰ区Ａ地区
（空中写真、
北上空から）

2　Ⅰ区Ｂ・Ｃ地区遠景
（空中写真、
北上空から）

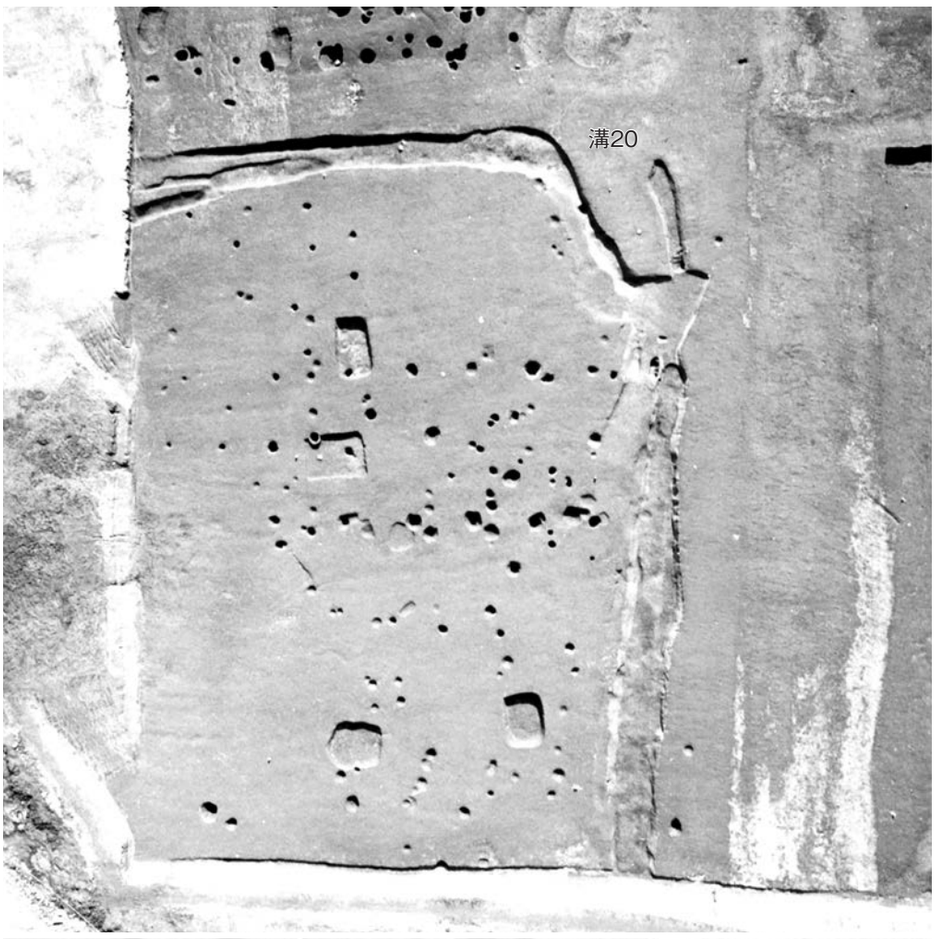
1　Ⅰ区Ｄ地区全景（空中写真）

2　Ⅰ区Ｄ地区南西区画全景
（空中写真）

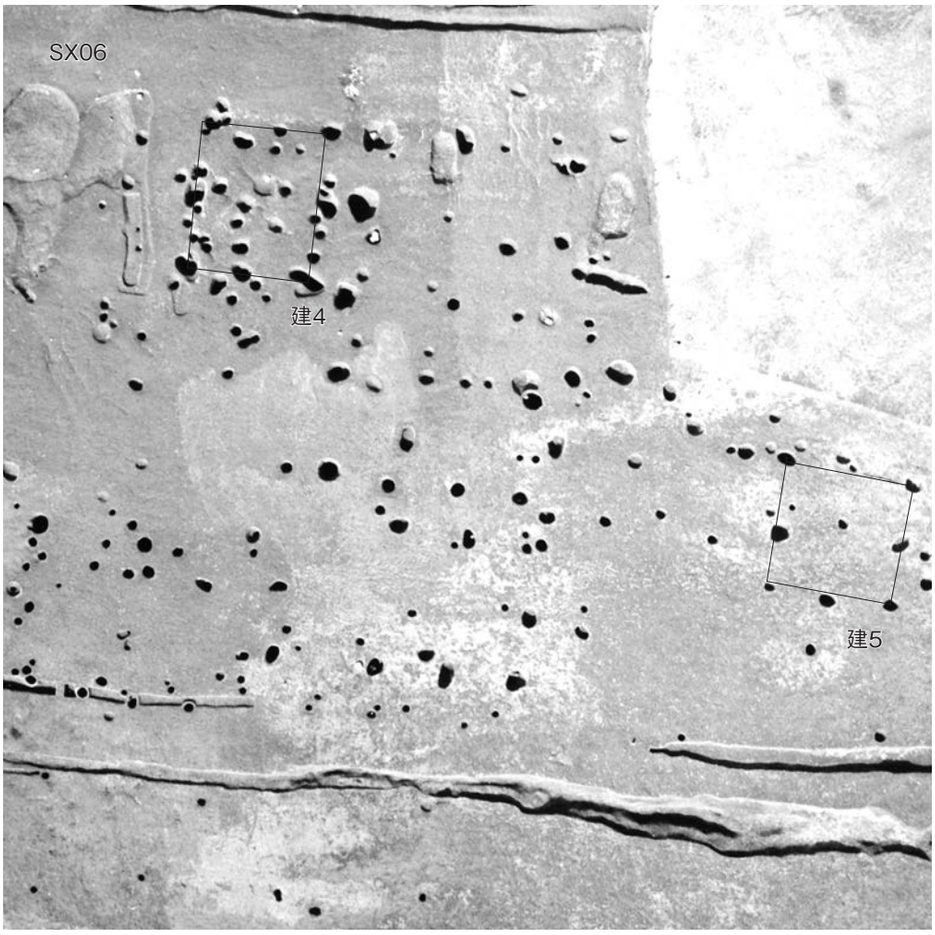
1　Ⅰ区Ｂ・Ｃ地区全景
（空中写真）



2　Ⅰ区Ｂ地区全景
（空中写真）



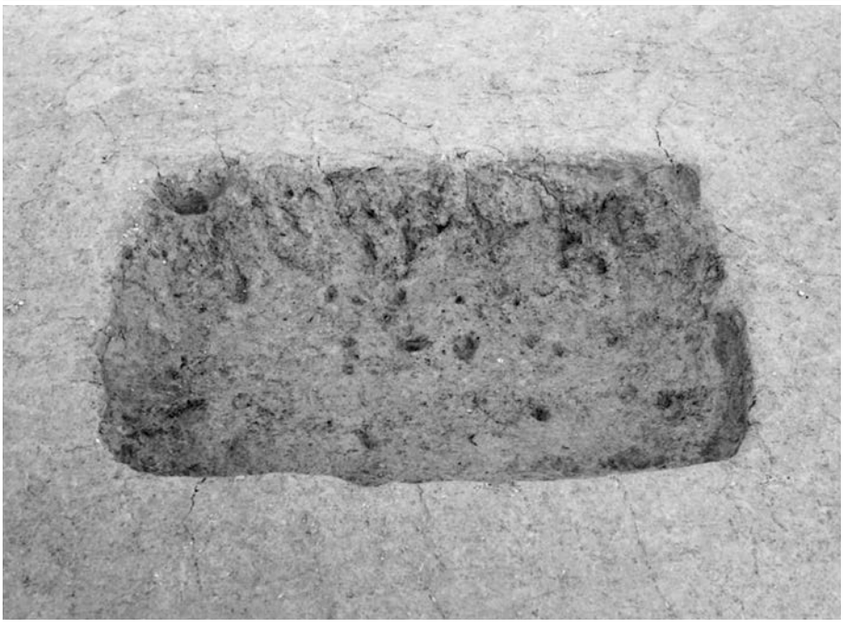
1　Ⅰ区Ｄ地区北東区画（空中写真）



2　Ⅰ区Ｄ地区南東区画（空中写真）

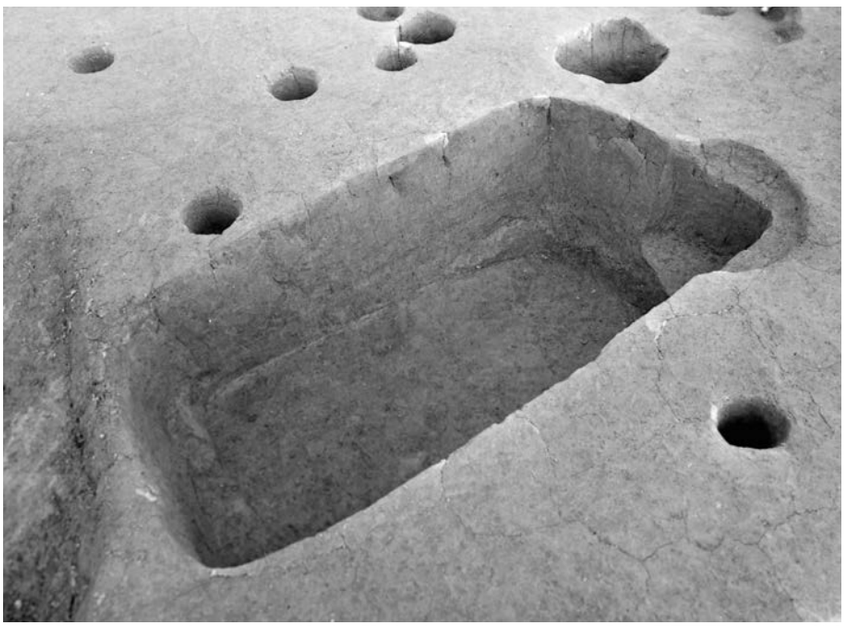
1　4号土坑（西から）

2　5・7号土坑（西から）

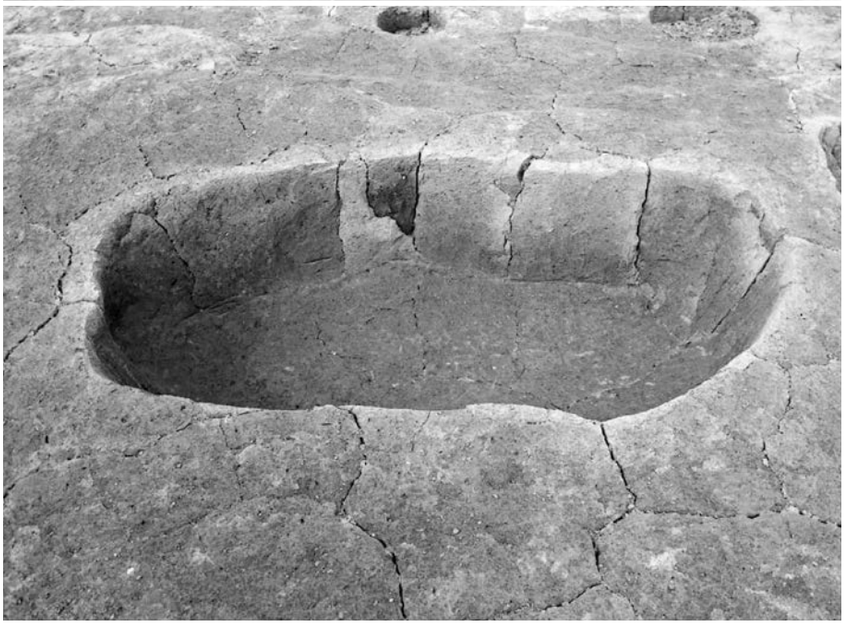


3　9号土坑（北から）

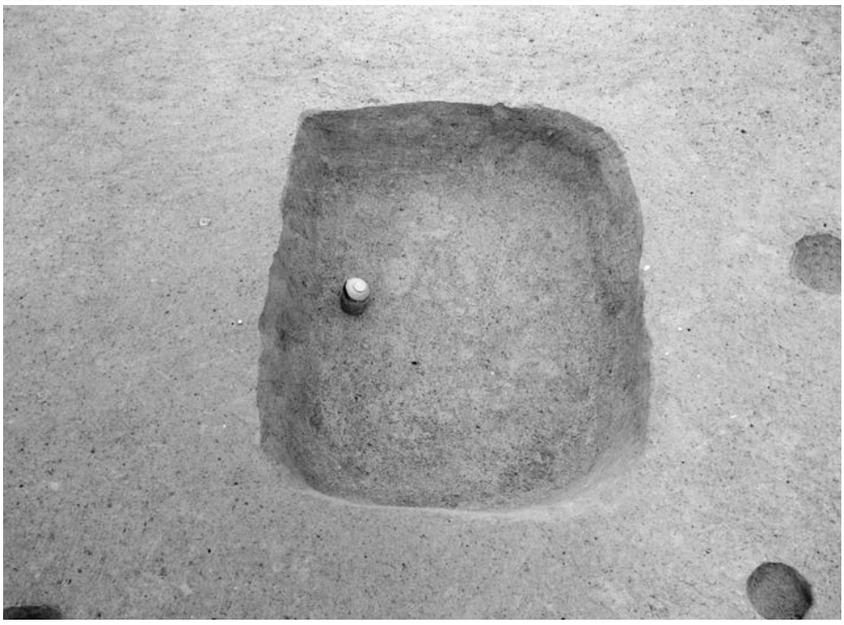
図版 30



1　10 号土坑（西から）



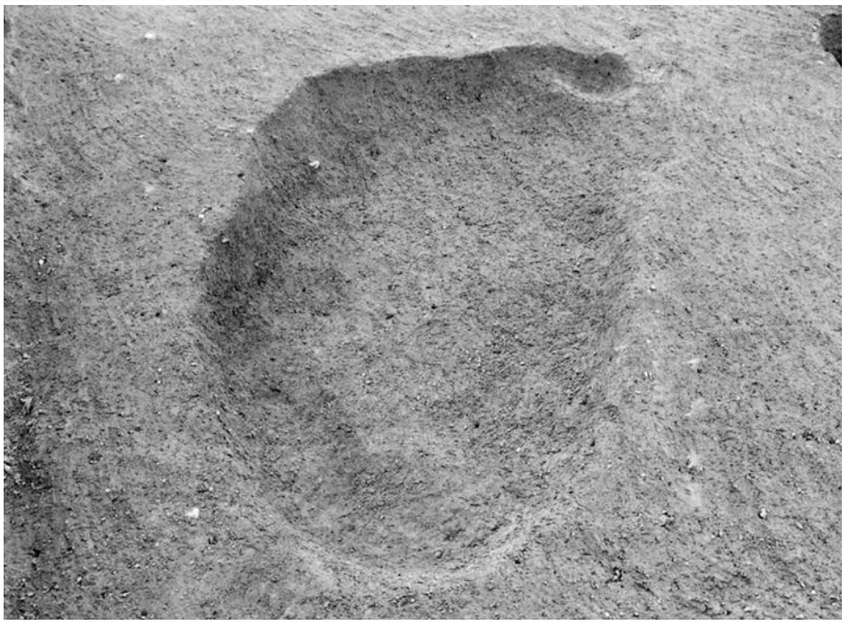
2　14 号土坑（南から）



3　18 号土坑（北から）

1　19 号土坑（東から）

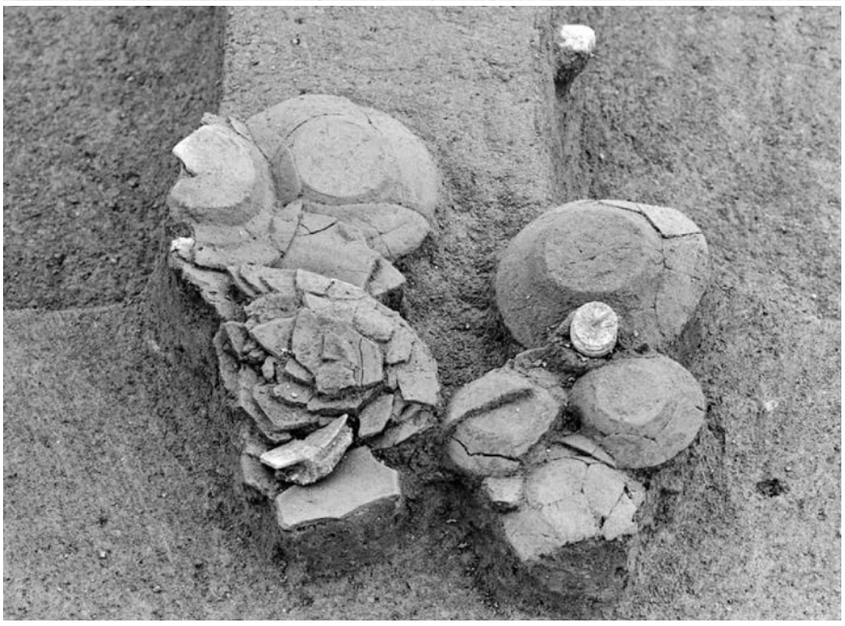
2　20 号土坑（北から）



3　21 号土坑（北から）

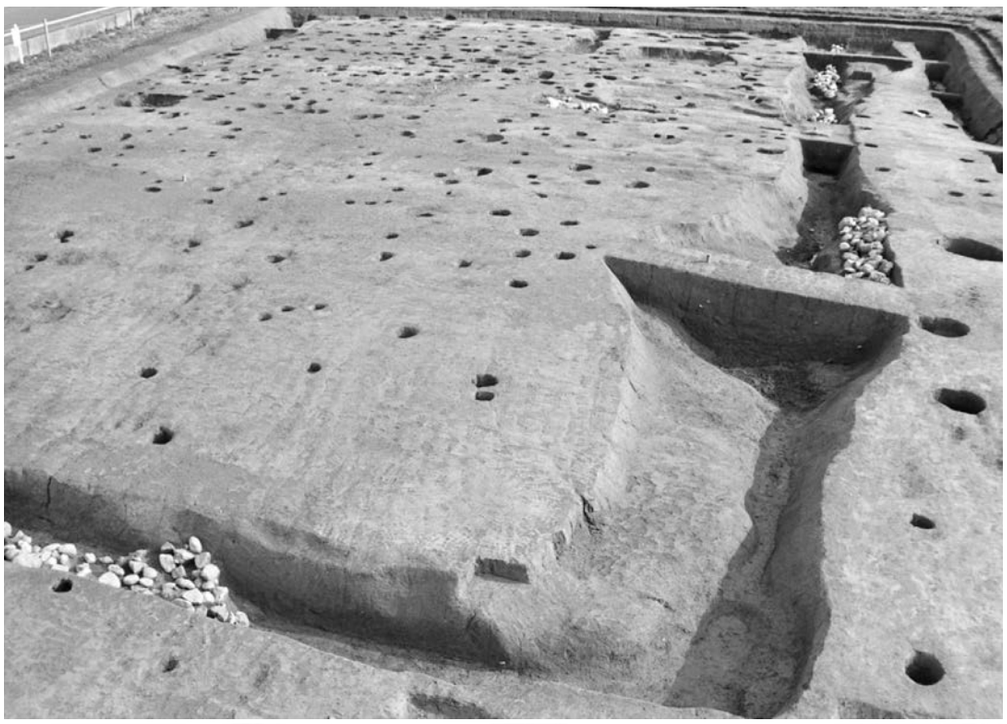
図版 32

1　22 号土坑（東から）



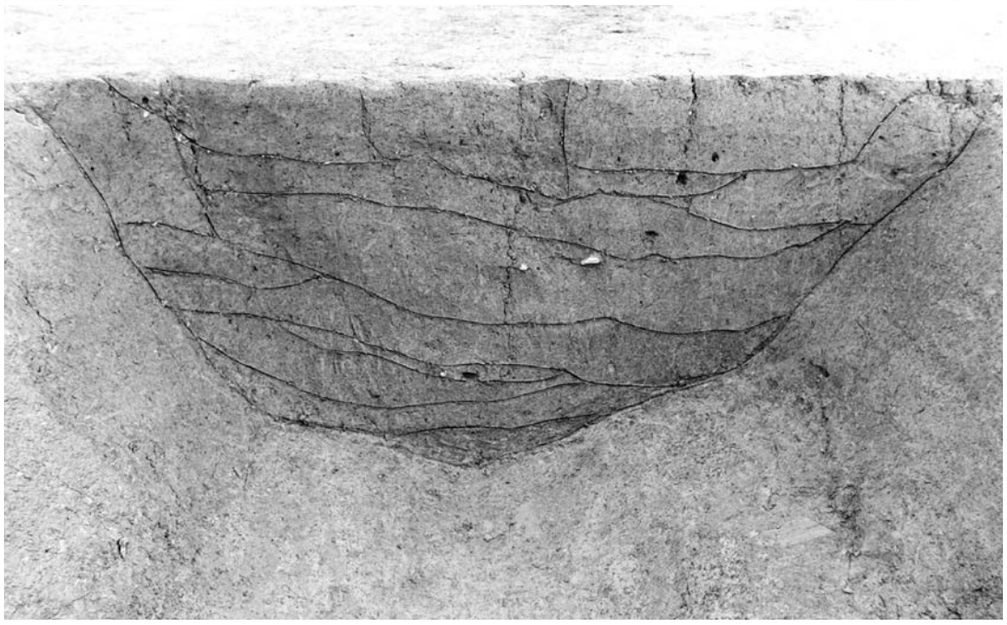
2　同上遺物出土状況
（北から）

3　ピット 190（南から）



1　4号溝
（南西から）

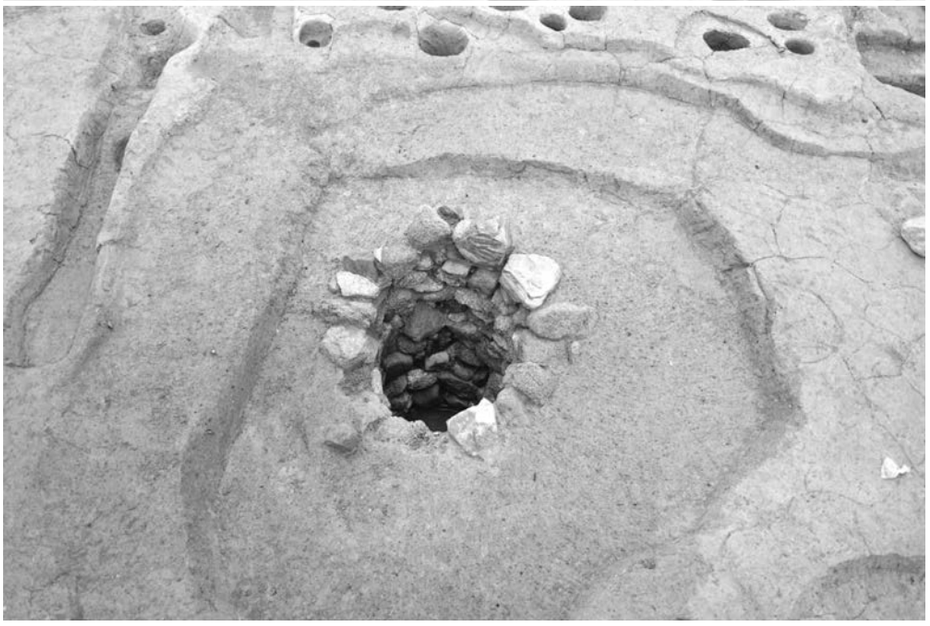
2　4号溝土層
（西から）



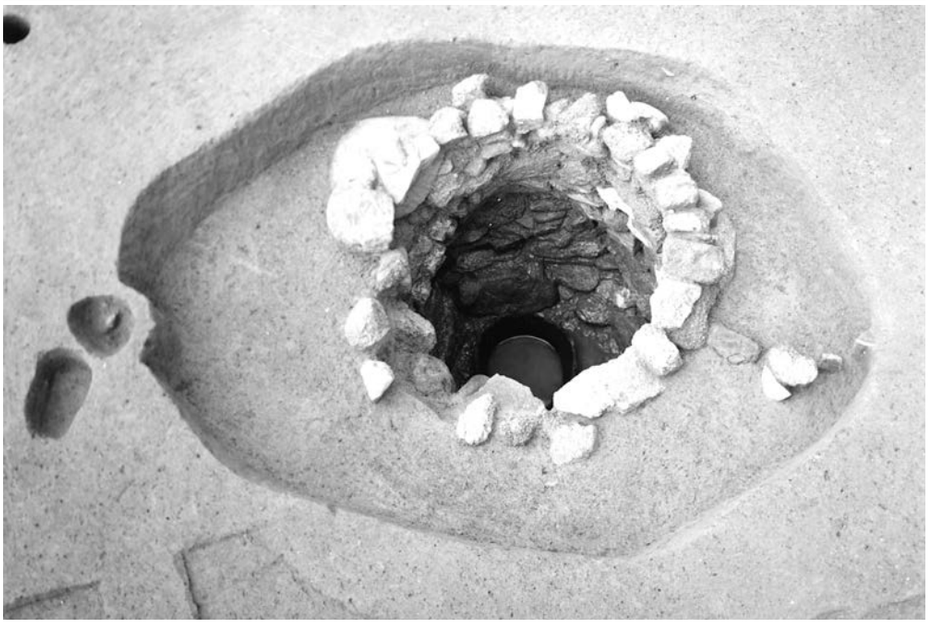
3　5号溝土層
（東から）

図版 34

1　1号建物跡（西から）

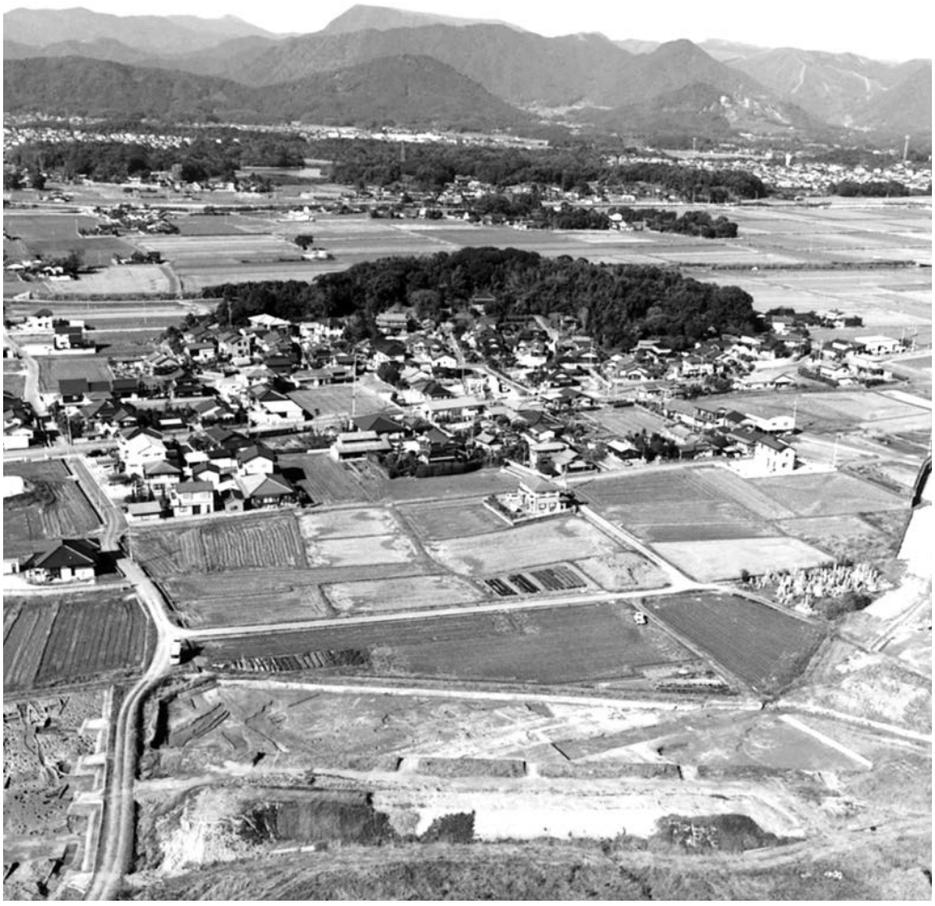


2　2号井戸（北から）



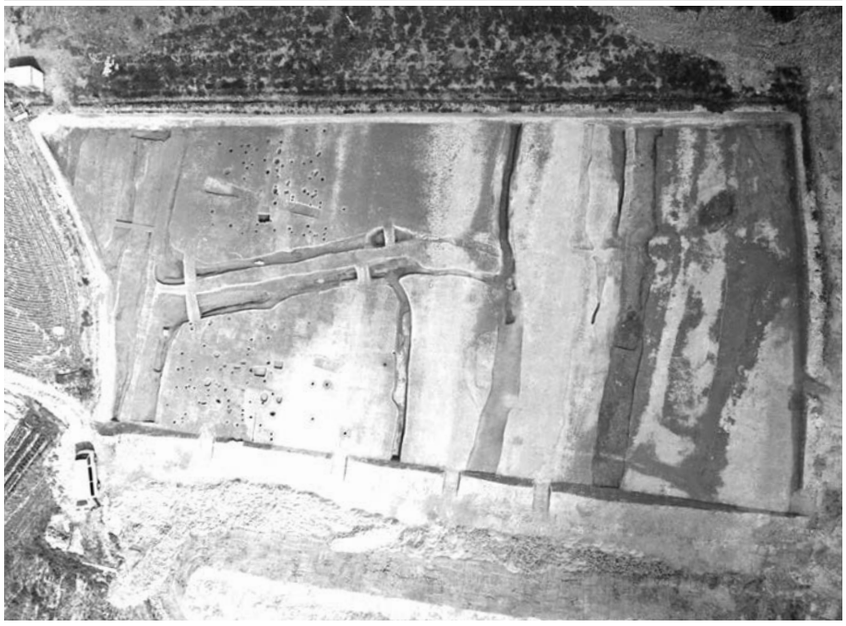
3　3号井戸（東から）

1　Ⅱ－１区遠景
（空中写真、東から）



1　Ⅱ－２区遠景
（空中写真、東から）

1　Ⅱ－３区遠景
（空中写真、東から）



2　Ⅱ－１区全景（空中写真）

3　Ⅱ－２区全景（空中写真）

1　Ⅱ－３区全景（空中写真）

2　１号土坑土層（東から）

3　１号土坑（東から）

図版 38

1　2号土坑土層（南西から）

2　2号土坑（西から）

3　4号溝土層（南から）

1　4 号溝土層（北から）

2　4 号溝
（空中写真、北から）

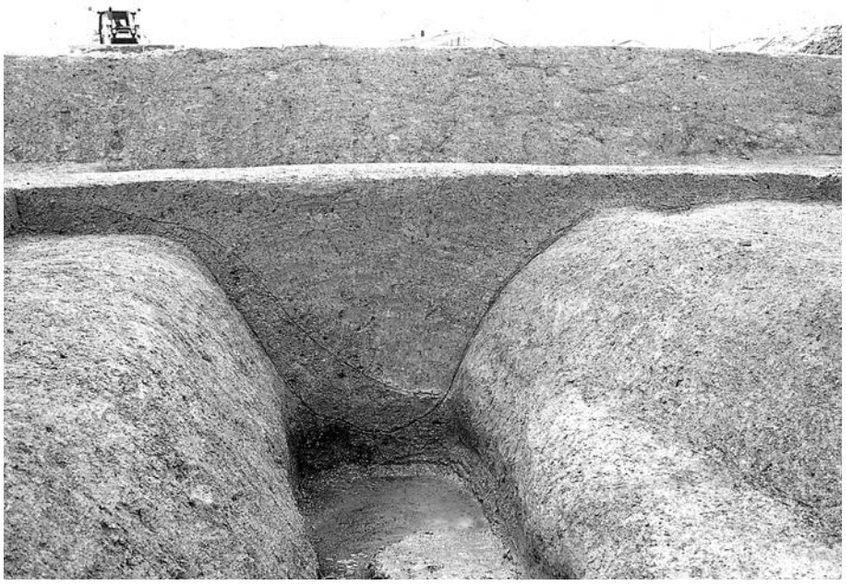
3　5 号溝土層（東から）

1　6 号溝土層（東から）

2　6 号溝土層（東から）

3　6 号溝遺物出土状況（東から）

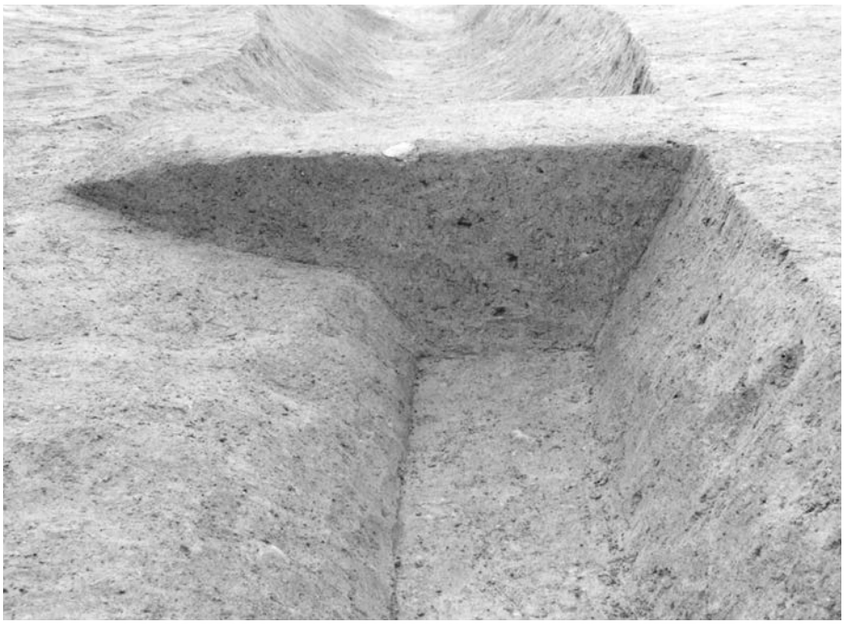
1　7 号溝土層（北から）



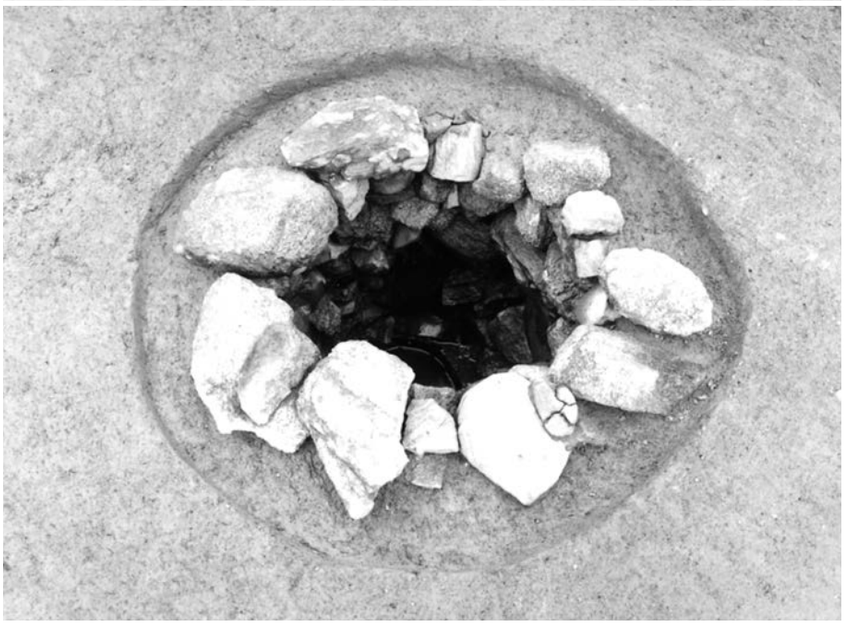
2　8 号溝土層（南から）

3　14 号溝土層（南から）

図版 42



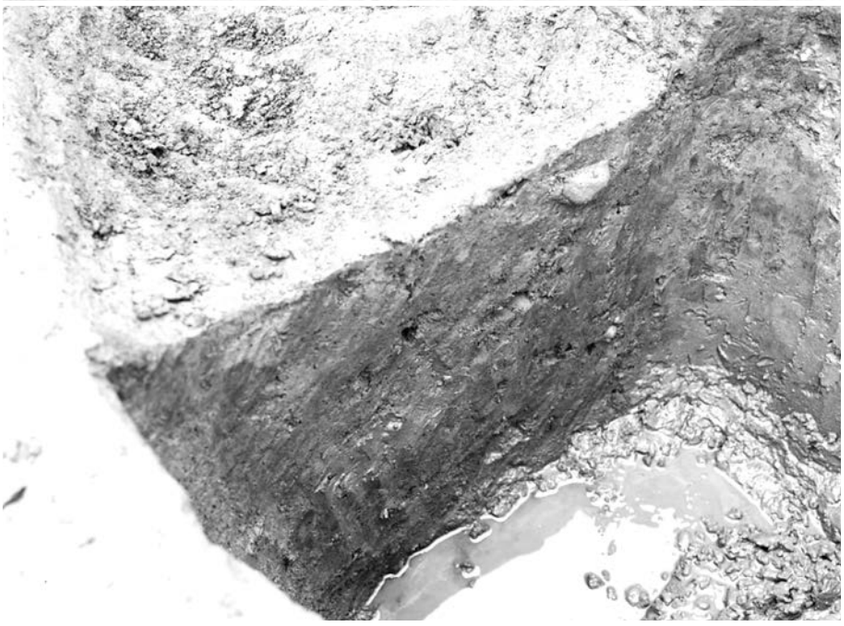
1　15 号溝土層（東から）



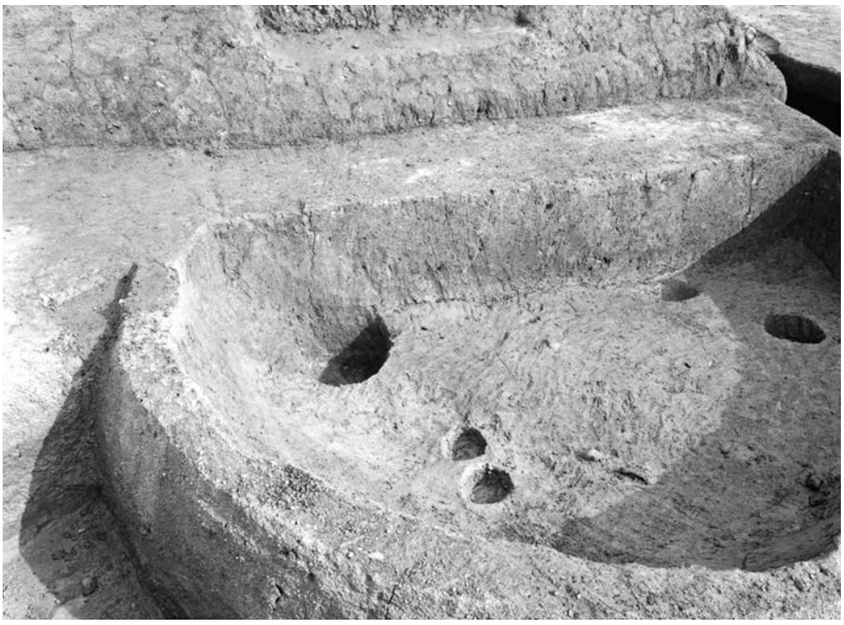
2　1 号井戸（東から）

3　1 号井戸井筒（東から）

1　Ⅲ区１号土坑（東から）



2　１号土坑土層（東から）



3　４号土坑土層（南から）

図版 44

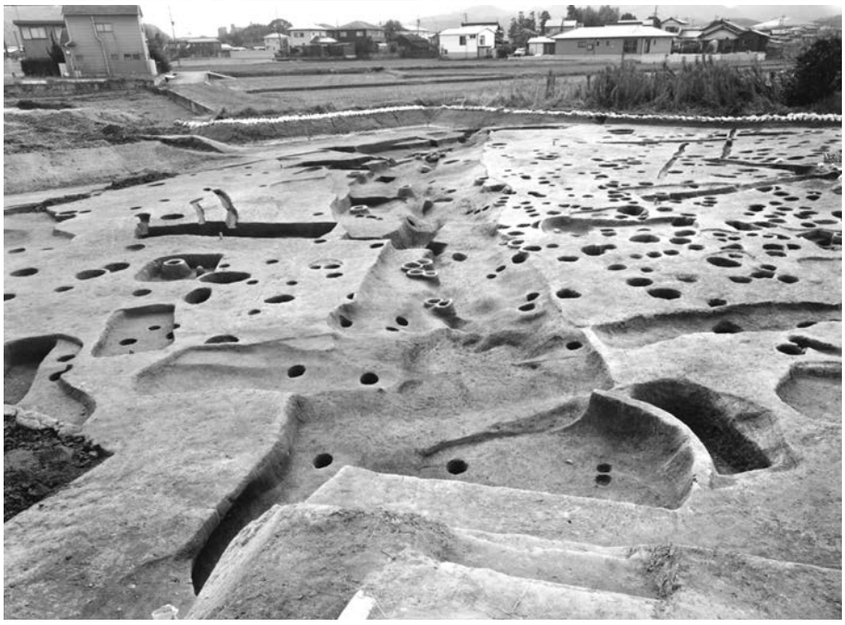
1　5号土坑（南から）

2　5号土坑土層（南西から）

3　7号土坑遺物出土状況（北から）

1　20 号溝北側土層（北から）

2　20 号溝南側土層（北から）



3　20 号溝（北から）

1　調査区北東壁土層（南から）

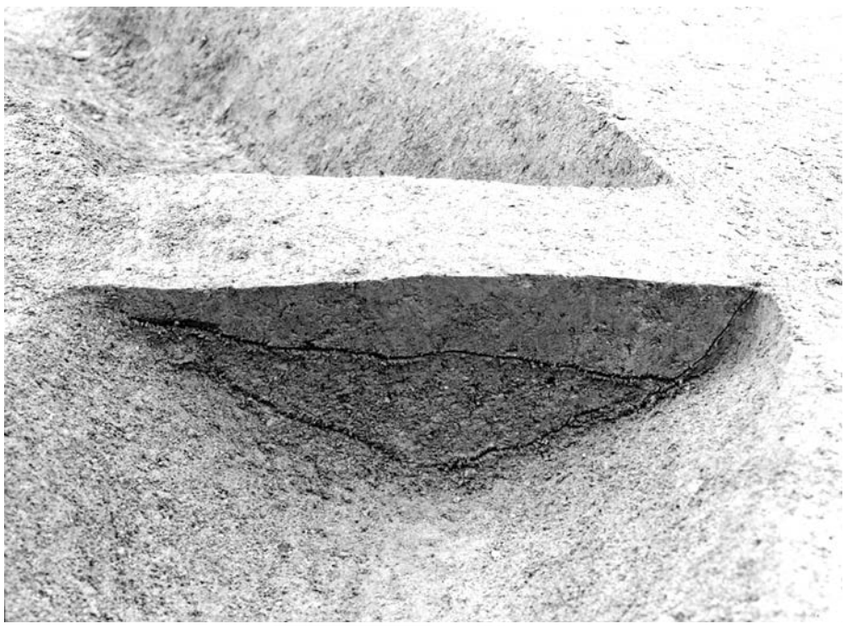
2　谷落ち確認トレンチ土層
（南から）

3　重機掘削状況

1　Ⅳ区（2 次調査）全景
（空中写真）

2　Ⅳ区（3 次調査）全景
（空中写真）

図版 48



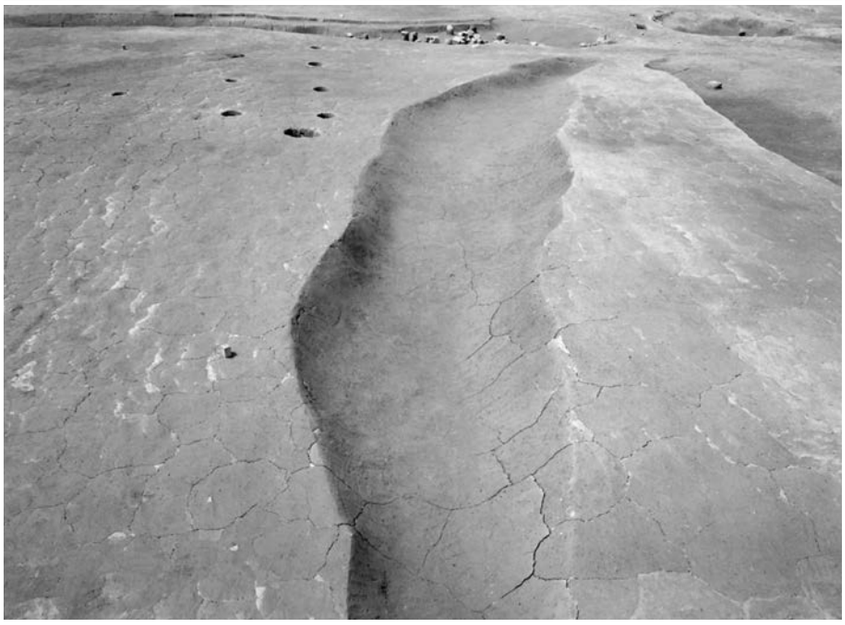
1　1号溝（南から）

2　4号溝（東から）

3　5号溝（南東から）

1　5・11 号溝（北東から）

2　11 号溝遺物出土状況
（北から）



3　14 号溝（北から）

図版 50

1　SX05（南から）

2　1 号土坑遺物出土状況
（南から）

3　ピット 50 遺物出土状況（西から）

第 37 図 - 1

第 41 図 - 5

第 41 図 - 6

第 41 図 - 7

第 41 図 - 8

第 41 図 - 9

第 41 図 - 1

第 44 図 - 4

第 44 図 - 5

第 46 図 - 1

第 46 図 - 2

第 46 図 - 3

第 46 図 - 4

第 46 図 - 5

第 46 図 - 6

第 46 図 - 7

第 46 図 - 8

宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物①

第 46 図 - 9

第 48 図 - 1

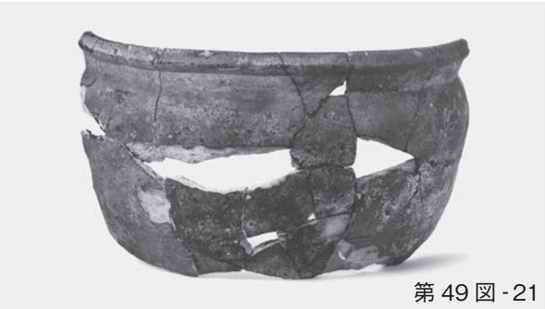
第 48 図 - 2

第 48 図 - 3

第 48 図 - 12

第 48 図 - 17

第 48 図 - 18


第 49 図 - 21

第 50 図 - 24

第 52 図 - 11

第 54 図 - 8

第 54 図 - 9

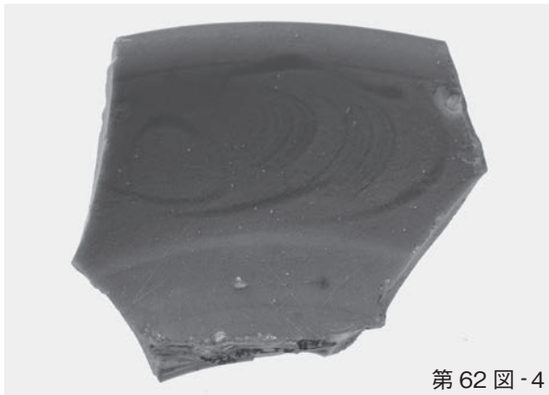
第 55 図 - 6

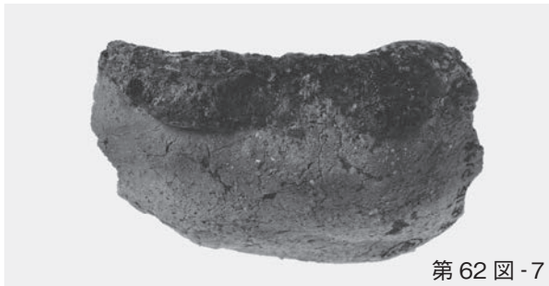
宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物②

第 56 図 - 3

第 65 図 - 13

第 56 図 - 5


第 62 図 - 4


第 62 図 - 7

第 56 ひ 17

第 64 図 - 26

第 64 図 - 32

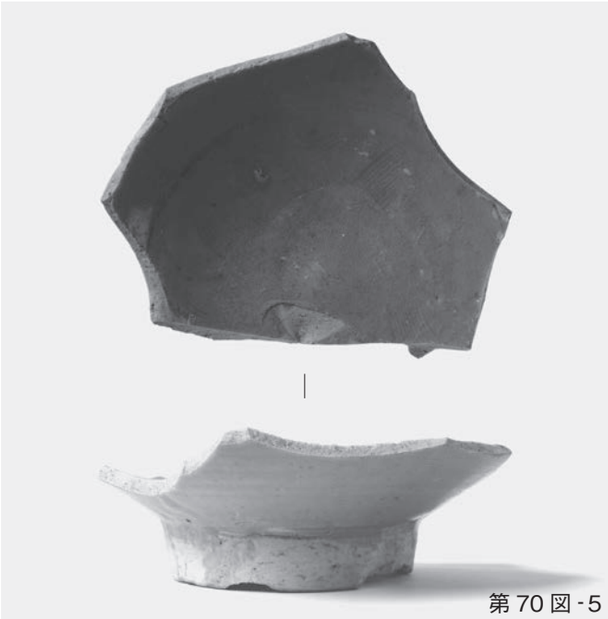
第 63 図

第 64 図 - 34

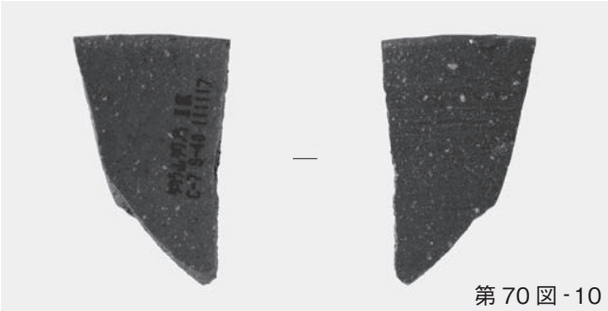
宝山桑ノ木遺跡Ⅰ区出土遺物③

第 70 図 - 1

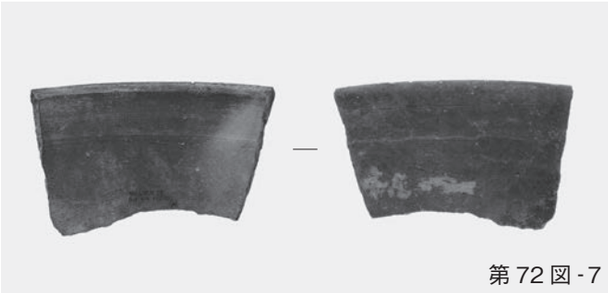
第 70 図 - 2

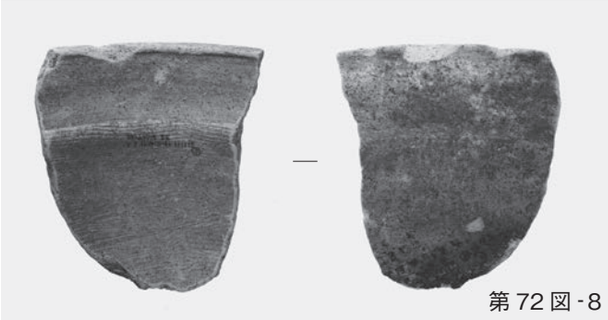

第 70 図 - 5

第 70 図 - 6


第 70 図 - 10

第 72 図 - 6


第 72 図 - 7


第 72 図 - 8

第 72 図 - 9

第 72 図 - 10

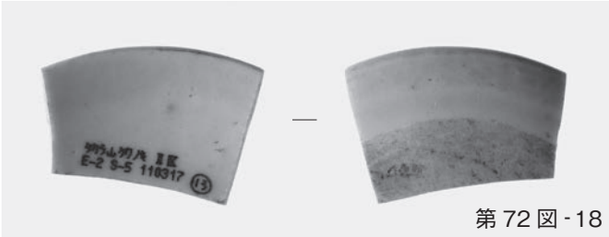
第 72 図 - 12

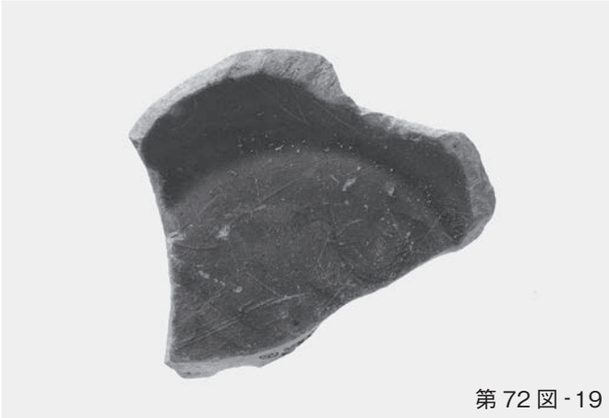
第 72 図 - 13

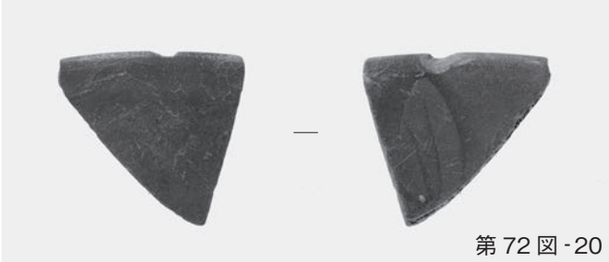
宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物①

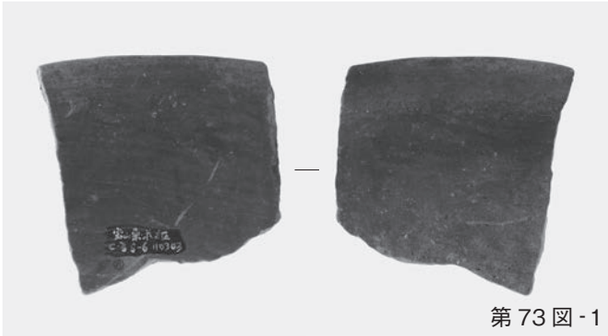
第 72 図 - 14

第 72 図 - 15

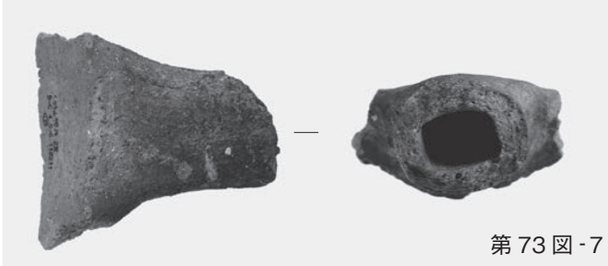

第 72 図 - 18

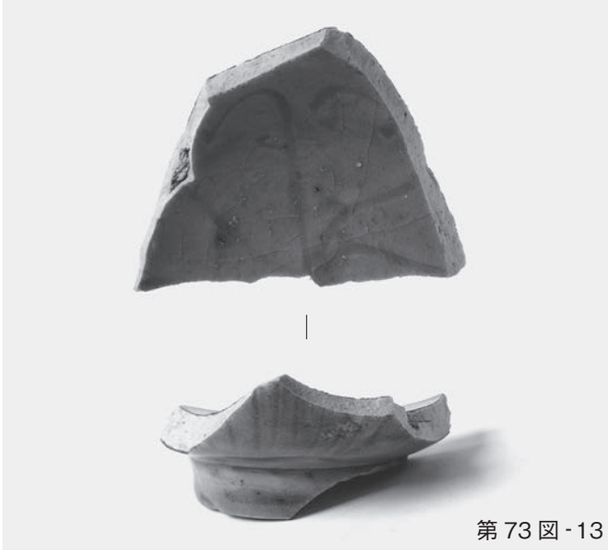

第 72 図 - 19

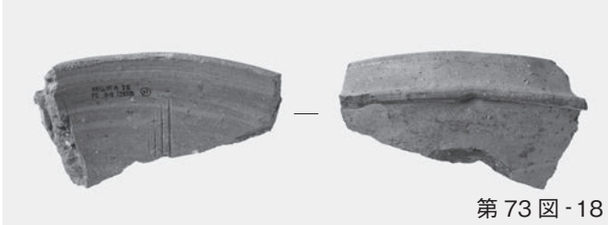

第 72 図 - 20


第 73 図 - 1

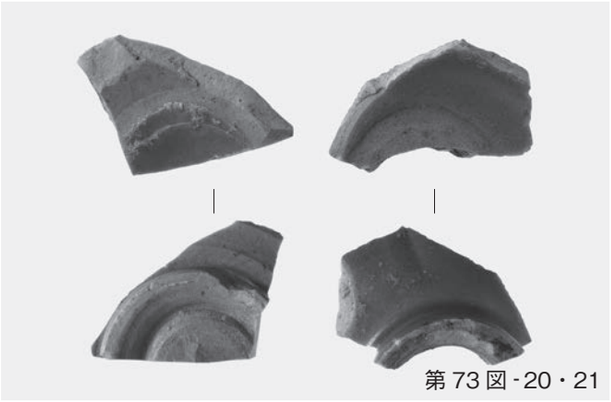
第 73 図 - 5


第 73 図 - 7

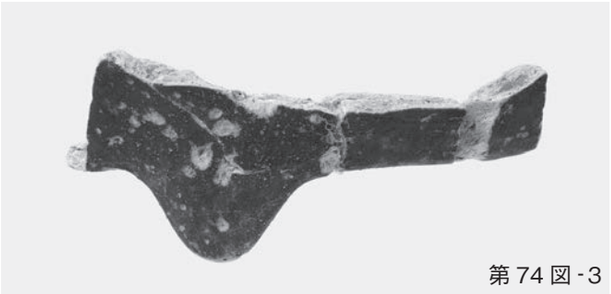

第 73 図 - 13

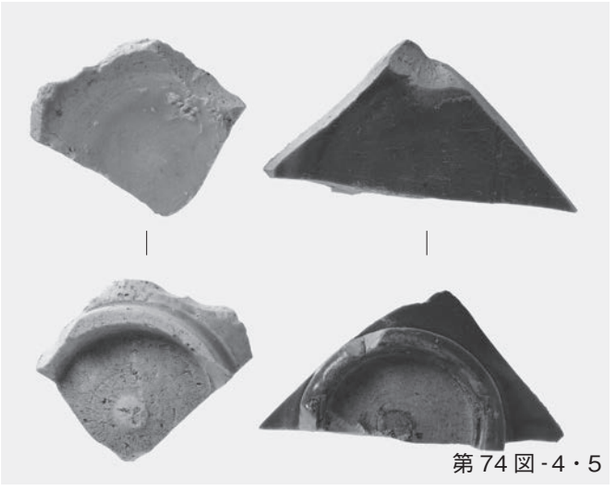

第 73 図 - 18

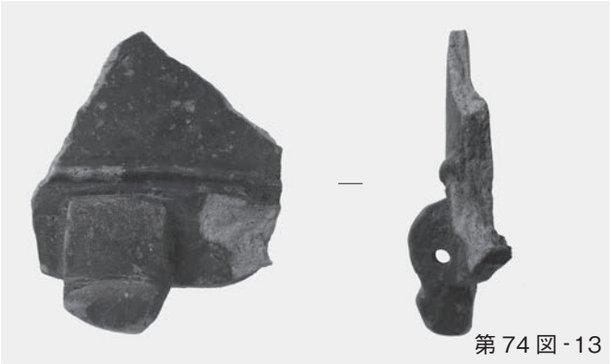
宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物②


第 73 図 -20・21

第 73 図 -24


第 74 図 -3

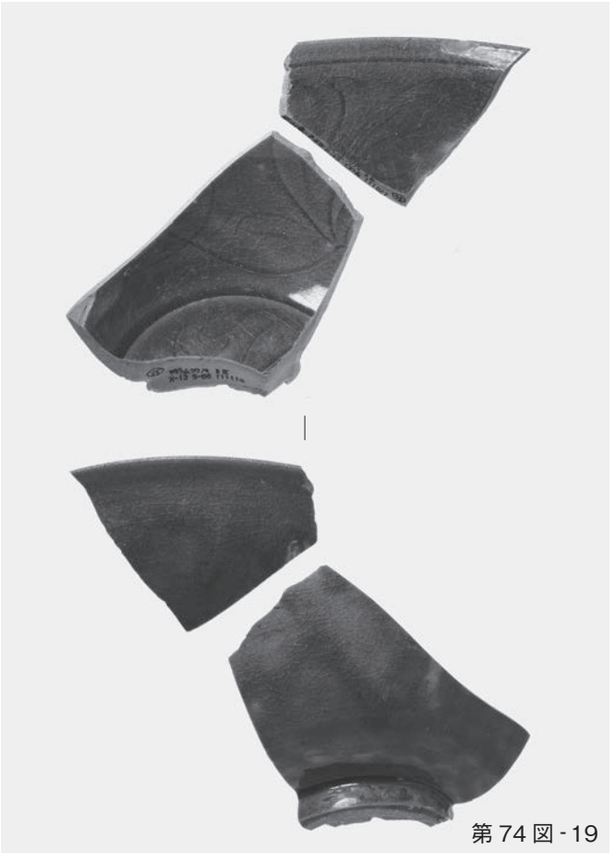

第 74 図 -4・5


第 74 図 -13

第 74 図 -14

第 74 図 -17

第 74 図 -18


第 74 図 -19

宝山桑ノ木遺跡Ⅱ区出土遺物③

第 87 図 - 2

第 88 図 - 5

第 89 図 - 13

第 92 図 - 4

第 92 図 - 5

第 95 図 - 31

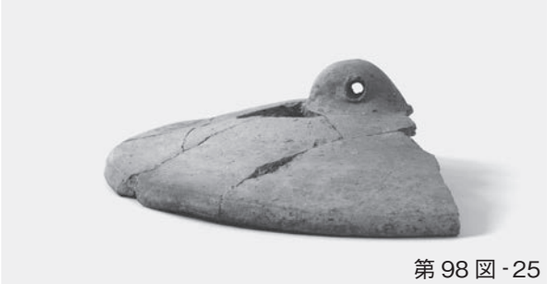
第 95 図 - 38

第 95 図 - 42

第 96 図 - 58

第 97 図 - 10

第 97 図 - 21


第 98 図 - 25

宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区出土遺物①

第 98 図 - 27

第 98 図 - 31

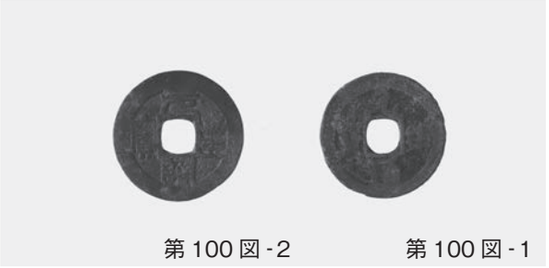
第 98 図 - 36

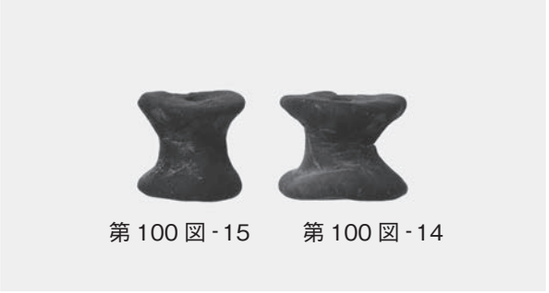
第 99 図 - 2

第 99 図 - 11

第 99 図 - 14

第 99 図 - 16


第 100 図 - 2　第 100 図 - 1


第 100 図 - 15　第 100 図 - 14

第 100 図 - 18

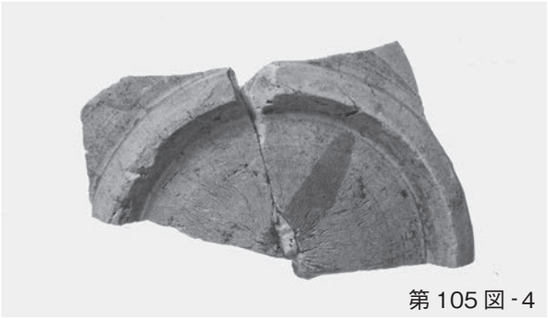
宝山桑ノ木遺跡Ⅲ区出土遺物②

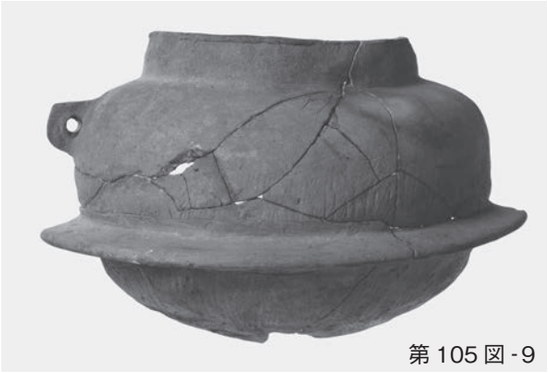
第 108 図 - 3

第 108 図 - 4

第 110 図 - 2

第 111 図 - 4


第 105 図 - 4


第 105 図 - 9

第 106 図 - 3

宝山桑ノ木遺跡Ⅳ区出土遺物

図版 60

1　流末溝田遺跡
　1 号土坑完掘状況（北から）

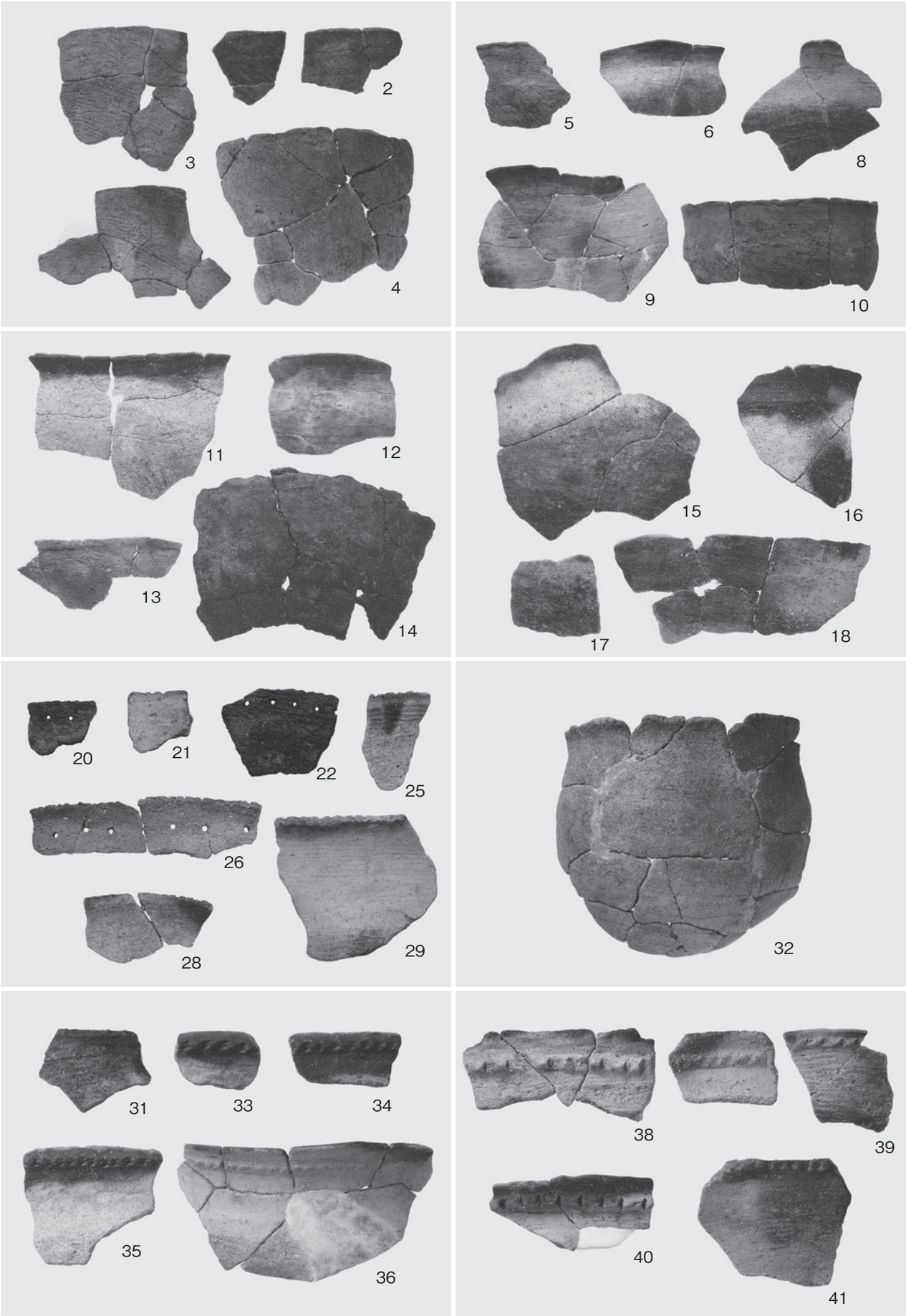
2　2 区全景（北から）

3　SX01 遺物出土状況（西から）

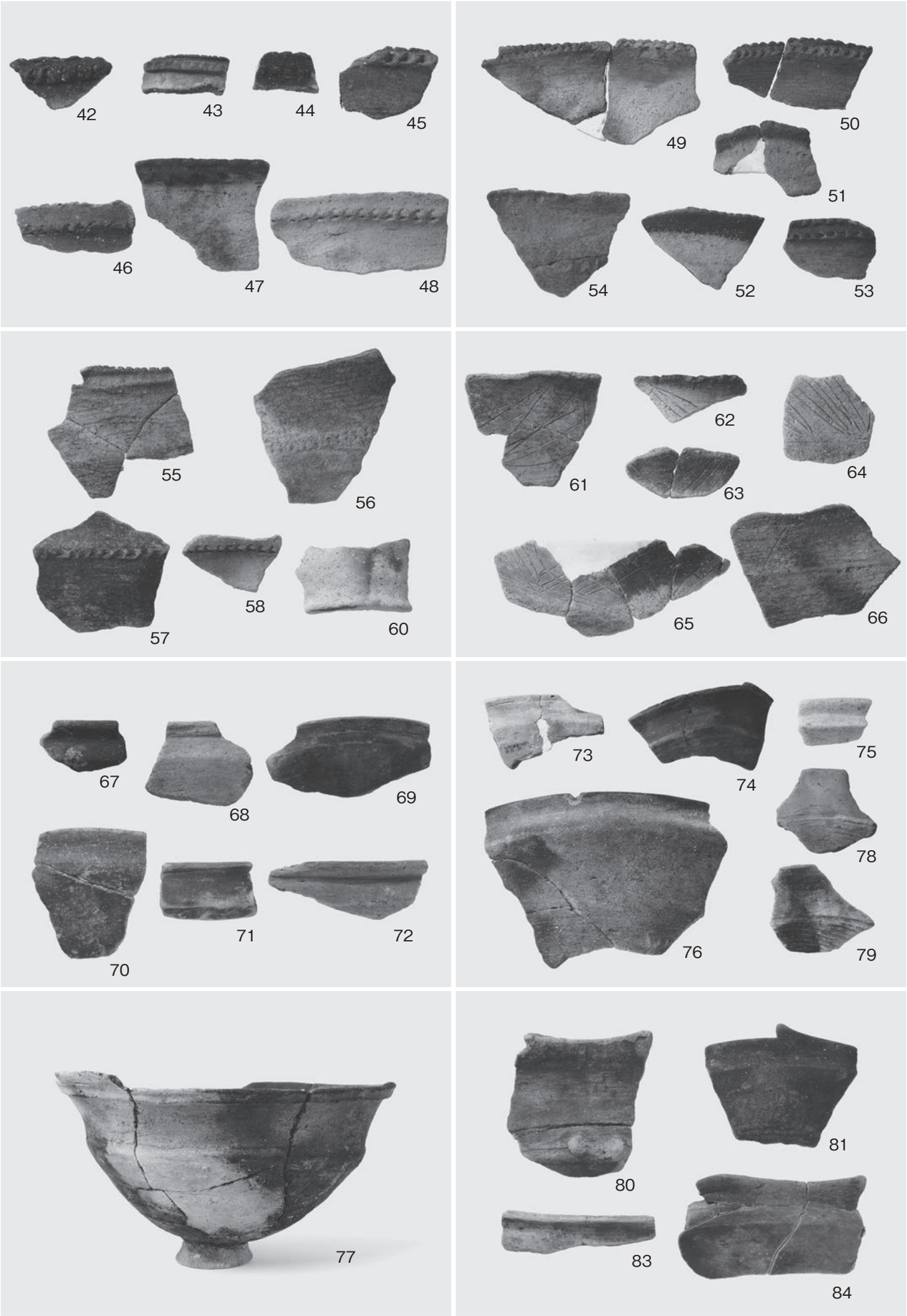
1　SX01 完掘状況（北から）

2　Ⅲ区全景（西から）

3　Ⅳ区全景（西から）

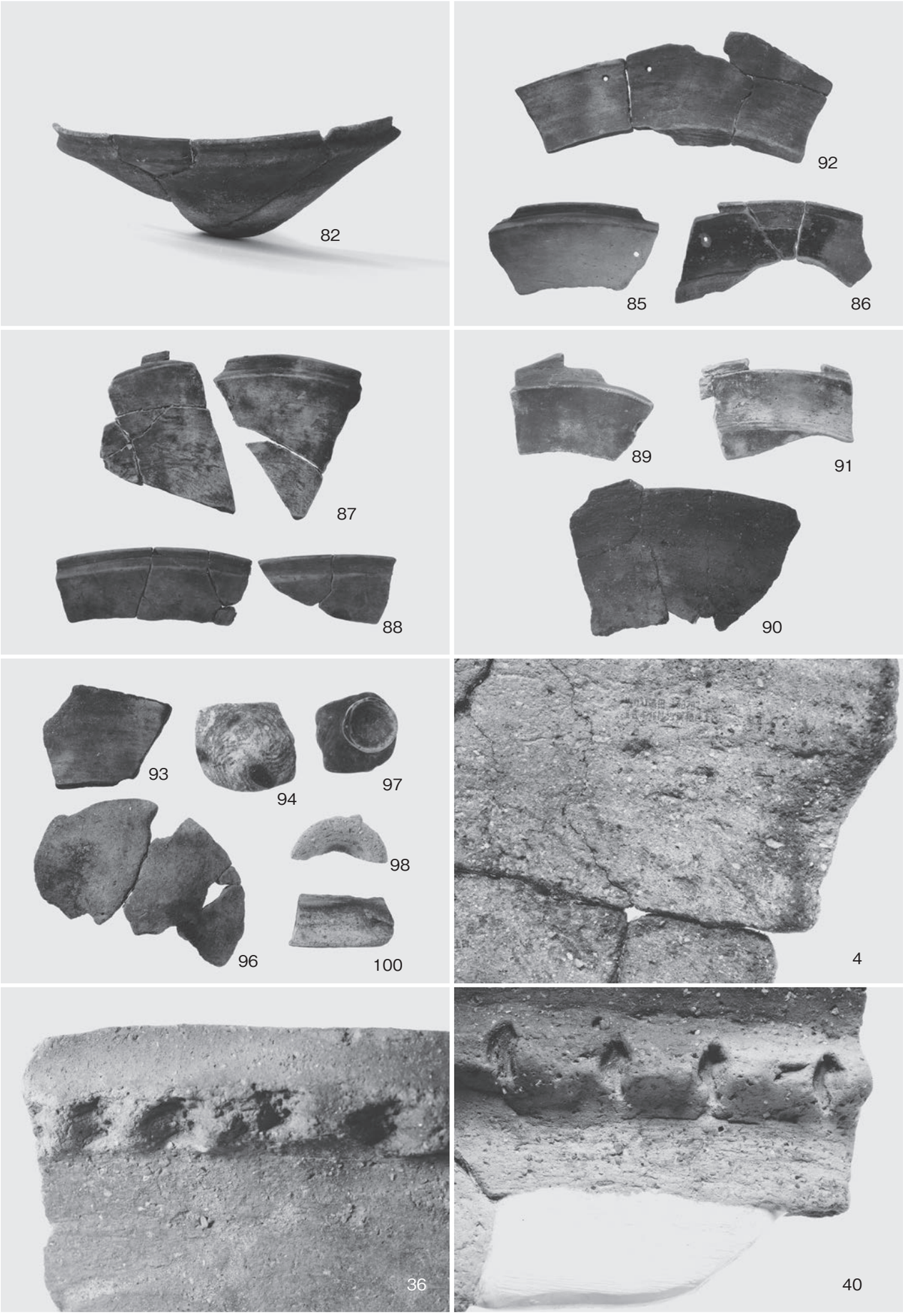


流末溝田遺跡出土遺物①

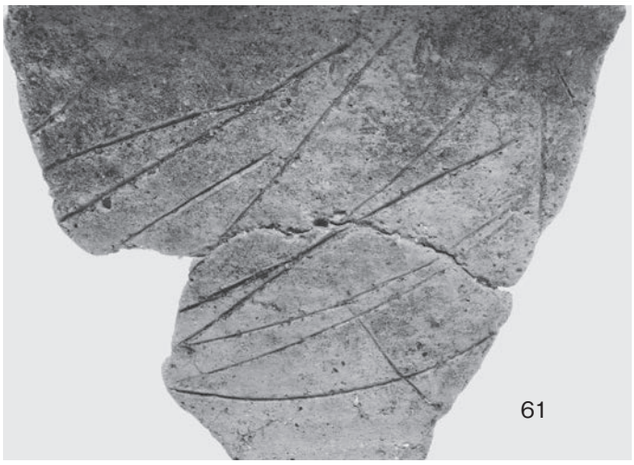


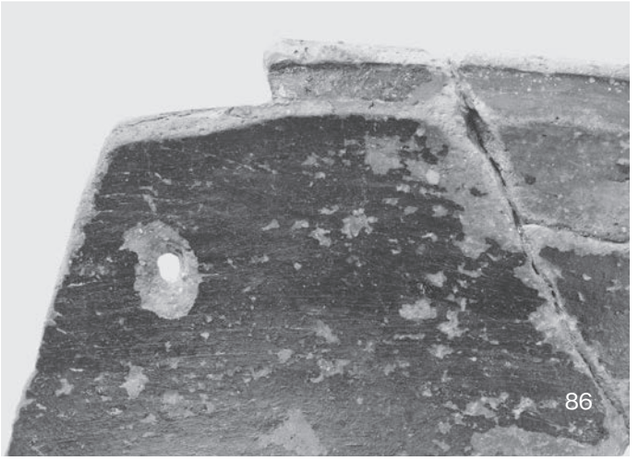
流末溝田遺跡出土遺物②

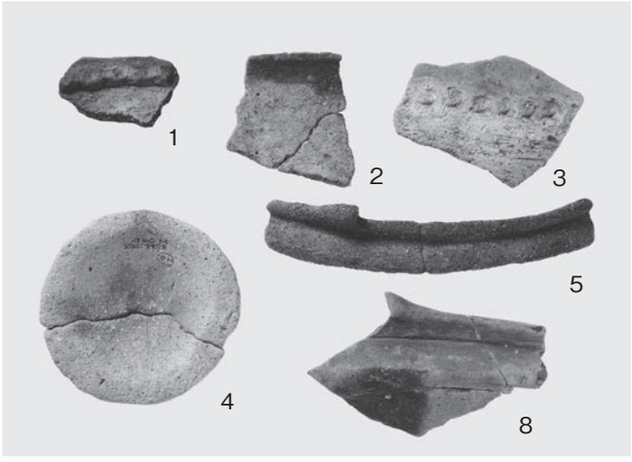
図版 64



流末溝田出土遺物③







流末溝田出土遺物④

報告書抄録

ふ り が な	たからやまこいでいせき　たからやまくわのきいせき　りゅうまつみぞたいせき
書　　名	宝山小出遺跡　　宝山桑ノ木遺跡　　流末溝田遺跡
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 12 集
編 著 者 名	吉村靖徳　小川泰樹 (編集)　秦憲二　城門義廣　大里弥生
編 集 機 関	九州歴史資料館
所　在　地	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3　　TEL 0942-75-9575
発 刊 年 月 日	平成 26（2014）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たからやまこいでいせき 宝山小出遺跡	ふくおかけんゆくはししたからやま 福岡県行橋市宝山	402133	14098004	33° 42′ 30″	130° 57′ 23″	2009.10.6 ～ 2010.12.9	4,800㎡	東九州自動車道建設
たからやまくわのいせき 宝山桑ノ木遺跡	ふくおかけんゆくはししたからやま 福岡県行橋市宝山	402133	14098005	33° 42′ 23″	130° 57′ 28″	2010.10.4 ～ 2012.7.30	9,800㎡	
りゅうまつみぞたいせき 流末溝田遺跡	ふくおかけんゆくはししりゅうまつ 福岡県行橋市流末	402133	14100001	33° 42′ 15″	130° 57′ 40″	2008.5.11 ～ 2008.10.6	1,100㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宝山小出遺跡	集落	近世～近代	竪穴住居跡、流路、区画溝、井戸	土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、石製品	
宝山桑ノ木遺跡	集落	中世	区画溝、掘立柱建物跡、井戸	土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、輸入陶磁器、石製品、銭貨	
流末溝田遺跡	集落	縄文時代	土坑、流路	縄文土器、石器	

要　　約

宝山小出遺跡：中世の屋敷地と考えられる区画溝が連続して、集落を形成する。隣接する宝山桑ノ木遺跡とは一連の遺跡。

宝山桑ノ木遺跡：中世の屋敷地と考えられる区画溝が連続して、集落を形成する。隣接する宝山小出遺跡とは一連の遺跡。

流末溝田遺跡：縄文時代晩期の土器が多量に出土した。

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 5

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

－ 12 －

福岡県行橋市所在遺跡の調査

宝山小出遺跡・宝山桑ノ木遺跡・流末溝田遺跡

平成 26 年 3 月 31 日

発行　九州歴史資料館

〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷　片山印刷有限会社

福岡県小郡市祇園 1 丁目 8-15